

ISSN 1880-7925

花園大学国際禅学研究所

# 論叢

第十二号

2017年3月

花園大学国際禅学研究所

花園大学国際禅学研究所論叢

第十二号

二〇一七年三月

## ANNUAL REPORT of the INTERNATIONAL RESEARCH INSTITUTE FOR ZEN BUDDHISM

No. 12

### Table of Contents

---

|   |     |
|---|-----|
| Gettan Dōchō's Annotated Edition of the <i>Ōbaku Sotoku Ju</i><br>LIN Guanchao.....   | 1   |
| A Compilation of Kamakura-era Tea Records from the Zen School:<br>With Japanese Readings and Annotation<br>TACHI Ryushi.....          | 27  |
| An Annotated Transcription of the <i>Kōyūjō</i> : Letters from Scholars to Uemura<br>Kankō in the Taishō Era<br>HORIKAWA Takashi..... | 161 |
| Views on Women in Japanese Zen: The Case of Zen Master Hakuin (3)<br>TAKESHITA Ruggeri Anna.....                                      | (1) |

---

March 2017

花園大学国際禅学研究所

論叢

第十二号



# 目次

|                                |                            |     |
|--------------------------------|----------------------------|-----|
| 月潭道澄の『黄檗祖徳頌』標註……………            | 林 觀 潮……………                 | 1   |
| 鎌倉期禅僧の喫茶史料集成ならびに訓註(上)……………     | 館 隆 志……………                 | 27  |
| 上村観光来簡集『交遊帖』解題と翻刻……………         | 堀 川 貴 司……………               | 161 |
| 執筆者一覧……………                     | ……………                      | 183 |
| 日本の禅宗における女性観 ―白隠禅師の場合―(3)…………… | 竹 下 ル ッ ジ エ リ ・ ア ン ナ…………… | (1) |



# 月潭道澄『黄檗祖徳頌』標註

林 觀 潮

## 目 次

- 一、解題
- 二、『黄檗祖徳頌』標註
- 三、『黄檗祖徳頌』の複写本
- 四、隠元禪師の生涯

## 一、解題

『黄檗祖徳頌』は初期黄檗宗の僧である月潭道澄（一六三六―一七一三）が開祖の隠元禪師（二五九二―一六七三）を讃えた詩作である（一）。

月潭は江州彦根（滋賀県彦根市）の出身で、十二歳で京都瑞石山永源寺如雪文和尚の座下に出家した。

慶安四年（二六五二）春より、洛西嵯峨翔鳳山直指庵（京都市右京区北嵯峨北の段町三番地）の独照性円（二六一七―一六九四）に参じた。承応三年（二六五四）七月に独照と共に長崎興福寺へ隠元禪師に参じ、それから

二十年間隠元の侍者を務め、その法化を助けた。隠元示寂の前日、寛文十三年（二六七三）四月二日に京都黄檗山萬福寺で独照に法を嗣ぎ、隠元の法孫となった。

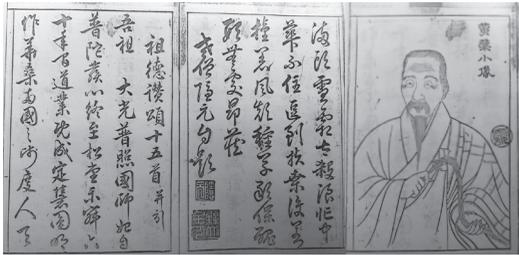
延宝三年（一六七五）四月、隠元のために三年の服喪を終え、京都黄檗山萬福寺を離れて直指庵に帰り、首座として独照を助けた。元禄七年（二六九四）九月、直指庵の二代住持を務め、その後そこに法を弘め、長老の僧として黄檗宗の内外から尊敬を集めた。同じく隠元の侍者を務めた齊雲道棟（二六三七—一七一三）を生涯無二の法友とした。

正徳三年（一七一三）三月、直指庵で菩薩戒会を三日間営み、僧俗およそ五百人に戒を授けた。当年五月、病を示し、遺偈の「生本不生、滅亦非滅、撒手便行、長空一月」を書き残し、八月六日に寂した。月潭は隠元などの唐僧からの薰陶を受け、詩文を能くした。語録に『龍巖集』『蕉窗詩集』『峨山稿』『永明壽禪師山居詩和韻』『巖居稿』『心華剩録』などがある<sup>(2)</sup>。

『黄檗祖徳頌』は宝永二年乙酉（二七〇五）十月の作で、当年に刊行されたと思われる。この年は隠元示寂の三十二年目にあたる。月潭はなお祖師を追慕し、『普照国師年譜』などによつて<sup>(3)</sup>、隠元の生涯を簡潔に十五首の七言詩で纏め、その徳業を再現しようとした。因みに、十五首の詩題は「普陀發心、夢僧分瓜、槩山脱白、金粟悟道、獅巖住靜、法通授衣、側石自平、祖庭闡法、應聘東渡、駐錫普門、太和開山、常行慈濟、松堂退隱、帝賜徽號、全身歸塔」である。

京都黄檗山萬福寺文華殿に現存する『黄檗祖徳頌』は、封面に「黄檗祖徳頌」と題し、「黄檗小像」、「老僧隠元自題」、「祖徳讚頌十五首并引」によつて構成される。

以下、この『黄檗祖徳頌』の本文について、句読点（ ）、（ ）（ ）を標示し、訓読を付け、また適当に註



黄檗祖德頌(4)

## 二、『黄檗祖德頌』標註

釈を加える。次に原本からの複写本の写真を付しておく。なお、文末に隠元禪師の生涯を紹介する。字体は、原則として原本の漢字をそのままに写す。写せない字体には、日本の常用漢字を用いる。

黄檗小像(黄檗の小像(5))

滿頭雪霜、空殺浪忙。(滿頭の雪霜なり、空殺し浪忙す。)

中華不住、逗到扶桑。(中華に住さず、扶桑に逗到す。)

設若撞着風顛種草、(たとえ風顛の種草に撞着すれば、)

難保醜態無處昂藏。(保つ難し、醜態の無処に昂藏すること。)

老僧隱元自題。(老僧隱元は自ら題す(6))。

祖德讚頌十五首并引

月潭道澄(7)

(祖德讚頌の十五首並びに引)

吾祖大光普照國師始自普陀發心、終至松堂示寂、六十年間、道業功成、定慧圓明。作華桑兩國之師、度人天無量之眾。巍巍德相、靄靄慈心。上皇賜號、樹君

建刹。種種勝績、讚莫能盡。澄也曾侍中匠、深沐法恩。滅後年尚、追慕曷止。茲揭道蹟十餘事之題名、各系以一章、章八句。雖綴詞陋拙、而聊伸嘆德之誠。倘後生輩采覽記誦、以獲諳開祖之芳猷、則幸矣。(吾が祖の大光普照国師は始めに普陀自り発心し、終りに松堂の示寂に至り、六十年の間に、道業は功成し、定慧は円明す。華桑両国の師と作し、人天の無量の衆を度す。巍巍の徳相、靄靄の慈心なり。上皇は号を賜い、樹君は刹を建つ。種種の勝績は、讚しても尽くすことは能ず。澄はかつて中匠を侍し、深く法恩を沐す。滅後に年は尚しくなつても、追慕すればなんぞ止まらんや。ここに道蹟の十餘事の題名を掲げ、各々に一章を以つて系し、章に八句なり。綴詞の陋拙と雖も、而して聊かに嘆徳の誠を伸す。もし後生輩は采覧して記誦し、以つて開祖の芳猷を獲諳すれば、則ち幸いなるや。)

普陀發心(普陀の発心)

海上普陀始一登、

海上の普陀に始めて一たび登れば、

丹崖瓊嶂瑞光騰。

丹崖瓊嶂は瑞光を騰がる。

潮音洞裏瞻慈相<sup>(8)</sup>、

潮音洞の裏に慈相を瞻あげ、

飢飽嶺頭逢異僧<sup>(9)</sup>。

飢飽嶺頭に異僧に逢う。

殊勝境彰如琢玉、

殊勝の境はあらわし、琢玉の如きなり、

塵勞念盡似銷冰。

塵勞の念は尽くし、氷を銷けることに似る。

煮茶日供百千眾、

茶を煮て日に百千の衆を供え、

綠乳開花碗面凝。

綠乳は花を開けて碗面に凝らす。

夢僧分瓜（僧の分瓜を夢みる）

嚴父客楚不歸郷、

嚴父は楚に客として郷に帰らず、

盡孝安貧養老嬢。

孝を尽くし貧に安んじて老嬢を養う。

私慮塵韁猶未脱、

私かに慮り、塵韁をなお未だ脱げずことを、

故敲仙觀禱冥祥。

故に仙觀を敲いて冥祥を禱る。

三員梵侶夢相遇、

三員の梵侶を夢みて相遇し、

四瓣西瓜分使嘗<sup>(10)</sup>。

四瓣の西瓜を分けて嘗めさせる。

敢保出家縁正熟、

敢えて保ち、出家の縁は正に熟ることを、

醒來賽願屢焚香。

醒めて来て願を賽してしばしば香を焚く。

槩山脱白（槩山に脱白す）

十二峯前投鹽老、

十二峯の前に鹽老に投じ、

周羅剪落現僧儀。

周羅を剪落して僧儀を現す。

圓明戒體通身潔、

戒体を円明して通身は潔なり、

清淨願輪善力推。

清淨の願輪は善力の推すことなり。

方喜九潭龍產子、

方に九潭の龍は子を産むことを喜び、

咸傳萬福鳳生兒。

みな萬福の鳳は兒を生むことを伝う。

寄言郷族休嘲笑、

寄言し、郷族は嘲笑せずことを、

今日東林有遠師(1)。

今日東林に遠師有る。

金粟悟道(金粟に道を悟る)

遠登金粟見宗盟、  
求道參玄志銳精。

遠く金粟に登つて宗盟を見え、  
道を求め玄を参じて志は鋭精なり。

萬指叢中忘自己、

萬指の叢中に自己を忘れ、

一巴掌下悟平生。

一巴掌の下に平生を悟る。

火杖擎起賊身露、

火杖を擎起すれば賊身は露し、

筋斗打翻眾目驚(12)。

筋斗を打翻して衆目は驚く。

出窟駿貌多意氣、

出窟の駿貌は意氣多き、

機前誰觸爪牙寧。

機前に誰か爪牙の寧を触れんや。

獅巖住靜(獅岩に住靜す)

千尋壁立一獅巖、

千尋まで一獅岩は壁立し、

高構禪關遠俗凡。

高く禪関を構えて俗凡を遠ざける。

種竹栽梅幽趣足、

竹を種え梅を栽えて幽趣は足り、

喝天棒月古風巖(13)。

天を喝し月を棒して古風は巖とす。

半肩畦服從教破、

半肩の畦服は従つて破りせしむ、

一味瓊齋不厭鹹。

一味の瓊齋は鹹を厭わず。

衲子來詢西祖意、

衲子は来て西祖の意を詢ねれば、

答言野鳥語喃喃<sup>(14)</sup>。

答言す、野鳥の語は喃喃なることを。

法通授衣（法通より衣を授ける）

費翁室内付龜毛、

費翁の室内に龜毛を付し、

再返巖間獨養高<sup>(15)</sup>。

再び岩間に返つて独りに高を養う。

將謂深藏聞妙密、

將に謂い、深く藏して妙密を聞くことを、

何圖四海道聲軻。

何んぞ四海に道聲の軻けることを図らんや。

信衣傳到法通使、

信衣を伝えて到り、法通の使なり、

祖席要真濟水濤。

祖席は真の濟水の濤を要す。

皓叟負囊曾入夢、

皓叟は囊を負つて曾て夢に入り、

看斯瑞應嘆奇遭<sup>(16)</sup>。

この瑞応を看れば奇遭を嘆す。

側石自平（側石は自ら平らにす）

側石如舟當路橫、

側石は舟の如く当路に横たわり、

朝來忽見自端平<sup>(17)</sup>。

朝に来て忽ちに自ら端平なることを見る。

軒知一夜默然祝、

軒に一夜の默然の祝りを知り、

足驗前程法道行。

足りて前程に法道の行うことを驗す。

徑塢喝時成片裂、

徑塢に喝す時に片裂を成し、

虎丘講處點頭輕。

虎丘に講じる処に點頭は軽くなり。

世人莫訝甚奇異、

世人は甚だ奇異を訝く莫れ、

為顯高流心術誠。

為に高流の心術の誠を顯す。

祖庭闡法（祖庭に法を闡く）

檠岫鍾靈六六峯、

檠岫は鍾靈し、六六の峯なり、

雄哉運祖大禪叢。

雄なるや、運祖の大禪叢。

獅王一到補師席、

獅王は一たび到つて師席を補えば、

毳侶駢臻參道風。

毳侶は駢臻して道風を參じる。

堂構卻教從地起、

堂構は却つて地より起せしむ、

法燈長見互天紅。

法燈は長く見えて天に互つて紅くなり。

焜煌龍藏朝廷賜、

焜煌として龍藏は朝廷の賜いなり、

翻閱恭酬帝渥隆<sup>(18)</sup>。

翻閱して恭しく帝渥の隆を酬いる。

應聘東渡（聘に応じて東渡す）

逸公三請志虔誠、

逸公は三たびに請い、志は虔誠なり、

萬里樽桑泛巨瀛<sup>(19)</sup>。

萬里の樽桑に巨瀛を泛べる。

海若護師舟速到<sup>(20)</sup>、

海若は師を護り、舟は速やかに到り、

陳僊垂識道當行<sup>(21)</sup>。

陳僊は識を垂れ、道は当に行う。

故邦皂白休留戀、

故邦の皂白は留戀する休れ、

異域靈山似喜迎。

異域の靈山は喜迎に似る。

寶林初登崎上寺、

寶林に初めて登れば、崎上の寺なり、

法雷震地眾聽驚。

法雷は地を震え、衆聽は驚く。

駐錫普門（普門に錫を駐す）

錫寓普門恰六秋、

錫を普門に寓して恰も六秋なり、

隨方怡樂唱徽猷<sup>(22)</sup>。

隨方に怡樂して徽猷を唱える。

安居雖有園亭好、

安居して園亭の好し有ると雖も、

縱目卻無峰壑幽。

縱目すれば却つて峰壑の幽無し。

甘露滾滾霑普地、

甘露は滾滾たり、普地を霑い、

慈雲靄靄覆千洲。

慈雲は靄靄たり、千洲を覆う。

故山屢寄催歸信、

故山はしばしば催歸の信を寄り、

難奈主人苦扳留。

いかんぞ主人は苦しく扳留せんや。

太和開山（太和に開山す）

雒南勝地泰畝場<sup>(23)</sup>、 雒南の勝地は泰畝の場となり、

鈞施繁隆剏寶坊。 鈞施は繁隆して寶坊を剏る。

唐國妙工粧聖像、 唐國の妙工は聖像を粧い、

暹羅靈木構高堂。 暹羅の靈木は高堂を構える。

門庭恢廓林巒暎、 門庭は恢廓し、林巒は暎り、

棒喝交馳龍象驥。 棒喝は交馳し、龍象はあがる。

一代開山功績就、 一代開山の功績は就り、

蘭孫桂子永聯芳。 蘭孫桂子は永く芳を聯ねる。

常行慈濟（常に慈濟を行う）

吾翁不亞永明師、 吾が翁は永明師につがず、

憫物克行菩薩慈。 物を憫れんで克く菩薩慈を行う。

贖命放生難筭計<sup>(24)</sup>、 命を贖い生を放すことは筭計し難きなり、

度人施戒沒邊涯。 人を度し戒を施すことは辺涯沒し。

雜華嘗冤資恩有、 雜華は冤にかえてして恩有を資し、

般若兼持壯道基。 般若は兼ねて持って道基をさかんにす。

或復當機提正令、 或いはまた機に當って正令を提げ、

銅睛鐵眼莫能窺。

銅睛鐵眼は能く窺う莫れ。

松堂退隱（松堂に退隱す）

雙邦領眾踰從、心

雙邦に衆を領いて從心に踰え、

卸擔投閒隱翠林。

担を卸し、投閒して翠林に隠れる。

掩室猶嫌雲水謁、

掩室すればなお雲水の謁えを嫌い、

問安復有宰官臨。

問安すればまた宰官の臨み有る。

滿顛雪皎增康壯、

滿顛の雪は皎として康壯を増し、

千偈濤翻自嘯唵。

千偈の濤は翻れば自ら嘯唵す。

時上鶴亭行樂處、

時に鶴亭の行樂処に上り、

應真相貌見應欽。

應真の相貌は見えればまさに欽うべし。

帝賜徽號（帝は徽号を賜う）

禪窟宏開播洛畿、

禪窟を宏開して洛畿に播き、

名揚北闕上皇知。

名は北闕に揚げ、上皇は知る。

降香屢到五雲麓、

降香はしばしば五雲麓に到り、

賜號欽稱一國師<sup>(25)</sup>。

賜號は一國師を欽稱す。

設利鎮山光燦爛、

設利は山を鎮め、光は燦爛なり、

宸奎藏匣墨淋漓。

宸奎は匣に蔵れ、墨は淋漓なり。

神龍呵護存悠久、

神龍は呵護し、悠久に存じ、

應壯梵園與帝基。

まさに梵園と帝基をさかんにすべし。

全身歸塔（全身は塔に歸す）

八旬有二道貌尊、

八旬有二になれば道貌は尊び、

期與諗翁同壽元。

諗翁と寿元を同じくすることを期す。

俄罷津梁辭濁世、

俄に津梁を罷えて濁世を辞し、

遺留祇夜耀山門。

祇夜を遺留して山門を耀す。

雙林變白曉風慘、

雙林は變白し、曉風はいたみ、

曇萼零紅晚日昏。

曇萼は紅をおとし、晚日は昏なり。

誰識其中離生滅、

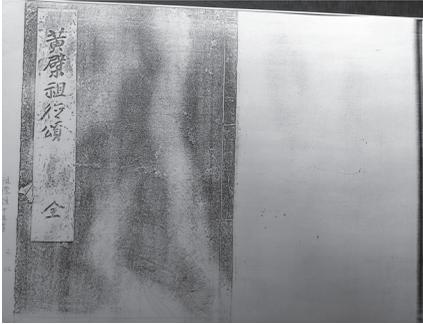
誰か其の中に生滅を離れることを識り、

全身闕塔蔭兒孫<sup>(26)</sup>。

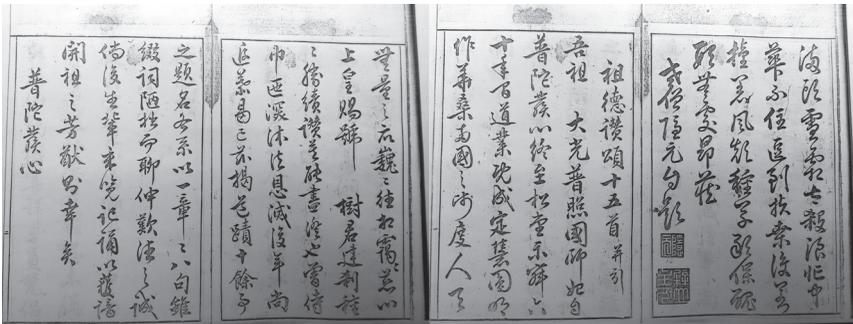
全身は塔に闕じて兒孫を蔭う。

皆寶永乙酉歲良月穀旦峨山不肖孫道澄焚盟拜書<sup>(27)</sup>。（時に寶永乙酉歲良月の穀旦、峨山の不肖の孫の道澄は焚盟し、拜して書す。）

月潭道澄『黄檗祖德頌』標註



三、『黄檗祖德頌』の複写本



海三普陀如一空丹崖紫嶂  
瑞光騰激音洞裏巖若如  
鐵壁嵌嵌連雲傳殊勝境  
如珠玉卷芳合若似消冰  
茶日竹百千叢綠乳為花

碗而體

夢僧不取

巖去空建不為御書空為  
空去之嫌私慮差輕說未脫  
敢故何親構冥祥三頁覽侶

喜如過四辦西依分使青  
敢保空家信正熱醒來雲影

鑿紫香

藥山脫白

十二時前投鐘空周羅古友

現僧儀圖於戒體通力索  
借淨願禱若力推方善九澤  
龍崖子咸信為指風生見言  
空柳枝林啼笑今日東林  
三這師

空乘悟道

志在空乘見玉皇本為奉  
云玉鏡稿為指叢中忘自己  
已巴掌下信平生少杖穿記  
賦為靈筋斗打翻石目擲出

空乘觀高壽寺塔寺推詞  
水牙際

柳農信辭

千壽壁上一物出高捧祥  
闌志飲九粒竹或梅出樹呈

喝天指月六風露中有吐眼  
從破一珠氣盡不厭鹹袖  
子未詢西祖之卷之孫白  
謔喻

法通按衣

黃菊空內付毫毛再返莊言  
稽者高借得佛堂首祿密  
何箇心海是香網信衣信為  
法通使視希要長信在傳  
皓文且兼空入身在斯瑞衣

喝高連

何石自空

何石自舟高散散其石之元  
身空平野如空默然觀  
呈驗前程任道行徑瑞鳴時

成片裂碎互構空然於極世  
人空其甚高靈為鼓高風

心術誠

祖庭問信

象油鐘靈六之障障或運祖

六經聚柳三一為補師希  
羅侯併漆為是亦空捧中於  
從必湯信惶長見巨天紅銀  
燐龍藏即這賜齋潤茶酬  
帝法信

應聘來信

遠以三信志虔誠萬里搏雲  
從巨瀛海子護師舟運到際  
樓岳鐵老蒼月紅那皂白依  
留香空城靈山似香空葉

月潭道澄『黄槩祖德頌』標註

|   |  |  |  |
|---|--|--|--|
| <p>身聯芳<br/>帝行慈濟<br/>吾向不亞亦明師 憫物克終<br/>甚善慈贖命 救生難等竹<br/>度人施戒後邊 徒難善善克</p> | <p>維南德地秦輪揚釣於紫<br/>陰靄葉坊秦園抄工極聖傳<br/>道羅堂不構亭門庭恢宏<br/>林秀暎構 唱交地極多孫<br/>一代為山比後就茶孫桂子</p> | <p>大和開山<br/>兼授留<br/>山為當催憐信結未之人<br/>雖目即登峰 豈出寸靈儀<br/>實吾地慈雲雷 震于物故</p> | <p>杖節聖崎 上乃修雷雲地<br/>聚莊常<br/>駐錫善<br/>錫寓柳林於入秋隨方怡示<br/>唱微猷安衣 雖有園亭好</p> |
|---|--|--|--|

|  |   |  |  |
|--|---|--|--|
| <p>龍何舊居修久 居壯黃園<br/>五帝基<br/>全身歸塔<br/>八旬有二道於 岳期之 陰白曰<br/>著元儀 嚴律 梁辭 尚</p> | <p>帝賜微跡<br/>極宏宏開 極落 裁久 為北 闕<br/>不皇 不降 音 為 五 帝 基 崇<br/>孫 欽 補 國 師 法 利 濟 必 元<br/>陳 深 宸 眷 藏 匣 是 餘 濟 神</p> | <p>兄之欽<br/>上 歸 亭 行 樂 亦 居 真 如 欽<br/>性 康 壯 千 倘 清 翻 日 嘯 吟 心<br/>闕 德 翠 林 掩 言 標 煙 雲 白 岳<br/>洞 出 沒 多 宰 官 臨 內 願 雲 皎</p> | <p>資 具 有 般 多 益 壯 是 基 或<br/>後 官 機 提 正 生 銅 財 法 眼<br/>美 終 究<br/>松 雲 進 德<br/>雙 節 欽 志 踰 從 人 卸 塔 放</p> |
|--|---|--|--|

|  |  |  |   |
|--|--|--|---|
| <p>寶水己酉年正月 製<br/>城山山有孫 老 德 堂<br/>錄 書<br/>原 本 所 藏 者<br/>黃 槩 堂 文 庫<br/>冊 號 二 二 一 一</p> | <p>遠 留 祇 衆 耀 山 一 雁 林 雲 白<br/>曉 風 條 景 粲 零 紅 晚 日 昏<br/>以 識 中 誰 能 滅 令 勇 劍 焚<br/>崔 兒 孫<br/>皆</p> | <p>全身歸塔<br/>八旬有二道於 岳期之 陰白曰<br/>著元儀 嚴律 梁辭 尚</p> | <p>帝賜微跡<br/>極宏宏開 極落 裁久 為北 闕<br/>不皇 不降 音 為 五 帝 基 崇<br/>孫 欽 補 國 師 法 利 濟 必 元<br/>陳 深 宸 眷 藏 匣 是 餘 濟 神</p> |
|--|--|--|---|



『黄檗祖徳頌』複写本

#### 四、隠元禪師の生涯

隠元隆琦は明末の臨済宗の禪僧で、日本黄檗宗の開祖である<sup>28</sup>。日本皇室より大光普照国師、仏慈広鑑国師、径山首出国師、覚性円明国師と特諡され、また真空大師、華光大師と勅賜された。一五九二年（明朝万曆二十年、日本文禄元年）十一月四日に生まれ、一六七三年（日本寛文十三年、清代康熙十二年）四月三日に寂した。

隠元禪師は明の福建省福州府福清県万安郷靈得里東林村（福清上逕鎮東林村）に生まれる。俗名は林曾曷、号は子房である。六歳の時に父が行方不明となり、幼少より仏教に発心する。二十一歳、江南一円を回つて父を捜したが果たせなかった。二十三歳、浙江省普陀山に登つて潮音洞主のもとに参じ、在俗信者でありながら一年ほど茶頭として奉仕した。

二十九歳、明の萬曆四十八年（一六二〇）二月、故里福清の古刹で、唐の希運禪師も住した黄檗山萬福禪寺の鑑源興寿（？—一六二五）の下で出家した。天啓元年（一六二二）の春、北へ赴き、崇禎三年（一六三〇）三月の福清黄檗山萬福禪寺へ帰るまでの十年間、主に浙江省内を行脚し参学した。天啓四年（一六二四）五月、浙江省嘉興府海塩県金粟山広慧禪寺で密雲円悟（一五六一—一六四二）の会下に参じ、坐禪に専念した。激しい修業の末、二年後、天啓六年（一六二六年）冬のある日、大悟の瞬間を迎え、仏法の底に徹し、禪僧として見事に立った。

崇禎三年（一六三〇年）三月、金粟山広慧禪寺の住持である密雲円悟は、福清黄檗山萬福禪寺に晋山住持し、八月に広慧禪寺に戻った。この時、隠元は密雲に随行して福清黄檗山萬福禪寺に帰った。その後、萬福禪寺を出て福清の獅子巖で修行した。

一六三三年（崇禎六年）十月、密雲円悟の法子である費隠通容（二五九三―一六六二）は福清黄檗山萬福禪寺に晋山し、一六三六年の春まで住持した。この間、一六三四年（崇禎七年）の春、隠元は費隠の法を嗣ぎ、臨済宗の第三十二伝となった。

四十六歳、一六三七年（崇禎十年）十月、福清の信者たちの招請によって、隠元は福清黄檗山萬福禪寺の住持の座に就いた。隠元禪師の福清黄檗山住持は、一六四四年（崇禎十七年）三月までの初任と、一六四六年（南明隆武二年、清の順治三年）正月から、一六五四年（南明永曆八年）五月までの再任との二回に亘った。その足掛け十七年の経営によって、禪師は黄檗山を中国東南の一大禪林に築き上げ、黄檗山教団を結成し、臨済宗黄檗派を創った。

大陸における明末の臨済宗黄檗派は隠元禪師などの渡航によって、日本に伝えられ、黄檗宗と再生された。一六五三年（南明永曆七年、清の順治十年）十二月一日、長崎の唐人寺であった興福寺、崇福寺、福濟寺を中心とする信者たちの度々の懇請に応じて、隠元禪師は日本渡航を決めた。

六十三歳、一六五四年（南明永曆八年、清の順治十一年、日本承応三年）五月十日、隠元禪師は福清黄檗山を離れて厦門（アモイ）へ向かい、六月二十三日、厦門より長崎へ渡航し、七月五日の晩、長崎に着き、翌日迎えられて興福寺に進み住持した。同年十月十五日から、興福寺で冬期結制を行い、翌年の一六五五年（日本明暦元年）正月に解制した。この間、隠元の高徳と禪風を慕う具眼の僧や学者たちが日本各地から興福寺

に雲集し、僧俗数千とも謂われる活況を呈した。

一六五五年（日本明暦元年）五月二十三日、隠元はまた福州出身の檀越に請われて崇福寺の住持を兼任した。同年八月九日、妙心寺元住持の龍溪性潜（一六〇二—一六七〇）の懇請により、隠元は長崎興福寺を離れ、摂州慈雲山普門寺へ赴き、九月六日、普門寺に進み住持し、十一月四日、開堂説法を行った。一六六一年（日本寛文元年）八月までの六年余りに、隠元は普門寺に在住し、多くの信者と檀越を得た。

隠元禪師は、当初、渡日三年の約束があり、故国からの再三の帰国要請もあつて度々帰国を決意したが、龍溪性潜らが引き止め工作に奔走した。一六五八年（日本万治元年）十一月四日、隠元は江戸において幕府四代將軍徳川家綱（一六四一—一六八〇）との会見に成功した。一六五九年（日本万治二年）五月、隠元は幕府より新寺を開創させるため、山城国宇治郡大和田に寺地を賜った。

一六六一年（日本寛文元年）五月八日、七十歳の隠元は新寺を創り始め、望郷の念を込め、故郷福清の古刹と同名の黄檗山萬福禪寺と名付け、八月二十九日、京都黄檗山萬福禪寺に晋山した。これ以後、福清の黄檗山萬福禪寺は古黄檗とも呼ばれるようになった。

一六六三年（日本寛文三年）一月十五日、隠元は京都黄檗山萬福禪寺の法堂において祝国開堂を行った。この盛大な法会によつて、隠元の禅風は内外に承認され、日本禅宗の中に、元来の曹洞宗、臨済宗の二派に加えて新たに黄檗宗の一派が開立されることになった。当年十二月一日から八日までの間、民衆に対して京都黄檗山萬福禪寺で初めての三壇戒会が厳修された。

京都黄檗山萬福禪寺の開創によつて、隠元は日本禅宗の一派の開祖となつた。その人望を慕い、後水尾法皇を始めとする皇族、また幕府要人を始めとする各地の大名、多くの商人たちが競つて帰依した。

隠元は歴とした明代の臨済宗を嗣法し、臨済正宗を名乗り、独特の威儀を持った。その『黄檗清規』は、乱れていた当時の日本禅宗各派の宗統・清規の更正に大きな影響を与え、特に卍山道白（一六三六―一七一五）などによる曹洞宗の宗門改革では重要な手本とされた。もつとも、隠元の禅風や叢林としての清規は当時の明代の臨済宗に倣っていたので、既に宋元時代に伝来して日本に根付いていた臨済宗とは趣を異にした。その違いにより、自ら一派として「済家黄檗山萬福禅寺派」を形成した<sup>(29)</sup>。この故、江戸時代、隠元を開祖とする京都黄檗山萬福禅寺の禅宗は、社会的に「臨済正宗黄檗山萬福禅寺」あるいは「臨済正伝黄檗派」と呼ばれ、一八七六年（日本明治九年）以後、公式的に黄檗宗と呼ばれる。

一六六四年（日本寛文四年）九月四日、隠元は京都黄檗山萬福禅寺の後席を法子の木庵性瑠（一六一一―一六八四）に移譲し、自ら山内の松隠堂に退き、楽しく黄檗山の発展を眺めていた。

八十二歳、一六七三年（日本寛文十三年）正月、隠元は体調の衰えを覚え、往生を予知し身边を整理し始めた。四月二日、後水尾法皇（二五九六―二六八〇）から「大光普照国師」号が特諡された。翌三日、遺偈を認めて示寂した。二十二年後の一六九四（日本元禄七年）九月、徳川幕府の許可によって国師号が公開され、以後、普照国師とも称される。

隠元禅師の弘法は、禅風思想、戒律清規、法式儀軌、教団組織、寺院制度などの面から、当時の日本仏教に多大な影響を与え、各宗派の復興運動に大きく貢献した。仏教以外にも、隠元とその弟子たちは、明清の文化や文物をも伝え、哲学、文学、語言、文字、また建築、雕塑、絵画、印刷、また音楽、医学、茶道、飲食、また書道、篆刻などの面から、江戸時代の社会生活全般に影響を与え、黄檗文化の現象を成した<sup>(30)</sup>。今日に至り、その影響は優れた文化遺産として、また文化的伝統として種々の分野に遺されており、日本近

世の文化を語るとき、隠元禪師や黄檗文化を抜きにして論ずることは不可能となっている<sup>(31)</sup>。例えば、普段の日本人の生活で用いられる隠元豆や煎茶は、隠元禪師の伝来ともされる。

隠元禪師の功績を讃え、日本皇室は後水尾法皇からの大光普照国師の封号を始めとし、五十年ごとの隠元遠忌に、諡号を賜い、慣例となった。一七二二年、靈元上皇より仏慈広鑑国師、一七七二年、後櫻町上皇より径山首出国師、一八二二年、光格上皇より覚性円明国師、一九一七年、大正天皇より真空大師、一九七二年、昭和天皇より華光大師を特諡した。

隠元禪師の功績はその故国でも讃えられる。二〇一五年五月二十三日、中国国家主席習近平は北京人民大会堂で行われる中日友好交流大会に参加し、隠元禪師の事跡を提起し、「私は福建省で仕事をしていた当時、中国の名僧、隠元大師が日本に渡った話を知りました。日本で隠元大師は仏教の教義だけでなく、先進的文化と科学技術も伝え、日本の江戸時代の経済社会発展に重要な影響を与えました。二〇〇九年、私が日本を訪問した際、北九州などで両国人民の途切れることのない文化的根源と歴史的つながりを直接に感じました。」と言った<sup>(32)</sup>。このように、現に隠元禪師は日中友好の懸け橋として重んじられている。

## 註

(1) 『黄檗祖徳頌』、一巻一冊。月潭道澄著。日本寶永二年乙酉(一七〇五)刊。卷末標記：「峇寶永乙酉歲良月穀旦峨山不肖孫道澄焚盥拜書。」又標記：「洛陽古川三郎兵衛粹行。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。

(2) ① 『龍巖集』、四卷二冊。月潭道澄著。詩集、刊年は不詳。卷一の一首目の詩は「乙卯夏回峨山作」とする。乙卯、延寶三年(一六七五)、時に月潭は京都黄檗山萬福寺を離れて峨山直指菴に帰った。京都黄檗山萬福寺文

- 華殿存。②『蕉窗詩集』、六卷二冊。月潭道澄著。貞享乙丑二年（一六八五）高泉性激作序、江戸時代刊本。京都黄檗山萬福寺文華殿存。③『峨山稿』、二卷二冊。月潭道澄著。元禄十年（一六九七）自序、元禄十一年戊寅（一六九八）刊本。自序…「道本無言、籍言顯道。…。元禄丁丑歲仲夏日月潭叟泚筆於直指心華室。」卷末刊記…「元禄十一年戊寅歲林鐘上浣日。書林古川三郎兵衛梓行、同林耶彌白氏共壽梓。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- ④『永明壽禪師山居詩和韻』、一卷一冊。月潭道澄著。元禄十二年己卯（一六九九）自序、元禄十三年庚辰（一七〇〇）刊本。卷末刊記…「元禄庚辰四月上旬。洛陽書肆古川三郎兵衛刊行。京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- ⑤『巖居稿』、六卷三冊。月潭道澄著。元禄十六年癸未（一七〇三）自序。序言…「此集乃余嚮居龍巖山房時所著之餘稿也。或舒嘯雲山泉石、或贈會縑素道友、一時率真適意之語耳。…。元禄癸未歲菊月上浣心華室老衲澄自敘。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。⑥『心華剩錄』、五卷五冊。月潭道澄著。寶永七年庚寅（一七一〇）自序。享保六年辛丑（一七二二）刊本。卷末刊記…「享保六年龍集辛丑孟正吉日謹識。皇都書林寺町通松原上町古川三郎兵衛雕行。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- (3) 『普照國師年譜』、二卷、南源性派・高泉性激撰。日本元禄七年（一六九四）、国師号が公開された年以後に完成。『新纂校訂隠元全集』附録所收、五〇八七―五二六四頁。『新纂校訂隠元全集』、全十二冊、共五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戸時代諸刻本の編輯影印。
- (4) 表紙の題目。
- (5) 見返しの頁に隠元禪師の法像。
- (6) ここに、陰文の方印「隠元」、「槃山主人」がある。
- (7) 月潭道澄、原本に無い。今、加える。
- (8) 『普照國師年譜』…「萬曆四十二年甲寅。師二十三歲、是春附進香舟至南海普陀山朝禮觀音。意謂菩薩神力、必能陰助尋父之願。及到山、忽見佛境殊勝、大非人世、一時凡念冰釋。遂發心投潮音洞主爲道人、領茶頭執事、日供萬衆、不以爲勞。洞主嘆曰…此佛子真菩薩之使也。其信心不懈忘如此。按師晚錄云…予昔因朝禮普陀大士、遂

發心出家、今五十餘年矣。近聞遭紅夷之厄、不能無感於衷焉。」『新纂校訂隱元全集』五一〇三頁。『新纂校訂隱元全集』、全十二冊、共五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戸時代諸刻本の編輯影印。

- (9) 『普照國師年譜』…「萬曆四十三年乙卯。師二十四歲。寓普陀、竊念此處乃菩薩蔭人福報之所、苟非精修實學者、曷足爲吾師。乃往茶山尋祇園老宿。過飢飽嶺、忽值老僧龐眉鶴髮、懷中取糶與師。師嘗一飽、擡頭禮謝。老僧隱矣。疑爲神僧。是春三月、附香船歸聞省母。母喜從天降。即勸母事佛持齋、日常念佛爲課。」『新纂校訂隱元全集』五一〇五頁。

- (10) 『普照國師年譜』…「萬曆四十六年戊午。師二十七歲、常慮出家緣弗就、一日登石竹山九仙觀祈夢。夢游深山岩崖中、有三僧坐磐石上、方食西瓜、剖而爲四。見師來、忻然以一分與之。師食畢遂寤。竊自喜曰…四沙門果、吾預其一。吾事濟矣。」『新纂校訂隱元全集』五一〇八頁。

- (11) 『普照國師年譜』…「光宗皇帝泰昌元年庚申。師二十九歲。按皇明通紀、是年七月、神宗登遐。八月初一、光宗即位。故以萬曆四十八年爲泰昌元年。是春二月十九日、師詣黃檗、禮賜紫鑑源壽公剃度。或者嘲曰…東林亦有佛耶。師應之曰…嘗聞佛性遍週沙界、豈獨外東林。昔廬山東林有慧遠、焉知今日東林無遠公乎。聞者嘆賞。師遂默願云…此處落髮、若不精修梵行、興崇法門、生陷泥犁。自是常持疏走民間募貲。冬聞道享法師講楞嚴經於海口瑞峯寺、特往聽之。初不解其義、至第四卷、畧有領會云。」『新纂校訂隱元全集』五一〇九頁。

- (12) 『普照國師年譜』…「天啓六年丙寅。師三十五歲。是年、金粟衆滿五百。分爲兩堂。…同參續知公、知師所証、謂五峰曰…老隱徹也。峰乃對衆勘云…汝有悟處、試道看。師云…道即不難、只恐驚群動衆。峰云…但說何妨。師打筋斗而出。峰云…真獅子兒善能吼哮。尋出堂作火頭。一日、密和尚室中、與衆論敬鬼神而遠之、衆答已。師在門外立。密云…汝進來說看。師進前、豎火叉云…離不得這老賊、近不得這老賊。密便打云…汝作賊會那。師即拂火叉出云…賊賊。師與密和尚機語契合多如此。」『新纂校訂隱元全集』五一二一頁。

- (13) 『普照國師年譜』…「崇禎四年辛未。師四十歲。按行實云…是年、龔夔友、夏象晉二居士請住獅子岩。剃度性常、

性樂性善等、刀耕火種、併力合作、攻苦食淡。人所難堪、師怡然自得。嘗述偈云：「結個茅庵石竹西、喝天棒月走雲霓。猶憐路半未歸客、拂拂春風浪馬蹄。又按與中上座書云：獅岩係吾手闢。汝能守之、前後有光。吾念足矣。」

『新纂校訂隱元全集』五一三四頁。

- (14) 『普照國師年譜』：「崇禎五年壬申。師四十一歲。居獅岩絕頂、万仞壁立。作岩中自叙偈、有眉堆三尺雪、身護万年藤句。時有僧問：如何是山中語。師云：野鳥傳古韻。僧云：如何是山中人。師卓然而立。僧云：恁麼則壁立千仞去也。師便打。」『新纂校訂隱元全集』五一三四頁。

- (15) 『普照國師年譜』：「崇禎七年甲戌。師四十三歲。在黃檗西堂寮。一日、因衆頌百丈再參馬祖一喝三日耳聾黃檗聞拳不覺吐舌因緣。師目之俱未妥。乃頌云：「一声茶毒聞皆喪、徧界嚮懷沒處藏。三寸舌伸安國劍、千秋凜凜白如霜。呈上費和尚。即圈出貼法堂前示衆。遂鳴鼓陞座云：我有一枝拂子。是從上用不尽的。顧師云：汝作麼生奉持。師喝云：放下著。費云：再道看。師又一喝便出。費下座。師進方丈禮拜云：適纔觸忤和尚。費舉拂云：汝且將去行持。師接得便打一拂。費云：將謂報恩那。師又打一拂、便歸寮。二月、仍回獅岩住靜。」『新纂校訂隱元全集』五一三八頁。

- (16) 『普照國師年譜』：「崇禎九年丙子。師四十五歲。住山頗久、四方仰重。一夜、夢一老人長眉皓首、荷甌負囊而入。師云：「老大大負累若此、不亦勞乎。老人放下行囊、出書幅單条并所負之物、見贈而去。醒以所夢告侍者玄生。生云：「斯乃吉夢、必有徵應。未幾果法通費和尚專使齋源流法衣至。師之道化往往徵兆如此。作曹谿源流頌三十五則。挽印初者旧卓龍吟居士偈。」『新纂校訂隱元全集』五一四二頁。

- (17) 『普照國師年譜』：「崇禎十年丁丑。師四十六歲。是夏五月、黃檗耆宿同侍御心弘林公等、請師接席當山。師却之、而請益堅、遂應。先是、岩側有塊石如舟。遊客每以不平為嘆。師云：「時節若至、自然平矣。一夕、跏趺石上、持呪默祝龍天：「此去黃檗、法道果行、此石可平。端坐炷香歸室。次早侍僧報云：「奇哉。石已平矣。師云：不必說。吾祝已徵。因名曰自平石。作銘記之。」『新纂校訂隱元全集』五一四四頁。

- (18) 『普照國師年譜』：「崇禎十一年戊寅。師四十七歲。春、建千日期場、開闔龍藏、答神廟賜藏恩也。按寺志云：「

三世祖中天圓公於萬曆辛丑赴闕請藏、居燕八年、未蒙諭旨、以疾卒京中。其徒孫興壽興慈復力懇、閱六載、會相國葉文忠公為奏聞。甲寅歲始頒藏至。師平時每語先人請藏艱辛之故、未嘗不惻然哽咽。至是翻藏、仰酬世德。」

『新纂校訂隱元全集』五一四六頁。

(19) 『普照國師年譜』・「順治十年癸巳。師六十二歲。∴。未幾、日本興福寺住持逸然奉王命差僧古石、齋書帛聘師東渡開化。先是數請未決、茲見其誠懇、特為上堂許之。」『新纂校訂隱元全集』五一八九頁。

(20) 『普照國師年譜』・「順治十一年甲午。師六十三歲。(中略)數日風浪大作、師書免參二字貼船頭、其浪遂平。時有巨鱗數萬隨舟而行。七月初五晚、抵長崎。是夜海上漁人咸見崎中紅光互天、意謂人家失火、各操舟救援。及至、其光隱矣。始知師入國之瑞應也。次早寺主逸然同檀越請進興福寺、法語五則。即日二鎮主謁見、謙恭致禮、各贈以偈。」『新纂校訂隱元全集』五二〇〇頁。

(21) 陳僊、陳仙、陳博と名乗る仙人。一六五四年、隱元禪師の渡航に当たつて、陳博と名乗る仙人は扶乩を通じて、送別の詩「寄贈和尚扶桑之行」・嚼盡黃根齒不寒、可知機下有禪關。三千桃葉初生日、以待真人共對澆。」を贈つた。寶永二年(一七〇五)、靈元上皇は、この詩を大いに重視し、黄檗宗の僧並びに参議藤原韶光、左大臣近衛家熙、天臺僧止堯憲などに文を書かせ、文集の『桃葉編』を編集させ、自ら序を寄せた。この『桃葉編』にある「寄贈和尚扶桑之行」の詩は、隱元禪師の弘法の見通し及び靈元上皇の誕生、即位についての予言で、またこの詩の作者である扶乩の仙人陳博が、実際に仙人と尊ばれる北宋の道士陳搏(八七一—九九九)の化身であると解釈された。靈元上皇はこの詩を通じて、皇室の神聖と尊厳を高めようと勘案したのでろう。参考…①『桃葉編』、三卷。藤原韶光編、日本寶永二年(一七〇五)。靈元上皇序。巻頭に「寶永二年十月二十三日」と記す「太上天皇御製桃葉編序」、巻末に「寶永二年歲次丙戌十一月朔旦、傳天臺教觀前大僧正沙門堯憲謹序」と記す「後序」がある。各巻題記…「参議正三位臣藤原朝臣韶光奉教撰、直指臣僧道澄、佛國臣僧道龜同校訂。」無名氏筆写本、日本愛知縣常滑市黄檗宗龍雲寺黄檗堂文庫存。②林觀潮「隱元隆琦と日本皇室―『桃葉編』を巡つて―」、『黄檗文華』第一二三號、京都黄檗山萬福寺黄檗文化研究所、二〇〇四年七月。

(22) 『普照國師年譜』…「明曆元年乙未。師六十四歲。(中略)會竺印上座齋賜紫龍溪大德等書請師住攝州普門。師曰…老僧年邁遠涉洪濤、以踐長崎之信足矣。那堪又應乎。既而二鎮主及竺印懇請不已、乃許之。(中略)師到普門、四方道俗、疑信參半、是非蜂起。師曰…鼻祖西來、有服毒之事。蘭溪東渡、有流言之謗。古人尚爾、而況於今、無足怪矣。」『新纂校訂隱元全集』五二二頁。

(23) 泰猷、太和小。『普照國師年譜』…「寬文元年辛丑。師七十歲。…五月初八日、太和開創、仍以黃檗山萬福禪寺名之、志不忘舊也。故有東西兩黃檗之語。八月廿九日進山、法語三則。」『新纂校訂隱元全集』五二三頁。

(24) 『普照國師年譜』…「寬文四年甲辰。師七十三歲。…師自開山黃檗、多放禽鳥、但闕放生池以縱水族。是夏洛中有二信士舍金、即命工山門內鑿池。池成放生。」『新纂校訂隱元全集』五二四頁。又、「放生池偈」…「余開山黃檗、得林巒之秀氣、每放生靈、盡皆禽屬、惟水族無與焉為歎。適某信士輸金鑿池、甚愜所懷。今後得魚鳥之同樂、樂莫大焉。乃述偈以識。鑿地開山澈本源、長流德澤利無邊。池成碧湛從魚躍、林密扶疏放鳥喧。人得逍遙無掛礙、物能解脫即悠然。盡教鱗羽游江漢、其樂春秋一大年。」『新纂校訂隱元全集』三六四頁。

(25) 後水尾法皇宸翰…「敕。朕聞臨濟之道徧行天下、至天童雙徑光輝益盛。唯我日域久乏宗匠、幸黃檗隱元琦和尚受請東來、重立綱宗、闡揚濟道、大光於國、功不可磨。朕屢沾法乳、簡在朕心。故特賜大光普照國師之號、以旌厥德。欽哉。故諭。寬文十三年四月二日。」京都黃檗山萬福寺存、『新纂校訂隱元全集』五四六一頁載。

(26) 『普照國師年譜』…「寬文十三年癸丑。師八十二歲。…泊然長逝。實寬文癸丑四月初三日未時也。留身三日、容色如生。四部眾持香花而供者、靡不悲哀而戀慕焉。三日後鎖龕、百日內諸弟子伴龕坐禪、二時諷誦上供、以酬慈蔭。遵治命停龕三年、乃於延寶乙卯夏四月三日、當大祥之期、備法仗奉龕入塔、塔坐癸向丁、在開山堂之左。嗣法門人無得寧等二十三人、剃度弟子河陽常等五十餘人。」『新纂校訂隱元全集』五二六〇頁。

(27) 寶永乙酉、寶永二年(一七〇五)。

(28) ①『新纂校訂隱元全集』、全十二冊、五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戶時代諸刻本の編輯影印。②林觀潮『隱元隆琦禪師』、廈門大學出版社、二〇一〇年十月。③林觀潮『臨濟宗

黄檗派與日本黄檗宗』、中國財富出版社、二〇一三年三月。

(29) 大鵬正鯤『濟家黄檗山萬福禪寺派下寺院牒』、一卷。日本延享二年(一七四五)寫本、京都黄檗山萬福禪寺文華殿存。

(30) 『黄檗文化人名辞典』、「序」：「今日、その影響は優れた文化遺産として、また文化的伝統として種々の分野に遺されており、わが国近世の文化を語るとき、黄檗禪や黄檗文化を抜きにして論ずることは不可能となっている。」  
『黄檗文化人名辞典』、大槻幹郎、加藤正俊、林雪光編著、京都思文閣、一九八八年十二月。

(31) ①柳田聖山：「近世日本の動きは、どの一面を取ってみても、黄檗文化の影響なしには解釈できない。」「近世日本仏教の改革―隠元」、『禪と日本文化』一八六頁、東京講談社、一九九二年六月。②柳田聖山：「明治以後の急激な西欧化によって、與かく見逃されていた靈性アジア的、本質的な反省の時與して、隠元生誕四百年を位置づけてよいのでないか。」『隠元誕生四百年 靈性アジアの本質的な反省の時』、『禪畫報』第二十號、四五頁、京都千真工藝株式會社、一九九二年夏。

(32) 習近平「在中日友好交流大會上的講話」、人民日報客戶端、二〇一五—〇五—二三 二二…二〇…二五。

## 鎌倉期禅僧の喫茶史料集成ならびに訓註 (上)

館 隆 志

### はじめに

本論は、鎌倉期に活躍した禅僧の「喫茶」史料を収集し、注釈を加えて研究者への便宜を図ることを目的とするものである。「茶」は、鎌倉時代に中国僧や中国に留学した禅僧たちによって輸入され、「禅」を介して日本に定着した。茶を飲む「喫茶文化」として広がり、それが現在の「茶道」へと展開してゆく。それに関わらず、禅宗文献の読解は極めて難解であるため、「禅宗」を中心とした視座は確立されていない。

本研究で扱う「喫茶」は、「茶道」として形作られる前の茶を飲む行為そのものとしての「喫茶」であり、これを「喫茶文化」として定義づけているものである。

喫茶文化の最初の伝来は明確ではないが、文献上の初見は、『日本後紀』弘仁六年(八一五)四月二十二日条で、「近江国滋賀韓埼」に行幸した嵯峨天皇が梵刹寺に立ち寄った際に、「大僧都永忠」が自ら煎じた茶を献じた記事であり、日本における受容と展開は当初より仏教を介して行なわれた。そして、鎌倉期以降に仏教寺院で広く受容されはじめ、室町期以降に茶道へと発展していき、庶民にまで広がり、現在まで受け継

がれている。このような、日本の仏教・文化史上極めて重要である喫茶文化の伝播と展開に対し、現在の研究動向は、二つの流れが形成されつつある。

一つは、喫茶を茶道史の中の位置づけで論ずる場合であり、かつて行なわれていた研究はほとんどがこの方法に基づいている。その場合、奈良・平安まで受け継がれた喫茶は、鎌倉時代に栄西によって再び招来され、その後も禅宗寺院を中心に受容され、室町期以降の茶道へとつながっていくとする見解を基本とするものである。ただし、論拠として最も重要であるはずの禅宗文献はほぼ取り上げられておらず、文献上の裏付けがない。

一つは、喫茶を喫茶文化として、茶道史とは切り離れた位置づけで論ずる場合であり、喫茶文化は奈良・平安から受け継がれ、鎌倉期以降、禅宗寺院のみならず、顕密寺院もその受容と展開に大きく寄与し、室町期以降の茶道につながっていくとする見解を基本とするものである。これは、従来の茶道史観のみから論じられる研究に対するものでもあり、この二つの流れを総合的に踏まえつつ研究が蓄積されている。しかしながら、鎌倉時代から南北朝にかけて最も影響力のあった禅宗の文献をほとんど用いておらず、その時代の実情を反映したものとはなっていない。

上記の研究は、専門著書、単独の雑誌論文ともに枚挙に暇がない。しかしながら、喫茶文化が中国から伝来し、禅寺を中心として受容されたにも拘わらず、そもそも基本となるはずの禅宗文献における喫茶史料が収集されていない。さらに、先行研究では禅宗寺院や僧侶の膨大な記録のなかでほんの一部の史料が使用されるだけであり、使用されている禅宗文献さえも、丹念に分析している研究は少ない。すなわち、現在の研究状況は不十分な史料による考察に基づくものであり、正確な分析が行なわれているとは言いがたいのであ

る。

その上、これまでの喫茶、および喫茶文化の研究は、基本的には禅宗研究者以外の手によって行なわれてきたため、特に鎌倉時代から南北朝期という茶道成立以前の時代を論究するに際し、禅語録を中心とした禅宗文献を基本史料とした上で、禅宗との関連で詳しく述べたものはほとんどない。また、これまで残存史料として紹介されたものが金沢文庫に集中しているため、ここから全体像を明らかにしようと試みる研究がほとんどである。

たとえば、茶に関する史料を収集した『史料による茶の湯の歴史』上(主婦の友社、一九九六)では、第一章「茶の湯以前」の第二節「宋代の茶と喫茶養生記」、第三節「禅院の茶」、第四節「喫茶の普及」において、日本の書物としては『喫茶養生記』『吾妻鏡』『仏日庵公物目録』『沙石集』『金沢文庫古文書』『関東往還記』が挙げられている。もちろん、本書は喫茶史料を総て網羅した史料集ではないが、この中の禅宗史料は、僅かに『喫茶養生記』『仏日庵公物目録』のみである。しかも、このような状況は、近年ようやく盛んになりつつある喫茶文化を中心とした研究においても見られ、研究で用いられている鎌倉時代の史料の中に、禅宗関係のものは極めて少ないのが実情である。

一方、実際に禅宗文献を紐解けば多くの喫茶史料を見ることができ、もちろん、禅宗文献はその内容が難解であるため、文献使用に際してはより細かい読解が必要である。また、実際に喫茶したか否かの判断に迷う文献も存在するが、一方で、確実に喫茶していたことを示す史料はかなり多く見られる。それは、これまでに提示されてきた顕密仏教や金沢文庫史料にも引けをとらないほどであり、その上、年代的な連続性も見いだせるのである。

そこで、このような研究状況を鑑みて、本論において、鎌倉期の禅語録をはじめとした禅宗文献における喫茶文化の史料を読解し、分析することで、日本における喫茶文化の受容とその背景、多様性と、その後中国から日本へと展開し日本化した過程が明らかになると考えたのである。

当初は確実に喫茶していたことを示す史料のみを収集していた。たとえば、鎌倉期禅僧たちが説法する際に、唐代や宋代の古則公案を引用した場合、その引用文に「喫茶」があるからと言って、それは実際に喫茶していたとは言えないからである。また、説法中に「喫茶」の文字があるからと言って、それは確実に喫茶していたことを示すことにはならない。このような理由から、内容を精査し、その上で喫茶が確実に思われるものだけを収集し、読解していた。

ところが、その途中で、「喫茶」に関する古則公案を提示したり、「喫茶」を説法に用いる日にちが、ある特定の日に集中していることに気がついた。この中でも特徴的なのが、端午（五月五日）と重陽（九月九日）であった。そこで、除外した「喫茶」に関する古則公案や、説法で「喫茶」を用いたものを再び見直してみると、それらが端午や重陽に行なわれた例が見られたのである。

その結果として、鎌倉期の禅寺ではこの端午や重陽に際して実際に「喫茶」していたことが判明することになった（実際には中国の宋代に遡り得る行札であり、南北朝・室町期の禅寺でも行なわれていたようである）。端午や重陽で「喫茶」に関する古則公案や、説法で「喫茶」を用いるのは、その日に実際に喫茶していたからと考えたのである。端午や重陽の喫茶については、稿を分けて論ずる予定である。

このような状況を踏まえた場合、内容のみからは、それが喫茶史料ではないと断定することは難しいように思われる。また、少なくとも多くの修行僧を前にして「茶」に関する説法をしていることも、喫茶の受容

を考える上では必要な情報と言えるのかもしれない。さらに、茶を含む公案がどのように理解されていたのかも、「喫茶」の受容を理解するためには必要であろう。このような経緯から、本論においてはでき得るかぎり史料を収集して掲載することを目指したものである。

この史料収集と注釈を踏まえた上で、鎌倉時代の禅僧における喫茶の受容をテーマとした研究を今後進める予定であるが、本論はそれらの基礎的研究と位置づけるものである。また、今後の喫茶文化史や茶道史研究の一助になれば幸いである。

## 凡例

■本論で紹介する史料は、鎌倉期禅僧の喫茶、茶に関する史料であり、かつ管見に触れたものすべてである。ここで収集した鎌倉期禅僧の史料とは、鎌倉時代の元弘三年（一三三三）までに示寂している僧侶の史料に留めている。ただし、東西撰述の『喫茶養生記』については、それそのものが喫茶史料であり、またすでに多くの注釈が存するため、本論では内容の翻刻や注釈は行なっていない。

■提示する禅僧の順番は、示寂した年時による。ただし、月峰了然是、師である蘭溪道隆よりも早くに示寂しているが、師弟関係にあることを重んじ、蘭溪道隆の次に掲載している。

■道元の著述に関しては、分量も種類も多いため、最初に喫茶の実情が文脈の中から解り易い清規関係の著述を載せ、次に公案集である真字『正法眼蔵』、これを踏まえた著述である七十五巻本『正法眼蔵』、説法録である『永平広録』、最後にその他の著述などを順に掲載した。

■最初に翻刻を載せ、次に語注、次に訳文を載せた。書誌情報は、それぞれの語注の冒頭に記した。出典など細かい注については補注として最後に一括し掲載している。なお、注釈においては、花園大学国際禅学研究所長の野口善敬先生の

ご指導を賜った。

■ 訳文については、あくまで限られた情報から導き出される範囲のものであり、多くの問題を含んでいるため、参考程度に留めて頂きたい。また、訳文の後に、それぞれの文献における喫茶史料としての位置づけを【】で記し、内容の要約や、喫茶史料としての見解を記した。

■ 漢字仮名交じり文で構成される『正法眼藏』については、道元自身が重要と思われる部分を漢文（中国語）のまま記しているため、この部分は文中に（ ）で訓読文を掲載した。

■ 使用する漢字は、常用漢字を基本とし、旧字体は新字体に直し、適宜、句読点訓点を付した。

■ 出典に用いた史料のうち、主立った書籍の略称は以下の通り。大正新脩大藏経Ⅱ大正藏、卍統藏経Ⅱ統藏、蘭溪道隆禪師全集Ⅱ蘭溪全、五山文学全集Ⅱ五山全、五山文学新集Ⅱ五山新、道元禪師全集（春秋社）七卷本Ⅱ道元①、道元禪師全集（春秋社）十七卷本Ⅱ道元②。

## 宋西関係史料

「史料Ⅰ—Ⅰ」『興禪護国論』巻中

乾道戊子歲遊天台。見山川国土勝妙、道場清淨殊特、生大歡喜、嘗施淨財、供十方學般若菩薩。已而至石橋、拈香煎茶、敬礼住世五百大阿羅漢。（二〇b）

「訓」乾道戊子の歲、天台に遊ぶ。山川・国土の勝妙にして、道場の清淨・殊特なるを見て、大歡喜を生じ、嘗て淨財を施して、十方の學般若菩薩に供す。已にして石橋に至り、香を拈じて茶を煎じ、住世の五百大阿羅漢に敬礼す。

○栄西：臨済宗黄龍派の明庵栄西（一一四一～一二二五）のこと「補1」。○『興禅護国論』は、栄西によつて撰述され、建久九年（一一九八）に成立した禅籍。禅が一つの宗旨として独立することが、「国を護る」ためにも、仏教のためにも必要であることを論じている。江戸時代の安永七年（一七七八）に建仁寺の高峰東暎が諸本を対校して出版した。○掲載書籍：「大正蔵八〇・一〇b」。○乾道戊子歳：乾道四年（一一六八）に当たる。○天台：台州（浙江省）天台県の天台山。山中には国清寺・万年寺・華頂寺・天台石橋などが存する「補2」。○勝妙：きわめてすぐれている。○清浄：煩惱からはなれ、清らかなさま。○殊特：特にすぐれていること。○淨財：清浄なる財貨。清浄なることに用いる資材などという。○学般若菩薩：『大般若経』の本尊とされ、智慧の仏とされる。○石橋：天台石橋のこと「補3」。○住世：出世と対になる言葉で、この現実世界に住するの意。○五百大阿羅漢：もとは、仏の涅槃の後にあつまつた五百人の羅漢のこと。五百人の羅漢への信仰は、禅宗で盛んに行なわれた。○已：ここでは、ほとんどなくしての意味。○敬礼：敬つて礼拝すること。

「訳」乾道四年（一一六八）に、天台山に遊行した。山川・国土はきわめてすぐれており、道場は清浄でとくにごくすぐれていることを拜見して、大いによろこび、そのうえ淨財を施し、十方の学般若菩薩に供養した。ほとんどなくして天台石橋に着ぎ、焼香して茶を入れ（て供養し）、この現実世界に住する五百大阿羅漢に敬つて礼拝した。

【天台石橋での茶供養】【中国における茶の事例】栄西は一度目の入宋時に、天台山の石橋に行き、茶を供養している。

「史料1—2」 「千光法師祠堂記」

二十八、航海達四明、遊台山万年寺、礼石橋羅漢、瀕茶現花。又見二青龍、俄頃尊者現全身。

〔訓〕二十八、海を航りて四明に達し、台山の万年寺に遊び、石橋の羅漢を礼し、瀹茶するに花現わる。又た二の青龍を見、俄頃して尊者の全身現わる。

○『千光法師祠堂記』は、大宋宝慶元年（二二二五）八月九日に南宋の修職郎監臨安府都稅務の虞樞が撰した采西の伝記であり、采西が天童山の千仏閣の建立に日本より木材を送つてその事業を助化したことと、その祠堂が天童山内に建てられて供養法会が行なわれたことが記される。依頼者は道元の參師の明全であるが、明全は宋地で客死したため、『祠堂記』には明全の略伝も付され、また同伝記の将来者は道元と考えられている。○掲載書籍：『日本国千光法師祠堂記』（『統群書類従』第九輯上、統群書類従完成会、一九二五年、二七三頁）。○二十八：日本の仁安三年（一一六八）、南宋の乾道四年に当たる。○台山：台州（浙江省天台縣）天台山の天台山。山中には国清寺・万年寺・華頂寺・天台石橋などが存する。○万年寺：天台山中の列秀峰下の平田にある禪寺「補一」。○石橋：天台石橋のこと。○羅漢：阿羅漢。尊敬されるべき人。仏弟子の到達する最高の階位。○瀹茶：瀹茗。煎茶と同じ。茶を入れること。○青龍：瑞兆とされる青色の龍。○俄頃：しばらく。○尊者：尊き長老の意。ここでは、羅漢尊者を指す。

〔訳〕二十八歳で、海を航つて四明（浙江省明州）に到達し、天台山の万年寺に遊行し、天台石橋の羅漢を拝礼して、茶を入れて供えたところ、花が現われた。また二頭の青龍が出現し、しばらくしてから〔羅漢〕尊者の全身が現われた。

【天台石橋での茶供養】【中国における茶の事例】〔史料1-1〕に同じ。

〔史料1-3〕『元亨釈書』卷二「釈采西」

乾道戊子遊天台、見山川勝妙、生大歡喜、至石橋焚香、煎茶礼住世五百大羅漢。

〔訓〕乾道戊子、天台に遊び、山川の勝妙なるを見て、大歡喜を生じ、石橋に到りて焚香し、茶を煎じ住世

の五百大羅漢を礼す。

○『元亨釈書』：臨濟宗聖一派の虎関師鍊（一二七八～一三四六）によつて撰述され、元亨二年（一三三二）に成立した全三十卷の仏教通史。榮西の伝記は「伝智一之二」に収録されている。○掲載書籍：「大日仏一〇一・一五六」。

○乾道戊子：乾道四年（一一六八）のこと。○天台：台州（浙江省）天台県の天台山。山中には国清寺・万年寺・華頂寺・天台石橋などが存する。○勝妙：きわめてすぐれている。○石橋：天台石橋のこと。○焚香：香を焚くこと。

○住世：出世と対になる言葉で、この現実世界に住するの意。○五百大羅漢：もとは、仏の涅槃の後にあつまつた五百人の羅漢のこと。五百人の羅漢への信仰は、禅宗で盛んに行なわれた。

【訳】乾道四年（一一六八）、天台山に遊行し、山川がきわめてすぐれていることを見て大いに喜び、石橋にて焼香し、茶を入れて（供養し）この現実世界に住する五百大羅漢に礼拝した。

【天台石橋での茶供養】【中国における茶の事例】「史料1-1」に同じ。

【史料1-4】『元亨釈書』卷二「釈榮西」

戊子歲上台山、見青龍於石橋、感羅漢於餅峰、因而供茶異花現盞中。

【訓】戊子ぼしの歲、台山たいざんに上り、青龍せいりゆうを石橋しゃきやうに見て、羅漢らかんを餅峰びよほうに感じ、因ちなみて茶を供えるに、異花いか、盞中せんちゆうに現あらわる。

○掲載書籍：「大日仏一〇一・一五八」。○戊子歲：乾道四年（一一六八）のこと。○台山：台州（浙江省）天台県の天台山。山中には国清寺・万年寺・華頂寺・天台石橋などが存する。○青龍：瑞兆とされる青色の龍。○石橋：天台石橋のこと。○羅漢：尊き長老の意。ここでは、羅漢尊者を指す。○餅峰：蒸餅峰。天台山の石橋あたりにある峰

の名。

「訳」乾道四年（一一六八）、天台山上り、石橋で青龍を見て、蒸餅峰で羅漢を感じ、そこで茶を供えたところ、異花が茶の器の中に現われた。

【天台石橋での茶供養】【中国における茶の事例】「史料111」に同じ。

「史料115」『吾妻鏡』建保二年二月四日条

二月大四日己亥、晴。將軍家聊御病惱。諸人奔走。但無殊御事。是若去夜御淵醉余氣歟。爰葉上僧正候御加持之處、聞此事、称良葉、自本寺召進茶一盞。而相副一卷書令献之。所誉茶徳之書也。將軍家及御感悦云々。去月之比、坐禅余暇書出此抄之由申之。

「訓」二月四日己亥、晴る。將軍家、聊か御病惱。諸人奔走す。但し殊なる御事無し。是れ若しは去ぬる夜の御淵醉の余氣か。爰に葉上僧正、御加持候するの処、此の事を聞き、良葉と称し、本寺自り茶一盞を召し進む。而も一卷の書を相い副え之を献めしむ。茶の徳を誉むる所の書なり。將軍家、御感悦に及ぶと云々。去ぬる月の比、坐禅の余暇に此の抄を書き出だすの由、之を申す。

○『吾妻鏡』は、鎌倉時代成立の歴史書であり、源頼朝から宗尊親王まで六代の記録で、治承四年（一一八〇）から文永三年（一二六六）の事績が編年体で記されている。成立時期は明確ではないが、鎌倉末期と推定されている。○掲載書籍…『吾妻鏡』建保二年二月四日条（『新訂増補国史大系』第三十二『吾妻鏡』前、七〇九頁）。○將軍家…鎌倉三代將軍、源実朝（一一九二〜一二一九）のこと「補1」。○御淵醉余氣…二日酔いのこと。○葉上僧正…臨濟宗黃龍派の明庵栄西（一二四一〜一二二五）のこと「補2」。○加持…加持祈祷。密教の儀式。○本寺…ここでは、龜

谷山寿福寺のこと「補3」。○所誉茶徳之書：『喫茶養生記』のことと考えられている「補4」。

「訳」〔建保二年、一二二四〕二月四日己亥、〔天気は〕晴れ。將軍源実朝は、軽く病気のようなので、諸人が奔走した。ただし、特段変わった様子が見られない。これはあるいは昨晚の飲み過ぎによる二日酔いか。そこで葉上僧正栄西が加持祈祷をされていたが、この事（実朝の二日酔い）を聞き、良薬と言って、寿福寺より茶一杯を勧めた。そのうえ、一卷の書（『喫茶養生記』）を副えて献上した。〔これは〕茶の徳を誉める書物である。源実朝は感悦したという。〔栄西は〕以前、坐禅の余暇にこの書物を著していたと言っていた。

【薬用としての喫茶】『喫茶養生記』の提出「坐禅の余暇」にこの抄（『喫茶養生記』）を記したとする記事に注目したい。『吾妻鏡』ができた鎌倉後期には、「茶の徳を誉むる所の書」と坐禅が結びついていた可能性が示唆されているからである。

## 道元関係史料

「史料2-1」『典座教訓』

又嘉定十六年癸未五月中、在慶元舶裏。倭使頭説話次、有一老僧來。年六十許歳。一直便到舶裏、問和客討買倭榭。山僧請他喫茶。問他所在、便是阿育王山典座也。

「訓」又た嘉定十六年癸未五月中、慶元の舶裏に在り。倭使頭と説話する次、一老僧有りて來たる。年六十許の歳なり。一直いちじくに便すなわち舶裏はかりに到り、和客わやくに問うて倭榭わじんを討もとめ買かう。山僧、他に喫茶を請こう。他の所在かれしよこいを問とうに、便こち是れ阿育王山あいくわうの典座てんざなり。

○道元：曹洞宗の道元（一一〇〇～一一五三）のこと「補一」。○『典座教訓』一卷は、典座（てんざ禪寺の修行僧の食事司る役職）の心得を示したもので、嘉禎三年（一二三七）に撰述された。中国留学中に道元に衝撃を与えた二人の老典座の話をはじめ、典座の職に就いて悟りを開いた祖師の機縁を紹介し、その職がいかに大事であるかを書き記した。江戸期に道元の清規を集めて刊行した『道元禪師清規』（通称『永平清規』）に収録され、世に流布した。○掲載書籍：「道元①六・一二」「道元②十五・一四」。○慶元：慶元府のこと。寧波の港があった。○倭使頭：日本人の船頭か。○説話：話す。○一直：まっすぐに。○倭樵：日本産の桑の葉のことか。○阿育王山：阿育王山広利禪寺のこと「補2」。○典座：禪宗寺院で衆僧の食事を司る役。六知事の一つ。

「訳」また嘉定十六年癸未五月中は、慶元府〔寧波の港〕の舶中にいた。倭使頭（日本人の船頭）と話していた時に、一人の老僧がやつて来た。年は六十歳ほどに見えた。まっすぐにそのまま船にやつてきて、和客（日本人の乗船者）に尋ねて倭樵を求めて買われた。私は、その老僧に喫茶を勧めた。老僧の所在を質問したところ、阿育王山の典座であった。

【中国上陸前の喫茶】道元が上陸前の寧波の船中で、阿育王山の典座と対談せんことを欲して、茶を差し出してもてなしている。日本の禅僧が、茶によるもてなしを行なった記録として最も古いものではないか。中国における喫茶であるが、正式上陸前であることは注目される。日本の建仁寺や博多などで学習していた可能性が想定されるからである。

「史料2―2」『弁道法』

摺被時、不得教被横而到隣位单上。不得卒暴作声。護身護儀、随衆恭衆而已。開静以去、不得展单蓋被而眠。

粥了帰寮喫茶喫湯、或復被位打坐。

〔訓〕被を摺む時、被をして横えて隣位の単上に到らしむることを得ざれ。卒暴にして声を作すことを得ざれ。身を護り儀を護り、衆に随い衆に恭するのみ。開静以去は、単に展べ被を蓋うて眠ることを得ざれ。粥了わり衆寮に帰りて茶を喫し湯を喫し、或いは復た被位にて打坐す。

○『弁道法』は、永平寺の前身である大仏寺における道元の説示であり（二二四四～二二四六）、僧堂における規矩が記されている。江戸期に道元の清規を集めて刊行した『道元禅師清規』（通称『永平清規』）に収録され、世に流布した。○掲載書籍：「道元①六・三六」「道元②十五・四三」。○被：掛け布団のこと。○卒暴：にわかに。急いで。○開静：修行僧を眠りから起こすこと。『禅苑清規』など。○衆寮：修行僧の学問所。読書や自習をする場所であることから、看読寮ともいう。

〔訳〕被（掛け布団）を畳む時、被（掛け布団）を横にして隣りの単（座位）の上まで到らないようにしなさい。急いで扱って音を出さないようにしなさい。身体を護り四威儀を護り、大衆とともに行動し、大衆ともにつつしんで修行するだけである。開静以後は、単（座位）を被（掛け布団）で蓋って眠ることがないように。粥が了わって衆寮に帰ってから茶を飲み湯を飲み、あるいはまた僧堂の自分の単で坐禅しなさい。

〔日常修行における喫茶〕粥が終わわり、衆寮に帰ってから茶湯を飲むことが記されている。毎日の修行生活における喫茶が規定されている。

〔史料2—3〕『弁道法』

寮主焼香之法、先到当面向聖僧問訊罷、步寄香炉之前、右手上香罷、又手右轉身還到当面、問訊訖、又手歩

到上間之兩板頭中間、問訊訖、又手右轉身、經正面而步到下間之兩板頭中間、問訊訖又手右轉身、步到正面  
向聖僧問訊了又手而立。然後行湯行茶。茶湯罷又燒香問訊。行李如初。

【訓】寮主燒香の法、先ず当面の聖僧に向かつて問訊し罷わり、香炉の前に歩み寄り、右手にて上香し罷わり、又手にて右に身を転じ、還つて当面に到りて問訊し訖わり、又手にて上間の兩板頭の間中に歩み到り、問訊し訖わり、又手にて右に身を転じ、正面を経て下間の兩板頭の間中に歩み到り、問訊し訖わり又手にて右に身を転じ、正面に歩み到りて聖僧に向かつて問訊し了わり又手にして立つ。然る後に行湯行茶す。茶罷に又た燒香問訊す。行李初めの如し。

○掲載書籍：「道元①六・四二〜四四」「道元②十五・五〇〜五一」。○寮主：衆寮に関する要務を司る役職。修行僧が交代で就任する。○当面：目の前。○聖僧：僧堂の中央に奉安する仏像。○問訊：一礼して頭を下げる。○上香：香を仏前に上げる。○又手：両手を胸の辺りで重ねること。左手は握つて拳をつつて親指を上に向け、右手は左手の甲の上に、親指以外の四本の指を置き、親指は左手親指の上に置く形を作る。○板頭：僧堂内の長連牀の各板の上位。首座位、後堂位などを指す。○行李：起居動作。

【訳】寮主の燒香の方法は、まず正面の聖僧に向かつて問訊し終われば、香炉の前に歩みより、右手にて上香し終わつたら、又手して右廻りに身を転じ、還つて正面に歩みよつて問訊し終われば、又手にて上間の兩板頭の間中に歩み寄り、問訊し終われば、又手して右廻りに身を転じ、正面を経て下間の兩淨縁の間中に歩み寄り、問訊し終われば又手にて右廻りに身を転じ、正面に歩み寄り聖僧に問訊して又手で立つ。「その後」湯を飲み、茶を飲む。茶・湯を飲み終わつたら燒香して問訊する。その作法は最初と同じである。

【日常修行における喫茶】晡時坐禪後の放參に際し、寮主が燒香する作法が記される。そして、寮主が燒香

し終わつたら、衆寮において皆で一斉に「行湯行茶」することが記されている。毎日の修行生活における喫茶が規定されている。

〔史料2―4〕『知事清規』

所謂道心者、不抛撒于仏祖之大道、深護惜于仏祖之大道。所以名利抛來、家郷辞去、比黄金於糞土、比声誉於涕唾、不瞞於真、不順於偽、護規繩之曲直、任法度之進退、遂不以仏祖家常之茶飯而売弄於賤価、乃道心也。

〔訓〕所謂の道心とは、仏祖の大道を抛撒せず、深く仏祖の大道を護惜するなり。所以に名利を抛ち來たり、家郷を辞し去り、黄金を糞土に比し、声誉を涕唾に比し、真を瞞かず、偽に順わず、規繩の曲直を護り、法度の進退に任かし、遂に仏祖家常の茶飯を以て賤価に売弄せざる、乃ち道心なり。

○『知事清規』は、寛元元年（一二四六）六月十五日に大仏寺を永平寺に改めた時に撰述された。江戸期に道元の清規を集めて刊行した『道元禅師清規』（通称『永平清規』）に収録され、世に流布した。○掲載書籍：『道元①』六・一三三二〔道元②〕十五・一五〇。○道心：悟りを求める心。仏道を求める心。○仏祖之大道：仏法の真理。仏法の一大事。○抛撒：なげすてる。○護惜：おしまもる。○名利：名譽と利益。名聞と利養。利養は財を食り己を肥やすこと。名聞は世間的な評判名声。○糞土：糞やきたない土。○声誉：声名。よい評判。○涕唾：なみだやつば。きたないもののたとえ。○規繩：円を描くためのぶんまわしと、長い直線をひくための墨繩。軌範などの基準となるもの。○曲直：まがつたことと、まっすぐなこと。正しくないことと、正しいこと。○法度：法律や制度などのきまり。軌範。○進退：立ち居振る舞い。○家常：日常。○売弄：自慢する。○賤価：安価。やすい値段。

〔訳〕いわゆる道心（仏道を求める心）とは、仏祖の大道（仏法の真理）をなげすてずに、深く仏祖の大道（仏

法の真理を惜しみ護ることである。だから、名聞と利養を投げ捨てて、故郷を立ち去り、黄金を糞や土のように見、名声を涙や唾のように見て、真実を欺かず、偽物に順わず、軌範を守り、法度に記された立ち居振る舞い通りに行ない、決して仏祖家常の茶飯（仏祖の日常の作法）を安価に自慢しないのが、まさに道心（仏道を求める心）なのである。

【仏祖家常の茶飯としての引用】修行僧の日常生活を、「仏祖家常の茶飯」と表現している。日常修行で喫茶が行なわれているからこそその記述であろう。

〔史料2—5〕『知事清規』

新到茶湯、特為不得闕礼。

〔訓〕新到しんとうの茶湯さとうは、特為とくゐにして礼れいを闕かくを得えざれ。

○掲載書籍：「道元①六・一五〇」「道元②十五・一七一」。○特為：特別に設ける。

〔訳〕新到に対する茶湯は、特別に設ける茶礼であり、礼節を欠いてはならない。

【清規における特為茶の一例】新しく寺に到着した雲衲に対して、特別に設ける茶湯を行なう場合は、礼節を欠いてはならないことを記す。新たに寺院に入山した修行僧に対して茶湯をしていたとみられる。雲水として行脚し、寺院に到着した修行僧を、客人としてもてなしていたものだろう。

〔史料2—6〕『赴粥飯法』

粥後放參、即住持人出堂、打放參鐘三下。如遇早參、更不打鐘。如為齋主、三下後陞堂、亦須打放參鐘。又

大坐茶湯罷、住持人聖僧前問訊出、即打下堂鐘三下。如監院首座入堂煎点、送住持人出、却来堂内、聖僧前上下問訊罷、盞裏出方打下堂鐘三下。

〔訓〕粥後の放参、即ち住持人出堂して、放参鐘を打つこと三下す。如し早参に遇わば、更に鐘を打たず。如し齋主のために、三下後に陞堂すれば、亦た須らく放参鐘を打つべし。又大坐の茶湯罷わつて、住持人聖僧前にて問訊して出ずれば、即ち下堂鐘を打つこと三下す。如し監院・首座の堂に入りて煎点せば、住持人の出づるを送り、堂内の聖僧前に却来して、上下間に問訊し罷わつて、盞・裏出ずれば方に下堂鐘を打つこと三下す。

○『赴粥飯法』一卷は、粥飯に赴くときの作法であり、永平寺において道元によつて示された。江戸期に道元の清規を集めて刊行した『道元禅師清規』（通称『永平清規』）に収録され、世に流布した。○掲載書籍：「道元①六・七〇〜七二」「道元②十五・八一〜八二」。○放参：もとは晩参（夜の坐禅）をやめて、修行僧に自由な時間を与えることを意味する言葉であったが、後にはすべての行事で休むことを「放参」と言うようになった。○放参鐘：放参の合図として打つ鐘。○早参：早朝の坐禅（早晨坐禅）。○齋主：施主。○陞堂：法堂に登つて説法する。○大坐茶湯：僧堂において大衆一同が坐して行なう茶礼。○下堂鐘：下堂は僧堂や法堂を退いて各自の寮社に帰ること。下堂鐘はその合図として打つ鐘。○監院：監寺とも。寺の運営面を司る要職。総領の任にあたる役目。六知事の一つ。○首座：第一座。禅宗寺院で修行僧の首位に坐る者。六頭首の一つ。○煎点：茶を入れること。

〔訳〕朝食の粥後の放参では、住持が（僧堂から）出堂して、放参鐘を三回打つ。もし早参（早晨坐禅）に遇えば、決して鐘を打たない。もし施主のために三回鳴つたのちに陞堂するなら、また必ず放参鐘を打たなければならぬ。また大坐の茶湯のあとは、住持人は聖僧前で問訊してから出堂し、すぐに下堂鐘を三回打つ。もし監院・首座が僧堂に入って煎点（茶を入れる）するならば、住持が僧堂から出るのを送り、僧堂内

の聖僧前に戻ってきて、上下問（で坐禅している大衆）に問訊してから、盞臺（茶碗と茶托）が片づけられたところで下堂鐘（下堂の合図の鐘）を三回打つ。

【日常修行における喫茶】【茶道具の記述】道元の記した清規に、粥後に放参した後に、「大坐茶湯」の茶礼があつた場合の作法が記されている。また、監院・首座が茶礼を行なつた場合の作法も記されている。この際の記述からは盞臺（茶碗と茶托）が使用されていたとみられる。

「史料2-7」真字『正法眼蔵』第一〇六則

澧州龍潭崇信禪師（嗣天皇）作餅為業。礼天皇和尚出家。皇謂云汝執侍吾、已後為汝説心要法門。凡經一載。師曰、來時和尚許説心要法門、至今未蒙指示。皇云、吾為汝説來久矣。師曰、何処是和尚為某説。皇云、你若不審、我則合掌。我若坐時、汝則侍立。汝擎茶來、吾為汝受。師良久。皇云、見則便見、擬思即差。師乃大悟。

「訓」澧州の龍潭崇信禪師（天皇に嗣ぐ）は餅を作るを業と為す。天皇和尚を礼して出家す。皇謂いて云く、「汝、吾に執侍せば、已後、汝が為に心要法門を説かん」と。凡そ一載を經。師曰く、「來たる時、和尚、心要法門を説くを許すも、今に至るまで未だ指示を蒙らず」と。皇云く、「吾、汝が為に説きたること久し」と。師曰く、「何処にて是れ和尚某の為に説くや」と。皇云く、「你若し不審せば、我則ち合掌す。我若し坐する時は、汝則ち侍立す。汝茶を擎げ來たれば、吾汝の為に受く」と。師、良久す。皇云く、「見れば則便ち見る、思わんと擬せば即ち差う」と。師乃ち大悟す。

○真字『正法眼蔵』は、道元が公案を三百則集めて著した漢文体の『正法眼蔵』のこと。一般的に知られる和文体の

『正法眼蔵』とは異なり、漢文体であるため、区別のために真字『正法眼蔵』と呼称される。この真字『正法眼蔵』は日本で編纂された最古の公案集であり、道元自身の手によって編集された。○掲載書籍：「道元①五・一八二〜一八四」「道元②十四・一六五」。○澧州龍潭崇く師乃大悟：「補1」。○澧州龍潭崇信禅師：唐代、青原下の龍潭崇信（生没年不詳）のこと「補2」。○天皇：石頭下の天皇道悟（七四八〜八〇七）のこと「補3」。○執侍：従事する。○心要：教えの真髓。○法門：真理の教え。仏の教え。○不審：挨拶の言葉。挨拶そのものも意味する。○侍立：そばに立つ。

〔訳〕澧州の龍潭崇信禅師（天皇道悟に嗣法する）は餅を作ることを生業としていたが、天皇道悟を礼して出家した。天皇道悟は言った、「君が私に付き従うなら、以後、私は君のために心要（教えの真髓）法門（真理の教え）を説こう」と。一年が経った。師（龍潭崇信）が言った、「ここにやって来た時に、和尚さんは、理の教えを説こう」と。師（龍潭崇信）が言った、「今まで示教を受けておりません」と。天皇道悟が言った、「私は君のために〔禅の教えを〕ずっと説いてきたんだ」と。師（龍潭崇信）が言った、「いったい、いつどこで和尚さまは私のために説いたのですか」と。天皇道悟が言った、「君が挨拶したときは、私はすぐに合掌していたではないか。私が坐禅している時は、君はすぐにそばに立つていたではないか。君が茶を捧げてもってやって来れば、私は君のために受けとっていたではないか」と。師（龍潭崇信）は、「意味が理解できずに」黙っていた。天皇道悟が言った、「見るときはそのまま見なさい、〔思慮をさしいれて〕見ようと思つてしまえばもうまちがいだ」と。師（龍潭崇信）はそこで大悟した。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によって紹介されていた。この公案に基づき、「史料2-50」「永平広録」巻

九「頌古」が提示された。

〔史料2—8〕真字『正法眼蔵』第一四三則

芙蓉山道楷禪師、問投子山青禪師曰、仏祖意句、如家常茶飯。離此之余、還別有為人言句也無。青和尚云、汝道、寰中天子勅、還佞禹湯堯舜也無。師擬開口。青和尚拈拄子驀口打云、你発意來時、早有二十棒分。師於此契悟、作礼便行。青和尚云、且來闍梨。師竟不回首。青和尚云、子到不疑之地耶。師掩耳而去。

〔訓〕芙蓉山道楷禪師、投子山青禪師に問うて曰く、「仏祖の意句は、家常の茶飯の如し。此れを離るるの余、還た別に為人の言句有りや」と。青和尚云く、「汝道え、寰中の天子の勅、還た禹湯堯舜を偸るや」と。師、口を開かんと擬するに、青和尚、扨子を拈つて驀口に打ちて云く、「你、発意して來たる時、早や二十棒の分有り」と。師、此に於いて契悟し、礼を作して便ち行く。青和尚云く、「且く來たれ闍梨」と。師竟に回首せず。青和尚云く、「子、不疑の地に到るや」と。師、耳を掩いて去る。

○掲載書籍：「道元①五・二〇二」「道元②十四・一八五」。○芙蓉山道楷禪師：曹洞宗の芙蓉道楷（一〇四三〜一一一八）のこと「補2」。○投子山青禪師：曹洞宗の投子義青（一〇三二〜一〇八三）のこと「補3」。○天子勅：天子は皇帝。皇帝（天皇）が発した命令。○禹湯：古代中国の明君である。○夏の禹王、殷の湯王のこと。○堯舜：中国古代の伝説上の帝王である堯と舜。○驀口：くちめがけてまっこうに。○発意：「ほつち」とも。仏法を求める心を起こすこと。発菩提心。発心。○二十棒：三十棒。師家が学人に対して与える棒打。徳山の棒。○開悟：大悟。悟りを開くこと。○契悟：開悟。大悟。悟りを開くこと。○闍梨：禅僧の代名詞。「私」の代名詞。天台宗の阿闍梨のことではない。○回首：廻首。振り返る。ふり返つて後ろを見る。○不疑：大悟徹底の境地。

「訊」芙蓉山の道楷禅師が投子山の義青禅師に質問した、「仏祖の言葉は家常の茶飯のようなものです。このことを離れて、別に教えの言葉がありますか」と。投子義青が言った、「君、言いたまえ、囊中の天子の勅は、はて禹・湯・堯・舜王の言葉を借りるか」と。師（芙蓉道楷）が何か言おうとしたところ、投子義青は払子を手を持ち口めがけてまっこうに打ちつけてから言った、「君が発心して来た時に、すでに二十棒をくれてやるに十分だったぞ」と。師（芙蓉道楷）は、ここで開悟し、再び礼拝すると立ち去ろうとした。投子義青が言った、「ちよつとこちらに來なさい、和尚さん」と。師（芙蓉道楷）は、とうとう振り返らなかつた。投子義青が言った、「君は、不疑の地（大悟徹底の境地）に到ったのか」と。師（芙蓉道楷）は、手で耳を掩つて去つて行つた。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によつて紹介されていた。この公案に基づき、「史料2-27」『正法眼蔵』「家常」や「史料2-51」『永平広録』巻九「頌古」が提示された。

「史料2-9」真字『正法眼蔵』第二三三則

趙州、有僧到。便問、曾到此否。僧云、曾到。師曰、喫茶去。又問僧、曾到此否。僧曰、不曾到。師曰、喫茶去。院主問、曾到且従、不曾到如何喫茶去。師乃喚院主。主応諾。師曰、喫茶去。

【訓】趙州、僧有りて到る。便ち問う、「曾て此に到るや」と。僧云く、「曾て到る」と。師曰く、「喫茶去」と。又た僧に問う、「曾て此に到るや」と。僧曰く、「曾て到らず」と。師曰く、「喫茶去」と。院主問う、「曾て到るは且く従く、曾て到らずは如何が喫茶去なる」と。師乃ち院主を喚ぶ。主、応諾す。師曰く、

「喫茶去」と。

○掲載書籍：「道元①五・二四八」「道元②十四・二三三」。○趙州く喫茶去…「補1」。○趙州…南嶽下の趙州從諗（七七八く八九七）のこと「補2」。○喫茶去…茶を飲みに行け。茶を飲んでから出直して来い。○院主…寺院の事務一切を主宰する者のこと。律院・教院の主たる者や、禪院の監寺・監院のこと言う。○応諾…うけがう。承諾する。

「訳」趙州從諗のもとに、ある僧がやってきた。すぐに質問した、「ここに来たことがあるか」と。僧が言った、「来たことがあります」と。師（趙州從諗）が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。僧が言った、「来たことはありません」と。師（趙州從諗）が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。院主が質問した、「来たことがある（と言った）僧についてはひとまずおいておきますが、来たことがないと言った僧にどうして茶をのみにいけ（と言ったのですか）」と。師（趙州從諗）はそこで「院主さん」と喚んだ、院主は（ハイと）応えた。師（趙州從諗）が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によつて紹介されていた。この公案に基づき、「史料2―28」「正法眼蔵」「家常」が提示された。

「史料2―10」真字『正法眼蔵』第二六三則

襄州王敬初常侍、一日治事次、京兆米和尚至。侍乃拳筆示之。米曰、還判得虚空麼。侍乃擲下筆入宅、更不復請。米和尚致疑。明日憑華嚴置茶筵次、設問、昨日米和尚、有何言句、便不得相見。侍曰、師子斲人、韓

獵逐塊。米纒聞乃遽出、朗笑曰、我会也、我会也。侍曰、会即不無、你試道看。米曰、請常侍拳。侍乃豎起一隻筋。米曰、這野狐精。侍云、這漢徹去也。

「訓」襄州の王敬初常侍、一日治事の次、京兆の米和尚至る。侍、乃ち筆を挙げて之に示す。米曰く、「還た虚空に判得すや」と。侍、乃ち筆を擲下し宅に入り、更に復た請せず。米和尚、疑を致した。明日、華嚴に憑いて茶を筵に置くの次、設問すらく、「昨日、米和尚、何の言句か有りて、便ち相見するを得ず」と。侍曰く、「師子は人を齧み、韓獹は塊を逐う」と。米、纒かに聞きて乃ち遽かに出で、朗らかに笑いて曰く、「我会せり、我会せり」と。侍曰く、「会することは即ち無きにはあらざるも、你試みに道いて看よ」と。米曰く、「常侍の拳すを請う」と。侍乃ち一隻の筋を豎起す。米曰く、「這の野狐精」と。侍云く、「這の漢、徹し去れり」と。

○掲載書籍…「道元①五・二六〇」「道元②十四・二四六～二四七」。○襄州王敬初…這漢徹去也…「補一」。○襄州…襄州(湖北省)のこと。○王敬初…唐代、瀉山下の王敬初(生没年不詳)のこと「補二」。○常侍…中国における宮廷の官名。○治事…事をおさめる。事務をとる。○京兆…雍州(陝西省)京兆府のこと。○米和尚…唐代、瀉山下の米和尚(生没年不詳)のこと「補3」。○虚空…空中の意。○判得…判は押判(公文書への署名)の意であろう。○擲下…投げ下ろす。投げ捨てる。○更不復請…請は調。面会しなかったの意。○華嚴…華嚴会のこと。『華嚴經』を講読し讚嘆する法会のこと。○筵…むしろ。○相見…互いに相い見える。拝顔する。○師子齧人、韓獹逐塊…「補4」。○韓獹…韓廬とも。戦国時代、韓の国の黒毛の駿犬の名。○筋…はし。○豎起…まっすぐ立てること。○野狐精…この狐のもののため。見かけ倒しを罵る言葉。○徹去…徹している。去は動作の進行を表す助字。

「訳」襄州の常侍であった王敬初は、ある日の事務をしていたら、京兆の米和尚がやってきた。常侍はそこで筆を手にとつて米和尚に示した。米和尚が言った、「はて空中に署名できたかい」と。常侍はすぐに筆を

投げ捨てて部屋に入り、決して面会しなかった。米和尚は疑いの気持ちを持ったので、翌日、華厳会で茶を筵むしろを置いた際に、質問した、「昨日は、私のどんな言葉で、相見できなかったのですか」と。常侍が言った、「師子は人を咬むが、韓獺は塊を逐うものです」と。米和尚は、聞くやいなやすぐに〔外に〕出て、朗らかに笑って言った、「私は分かった、私は分かった」と。常侍が言った、「分かったことは有るかもしれないが、何が分かったか」試しに言ってみてごらん下さい」と。米和尚が言った、「常侍さんが何かを〔質問として〕挙げ示して下さい」と。常侍はすぐに一本の箸をまつすぐに立てた。米和尚が言った、「この〔見かけ倒しな〕野狐精め」と。常侍が言った、「こやつは、徹底して〔悟って〕いる」と。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によつて紹介されていた。

〔史料2—11〕真字『正法眼蔵』第二九八則

長慶有時云、寧説阿羅漢有三毒、不説如来有二種語。不道如来無語、只是無二種語。保福曰、作麼生是如来語。師曰、聾人争得聞。保福曰、情知、汝向第二頭道。師曰、作麼生是如来語。保福云、喫茶去。

〔訓〕長慶、有る時云く、「寧ろ阿羅漢あらかんに三毒有りと説くも、如来にょらいに二種語有りと説かざれ。如来に語無しと道いわず、只だ是れ二種語な無なきのみ」と。保福曰く、「作麼生そもさんか是れ如来の語」と。師曰く、「聾人ろうじん、争いでか聞くことを得ん」と。保福曰く、「情まじに知る、汝、第二頭だいにとうに向むかつて道いうことを」と。師曰く、「作麼生そもさんか是れ如来の語」と。保福云く、「喫茶去きつさこ」と。

○掲載書籍：「道元①五・二七四」「道元②十四・二六一」。○長慶有時云く喫茶去：「補一」。○長慶：雪峰下の長

慶慧稜(八五四〜九三二)のこと「補2」。○阿羅漢…尊敬されるべき人。仏弟子の到達する最高の階位。○三毒…人の善心を害する三種の煩惱。貪・瞋・癡。○如来…タターガタ(梵: Tathagata)のこと。真如から来た人。真理に到達した人。仏陀のこと。仏の十号の一。○保福…雪峰下の保福従展(？〜九二八)のこと「補3」。○聾…耳が聞こえない状態。○向第二頭…後手。次の一手。○喫茶去…茶を飲みに行け。茶を飲んでから出直して来い。

「訳」長慶慧稜がある時に言った、「いつそ阿羅漢に(貪・瞋・癡の)三毒が有ると説いたとしても、如来に二種(真実・方便)の語が有ると説いてはならない。如来に言葉が無いと言わないが、ただ二種の言葉だけは無い(、真実の言葉のみがあるのだ)」と。保福従展が言った、「如来の言葉とはどういうものですか」と。師(長慶慧稜)が言った、「聾人(聞く耳をもたぬ人)に、どうして聞くことができよう」と。保福従展が言った、「まったく解った、君が(仏法の第一義を言えずに)第二義を言っていることが」と。長慶慧稜が言った、「(では、いったい)如来の言葉とはどういうものですか」と。保福従展が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によって紹介されていた。この公案に基づき、「史料2-12」『永平広録』巻九「頌古」が提示された。

「史料2-12」『正法眼蔵』「仏性」七十五巻本の三巻

四祖いはく、是何姓は、何は是なり、何は是なり、何は是なり、何は是なり、何ならしむるは是のゆゑなり、是ならしむるは何の能なり。姓は是也何也なり。これを膏湯にも点ず、茶湯にも点ず、家常の茶飯ともするなり。

○『正法眼蔵』は道元の主要な著述の一つ。正法眼蔵とは、中国禪宗において、悟りの心、仏法の神髄を指す語として用いられていた言葉である。道元はこれを自身の著述の題名とし、さまざまな観点から「正伝の仏法」を詳述した。この時代としては珍しく和文体で書かれており、門弟に具体的に伝えようとする意図が窺えよう。編集形態によつて「七十五巻本」「六十巻本」「十二巻本」などに分類されている。○掲載書籍…『道元①一・二〇』『道元②一・八八～八九』。○四祖…四祖道信（五八〇～六五一）のこと【補1】。○是何姓…【補2】。○蒿湯…蒿（よもぎ）を湯に和したものの。よもぎ湯。

「訳」四祖が「是何姓」と言っているが、「何（絶対の真実）」とは「是（生きている真実）」であり、「是」を「何」とするのである。これが「姓（仏性）」である。「何」となるのは「是」があるからであり、「是」となるのは「何」の能（はたらき）である。「だから」「姓」は「是」であり「何」なのである。「この「是何姓」の三文字を」蒿湯にも入れ、茶湯にも入れ、家常の茶飯ともする（ように、日常生活の中で参究すべし）。【家常の茶飯としての引用】例示として用いられた表現であるが、蒿（よもぎ）湯、茶湯、あるいは家常の茶飯という例を出して、日常生活の中で参究すべきことを述べている。

「史料2—13」『正法眼蔵』「仏性」七十五巻本の三巻

黄檗在南泉茶堂内坐。南泉問黄檗、定慧等学、明見仏性。此理如何。黄檗曰、十二時中不依倚一物始得。南泉云、莫便是長老见处麼。黄檗曰、不敢。南泉云、醬水錢且致、草鞋錢教什麼人還。黄檗使休（訓…黄檗、南泉の茶堂内に在りて坐す。南泉、黄檗に問う、「定慧の等学は、明らかに仏性を見る。此の理は如何」と。黄檗曰く、「十二時中、一物に依倚せず始めて得し」と。南泉云く、「便ち是れ長老の見処なること莫きや」と。黄檗曰く、「不

敢」と。南泉云く、「醬水錢は且く致く、草鞋錢は什麼人をしてか還さしめん」と。黄檗便ち休む。

○掲載書籍：「道元①一・三六〇三七」「道元②一・一二一〜一二二」。○黄檗在南泉茶堂へ黄檗便休：「補1」。○黄檗：南嶽下の黄檗希運（生没年不詳）のこと「補2」。○南泉：馬祖下の南泉普願（七四八〜八三四）のこと「補3」。○茶堂：住持の行札の場所。昔は法堂の後、方丈の前にあつた。○定慧：禪定と智慧。○仏性：仏の性質。仏としての本性。○十二時：一昼夜。一日中。二十四時間。○依倚：よりかかる。頼る。○莫便是長く麼：推測の句法。○見処：自分でつかんだもの。これだと納得したもの。○不敢：どういたしまして。○漿水錢：飲み物代。漿水はこめのとき汁。○草鞋錢：わらじ代。行脚僧の旅費。

「訳」黄檗希運が、南泉普願の茶堂の中で坐つていた。南泉が、黄檗に質問した、「定慧を等しく学ぶことは、明らかに仏性を見る（ための）ものであると（言うが）、この道理はどうだろうか」と。黄檗が言った、「一日中、なにもものにも頼らなければよいのです」と。南泉が言った、「（ひよつとしてそれが）長老の見解なのか」と。黄檗が言った、「どういたしまして」と。南泉が言った「飲み物代のはひとまずおいておくとして、わらじ代は誰に還させたものか」と。黄檗は問答を止めた。

【古則公案の提示】『天聖広灯録』八の黄檗希運章からの引用。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によって紹介されていた。

「史料2-14」『正法眼蔵』「仏性」七十五卷本の三卷

趙州有僧問、狗子還有仏性也無（訓：趙州、僧有りて問う、狗子、還た仏性有りや）、この問取は、この僧の構得趙州の道理なるべし。しかあれば仏性の道取問取は、仏祖の家常茶飯なり。

○掲載書籍：「道元①一・四〇」「道元②一・一二九」。○趙州有僧問く有仏性也無：「補一」。○趙州：南嶽下の趙州從諗（七七八〜八九七）のこと「補2」。○問取：問いかける。○構得：構得。ぴったり出会う。邂逅する。○道取：言つてのける。適切に言い表すこと。

「訳」趙州從諗にある僧が質問した、「犬に仏性があるか」と、この問いかけは、この僧が趙州の道理をうまくつかまえたものである。だから、仏性についての適切な答えと問いかけは、仏祖の日常の茶飯なのである。

【仏祖の家常茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。仏性についての適切な答えと問いかけを、仏祖の家常茶飯にたとえている。

「史料2―15」『正法眼蔵』「行持」上 七十五巻本の十六巻

大悟をまつことなかれ、大悟は家常かじょうの茶飯さはんなり。不悟をねがふことなかれ。不悟は髻中けいちゆうの宝珠ほうじゆなり。

○掲載書籍：「道元①一・一六一」「道元②二・一四二」。○不悟：ここで言う「不悟」は、悟らないという意味ではない。道元は不悟を大悟と同義の高い位置づけのものとして捉えている「補1」。○髻中宝珠：髻中明珠とも。転輪聖王の髻の中に隠された宝珠のこと「補2」。

「訳」大悟をまつてはならない、大悟は日常の茶飯なのだから。不悟ふごを願つてもならない、不悟こそは髻中けいちゆうの宝珠ほうじゆ（最もすばらしい仏法の宝）なのだから。

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。大悟を「家常の茶飯」にたとえている。

「史料2-16」『正法眼蔵』「行持」下 七十五卷本の十六卷

（芙蓉道楷の説法）唯将本院莊課一歲所得、均作三百六十分、日取一分用之。更不随人添減。可以備飯則作飯、作飯不足則作粥、作粥不足則作米湯。新到相見茶湯而已、更不煎点。唯置一茶堂、自去取用（訓…唯だ本院の莊課の一歳の所得を均して、均しく三百六十分を作して、日に一分を取つて之を用う。更に人に随つて添減せず。以て飯を備う可ければ則ち飯を作り、飯を作るに足らざれば則ち粥を作り、粥を作るに足らざれば則ち米湯を作る。新到の相見は茶湯のみ、更に煎点せず。唯だ一を茶堂に置き、自ら去きて取り用ちゆるのみ）。

○掲載書籍：「道元①一・一九二」「道元②二・二〇七」。○芙蓉道楷：曹洞宗の芙蓉道楷（一〇四三〜一一一八）のこと「補1」。○唯将本院莊課自去取用：「補2」。○本院：主となる院。○莊課：莊園の課料。○所得：得るところ。○三百六十分：陰曆における一年間の日数。○米湯：米を煮てできた湯汁。○新到：新参者。新たに入門した者。○相見：互いに相見える。拝顔する。○煎点：茶を入れる。○茶堂：住持の行礼の場所。昔は法堂の後、方丈の前にあつた。

「訳」ただ本院の莊園年貢一年分の所得を、ひとしく三百六十分し、日に一分を取つてこれに用いなさい。さらに人数によつて増減することがないように。それでご飯を作るのに足りればご飯を作り、ご飯を作るのに足りないならば粥を作り、粥を作るのに足りないならば米湯を作りなさい。新到の相見については「最初の」茶湯のみで、「その後は」決して茶を入れない。ただ茶を一杯茶堂に置いておき、「あとは新到が」自分で取りに行つて飲めばよいのだ。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によつて紹介されていた。

「史料2—17」『正法眼蔵』「行持」下 七十五卷本の十六卷

先師天童和尚は、越上の人事なり、十九歳にして、教学をすてて参学するに、七句におよんでなほ不退なり。嘉定の皇帝より紫衣師号をたまはるといへども、つひにうけず、修表辞謝す。十方の雲衲ともに崇重す。遠近の有識ともに随喜するなり。皇帝大悦して御茶をたまふ。しれるものは奇代の事と讃歎す。まことにこれ真実の行持なり。

○掲載書籍：「道元①・一九六」「道元②二・二二四～二二五」。○先師天童和尚：曹洞宗の長翁如浄（一一六二～一二二七）のこと。「補1」。○天童：天童山景德禪寺のこと。「補2」。○越上：越州（浙江省）のこと。○教学：教説を中心に学ぶ学問。○七句：句は十の単位。七十年。○不退：かたく決心して、仏道修行をする。○嘉定皇帝：南宋の寧宗（一一六八～一二二四）のこと。○紫衣：皇帝から賜る僧侶の紫色の法衣や袈裟。○師号：禪師号のこと。ここでは、皇帝から送られる勅号の禪師号。○修表：上奏文を書くこと。○辞謝：ことわりの言葉を述べ、辞退する。○十方：東西南北と四維（東南・東北・西南・西北）に上下を加える。全ての方向。○雲衲：雲水。諸方歴遊する修行僧。○崇重：尊び重んじる。○有識：善知識のこと。人々を仏の道へ誘い導く人。○随喜：教えを聞いて大きな喜びを感じる。○奇代：希代。世にもまれなこと。○讃歎：ほめたたえる。○行持：仏道修行を、正しく行ないたもつこと。

「訳」先師の天童如浄和尚は、越州の人であり、十九歳で、教学をすてて禅に参学して、七十歳になるが、強い決心をもって仏道修行をされている。嘉定皇帝（寧宗）より紫衣と禪師号を賜ったが、遂に受けずに、上表文を書いて辞退された。あらゆる修行僧たちが尊び重んじ、遠近の有識（長老）がみな大変喜ばれた。皇帝は大いに悦び如浄に「御茶」を送ったが、このことを知った人たちは世にもまれなことと褒め称えた。これこそまことに真実の行持である。

【中国における茶の事例】【贈答品としての茶】道元の師である如浄が、寧宗皇帝より「御茶」を送られた故事を紹介する。

「史料2―18」『正法眼蔵』「溪声山色」 七十五卷本の二十五卷

その接渠のところ、有情に道取せしめ、無情に道取せしむるに、身処にきき、心処にきく。若将耳聴は家常の茶飯なりといへども、眼処聞声これ可必不必なり。

○掲載書籍：「道元①一・二八二〜二八三」「道元②三・一四八」。○接渠：相手に応接する。○有情：感情や意識などを持つて。○道取：言つてのける。適切に言い表すこと。○無情：精神や感情などの心の働きを持たずに。○若将耳聴・眼処聞声：「補1」。○何必：どうしてする必要があらうか。なにもくすることはない。○不必：するには及ばない。するまでもない。

「訳」その「修行僧に導師が出会った」際に応接するのに、「導師は修行僧に」有情に言わせ、無情に言わせて、「導師の方は」身体でも聞くし、心でも聞くのである。耳で聴くことは日常の茶飯であるけれども、眼で声を聞くことは、「あえてそれをする」必要があらうか、「あえてそれを」するまでもないことだ。

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。「耳聴」を「家常の茶飯」にたとえている。

「史料2―19」『正法眼蔵』「神通」 七十五卷本の三十五卷

かくのごとくなる神通は、仏家の茶飯なり、諸仏いまに懈倦せざるなり。

○掲載書籍：「道元①一・三九二」「道元②四・一〇三」。○神通：神変不可思議な能力。○懈倦：あきてなまける。

「訳」「『正法眼蔵』の表題として示した」このような神通は、仏家の茶飯である、諸仏は今に至るまでおぎなりにしたことはない。

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。「神通」を「仏家の茶飯」にたとえている。

「史料2―20」『正法眼蔵』「神通」七十五巻本の三十五巻

大瀧禪師（中略）大瀧つひに洗面す。洗面しをはりて、わづかに坐するに、香嚴きたる。大瀧いはく、われ適来、寂子と一上の神通をなす。不同小小なり、香嚴いはく、智閑下面にありて、了了に得知す。大瀧いはく、子、こころみに道取すべし。香嚴すなはち一椀の茶を点来す。大瀧ほめていはく、二子の神通・智慧、はるかに驚子・目連よりもすぐれたり。

○掲載書籍：「道元①一・三九二〜三九三」「道元②四・一〇四〜一〇五」。○大瀧禪師すくくれたり：「補1」。○大瀧：瀧仰宗祖の瀧山靈祐（七七一〜八五三）のこと「補2」。○香嚴：瀧山下の香嚴智閑（？〜八九八）のこと「補3」。○了了：物事が明らかさま。○寂子：瀧仰宗祖の仰山慧寂（八〇七〜八八三）のこと「補4」。○適来：いましがた。○神通：神変不可思議な能力。○道取：言つてのける。適切に言い表すこと。○驚子：驚驚子。舍利弗のこと。釈迦十代弟子の一人。○目連：目犍連のこと。釈迦十代弟子の一人。

「訳」大瀧禪師（中略）瀧山靈祐はそこで洗面した。洗面し終わつて、すこし坐っていたら、そこに香嚴智閑がやつてきた。瀧山が言った「私は先ほどから（仰山）慧寂さんと一段上の神通をやつていた。つまらない神通ではないぞ」と。香嚴が言った、「私は下面（向こう側）にいたので、はつきりと知つています」と。瀧山が言った、「君、試しに言つてみなさい」と。香嚴はすぐに一椀の茶を入れてきた。瀧山がほめていう、

「君たち（仰山と香巖）の神通と智慧は、舍利弗や目犍連よりも、遙かにすぐれている」。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によつて紹介されていた。

「史料2-21」『正法眼蔵』「栢樹子」 七十五巻本の四十巻

（趙州從諗が）或時いはく、烟火徒勞望四鄰、饅頭餠子前年別。今日思量空噉津、持念少嗟歎類。一百家中無善人、來者祇道覺茶喫、不得茶噉去又嘔（訓・烟火は徒勞す四鄰を望むことを、饅頭餠子前年より別る。今日思量して空しく噉津す、持念は少なく嗟歎は類なり。一百家中に善人無し、來たる者は祇だ道う茶を覺めて喫せんと、茶を得て噉わざれば去つて又た嘔る）。あはれむべし烟火まねなり、一味すくなし、雜味は前年よりあはず、一百家人きたれば茶をもとむ、茶をもとめざるはきたらず。將來茶人は、一百家人にあらざらん。

○掲載書籍：「道元①一・四三七」「道元②四・二〇一〜二〇二」。○趙州從諗：南嶽下の趙州從諗（七七八〜八九七）のこと「補1」。○烟火徒勞う茶噉去又嘔：「補2」。○烟火：煙火。ご飯を炊くときの煙。かまどの火。○徒勞：むだな苦勞。○四鄰：四方周囲。○饅頭：マントウ。○餠子：餅や団子の類。○思量：いろいろと思いをめぐらし考えること。○噉津：唾液をのむ。唾をのむ。○持念：正法を心に持つ。○嗟歎：舌打ちして歎く。○嘔：むざぼり食べる。

「訳」（趙州從諗が）あるとき言った、「私の寺では米を炊けないので」かまどの火は無駄に四方周囲を見るばかりで、饅頭とか餅や団子などは前年から食べていない。今日思い出しては空しく唾を飲み込んだ。正法を心に持つ気持ちには少なく、舌打ちして歎くばかりである。百人もいる修行者中に善人がおらず、ここに來

る者はただ茶を飲みたいと言うばかりである。「しかも、」茶を飲むことができなければ怒ってどこかへ行つてしまふ」と。あわれなことだ、かまどの火などはほとんどなく、「ご飯」一つを食べることが少なく、「おかずなど」他種類の食事は数前から食べていない。百人もの修行僧がやって来ては茶を求め、茶を求めない人はこない。茶をもつてくる人は、百人の修行僧の中には一人もいないであろう。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によつて紹介されていた。

「史料2—22」『正法眼蔵』「栢樹子」七十五巻本の四十巻

(趙州從諗は)あるひはこのみをひろひて、僧衆もわが身も、茶飯の日用に活計す。

○掲載書籍：「道元①一・四三二六」「道元②四・二〇三〇二〇四」。○日用：日々用いること。毎日の入用。平常のこと。○活計：生活を維持すること。暮らしむぎ。なりわい。

【訳】(趙州從諗は)あるいは木の実を拾つて、修行僧も自分自身も、日常のご飯に用いて生活を維持した。

【古則公案の提示】真字『正法眼蔵』における茶の記述を含む公案。直接的な喫茶史料ではないが、道元門下では、このような公案が道元によつて紹介されていた。

「史料2—23」『正法眼蔵』「説心説性」七十五巻本の四十二巻

いまだ小乗の局量しやうじやうきやうりやうを解脱せざるなり、いかでか大乘の奥玄おうちげんにおよばん。いかにいはんや向上こうじやうの関板子かんばんしをしらんや。仏祖の茶飯さはんを喫きしきたれるといひがたし。

○掲載書籍：「道元①・四五二」「道元②四・二三三」。○局量…心の大きさ。器量。○解脱…煩惱の束縛から解放されて、悟りの境地に到達すること。○奥玄…奥深い玄旨。○向上…上の。その先の。○関梶子…関振。戸の開閉のためのからくり。基軸。

〔訳〕「いまだ小乗の器量を解脱していないのに、どうして大乘の奥玄に及ぼうか。ましてやどうして向上の関梶（悟入の方法）を知ろうか。仏祖の茶飯を食べてきたとはいえない。

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。仏道修行そのものを「仏家の茶飯」と述べている。日常生活で茶飯を喫しているからこそ、説得力を持つ言葉。

〔史料2—24〕『正法眼蔵』「仏経」七十五卷本の四十七卷

知識はかならず経巻を通利す。通利すといふは、経巻を国土とし、経巻を身心とす。経巻を為他の施設とせり、経巻を坐臥経行とせり。経巻を父母とし、経巻を児孫とせり。経巻を行解とせるかゆるゑに、これ知識の経巻を参究せるなり。知識の洗面喫茶、これ古経なり。

○掲載書籍：「道元①二・一四」「道元②五・一〇七、一〇八」。○知識…善知識のこと。人々を仏の道へ誘い導く人。○経巻…仏教經典。○通利…良く通じて阻害のないようにする。○為他…他の為にする。他の為にする接化。○施設…手段。方法。手だて。○坐臥経行…日常の立ち居振る舞いのこと。○行解…修行と理解。実践と理論。

〔訳〕善知識は経巻に良く通じている。「経巻に」良く通じているというのは、経巻を国土とし、経巻を身心とし、経巻を他人への接化の手段とし、経巻を坐臥経行（日常の立ち居振る舞い）とし、経巻を父母とし、経巻を児孫とすることだ。経巻を修行と理解としていいるから、善知識が経巻を参究するのだ。善知識の洗面

喫茶は、古経（古より伝わった経巻）なのである。

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。「知識の洗面喫茶」を「古経」すなわち古より伝わった経巻とも述べている。修行生活の継承そのものが、古より伝わった経巻と同等の意味を持つものとして述べられている。

〔史料2―25〕『正法眼蔵』「法性」 七十五巻本の四十八巻

知識ちしきこれ法性ほつしょうなり、自己じこなり。法性ほつしょうこれ知識ちしきなり、法性ほつしょうこれ自己じこなり。法性ほつしょう自己じこなるかゆゑに、外道げどう魔党まとうの邪計じやくけせる自己じこにはあらざるなり。法性ほつしょうには外道げどう魔党まとうなし、ただ喫茶きつしやくらい、喫飯きつぱんらい、点茶てんさらいのみなり。

○掲載書籍：「道元①二・二七」「道元②五・一三二」。○知識：善知識。善徳の智者。正法を説いて人を正しく導く

師。○法性：すべての存在や現象の真の本性。○外道：仏教以外の他の教えを信奉するもの。○魔党：天魔・悪魔の

仲間。仏道をさまたげるもの。○邪計：邪な計らい。○点茶：茶を入れる。○来：ある動作を進行させる意志を持つ

助字。

〔訳〕善知識は法性であり、自己である。法性は善知識であり、法性は自己である、法性が自己であるから、外道魔党が邪な計らいをした自己ではない。法性には「仏教以外を信奉する」外道や「仏道をさまたげる」魔党はない、ただ粥を食べ、飯を食べ、茶をいれるだけである。

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。日常の仏道修行生活を述べるに際し、「喫茶、点茶」と述べている。茶を飲む行為は、「粥」「飯」と同等のものとして述べられている。

「史料2—26」『正法眼蔵』「陀羅尼」七十五卷本の四十九卷

いはゆる大善知識だいぜんちしきは、仏祖ぶつそなり。かならず中瓶ちゅうびんに勤恪きんかくすべし。しかあればすなはち擎茶来けいさらい、点茶来てんさらい、心要しんちやげん成じやうせり、神通じんづう現成げんじやうせり。盥水くわんすいらい来らい、瀉水しゃすいらい来らい、不動著境ふどうじやくきやうなり、下面あめんりやうち了知りやうちなり。

○掲載書籍：「道元①二・三二」「道元②五・一四二」。○善知識：善徳の智者。正法を説いて人を正しく導く師。○中瓶：中は手中、瓶は浄瓶。これらを用いて、親しく師の世話をする。弟子として仕えることをいう。○勤恪：つとめつつしむ。○擎茶来：茶をささげてくる「補1」。○点茶：茶を入れる。○心要：教えの真髓。○現成：すでにできあがっている、既成の。ありのまま現れていること。○神通：神変不可思議な能力。○盥水：手に水をそそぐ。○瀉水：供具や道場に水を注いで清める。○不動著境：環境を動かさない「補2」。○不動：心や境地などのゆるぎないさま。○下面了知：瀉山靈祐の言葉「補3」。

「訳」いわゆる大善知識というのは、仏祖である。かならず「仏祖の」弟子としてつとめはげまねばならぬ。だからこそ、茶をささげ、茶を入れて、仏法の至極しごくがあるのままにあらわれ、神通じんづうがあるままに現れるのだ。手を清めて、道場を清める、それこそが「鄧隱峰の」「不動著境」、「瀉山靈祐の」「下面了知」（の境地）である。

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。「擎茶来」「点茶来」という行為に、「心要」「神通」があるのままに現れていることを説いている。

「史料2—27」『正法眼蔵』「家常」七十五卷本の五十九卷

おほよそ仏祖ぶつその屋裏おくりには、茶飯さはんこれ家常かじやうなり。この茶飯の義、ひさしくつたはれて、而今にこんの現成げんじやうなり。この

ゆえに仏祖茶飯の活計かつけいきたれるなり。大陽山楷和尚問投子曰、仏祖意句、如家常茶飯、離此之余、還有為人言句也無。投子曰、汝道、寰中天子勅、還飯禹湯堯舜也無。大陽擬開口。投子拈弘子掩師口曰、汝發意來時、早有三十棒分也。大陽於此開悟、禮拜便行。投子曰、且來闍梨。大陽竟不回頭。投子曰、子到不疑之地耶。大陽以手掩耳而去（訓・大陽山楷和尚、投子に問うて曰く、「仏祖の意句は、家常の茶飯の如し、此れを離るの余、還た為人の言句有りや」と。投子曰く、「汝道え、寰中の天子の勅、還た禹湯堯舜を飯るや」と。大陽、口を開かんと擬す。投子、弘子を拈じて師の口を掩いて曰く、「汝、發意し來たる時、早や三十棒の分有り」と。大陽、此に於いて開悟し、禮拜して便ち行く。投子曰く、「且く來たれ闍梨」と。大陽竟いに回頭せず。投子曰く、「子、不疑の地に到るや」と。大陽、手を以て耳を掩いて去る。しかあれば、あきらかに保任すべし。仏祖意句は、仏祖家常の茶飯なり、家常の鹿茶淡飯は、仏祖の意句なり。仏祖は茶飯をつくる、茶飯、仏祖を保任せしむ。しかあれとも、このほかの茶飯力をからず、このうちの仏祖力をついやさざるのみなり。

○掲載書籍：「道元①二・一二四〜一二五」「道元②六・九九〜一〇一」。○屋裏：自分の家。○家常：日常。尋常。平生。○家常茶飯：普通の家庭の料理。○現成：すでにできあがっている、既成の。ありのまま現れていること。○活計：生活を維持すること。暮らしむぎ。なりわい。○大陽山楷和尚く以手掩耳而去：「補1」。○大陽山楷：曹洞宗の芙蓉道楷（一〇四三〜一一一八）のこと。「補2」。○投子：曹洞宗の投子義青（一〇三二〜一〇八三）のこと。「補3」。○意句：心とそれを表す言葉。○為人：人のためにする。人を教え諭す。教化。○寰中：天下。世界中。○天子勅：天子は皇帝。皇帝（天皇）が発した命令。○禹湯：古代中国の明君である、夏の禹王、殷の湯王のこと。○堯舜：中国古代の伝説上の帝王である堯と舜。○發意：「ほつち」とも。仏法を求め心を起こすこと。發菩提心。○發心。○三十棒：師家が学人に対して与える棒打。徳山の棒。○開悟：大悟。悟りを開くこと。○闍梨：禪僧の代名詞。「私」の代名詞。天台宗の阿闍梨のことではない。○回頭：廻首。振り返る。ふり向いて後ろを見る。○保任：

保証する。○餽茶淡飯：粗茶淡飯。そまつな茶とそまつな飯。

「訳」およそ仏祖の家では、茶と飯は日常である。この茶と飯の義は、長いあいだ伝えられて、今、現成しているのだ。だから仏祖の茶飯の在り方は維持されてきたのだ。大陽山の(芙蓉)道楷和尚が、投子義青に質問して言った、「仏祖の心と言葉は、日常の茶飯のようなものです。これを離れてほかに、人に教える言葉がありますか」と。投子が言った、「君、言ってみたまえ、寰中の天子の勅は、はて禹・湯・堯・舜王の言葉を借りるか」と。大陽(芙蓉道楷)が口を開こうとすると、投子は払子を手に取り師(大陽)の口を掩つて言った、「君が発心して来た時には、すでに三十棒をくれてやるに十分だったぞ」と。大陽(芙蓉道楷)はここで開悟し、礼拝して立ち去ろうとした。投子が言った、「ちよつとこちらにきなさい、和尚さん」と。大陽(芙蓉道楷)は、とうとう振り返らなかつた。投子が言った、「君は、不疑の地(大悟徹底の境地)に到つたのか」と。大陽(芙蓉道楷)は、手で耳を掩つて去つて行つた。このようであるから、明らかに「悟つたことを」保証しなければならないのだ。仏祖の心と言葉は、仏祖の日常の茶飯である、日常のそまつな茶と飯は、仏祖の心と言葉である。仏祖は茶飯を作り、茶飯は仏祖を保証している、そうではあるが、この「仏祖以外の」ほかの茶飯の力は借りないし、この「仏祖の茶飯の」中にある仏祖の力を浪費しないだけである。【日常の茶飯としての引用】【古則公案の提示】道元は正法眼蔵を「家常」という題名で解き明かすが、『正法眼蔵』「家常」、その中で「茶飯」を「家常」と位置づけている。日常生活で茶飯を喫しているからこそ、説得力を持つ言葉。また、茶の記述を含む公案として、真字『正法眼蔵』第一四三則「史料2―8」の公案を提示している。

「史料2—28」『正法眼蔵』「家常」 七十五卷本の五十九卷

趙州真際大師、問新到僧曰、曾到此間否。僧曰、曾到。師曰、喫茶去。又問一僧、曾到此間否。僧曰、不曾到。師曰、喫茶去。院主問師、為甚曾到此間也喫茶去、不曾到此間也喫茶去。師召院主、主応諾。師曰、喫茶去（訓：趙州真際大師、新到の僧に問うて曰く、「曾て此間に到るや」と。僧曰く、「曾て到る」と。師曰く、「喫茶去」と。又た一僧に問う、「曾て此間に到るや」と。僧曰く、「曾て到らず」と。師曰く、「喫茶去」と。院主、師に問う、甚と為てか曾て此間に到るも也た喫茶去、曾て此間に到らざるも也た喫茶去なる」と。師、院主を召す。主応諾す。師曰く、「喫茶去」と。いはゆる此間は、頂顛にあらざ、鼻孔にあらざ、趙州にあらざ。此間を跳脱するゆゑに、曾到此間（訓：曾て此間に至る）なり、不曾到此間（訓：曾て此間に至らず）なり、這裏是甚麼处在、祇管道曾到不曾到（訓：這裏は是れ甚麼の处在にしてか、祇管に道う、曾て到る、曾て到らずと）なり。このゆゑに先師いはく、誰在画楼沽酒処、相邀来喫趙州茶（訓：誰か画楼の沽酒処に在りて、相い邀来して趙州の茶を喫せん）。しかあれば仏祖の家常は、喫茶喫飯のみなり。

○掲載書籍：「道元①二・一二八〜一二九」「道元②六・一〇八〜一〇九」。○趙州真際く喫茶去：「補1」。○趙州真際大師：南嶽下の趙州從諗（七七八〜八九七）のこと「補2」。○新到：僧堂の新参。○此間：こちら。当地。此中。○喫茶去：茶を飲みに行け。茶を飲んでから出直して来い。○院主：寺院の事務一切を主宰する者のこと。律院・教院の主たる者や、禅院の監寺・監院のこと言う。○応諾：うけがう。承諾する。○頂顛：頭のとつぺん。○鼻孔：鼻のあな。鼻。○跳脫：ここでは、とんで離れる。とびつきぬげる意。○祇管：只管。ひたすら。一途に。○誰在画楼沽酒処、相邀来喫趙州茶：「補3」。○画楼：かざられた華麗な二層以上の建物。○沽酒処：酒を売り買いする所。○家常：日常。尋常。平生。

「訳」趙州真際大師は、新到の僧に質問した、「此間（この寺）に来たことがあるか」と。僧が言った、「来

たことがあります」と。師(趙州從諗)が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。またある僧に質問した、「此間(この寺)に来たことがあるか」と。ある僧が答えた、「来たことはありません」と。師(趙州從諗)が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。院主が師に質問した、「どういう理由で、此間(この寺)に来たことがあるといつても喫茶去と言ひ、此間(この寺)に来たことがないと言つても喫茶去と言うのですか」と。師(趙州從諗)は、「院主さん」と喚んだ。院主は(「ハイと」)応えた。師(趙州從諗)が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。いわゆる此間(ここ)とは、頂顛ではないし、鼻孔でもない、趙州でもない。此間(ここ)を飛び越えて脱しているから、「此間(ここ)に来たことがある」「(と言つたの)であり、「此間(ここ)に来たことがない」「(と言つたの)であり、「此間(ここ)をどこだと思つて、ひたすら、来たことがあるとか、来たことがないとか言うのか」ということになるのである。だから先師は言つたのだ、「いつたい誰がきらびやかな二階建ての酒屋にいながら、お迎えして趙州の茶を飲むのか」と。そうであるから仏祖の日常は、茶を飲み飯を食べるだけなのである。

【日常の茶飯としての引用】道元は正法眼蔵を「家常」という題名で解き明かすが(『正法眼蔵』「家常」)、その中で「茶飯」を「家常」と位置づけ、「仏祖の家常」が「喫茶喫飯」であることを述べる。日常生活で茶飯を喫しているからこそ、説得力を持つ言葉。また、「史料2-9」真字『正法眼蔵』第二三三則の公案を提示している。

「史料2-29」『正法眼蔵』「安居」 七十五卷本の七十二卷

梵網經中に冬安居あれども、その法つたわれず、九夏安居の法のみつたはれり。正伝まのあたり五十一世な

り。清規云、行脚人欲就処所結夏、須於半月前掛搭、所貴茶湯人事不倉卒（訓…清規に云く、行脚の人は処所に就いて結夏せんと欲せば、須らく半月前に於いて掛搭すべし。貴ぶ所は茶湯・人事を倉卒ならざらんことを）。いはゆる半月前とは、三月下旬をいふ。

○掲載書籍…「道元①二・二二一～二二二」「道元②七・五九～六〇」。○梵網經中に冬安居あれども…「補一」。○九夏安居…安居結制が九十日間であること。○五十一世…道元が釈尊から数えて五十一世に当たる。○清規云く不倉卒…「補二」。○行脚…仏道修行のために、僧侶が諸国を歩き回ること。○掛搭…行脚の修行僧が僧堂に滞在し修行すること。僧堂に安居すること。○倉卒…急に。

「訳」梵網經の中に冬安居の記述があるけれども、その法は伝わることなく、九夏安居の法のみが伝わった、〔釈尊から〕正伝して五十一世となっている。清規に言う、「行脚しようとする人はどこかの〔禪寺で四月十五日から始まる〕結夏安居に行こうと思つたなら、必ず半月前に僧堂に掛搭しなければならぬ。〔それは、修行道場における〕茶湯や人事をあたふたとしないうことを貴ぶためである。いはゆる〔ここで言う〕半月前とは、三月下旬のことである。

【清規における特為茶の一例】道元は、『正法眼蔵』『安居』において、「清規云」として『禪苑清規』を用い、行脚している僧侶が、新たに掛搭（入山）した際に、茶湯でもてなすこと貴んでいることを記している。このことは『知事清規』に記されている内容と一致している。

「史料2—30」『正法眼蔵』『安居』 七十五卷本の七十二卷

四月十三日の齋罷に、衆寮の僧衆、すなはち本寮につきて煎点諷經す、寮主ことをおこなふ。点湯焼香、み

な寮主これをつとむ。

○掲載書籍：「道元①二・二三五」「道元②七・六四〇六五」。○斎罷：中食が終わって。○寮寮：修行僧の学問所。読書や自習をする場所であることから、看読寮ともいう。○煎点諷経：茶を入れて経文を諷誦する。○寮主：寮寮に關する要務を司る役職。修行僧が交代で就任する「補」。○点湯：お湯を供養する。

【訳】四月十三日の中食が終わって、寮寮の修行僧は、すぐに〔皆で一斉に〕本寮で煎点諷経を行ない、寮主が煎点供養を行なう。点湯と焼香についても、みな寮主が〔代表して〕これを行なう。

【清規における特為茶の一例】四月十三日に、寮寮で煎点諷経を行なっている。四月十五日の結夏安居に先立つ行事と考えられ、翌十四日に煎点する行事が記されている。

「史料2―31」『正法眼蔵』「安居」 七十五卷本の七十二卷

念誦の法（中略）すべからく念誦已前に写勝して首座に呈す。知事、搭袈裟・帶坐具して、首座に相見する  
とき、あるひは両展三拜しをはりて、勝を首座に呈す。首座答拜す。知事の拜とおなじかるべし。勝は箱に  
襖袂子をしきて、行者にもたせゆく。首座知事をおくりむかふ。勝式、庫司今晚就雲堂煎点、特為首座大衆、  
聊表結制之儀、伏冀衆慈同垂光降、寛元三年四月十四日庫司比丘（某甲等）謹白（訓：勝式は、庫司今晚雲堂  
に就いて煎点し、特に首座・大衆の為に、聊か結制の儀を表わす、伏して冀くは衆慈同に光降を垂れんことを。寛元三年  
四月十四日庫司比丘（某甲等）謹しんで白す）。（中略）煎点をはりぬれば、勝ををさむ。

○掲載書籍：「道元①二・二三六〇二二八」「道元②七・六六〇六九」。○念誦：経文や仏の名を唱えること。○勝：  
榜。禅寺における掲示板。○首座：第一座。禅宗寺院で修行僧の首位に坐る者。六頭首の一つ。○知事：禅宗寺院の

役職のうち、東班（東序）のこと。都寺・監寺・副寺・維那・典座・直歳の六知事。○坐具：坐臥するときに展べる布。袈裟の際にはこれを持ち、展べて拝し、展べて坐わる。○両展三拝：二度坐具を展げること。大展三拝、展坐具三拝、触礼三拝を行なうこと。○複袱子：ふくき。○行者：老尊宿などに給仕するもの。○勝式庫司：謹白：「補1」。○勝式：榜式。掲示板の書式。○庫司：庫司知事。禪宗寺院の内外の事務を総覧する役職。監院のこと。また、監院が分掌した都寺、監寺、副寺の三役を総称している場合もある。○雲堂：僧堂。禪宗寺院における修行道場。僧侶が坐禅・食事・睡眠する建物。○煎点：茶を入れる。○特為：特別に設ける。○結制：九旬安居の制を結ぶこと。○衆慈：大衆の慈悲心。○光降：来臨することの敬語。○寛元三年四月十四日：一二四五年四月十四日。『正法眼蔵』「安居」は寛元三年六月十三日に示衆したものであるから、おそらくはこの年に実際に行なわれた行事に基づく記事。

「訊」念誦の法。（中略）かならず念誦より前に榜（掲示板）を写して首座に差し出す。知事は袈裟を着て坐具を持つて、首座に相見する時には、あるいは両展三拝し終わつてから、榜（掲示板）を首座に差し出す。首座は答拝するが、知事の礼拝と同じようにしななければならない。榜（掲示板）は箱の中に袱紗ふくさをしいて、行者にもたせて、首座・知事を送り迎えさせる。榜（掲示板）の書式は、「庫司は今晩、雲堂において茶を入れ、特に首座・大衆のために、いささか結制の儀を表します。願わくは、大衆の皆さまがともに来臨されますように。寛元三年（一二四五）四月十四日、庫司比丘（某甲等）が謹しんで申し上げます。（中略）茶を入れる儀式が終われば、榜（掲示板）を収める。

【清規における特為茶の一例】結夏安居前日の四月十四日に、修行僧が僧堂で一斉に喫茶している。

堂頭、庫司、首座、次第に煎点といふことあり。しかあれども遠島深山のあひだには省略すべし。ただこれ礼数なり。退院の長老、および立僧の首座、おのおの本寮につきて知事頭首のために、特為煎点するなり。

○掲載書籍：「道元①二・三三四」「道元②七・七九」。○堂頭：禅宗寺院の住持。○庫司：庫司知事。禅宗寺院の内外の事務を総覧する役職。監院のこと。また、監院が分掌した都寺、監寺、副寺の三役を総称している場合もある。○首座：第一座。禅宗寺院で修行僧の首位に坐る者。六頭首の一つ。○煎点：茶を入れる。○礼数：身分に応じた礼儀や待遇のこと。○立僧首座：正規の首座の他に別に立てた首座。西堂、前堂、耆宿などから請われて、修行僧のために法を説く。○知事：禅宗寺院の役職のうち、東班（東序）のこと。都寺・監寺・副寺・維那・典座・直歳の六知事。○頭首：禅宗寺院の役職のうち、西班（西序）のこと。首座・書記・藏主・知殿・知客・知浴の六頭首。○特為：特別に設ける。

〔訳〕堂頭、庫司、首座、順番に茶を入れる儀式がある。そうではあるが、遠島や深山にあつては省略しなさい。ただこれは身分に応じた礼儀である。住持を退院した長老や、立僧の首座は、それぞれが本寮で知事・頭首のために、特別に茶を入れる。

【清規における特為茶の一例】堂頭、庫司、首座が次第に茶を入れることが記される。また、住持を退院した長老や、立僧の首座が、知事・頭首のために茶を入れることが記される。長老、首座による茶によるものなし。

「史料2—33」『正法眼蔵』「安居」 七十五卷本の七十二卷

解夏、七月十三日、衆寮煎点調経。またその月の寮主これをつとむ。十四日晚念誦。来日陞堂、人事、巡察、煎点、並同結夏。唯勝状詞語、不同而已。庫司湯勝云、庫司今晚、就雲堂煎点。特为首座大衆、聊表解制之

儀。伏冀衆慈同垂光降（訓：十四日晚の念誦。来日の陞堂、人事、巡察、煎点、並びに結夏に同じ。唯だ勝状の詞語、不同なるのみ。庫司、湯勝に云く、庫司、今晚、雲堂に就いて煎点す。特に首座・大衆の為に、聊か解制の儀を表す。伏冀は衆慈同に光降を垂れんことを）。

○掲載書籍：「道元①二・二三四」「道元②七・八〇〇八二」。○解夏、七月十三日〜同垂光降：「補1」○衆寮：修行僧の学問所。読書や自習をする場所であることから、看読寮ともいう。○煎点諷経：茶を入れて経文を諷誦する。○寮主：衆寮に関する要務を司る役職。修行僧が交代で就任する。○念誦：経文や仏の名を唱えること。○陞堂：高座に上る。須弥壇に登る。上堂。○巡察：住持が禅宗寺院内の各寮舎または衆寮を巡回して、その状態を調べること。○並：すべて。○詞語：文の言葉。○庫司：庫司知事。禅宗寺院の内外の事務を総覧する役職。監院のこと。また、監院が分掌した都寺、監寺、副寺の三役を総称している場合もある。○勝：榜。禅寺における掲示板。○雲堂：僧堂。禅宗寺院における修行道場。僧侶が坐禅・食事・睡眠する建物。○特為：特別に設ける。○衆慈：大衆の慈悲心。○光降：来臨することの敬語。

「訳」解夏では、七月十三日に、衆寮にて煎点諷経（茶を入れて経文を諷誦する）があり、またその月の寮主がこれをつとめる。十四日には、晩の念誦、翌日には陞堂（上堂）があるが、人事、巡察、煎点、すべて結夏と同じである。ただ榜状（掲示板）が、同じではないだけである。庫司の湯勝（掲示板）に言う、「庫司は今晩、雲堂（僧堂）において茶を入れ、特に首座・大衆のため、少しばかり解制の儀式を行なう。願わくは、大衆の皆さまがひとしく来臨されますように」と。

【清規における特為茶の一例】七月十三日、衆寮で煎点諷経、その月の寮主がこれを行なう。七月十四日、解制の前日、僧堂にて一斉に茶を飲む。

「史料2—34」『正法眼蔵』「安居」 七十五卷本の七十二卷

知事・頭首告云、衆中兄弟行脚、須俟茶湯罷、方可随意（如有緊急縁事、不在此限）（訓…知事・頭首告げて云く、衆中の兄弟行脚せんには、須らく茶湯罷を俟つて、方に随意なる可し。もし緊急の縁事有らば、此の限りに在らず）。

○掲載書籍：「道元①二・二三五」「道元②七・八二〜八三」。○知事・頭首く不在此限…「補1」○知事…禅宗寺院の役職のうち、東班（東序）のこと。都寺・監寺・副寺・維那・典座・直蔵の六知事。○頭首…禅宗寺院の役職のうち、西班（西序）のこと。首座・書記・蔵主・知殿・知客・知浴の六頭首。○衆中…大衆の中。修行僧たち。一会の僧衆。○行脚…仏道修行のために、僧侶が諸国を歩き回ること。○随意…このまま。自由に。○縁事…機会。原因。

「訳」知事・頭首が告げて言う、「諸君たちがこれから行脚しようとするならば、かならず茶湯が終わるのをまつて、そこではじめて自由にしなさい」と。へもし緊急の用事がある時は、この限りではない。

【清規における特為茶の一例】七月十四日、解夏の前日に知事が言う言葉として、行脚は、必ず茶湯が終わつてからと述べるのが修行に組み込まれており、茶湯が修行生活でも重要な行事であったことがわかる。

「史料2—35」『永平広録』巻一「興聖寺語録」（上堂17）

上堂。拳忠国師験大耳三蔵他心通、又拳仰山・玄沙・玄覺・趙州了。師乃云、国師如何最初不向三蔵道、你得幾枚他心通、你只得他心通、更得自心通也無。若恁麼道、三蔵豈不茫然耶。五位尊宿俱以第三度為不見也。殊不知、前兩度也不見得。若将三蔵二乘通而為仏祖之他心通、五位尊宿未免二乘之窠窟、猶在三蔵之偏局也。要会仏祖通麼。自心他心兮、全殺全活。乃通乃變兮、盪水点茶。

〔訓〕上堂。忠国師、大耳三藏の他心通を驗するを拵す、又た仰山・玄沙・玄覺・趙州を拵し了る。師乃ち云く、「国師、如何んが最初に三藏に向かつて道わざる。『你、幾枚の他心通を得るも、你、只だ他心通を得るのみ。更に自心通を得るや』と。若し恁麼に道わば、三藏豈に茫然たらざらんや。五位の尊宿、俱に第三度を以て不見と為す。殊に知らず、前の両度も也た見得せざることを。若し三藏の通を將てして仏祖の他心通と為さば、五位の尊宿、未だ二乗の窠窟を免れず、猶お三藏の偏局に在り。仏祖の通を会せんと要するや。自心も他心も、全て殺し全て活かす。乃ち通じ乃ち變ず、鹽水点茶なり」と。

○永平広録：『永平広録』は、道元の宇治興聖寺、越前永平寺などの上堂説法や法語などを集めたもの。漢文体で記され、全十巻で構成される。後に、弟子の寒巖義尹が語録十巻を中国に持つて行き、如浄の門弟に依頼して一巻に抄録した『永平元禪師語録』一巻があるため、抄出本を『永平略録』と呼称している。○掲載書籍：『道元①』三・一四〔道元②〕十・二〇。○忠国師驗大耳三藏他心通：〔補1〕。○大耳三藏：インドからの渡来僧、大耳三藏のこと。詳しい行実是不明。○忠国師：六祖下の南陽慧忠（？七七五）のこと〔補2〕。○他心通：六神通の一つ。他人の心の動きを知る神通力。○仰山・玄沙・玄覺・趙州：〔補3〕。○仰山：瀉仰宗祖の仰山慧寂（八〇七〜八八三）のこと〔補4〕。○玄沙：雪峰下の玄沙師備（八三五〜九〇八）のこと〔補5〕。○玄覺：六祖下の永嘉玄覺（六七五〜七1三）のこと〔補6〕。○趙州：南嶽下の趙州從諗（七七八〜八九七）のこと〔補7〕。○自心通：他心通に対していう。自らの心のうちを自ら知る。道元による造語。○豈不々耶：なんと〜ではないか。○茫然：ぼんやりして我を忘れる。○五位尊宿：趙州從諗、玄沙師備、仰山慧寂、海会端、雪竇重顕の五人の僧侶〔補8〕。○二乗通：声聞、縁覚という小乗の神通力。○窠窟：落とし穴。○偏局：偏つたせまい見解。○全殺全活：総てを殺し総てを活かす。○鹽水点茶：瀉山靈祐が昼寝の夢を当てよと命じたとき、仰山慧寂は盥に水を盛つて呈し、香巖智閑は茶を入れて献じた故事〔補9〕。

「訳」上堂。「忠国師、大耳三蔵の他心通を験す」の公案を挙し、また「仰山慧寂・玄沙師備・永嘉玄覺・趙州從諗」(「の著語」)を挙しおわつてから、師(道元)が言った、「忠国師は、どうして最初に三蔵に向かつて言わなかったのだらうか、『君はどれほどの他心通は得ていたしても、君はただ他心通を得たに過ぎない。さらに自心通を得ているのか』と。もしこのように言つたなら、三蔵は茫然としたことであろう。五人の尊宿(趙州從諗、玄沙師備、仰山慧寂、海会端、雪竇重顯)は、みな第三回目は「三蔵が忠国師の心を」見えないとしている。まつたく分かつていないのだ、「本当は」前の二回も見ることができなかったことが。もし三蔵の二乗の神通力を仏祖の他心通とするならば、五人の尊宿は、まだ二乗(声聞と縁覚)という落とし穴に陥ることを逃れられず、なお三蔵の偏つたせまい見解に在ることになる。「諸君、」仏祖の神通を理解したいと思うか。自心通も他心通も、「殺すときには」完全に殺し「活かすときには」完全に活かす。「その場に応じて」適応したり変化したりで、「仰山は」鹽に水を盛り、「香嚴は」茶を入れたのだ」と。

【古則公案を用いた説法】直接的な喫茶史料ではない。「仏祖之通」の例えとして、「乃ち通じ、乃ち変ず、盪水点茶なり」と述べている。茶の記述を含む公案を用いた説法。

【史料2—36】『永平広録』巻一「興聖寺語録」(上堂122)

閉炉上堂。云、看看興聖一紅炉、尽界十枚合作模。生活練成諸仏祖、今朝授手点茶糊。

「訓」閉炉の上堂。云く、「看よ看よ興聖が一紅炉、尽界十枚合わせて模を作す。生活して練り成す諸仏祖、今朝授手して茶・糊を点ぜん」と。

○掲載書籍：「道元①三・六四」「道元②十・九〇」。○閉炉上堂：三月一日(中国では二月一日)、炉を閉じるに当

たつて行なう上堂「補1」。本上堂は寛元元年（一二四三）三月一日。○興聖：宇治興聖寺のこと「補2」。○茶糊：茶と濃い粥。○尽界：尽十方界。

「訊」閉炉の上堂で、言った、「見よ見よ、興聖寺の真つ赤な炉を、〔真赤な炭の重なり合うさまは〕尽十方界を重なり合わせて形づくっているかのようである。〔そこから〕生き生きと諸仏祖が現れているではないか、今朝、私自身の手で茶と粥を供養しよう」と。

【仏前への茶の供養】【特為茶の一例】道元が宇治興聖寺にて、閉炉にあたって仏祖に茶と粥を供養している。

【史料2—37】『永平広録』巻二「大仏寺語録」（上堂133）

上堂。去年冬間、特示兄弟。若於堂内・廊下・溪辺・樹下兄弟每相見処、互相合掌低頭、如法問訊、然後説話。未問訊前不許相語大小要事。永為恒規。是仏祖相見之家常茶飯也。仏祖豈無礼儀。（後略）

【訓】上堂。「去年の冬間、特に兄弟に示す。若しは堂内・廊下・溪辺・樹下、兄弟毎に相見する処に於いて、互相に合掌し低頭して、如法に問訊し、然る後に説話せよ。未だ問訊せざる前に、大小の要事を相い語ることを許さず。永く恒規と為せ。是れ仏祖相見の家常の茶飯なり。仏祖豈に礼儀無からんや。（後略）」

○掲載書籍：「道元①三・七八」「道元②十・一〇四」。○去年冬間：寛元二年（一二四四）の冬。○如法：規定された通り。法にかなない、理にかなうこと。○恒規：後代の者も守るべき規範のこと。○家常茶飯：日常の作法。日頃の作法。○礼儀：礼法と儀式。行なうべき作法。

【訊】上堂。「去年の冬の間、特に大衆に示した。もし堂内・廊下・溪辺・樹下といった普段諸君たちが顔を合わせている所では、常に互いに合掌して低頭し、規定された通りに問訊してから、言葉を交わしなさい。

まだ問訊していない前に、さまざまな大事な要件を語りあつてはならない。永く軌範としなさい。これは、仏祖が相見する際の家常の茶飯（日頃の作法）である。仏祖にどうして礼儀がないことがあるうか。（後略）

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。修行僧が互いに顔を合わせた際の作法を示し、これを「仏祖相見の家常の茶飯（作法）」と示し、日頃の作法を「家常の茶飯」とたとえている。日常生活で茶飯を喫しているからこそ、説得力を持つ言葉。

〔史料2—38〕『永平広録』巻三「永平寺語録」（上堂<sup>222</sup>）

上堂。夾山、因僧問、撥塵見仏時如何。山曰、直須揮劍。劍若不揮、漁父棲巢。師曰、若是永平、又且不然。或有人問撥塵見仏時如何、祇对他道。不勞懸石鏡、天曉自鷄鳴。喫飯喫茶、出入同門。

〔訓〕上堂。「夾山、因みに僧問う、『塵を撥つて仏を見る時は、如何』と。山曰く、『直に須らく劍を揮うべし。劍若し揮わざれば、漁父、巢に棲まん』と。師曰く、『若し是れ永平ならば、又た且つ然らず。或いは人有りて、『塵を撥つて仏を見る時は、如何』と問わば、祇だ他に対して道わん、石鏡を懸くるを勞せず、天曉自ずから鷄鳴く。喫飯喫茶、出入同門なり』と。

○掲載書籍：「道元①三・一五〇」「道元②十・一九四」。○夾山因僧問く漁父棲巢：「補1」。○夾山：青原下の夾山善会（八〇五く八八一）のこと「補2」。○劍若不揮、漁父棲巢：「漁父」は漁師。漁業に従事する人「補3」。○祇对他道：「祇対」の二字で「答える。応対する。」という意味になることもあるが、ここは、「只对他道」と同じく、上にある「若しくならば」「或いはくならば」といった仮定形と対応して、「祇だ他に対して道わん（彼に向かって言うだけのことだ）」の意となる。○不勞懸石鏡、天曉自鷄鳴：「補4」。○天曉：あかつき。明け方のこと。○喫飯喫

茶、出入同門：「補5」。

「訳」上堂。「夾山善会に、ある時に僧が質問した、『塵（煩惱）を払って仏を見る時は、どうでしょうか』と。夾山が答えた、『そんな考えをぶった切るために』剣を振り回さねばならぬ。もし剣を振り回さなければ、漁師（仏）、巢（家）に引きこもってしまう』と」と。師（道元）が言った、『もし私なら、またそうは言わない。もしある人が、『塵（煩惱）を払って仏を見る時は、どうでしょうか』と質問したなら、ただその人に答えて言うだけで、『役に立たない』石の鏡を懸ける手間はいらぬ、夜が明ければ自然と鶏は鳴く。ご飯を食べ茶を飲む、出たり入ったり（おまえも仏も）同じ門からやってくるのに』と。

【日常の茶飯としての引用】【喫茶を用いた説示】直接的な喫茶史料ではない。喫茶喫茶が日常であることを踏まえて説法を行なっている。

「史料2—39」『永平広録』卷三「永平寺語録」（上堂231）

上堂。拈拄杖云、諸法之至極。横拄杖云、佛法之源底。這裏転聖諦法輪。所謂、苦諦・集諦・滅諦・道諦。作麼生是苦諦。森羅万象総在這一椀茶裏。作麼生是集諦。瑞雲光璨爛。作麼生是滅諦。健即坐禪困即眠。作麼生是道諦。大道通長安。這箇是心化仏辺事。向上又如何。要見向上苦諦麼。卓拄杖一下。要見向上集諦麼。卓拄杖一下。要見向上滅諦麼。卓拄杖一下。要見向上道諦麼。卓拄杖一下。這箇雖是仏祖向上事、且道、永平意作麼生。卓拄杖兩下。

「訓」上堂。拄杖を拈して云く、「諸法の至極」と。拄杖を横にして云く、「佛法の源底。這裏にて聖諦の法輪を転ぜん。所謂、苦諦・集諦・滅諦・道諦なり。作麼生か是れ苦諦、森羅万象総て這の一椀の茶裏に在り。

作麼生そもさんか是れ集諦ぢいつてい、瑞雲ずいうんの光璨爛さざらんたり。作麼生そもさんか是れ滅諦めつてい、健すこやかなれば即ち坐禅ざぜんし困すまわすれば即ち眠る。作麼生そもさんか是れ道諦だうてい、大道だうどうは長安ちやうあんに通ず。這箇ぢやこは是れ応化おうけ仏ぶつ辺へんの事なり。向上こうじやうま又た如何いかにん。向上こうじやうまの苦諦くみを見んと要すようすや」と。拄杖ちゆさうを卓たつること一下す。「向上こうじやうまの集諦ぢいつていを見んと要すようすや」と。拄杖ちゆさうを卓たつること一下す。「向上こうじやうまの滅諦めつていを見んと要すようすや」と。拄杖ちゆさうを卓たつること一下す。「向上こうじやうまの道諦だうていを見んと要すようすや」と。拄杖ちゆさうを卓たつること一下す。「這箇ぢやこは是れ仏祖ぶつその向上こうじやうま事じなりと雖いともも、且しかもく道いえ、永平えいへいの意いは作麼生そもさん」と。拄杖ちゆさうを卓たつること両下りやうげす。

○掲載書籍：「道元①三・一五四」「道元②十・一九九〜二〇〇」。○至極：極点にまで達する。○源底：至極の所。

○聖諦：四聖諦。苦諦・集諦・滅諦・道諦のこと。○法輪：仏の教法のこと。法を転輪聖王の輪宝にたとえたもの。

○苦諦：四聖諦の第一。この世が苦であるという真理。○集諦：四聖諦の第二。苦の原因は煩惱であるという真理。

○滅諦：四聖諦の第三。苦しみが消滅した状態が理想という真理。○道諦：四聖諦の第四。八聖道の実践が苦を滅す

るための方法であるという真理。○森羅万象しんらかうまう総そう在ざい這一この椀わん茶ちや裏り：「補一」。○森羅万象しんらかうまう：存在する一切のもの。○瑞雲ずいうん：めでたいしるしの雲。○璨爛さんらん：ひかり輝かがやきあざやか。璨さんはひかり輝かがやくさま。爛らんは目にあざやかなさま。○健即坐禅けんじくざぜん

困即眠こんじくみん：健康であれば坐禅し、疲れば眠る「補二」。○大道通長安だうどうつうちやうあん：大道は長安に通じている「補三」。○応化仏おうけぶつ：応身仏と化身仏のこと。○向上こうじやうま：上の。○永平えいへい：ここでは道元の自称。

「訳」上堂。拄杖ちゆさうをもち挙げて言つた、「これが」諸法の至極しよく（きわめつき）だ」と。拄杖ちゆさうを横にして言つた、「これが」仏法の源底げんてい（こんぼん）だ。ここで四聖諦しじやうていの法輪ふりんを解き明かそう。いわゆる「四聖諦とは」、苦諦くてい

・集諦ぢいつてい・滅諦めつてい・道諦だうていことである。苦諦くていとは何か、森羅万象しんらかうまうが総そうてこの一椀いちわんの茶ちやの中ちゆうにある。集諦ぢいつていとは何か、瑞雲ずいうんの光ひかりが璨爛さんらんと光り輝かがやいている。滅諦めつていとは何か、健康ならば坐禅ざぜんし疲つかれたら眠る。道諦だうていとは何か、大道だうどうは長安ちやうあんに通じている。これらのことは応身おうしん仏ぶつや化身けしん仏ぶつのレベルの事である。向上こうじやうまのレベルではどうだ。向上こうじやうまの苦諦くみを見たいと思うか」と。拄杖ちゆさうを立ててドンと一突きした。「向上こうじやうまの集諦ぢいつていを見たいと思うか」と。拄杖ちゆさうを

立ててドンと一突きした。「向上の滅諦を見たいと思うか」と。拄杖を立ててドンと一突きした。「向上の道諦を見たいと思うか」と。拄杖を立ててドンと一突きした。「このことは仏祖の向上事ではあるが、さあ言つてみよ、私の本意はどうだ」と。拄杖を立ててドンドンと二突きした。

【茶碗を例示した説示】実際に拄杖を使つて自在に接化していることから、ここでいう「這一椀茶裏」も目の前に実在していた茶碗を示して説法していたのではないか。

〔史料2—40〕『永平広録』巻四「永平寺語録」（上堂315）

上堂。諸法因縁生。是法説因縁。是法縁及尽。大師如是説。參這箇道理、又作麼生。若阿湿鞞聞而命根断絶、舍利弗聞而面目裂開也。是仏祖屋裏、尋常茶飯。若是仏祖児孫、就毘盧頂門建宝王刹、当洞山向上転大法輪始得。且道、作麼生是転大法輪。遂拈起拈子云、直饒転得、未免永平拈子。

〔訓〕上堂。『諸法は因縁より生ず。是の法は因縁を説く。是の法は縁と及に尽く』と。大師、是の如く説く。這箇の道理に参ずること、又た作麼生。阿湿鞞の若きは聞きて命根断絶し、舍利弗は聞きて面目裂開す。是れ仏祖の屋裏、尋常の茶飯なり。若し是れ仏祖の児孫ならば、毘盧頂門に就いて宝王刹を建て、洞山の向上に当たつて大法輪を転じて、始めて得し。且く道え、作麼生か是れ大法輪を転ずる』と。遂に拈子を拈起して云く、「直饒い転じ得るも、未だ永平の拈子を免れず」と。

○掲載書籍：「道元①三・二〇四～二〇六」「道元②十一・四五～四六」。○諸法因縁生、是法説因縁、是法縁及尽：「補1」。○阿湿鞞：阿湿示。釈尊成道後、釈尊が最初に説法した五比丘の一人。○命根：いのち。生命。○舍利弗：仏十第弟子の一人、舍利弗のこと。○仏祖児孫：仏陀の法を受け嗣ぐ者。○毘盧：毘盧遮那仏のこと「補2」。○頂

門：頭のでつべん。○宝王刹：七宝で莊嚴された寺院。仏国土。○洞山：曹洞宗の洞山良价（八〇七〜八六九）のこ  
と【補3】。○大法輪：仏の所説をいう。仏法を転輪聖王の輪宝にたとえたもの。

【訓】上堂。『諸法は因縁より生じ、この法は因縁とともに尽きる』と。釈迦大師は、このように説いた。この道理をどのように参究すればよいのであろうか。阿湿示はこれを聞いて命を断ち、舍利弗はこれを聞いて面目が裂けてしまった。これは仏祖の屋裏であり、日常の茶飯である。もし仏祖の児孫ならば、毘盧頂門に宝王刹を建て、洞山の向上で大説法をすればよいのだ。さあ言ってみよ、どのように大説法をするのか」と。ついに弘子を取りあげて示して言った、「たとえ説法できたとしても、まだ私の弘子からは逃れられない」と。

【日常の茶飯としての引用】直接的な喫茶史料ではない。釈尊の説法を「尋常の茶飯」としてたとえている。日常生活で茶飯を喫しているからこそ、説得力を持つ言葉。

【史料2-41】『永平広録』巻五「永平寺語録」（上堂380）

上堂。仏祖児孫、莫学諸阿笈摩教・諸婆羅門法・祭祀法・路伽耶陀・逆路伽耶陀。祇管救頭燃、而須学仏仏祖祖之拳頭・眼睛・拄杖・弘子・蒲団・禅板・祖师心・祖师語。若非仏祖之行履不行、若非仏祖之言句不言。大衆還要委悉這箇関捩子麼。良久云、蒲団・禅板・趙州茶、十二時中不説邪。古仏曾参端的意。和修伝著仏袈裟。

【訓】上堂。「仏祖の児孫は、諸もろの阿笈摩教・諸もろの婆羅門法・祭祀法・路伽耶陀・逆路伽耶陀を学ぶこと莫かれ。祇管に頭燃を救いて、須らく仏祖の拳頭・眼睛・拄杖・弘子・蒲団・禅板・祖师の心・

祖師の語を学ぶべし。若し仏祖の行履に非ざれば行ぜざれ、若し仏祖の言句に非ざれば言わざれ。大衆、還た這箇の関捩子を委悉すや」と。良久して云く、「蒲団・禪板・趙州の茶、十二時中、邪を説かず。古仏、曾て端的の意に参じ、和修、仏袈裟を伝著す」と。

○掲載書籍：「道元①三・二四二〜二四四」「道元②十一・九一〜九二」。○仏祖児孫：仏陀の法を受け嗣ぐ者。○阿笈摩教：『阿含經』の教え。○婆羅門法：バラモン教。○祭祀法：仏教以外のまつりの方法。○路伽耶陀：ローカーヤ特派。古代インドの思想の一つ。○逆路伽耶陀：反ローカーヤ特派。ローカーヤ特派に反対する一派。○頭燃：頭に火がついて燃え始めたこと。一刻も放置しておけない事態をいう。○禪板：禪版とも。倚版。坐禅の時に身を寄せるための道具。○行履：日常の行為。日々の修行。○関捩子：関捩子。ねじ。ぜんまい。からくり。しかけ。○委悉：物事を事細かに詳しくすること。○趙州茶：「趙州喫茶去」の公案「補一」。○十二時：一昼夜。一日中。二十四時間。○端的：はつきりとしているさま。そのものずばりのありよう。○和修伝著仏袈裟：商那和修が生まれながら袈裟をまもっていたとされる話「補二」。○和修：商那和修のこと。

「訳」上堂。「仏陀の法を受け嗣ぐ者たちは、諸もろの『阿含經』の教え、諸もろのバラモン教の法、仏教以外のまつりの方法、ローカーヤ特派、反ローカーヤ特派を学んではならない。ひたすら、「炎で」燃えさかる頭を救うように（「一刻も早く」、必ず仏祖の拳頭・眼睛・拄杖・拄杖・扠子・蒲団・禪板・祖師の心・祖師の語を学びなさい。もし仏祖の修行でなければ行じてはならない、もし仏祖の言葉でなければ言ってはならない。諸君、このからくりが良く分かったか」と。しばらく間をおいてから、「蒲団・禪板・趙州の茶、（この坐禅と修行の日々の生活で）二十四時間、邪な事を言わないこと（「が大事である」）。古仏は、かつて（言葉によらず）そのものずばりの真意に参じ、商那和修は仏袈裟を伝えた」と。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。「趙州茶」としての引用ではあるが、蒲団・禪板など坐禅に

使用する法具と同等に挙げられていることから、日常的に飲む茶を「趙州茶」と述べたものか。

〔史料2—42〕『永平広録』卷五「永平寺語録」（上堂394）

上堂。記得、世尊、因五通仙人問、世尊六通、我有五通。如何是那一通。世尊召云、五通仙。五通応諾。世尊云、那一通你問我。三界世尊喚一声、五通仙人応一声。五通六通那一通、有辺無辺無有辺。鹽水点茶供和尚。永平門下又且如何。五通仙人本期欲偷小釈迦眼睛而見小釈迦、忽然見得大釈迦時如何。良久云、仙人非先所望。乞児打破飯碗。

〔訓〕上堂。「記得す、世尊、因みに五通仙人問う、『世尊に六通、我に五通有り。如何か是れ那の一通』と。世尊召して云く、『五通仙』と。五通、応諾す。世尊云く、『那の一通、你、我に問う』と。三界の世尊、喚ぶこと一声して、五通仙人、応うること一声す。五通・六通・那一通、有辺・無辺・無有辺なり。鹽水点茶し、和尚に供す。永平門下、又た且つ如何。五通仙人、本より小釈迦の眼睛を偷んで小釈迦を見んと期し欲するも、忽然として大釈迦を見得する時、如何」と。良久して云く、「仙人、先に所望するに非ず。乞児、飯碗を打破す」と。

○掲載書籍：「道元①三・二六四」「道元②十一・一二七―一一八」。○記得：記憶すること。覚えていること。○世尊、因五通仙人問く五通六通那一通：「補1」。○五通仙人：五つの神通力をもった仙人。○五通：五神通のこと。六神通の中で漏神通を欠いた五つの神通力。天眼通・天耳通・他人通・宿命通・神足通の五つ。○六通：仏・菩薩に備わる六種の超人的な能力。○応諾：声を出して応答する。○鹽水点茶：瀧山靈祐が昼寝の夢を当てよと命じたとき、仰山慧寂は鹽に水を盛って呈し、香嚴智閑は茶を入れて献じた故事「補2」。○永平門下：永平寺の道元の門下。○

忽然…突然に。たちまちに。○見得…見てとる。○乞兒打破飯碗…乞兒にとつても最も大事な飯碗を打ち砕く「補3」。○乞兒…乞食。○打破…うち破ること。負かすこと。○飯碗…飯碗。○飯の器。

「訊」上堂。「次の様な話を」覚えていて、世尊に（向かつて）、ある時、五通仙人が質問した、『世尊には六通が、私には五神通があります。その（足りない）一つの神通は何ですか』と。世尊が召して言われた、『五通仙人さん』と。五通仙人は、「ハイ」と声を出して応えた。世尊が言われた、『どの一つの神通を、君は私に質問したのか』と。（道元が著語して言う、）三界の世尊が喚びかけ、五通仙人が一声出して応えた。五通・六通・那の一通（のうち）、（仙人の五通には）<sup>際</sup>邊際があり、（仏の六通には）<sup>際</sup>には邊際がなく、（那の一通にも）<sup>際</sup>邊際がない、だからこそ（仰山は）<sup>たらい</sup>盥に水を盛り、「香嚴は」茶を入れて、（瀉山）和尚に供えたのだ。永平寺の門下では、またさあどうか。五通仙人は、もともと釈迦の目玉をぬすんで小釈迦を見ようとしていた（「だけなのだ」）が、突然に大釈迦を見た時には、どうだったであろうか』と。しばらく間をおいてから言った、「仙人（が見たものは）」は、先に望んでいたものではなかった。乞兒は、「大事な」飯碗を壊してしまった』と。

【古則公案を用いた説法】直接的な喫茶史料ではない。茶の記述を含む公案を用いた説法。

「史料2—43」『永平広録』卷五「永平寺語録」（上堂428）

上堂。挙、世尊在靈山会上、百万衆前拈優曇華、告曰、吾有正法眼藏涅槃妙心、附属摩訶迦葉。于時迦葉、破顏微笑。世尊昔日欲伝法、百万衆前拈得華、瞬目告言吾有法、破顏微笑独逢翁。這箇是長連牀上學得底、向上又作麼生。大衆還委委麼麼。良久云、莫問此間何活計。西天也有趙州茶。

〔訓〕上堂。挙す、「世尊、靈山会上に在りて、百万衆前に優曇華を拈じ、告げて曰く、『吾に正法眼蔵・涅槃妙心有り、摩訶迦葉に付属す』と。時に迦葉、破顔微笑す。世尊、昔日法を伝えんと欲し、百万衆前に華を拈得し、瞬目して告げて『吾に法有り』と言ひ、破顔微笑、独り舎に逢う。這箇は是れ長連牀上の学得底なり。向上は又た作麼生。大衆、還た委悉せんと要すや」と。良久して云く、「此間、何の活計ぞと問う」と莫かれ。西天にも也た有り趙州の茶」と。

○掲載書籍：「道元①四・一二」「道元②十一・一五三〜一五四」。○世尊在靈山会上く付属摩訶迦葉：「補一」。○世尊：世の尊敬を受ける人。釈迦牟尼仏のこと。仏十号の一つ。○靈山：靈鷲山の略。王舎城の東北にそびえる山。釈尊が説法を行なつた場所。○優曇華：ウドンバラの花。○正法眼蔵涅槃妙心：釈尊が体得した、絶対の真理（仏法の真髓）の内容を表現した言葉。○摩訶迦葉：仏十大弟子の一人、摩訶迦葉のこと。禅宗における西天第一祖「補2」。○付属：附嘱。教えを伝えるように託す。○破顔微笑：笑顔でほほえむ。○瞬目：まばたき。○舎：父。○長連牀：僧堂内の坐禅をする場所。修行僧はそこで、坐禅のみならず、食事も睡眠も行なう。○向上：上の。その先の。○委悉：物事を事細かに詳しくすること。○活計：生活を維持すること。暮らしむぎ。なりわい。○西天：中国からみて西方にある天竺国（インド）の意。

〔訳〕上堂。「公案を」挙げ「示し」た、「釈尊は、靈鷲山で、百万人を前にして優曇華を手にとつてから、〔皆にむかつて〕述べた、『私に正法眼蔵・涅槃妙心がある、これを摩訶迦葉に伝える』と。時に摩訶迦葉は、笑顔でほほえんだ。〔これを言い換えれば次の様になる。〕釈尊は、昔、法を伝えようとして、百万人の前で華を手にとつた。〔そして、〕まばたきしてから『私に法が有る』と述べた、笑顔の迦葉は父（釈尊）に逢えただけだった、と。この話は長連牀（僧堂の単）の上で〔坐禅して〕学び得るものである。〔更にそれを超えた〕向上は、いつたいどうだ。諸君、きちんと知りたとお思いか」と。しばらくしてから言った、「ここで

はどういう暮らしむきかと質問してはならない。インドにもまた趙州の茶があるのだから」と。

【仏前への茶の供養】【特為茶の一例】仏生日上堂の次に収録されている上堂。内容は釈尊に因む。実際に献茶したことに因んだものではないかと思われる。

〔史料2—44〕『永平広録』卷六「永平寺語録」(上堂455)

上堂。記得、葉山問高沙弥、汝從看經得、請益得。沙弥云、不從看經得、亦不從請益得。葉山云、大有人、不看經不請益、為什麼不得。沙弥云、不道他無、只是不肯承當。今日永平句句註脚。葉山云、汝從看經得、請益得。師著語云、得与未得、且從拳頭。沙弥云、不從看經得、亦不從請益得。師著語云、不曾到趙州先、喫得趙州茶。葉山云、大有人不看經不請益、為什麼不得。師著語云、一切衆生無仏性。沙弥云、不道他無、只是不肯承當。師著語云、一切衆生有仏性。師又云、忽有人問永平、為什麼恁麼道、祇向他道、元要諸空為破有。既無語有要何空。

〔訓〕上堂。「記得す、葉山、高沙弥に問う、『汝、看經從り得るや、請益從り得るや』と。沙弥云く、『看經從り得ず、亦た請益從り得ず』と。葉山云く、『大いに人有り、看經せず請益せず、什麼と為てか得ざる』と。沙弥云く、『他に無しとは道わず、只だ是れ肯えて承當せざるのみ』と。今日、永平句句に註脚せん」と。葉山云く、「汝、看經從り得るや、請益より得るや」と。師、著語して云く、「得と未得と、且に拳頭に從る」と。沙弥云く、「看經從り得ず、亦た請益從り得ず」と。師、著語して云く、「曾て趙州に到らざる先に、趙州の茶を得」と。葉山云く、「大いに人有り看經せず請益せず、什麼と為てか得ざる」と。師、著語して云く、「一切衆生に仏性無し」と。沙弥云く、「他に無しとは道わず、只だ是れ肯えて承當せざるの

み」と。師、著語して云く、「一切衆生に仏性有り」と。師又た云く、「忽ち人有りて永平に『什麼と為てか 恁麼に道う』と問わば、祇だ他に向かつて道わん、『元と諸空を要するは、有を破せんが為なり。既に諸有 無ければ、何の空をか要せん』と。

○掲載書籍：「道元①四・四二〜四四」「道元②十一・一九〇〜一九一」。○記得：記憶すること。覚えていること。

○薬山問高沙弥く只是不肯承当：「補1」。○薬山：青原下の薬山惟儼（七四五〜八二八）のこと「補2」。○高沙弥

：唐代、青原下の高沙弥（生没年不詳）のこと「補3」。○看経：経文を看読（黙読）することや、仏前で経文を読

誦（誦経）すること。○請益：師に教えを請ひ法益を受けること。○承当：うけがう。引き受けること。○永平：こ

こでは道元の自称。○註脚：古則・公案や古人の言句に評釈を下すこと。○趙州：南嶽下の趙州從諗（七七八〜八九

七）のこと「補4」。○趙州茶：「趙州喫茶去」の公案「補5」。○一切衆生有仏性：一切の衆生には仏性が具わつて

いる。

「訳」上堂。「次の様な話を」覚えている、薬山惟儼が、高沙弥に質問した、『君、（君が会得した仏法は） 經典を読んで得たものか、師匠の教えによつて得たものか』と。沙弥が言った、『經典を読んで得たものでも、また師匠の教えによつて得たものでもありません』と。薬山惟儼が言った、『經典を読まず、師匠の教 えにもよらない人はたくさんいるのに、どうして得られないのか』と。沙弥が言った、『彼らに無いとは言 いませんが、ただ（彼らがきちんと）引き受けていないだけなのです』と。今日、私とその言葉一つ一つを 評釈してみよう。「薬山が言った、『君、（君が会得した仏法は）經典を読んで得たものか、師匠の教えによ つて得たものか』と』について、師（道元）はコメントして言った、『「仏法を」会得したとか会得していな いとかいうのは、まさにこの拳によ（つて握ったり開いたりする）ようなものである』と。「沙弥が言った、『經典を読んで得たものでも、また師匠の教えによつて得たものでもありません』と』について、師（道元）

がコメントして言った、「かつて趙州に行つたこともない前から、趙州の茶を手に入れていたのだ」と。「葉山が言った『經典を読まず、師匠の教えにもよらない人はたくさんいるのに、どうして得られないのか』と」について、師（道元）がコメントして言った、「一切の衆生に仏性は具わっていない」と。「沙弥が言った、彼らに無いとは言いませんが、ただ（彼らがきちんと）引き受けていないだけなのです」と。について、師（道元）がコメントして言った、「一切の衆生には仏性が具わっている」と。師（道元）がまた言った、「突然に誰かが私に『どういう理由でそのように言うのか』と質問したなら、ただ彼に向かつて言つてやろう、『元来、諸もろの空が必要なのは、有（と）という固定概念』を打ち破るためである。〔しかし〕既に諸もろの有が存在しないならば、どんな空を必要としようか』と」。

【古則公案を用いた説法】直接的な喫茶史料ではない。古則公案に対する著語を、「趙州茶」という古則公案を用いて示したもの。

〔史料2—45〕『永平広録』巻六「永平寺語録」（上堂464）

上堂。記得、百丈、因僧問、瑜伽論・瓔珞經、大乘戒律、豈不依隨耶。百丈曰、我所宗、非局大小乘、非異大小乘。永平聊有山偈。良久云、十車競処一車現、相伴客人揖自茶。聞者雖多知者少、大王所説先陀婆。

〔訓〕上堂。「記得す、百丈、因みに僧問う、『瑜伽論 瓔珞經 大乘戒律、豈に依隨せざらんや』と。百丈曰く、『我が宗とする所は、大小乗に局るに非ず、大小乗に異なるに非ず』と。永平、聊か山偈有り」と。

良久して云く、「十車競う処に一車現われ、相伴の客人 揖して自ら茶す。聞者は多しと雖も知者は少なし。大王説く所の先陀婆」と。

○掲載書籍：「道元①四・五〇」〔道元②十一・一九九〕。○記得：記憶すること。覚えていること。○百丈、因僧問「非異大小乗」〔補1〕。○百丈：馬祖下の百丈懷海（七二〇・七四九〜八一四）のこと〔補2〕。○瑜伽論：『瑜伽師地論』のこと。玄奘が貞観二十二年（六四八）に訳出した。漢訳では弥勒、チベット伝では無着の作とする。○瓔珞経：『菩薩瓔珞本業経』のこと。後秦の竺仏念訳とされる。○大乘戒律：菩薩戒とも。大乘仏教における菩薩僧と大乘の信者に与えられる戒律。○依隨：依りて隨がう。○永平：道元の自称。○先陀婆：分かる人には分かる言葉。甚深難解な如来の言葉の比喩〔補3〕。

〔訳〕上堂。「次の様な話を」覚えている、百丈懷海にある時に僧が質問した、『瑜伽論と瓔珞経といった大乘戒律に、「あなたは」どうして依拠しないのですか』と。百丈が答えた、『私が宗としているところは、大小乗と限定されたものでもないし、大小乗と異なるものでもない』と。私に、一つの偈頌が有る』と。しばらく間をおいてから、「十の車が競いあつているところに一つの車が現われ、連れの客人がうやうやしく自ら茶をすすめる。聞いている者は多いが知る者は少ない。〔それはまさに〕大王の話す先陀婆（とという言葉の様に、智慧ある臣下でなければ聞いても分からないのだ）」と。

〔古則公案を用いた説法〕直接的な喫茶史料ではない。古則公案に対する偈頌を、「茶」を用いて示したものの。

〔史料2—46〕『永平広録』卷七「永平寺語録」（上堂499）

上堂。向日開来手裏花、与時煎点趙州茶。衲僧円相中秋月、更問如何三斤麻。正当恁麼時、又作麼生道得。良久云、伝衣処有何意、莫打牛須打車。

〔訓〕上堂。「日に向かって開き来たる手裏の花、時と与に煎点す趙州の茶。衲僧の円相、中秋の月なるに、

更に問う如何なるか三斤の麻。正当恁麼の時、又た作麼生か道得せん」と。良久して云く、「伝衣する処、何の意か有らん。打牛すること莫かれ、須らく打車すべし」と。

○掲載書籍：「道元①四・八四」「道元②十二・三六〇三七」。○煎点趙州茶：「趙州喫茶去」の公案「補1」。○中秋月：旧暦の八月十五日の満月。○三斤麻：「洞山麻三斤」の公案「補2」。○道得：よく言い表わす。○伝衣：法を伝えた証として、袈裟を伝えること。○打牛・打車：「南嶽磨靦話」に基づく「補3」。

〔訳〕上堂。「日本編に向かって開いている手に持った華、時間にあわせて湯を沸かして点てる趙州の茶。衲僧の円相は中秋の月のように真ん丸であるのに、更に〔洞山の〕「麻三斤」はどうかなどと質問する。まさにこの時、またどのように言うことができようか」と。しばらく間をおいてから、「仏陀が袈裟を伝えたことに、何の意味があるうか。〔牛車が動かなくなつたとき、諸君らは〕牛を打つてはならない、必ず車を打つようにしなさい」と。

【古則公案を用いた説法】直接的な喫茶史料ではない。「趙州茶」という表現をもつて、「趙州喫茶去」の公案への参究を暗示している。ただし、月を見ながら茶を飲んでいたことに因むか。

〔史料2—47〕『永平広録』巻七「永平寺語録」（上堂522）

上堂。云、記得、先師天童住天童時、上堂示衆曰、衲僧打坐、正恁麼時、乃能供養尽十方世界諸仏諸祖、悉以香華・灯明・珍宝・妙衣・種種之具、恭敬供養無間断也。汝等知麼、見麼。若也知得、莫道空過。若也未知、莫得当面諱却。師云、永平忝為天童法子、不同天童拳歩。雖然、一等天童打坐來也。如何不通天童堂奥之消息。且道、作麼生是恁麼道理。良久云、衲僧打坐時節、莫道磨靦打車、供養十方仏祖、妙衣・珍宝・香

華。正当恁麼時、更有為雲為水示誨処麼。顧視大衆云、凡類何能聞見及、自家一喫趙州茶。

〔訓〕上堂。云く、「記得す、先師天童、天童に住する時、上堂して衆に示して曰く、『衲僧、打坐せし正恁麼の時、乃ち能く尽十方世界の諸仏諸祖に供養するに、悉く香華・灯明・珍宝・妙衣・種種の具を以てし、恭敬供養、間断すること無かれ。汝等知るや、見るや。若し也た知り得ば、空しく過ぐすと道うこと莫かれ。若し也た未だ知らざれば、当面に諍却するを得ること莫かれ』と。師云く、「永平、天童の法子爲ることを忝くするも、天童の挙歩に同からず。然りと雖も一等に天童の打坐し來たる。如何が天童堂奥の消息に通ぜざる。且く道え、作麼生か是れ恁麼の道理」と。良久して云く、「衲僧、打坐する時節、磨瓶・打車と道うこと莫かれ、十方の仏祖に妙衣・珍宝・香華を供養す。正当恁麼の時、更に雲の爲水の爲に示誨の処有りや」と。大衆を顧視して云く、「凡類は何ぞ能く聞見し及ばん、自家一たび趙州の茶を喫す」と。

○掲載書籍：「道元①四・一〇二」「道元②十二・六〇〜六一」。○記得：記憶すること。覚えていゝること。○先師天童く莫得当面諍却：典拠未詳「補1」。○先師天童：曹洞宗の長翁如淨（一一六二〜一二二七）のこと「補2」。○天童：天童山景德禪寺のこと「補3」。○衲僧：衲衣を着た僧。禅僧のこと。○尽十方世界：ありとあらゆる世界。全世界。○香華：花と香り。○灯明：ともしび。○珍宝：珍しい宝物。○妙衣：妙なる法衣。○恭敬：敬い尊ぶこと。○間断：間がとぎれること。絶え間。○当面：直に向き合うこと。目の当たりにすること。○諍却：はばかり避ける。却是動詞の意味を強める助字。○永平：ここでは道元の自称。○挙歩：歩き出す。歩み方。○一等：一樣。○堂奥：仏法の真髓。○磨瓶・打車：「南嶽磨瓶話」の公案に基づく「補4」。○雲水：行雲流水の略。雲水僧。諸方歴遊する修行僧。○示誨：垂示教誨の略。教えること。○顧視：振り返つて見ること。かえりみる。○凡類：凡流。凡夫の輩。○自家：自分で。○趙州茶：「趙州喫茶去」の公案「補5」。

〔訳〕上堂。云く、「次の様な話を」覚えていゝる、先師如淨が、天童山の住持をしていゝる時、上堂して修行

僧に示して言われました、『諸君、坐禅しているまさにこの時に、よく全世界の諸仏諸祖に供養するのに、すべての香華・灯明・珍宝・妙衣・種種の仏具を用い、敬って供養することに間断があつてはならない。諸君らは〔このことを〕知っているか、見ているか。もし知っているならば、〔坐禅して〕空しく〔時間を〕過ぎていっていると云つてはならない。もしまだ知っていなかったとしても、〔それを理由に〕坐禅することを正面から嫌い避けることがないように』と。師（道元）が言つた、「私はかたじけなくも天童如浄の法を嗣いだものであるが、『私自身は』天童〔如浄〕のやり方と〔まつたく〕同じというわけではない。しかしながら、ひとしく天童の坐禅をしてきた。どうして天童の奥義に通じていないことがあるか。さあ言つてみよ、この道理はいつたどういふことか」と。しばらく間をおいてから、「諸君、坐禅している時間が、瓦を磨き、車を打つことだと言つてはならない、十方の仏祖に妙衣・珍宝・香華を供養しているの〔に等しい〕だ。まさにこの時、さらに雲水諸君のために教える言葉があるだろうか」と。大衆を見まわしてから、「凡夫〔である我々〕がどうして〔坐禅の奥義を〕聞見することができようか。自分で一杯の趙州茶を飲む〔ただ自分から坐禅する〕だけである」と。

【古則公案を用いた説法】直接的な喫茶史料ではない。坐禅という行為は、聞見するものではなく、実際に自分から行なうものであることを説明するのに、「趙州茶」という表現で示したもの。日常生活で茶飯を喫しているからこそ、説得力を持つ言葉。

〔史料2―48〕『永平広録』卷八「小参」（小参1）

解夏小参。古今明弁、彼此見成。若不知有争得恁麼。若也知有争得恁麼。雖然如此、只見把住、未見放行、

眉毛蹉過、正眼覷著。要且拋令而行、尽大地人喫茶。

「訓」解夏の小參。古今明弁し、彼此見成す。若し有を知らずんば、争でか恁麼を得ん。若しまた有を知らば、争でか恁麼を得ん。然も此の如くなりと雖も、只だ把住を見て、未だ放行を見ず、眉毛蹉過し、正眼にて覷著す。要且つ令に拋つて行ぜば、尽大地の人喫茶せん。

○掲載書籍：「道元①四・一一〇」「道元②十二・六九」。○解夏小參：夏安居が終わるのに因んで行なう小參。○明弁：はつきりと善悪を区別する。○見成：眼前に隠れることなく、ありのままに現れていること。○把住：把定。しつかりと握る。相手の機を押さえ込むこと。○放行：束縛することなく、自由に放しておくこと。○眉毛蹉過：「眉毛」は「眨上眉毛」を省略したものであろう。「蹉過」は、すれ違ふこと。道理を外れること「補」。○正眼：正視する。まのあたりにする。正しい仏法の眼。○覷著：うかがい尽くす。見つめてしまう。○要且：要するに、つまるところ、ともかく。○尽大地：すべての大地。世界中すべて。

「訳」解夏の小參。古今〔の祖師方の言行〕を明らかに弁別したなら、彼此〔どこでも仏法の真理〕があるままに現れてくる。もし〔それ（仏法の真理）が〕有ることを知らないというのならば、「手掛かりされないのだから」どうやってそれ（仏法の真理）を得られようか。もしまた〔仏法の真理が〕有ることを知っているというのならば、「真理など実在しないのだから」どうしてそれ（仏法の真理）を得られようか。とはいえ、〔この言葉は〕ただ把住（相手を押さえこむ方法）を示しているだけで、まだ放行（相手を自由にする方法）を示していない、眉毛〔をピクリと動かした〕だけで〔真理から〕外れてしまう、正しい仏法の眼でうかがい尽くすことだ。ともかく〔諸君らが〕法令（清規）に従って修行するならば、すべての人たちが喫茶することであろう。

【古則公案を用いた説法】【清規における特為茶の一例】清規に従って修行すれば、すべての人たちが喫茶するのとべている。喫茶はあくまでたとえであるが、禅宗清規と喫茶との関係が語られていることは興味深い。日常生活で茶飯を喫しているからこそ、説得力を持つ言葉。また、『永平広録』巻八「小参」「史料2—49」と同様に、解夏に行なわれた実際の喫茶に因むものと思われる。『正法眼蔵』「安居」「史料2—34」参照。

「史料2—49」『永平広録』巻八「小参」（小参7）

解夏小参。云、要見法歳周円麼。作一円相云、因従這裏做。又作一円相云、是在這裏成。参得蘿蔔頭禅、満于驢胎馬腹。参得琉璃瓶子禅、打破七華八裂。参得如来禅、眼裏無筋一世貧。参得祖师禅、殃過及児孫。恁麼参得、且道、永平意作麼生。但見日頭東畔上。誰能更喫趙州茶。

「訓」解夏の小参。云く、「法歳の周円を見んと要すや」と。一円相を作して云く、「因みに這裏従り做る」と。又た一円相を作して云く、「是れ這裏に在りて成る。蘿蔔頭禅に参得せば、驢胎馬腹を満たす。琉璃瓶子禅に参得せば、七華八裂に打破す。如来禅に参得せば、眼裏に筋無く一世貧し。祖师禅に参得せば、殃過児孫に及ぶ。恁麼の参得、且く道え、永平の意は作麼生。但だ日頭の東畔に上るを見る。誰か能く更に趙州の茶を喫せん」と。

○掲載書籍：「道元①四・一一八」「道元②十二・七九」。○解夏小参：夏安居が終わるのに因んで行なう小参。○法歳：法臘。夏臘。○参得：参禅して真理を体得すること。○蘿蔔頭禅：だいこん禅。安易に印可を与える希薄な禅。「補1」。○琉璃瓶子禅：ガラス瓶の禅。「補2」。○七華八裂：ばらばら。○打破：うち破ること。負かすこと。○如来禅：如来の根本精神を伝える禅。のちには祖师禅と対に用いられた「補3」。○眼裏無筋一世貧：ものの本質を見

抜く力がなく、一生涯むだに送る〔補4〕。○祖師禅：祖師から祖師に以心伝心して伝えられた禅。如来禅と対に用いられる〔補5〕。○殃過：殃害。災い。○永平：ここでは道元の自称。○但見日頭東畔上。誰能更喫趙州茶：〔補6〕。○趙州茶：「趙州喫茶去」の公案〔補7〕。

〔訳〕解夏の小参。言った、「夏安居が終わり」法臘が円満成就し〔て一つ増え〕たのを見たいと思うかと。一円相を描いて言った、「ここから〔夏安居が〕はじまった」と。また一円相を描いて言った、「ここで〔夏安居が〕円成した。蘿蔔頭禅〔だいいこん禅〕に参禅したなら、「生まれ変わって」驢（ロバ）や馬に宿つてしまう。琉璃瓶子禅に参禅したなら、こなごなにくだけちつてしまう。如来禅に参禅したなら、本質を見抜く力がなく一生涯をむだに送つてしまう。祖師禅に参禅したなら、「その法が伝えられていくから」災いが児孫にまで及んでしまう。このような参禅の功德について、さあ言ってみよ、私の本意はどこにあるのか。ただお日さまが東の方に上るのを見ている。いったい誰がさらに趙州茶を喫することができるのか」と。

【古則公案を用いた説法】【清規における特為茶の一例】古則公案を用いた説法。また、『永平広録』巻八「小参」〔史料2―48〕と同様に、解夏に行なわれた実際の喫茶に因むものと思われる。『正法眼蔵』「安居」〔史料2―34〕参照。

〔史料2―50〕『永平広録』巻九「頌古」（頌古55）

龍潭禅師、作餅為業。礼天皇和尚出家。皇謂云、汝執侍、吾已後為汝説心要法門。凡経一載、潭曰、来时和尚許説心要法門。至今未蒙指示。皇云、吾為汝説来久矣。潭曰、何処是和尚為某説。皇云、你若不審、我則合掌。我若坐時、汝則侍立。汝擎茶来、吾為汝受。潭良久。皇云、見則便見、擬思即差。潭乃大悟。

這箇是誰誰是我、似來似去水中泡。千年八百田將主、師資心要龍与蛟。

「訓」龍潭禪師、餅を作るを業と為す。天皇和尚を礼して出家す。皇、謂いて云く、「汝執侍せば、吾、已後、汝が為に心要法門を説かん」と。凡そ一載を経。潭曰く、「來たる時、和尚、心要法門を説くを許す。今に至るまで未だ指示を蒙らず」と。皇云く、「吾、汝が為に説き來たること久し」と。潭曰く、「何処にて是れ和尚某の為に説く」と。皇云く、「你若し不審せば、我則ち合掌す。我若し坐する時、汝則ち侍立す。汝茶を擎げ來たれば、吾、汝の為に受く」と。潭良久す。皇云く、「見れば則便ち見る、思わんと擬せば即ち差う」と。潭乃ち大悟す。

這箇は是れ誰ぞ、誰か是れ我、來たるに似て去るに似たり水中の泡。千年に八百の田將主、師資の心要は龍と蛟と。

○掲載書籍：「道元①四・二二八」「道元②十二・一八九」。○龍潭禪師ノ潭乃大悟：「補1」真字『正法眼藏』一〇六則。○龍潭禪師：唐代、青原下の龍潭崇信（生没年不詳）のこと「補2」。○天皇和尚：石頭下の天皇道悟（七四八〜八〇七）のこと「補3」。○不審：挨拶の言葉。挨拶そのものも意味する。○執侍：従事する。○心要：教えの真髓。○法門：真理の教え。仏の教え。○千年八百田將主：田地の持ち主が次々に変わること。「田將主」は「田莊主」の意か「補4」。○師資：師匠と弟子。○蛟：みずち。へびに似た伝説上の動物。水に住み、角と四本の足があり、毒気を吐いて人を害すると伝える。

「誤」龍潭崇信は、餅を作つて業としていたが、天皇道悟を礼して出家した。天皇道悟は言った、「君、私に従事したなら、私はこれより君のために心要（教えの真髓）法門（真理の教え）を説こう」と。一年が経過した。龍潭崇信が言った、「ここにやつて來た時に、和尚さんは、私に心要（教えの真髓）法門（真理の教え）

を説いてくれると言いました。「しかし、」今まで指示を受けておりません」と。天皇道悟が言った、「私は君のために〔禅の教えを〕長らく説いてきたぞ」と。龍潭崇信が言った、「どこで和尚さんは私のために説いたのですか」と。天皇道悟が言った、「君が挨拶したときは、私はすぐに合掌していたではないか。私が坐禅している時は、君はすぐにそばに立っていたではないか。君が茶を拵げてもつてやつて来れば、私は君のために受けとっていたではないか」と。龍潭崇信は、「意味が理解できずに」黙っていた。天皇道悟が言った、「見るときはそのまま見なさい、〔思慮をさしいれて〕見ようと思つてしまえばもうまちがいだ」と。龍潭崇信はそこで大悟した。

これはいつたい誰なのか、誰が私なのか、来て去るさまは水中の泡に似ている。千年の間に八百人も変わる田荘の持ち主（のように一定不変の存在はないの）であり、師匠と弟子が伝える心要（教えの真髓）は龍と蛟（の遣り取りのようなもの）だ。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。茶の記述を含む公案。真字『正法眼蔵』第一〇六則「史料2-7」に記した公案に基づき、道元が示した頌古。

〔史料2-51〕『永平広録』巻九「頌古」（頌古57）

芙蓉楷和尚、参投子乃問、仏祖言句家常茶飯。離此之外、别有為人言句也無。子曰、汝道、寰中天子勅、還仮堯舜禹湯也無。楷欲進語、子以仏子撼楷口曰、汝発意来、早有三十棒也。楷即開悟、再拜便行。子曰、且来闍梨。楷不顧。子曰、汝到不疑之地耶。楷、以手掩耳。

仏祖家常茶飯、為人知礼只寒筋、莫君掩耳擬開口、膠柱調絃曲更加。

「訓」芙蓉楷和尚、投子に参じて乃ち問う、「仏祖の意句は家常の茶飯なり。此れを離るるの外、別に為人の言句有りや」と。子曰く、「汝道え、寰中の天子の勅、還た禹湯堯舜を偸るや」と。楷、進んで語らんと欲するに、子、払子を以て楷が口を撼つて曰く、「汝、発意して来たるに、早や三十棒有り」と。楷即ち開悟し、再び拜して便ち行かんとす。子曰く、「且く来たれ、闍梨」と。楷顧みず。子曰く、「汝、不疑の地に到るや」と。楷、手を以て耳を掩う。

仏祖家常の茶飯は飽なり、人の為にするに礼を知るは只だ寒笳のみ。君、耳を掩うこと莫くして口を開かんと擬せば、膠柱して調絃し曲更に加えしならん。

○掲載書籍：「道元①四・二二〇」「道元②十二・一九〇～一九一」。○芙蓉楷和尚以手掩耳：「補1」真字『正法眼蔵』一四三則。○芙蓉楷和尚：曹洞宗の芙蓉道楷（二〇四三～一一一八）のこと「補2」。○投子：曹洞宗の投子義青（一〇三二～一〇八三）のこと「補3」。○家常：日常。尋常。○為人：人のためにする。人を教え諭す。教化。○寰中：天下。世界中。○天子勅：天子は皇帝。皇帝（天皇）が発した命令。○禹湯：古代中国の明君である、夏の禹王、殷の湯王のこと。○堯舜：中国古代の伝説上の帝王である堯と舜。○発意：「ほつち」とも。仏法を求める心を起こすこと。発菩提心。発心。○三十棒：師家が学人に対して与える棒打。徳山の棒。○開悟：大悟。悟りを開くこと。○闍梨：禅僧の代名詞。「私」の代名詞。天台宗の阿闍梨のことではない。○麈：粗末なさま。○寒笳：管楽器の一つ。あしぶえ。○膠柱：琴柱に膠す。琴柱は、胴の上を立てて弦を支え、その位置によつて音の高低を調節するもので、これを膠でかためること。融通のきかないことを指す。○調絃：琴などの弦を調整する。

「訳」芙蓉道楷が、投子義青に参じて質問した、「仏祖の言葉は家常の茶飯です。このことを離れて、別に教える言葉がありますか」と。師（投子義青）が言った、「君、言いたまえ、寰中の天子の勅は、はて禹・湯・堯・舜王の言葉を借りるか」と。芙蓉道楷は進み出て話をしようとする、師（投子義青）は払子で芙蓉

道楷の口を払ってから言った、「君、発心して来たときに、とつくに三十棒をくらっているぞ」と。芙蓉道楷はすぐに開悟し、再び礼拝して立ち去ろうとした。師（投子義青）が言った、「ちょっとこちらに來なさい、和尚さん」と。芙蓉道楷は、振り返らなかつた。師（投子義青）が言った、「君は、不疑の地（絶対の境地）に到つたのか」と。芙蓉道楷は、手で耳を掩つた。

仏祖の日常の茶飯は質素であり、指導するのに礼をわきまえているのは寒筩（楽器）の笛だけだ。諸君、「芙蓉道楷が」耳をおおわずに口を開こうとしていたなら、琴柱を膠で固めて絃を調整するように〔音程の狂つた〕曲をさらに加えたことであろう。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。茶の記述を含む公案。真字『正法眼蔵』第一四三則「史料2—8」に記した公案に基づき、道元が示した頌古。

「史料2—52」『永平広録』卷九「頌古」（頌古64）

長慶有時云、寧説阿羅漢有三毒、不説如来有二種語。不道如来無語、只是無二種語。保福曰、作麼生是如来語。慶云、聾人争得聞。保福云、情知、汝向第二頭道。慶云、作麼生是如来語。保福云、喫茶去。

不説徳声三両種、木人本自木人孫。如来語是如来語、更有一聾記已言。

「訓」長慶、有る時云く、「寧ろ阿羅漢に三毒有りと説くも、如来に二種の語有りと説かざれ。如来に語無しと道わず、只だ是れ二種の語無きのみ」と。保福曰く、「作麼生か是れ如来の語」と。慶云く、「聾人、争でか聞くことを得ん」と。保福云く、「情に知る、汝、第二頭に向かつて道うことを」と。慶云く、「作麼生か是れ如来の語」と。保福云く、「喫茶去」と。

徳声は三両種と説かざれ、木人は本自り木人の孫。如来の語は是れ如来の語なるに、更に一聾有つて己言を記す。

○掲載書籍：「道元①四・二二四～二二六」「道元②十二・一九六～一九七」。○長慶有時云く喫茶去…「補一」。○長慶：雪峰下の長慶慧稜（八五四～九三二）のこと「補2」。○阿羅漢：尊敬されるべき人。仏弟子の到達する最高の階位。○三毒：人の善心を害する三種の煩惱。貪・瞋・癡。○如来…タターガタ（梵：Tathagata）のこと。真如から来た人。真理に到達した人。仏陀のこと。仏の十号の一。○保福：雪峰下の保福從展（？～九二八）のこと「補3」。○聾：耳が聞こえない状態。○向第二頭：後手。次の一手。○喫茶去：茶を飲みに行け。茶を飲んでから出直して来い。○木人：木像の男性。分別を絶したありようにたとえる。

「訊」長慶慧稜がある時に言った、「いつそ阿羅漢に（貪・瞋・癡の）三毒が有ると説いたとしても、如来に二種（真実・方便）の語が有ると説いてはならない。如来に言葉が無いと言わないが、ただ二種の言葉だけはない（、真実の言葉のみがあるのだ）」と。保福從展が言った、「如来の言葉とはどういうものですか」と。長慶慧稜が言った、「聾人（聞く耳をもたぬ人）に、どうして聞くことができよう」と。保福從展が言った、「まったく解った、君が（仏法の第一義を言えずに）第二義を言っていることが」と。長慶慧稜が言った、「（では、いったい）如来の言葉とはどういうものですか」と。保福從展が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。

（如来の）徳声（立派な説法）に二三種あると説いてはならない、木人はもともと木人の孫である。如来の言葉は如来の言葉であるのに、さらに一聾（聞く耳をもたぬ輩）がいて自分の言葉を記してしまうのだ。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。茶の記述を含む公案。真字『正法眼蔵』第二九八則「史料

2—11」に記した公案に基づき、道元が示した頌古。

【史料2—53】『永平広録』卷十「偈頌」（偈頌31）

与成忠二首

（中略）

大道元来無定轍、東西南北悉仙家。雖然赤脚人難弁、裸腹空虚怕糊茶。

【訓】成忠に与える二首

（中略）

大道だいたうに元来がんらい、定轍ていごな無し、東西南北こことせんに悉く仙家せんけなり。然も赤脚しかしやくきゃくにして人弁べんし難がたしと雖も、裸腹空虚らふくくうきよなれば糊茶こさを怕おそる。

○掲載書籍：「道元①四・二六四」「道元②十三・二二〇二三」。○定轍：定められた路。○仙家：仙人の住する所。

○赤脚：肌をむき出しにした足。素足。○糊茶：粥と茶。

【訳】成忠に与える二首

（中略）

大道には元から定められた路は存在しない、東西南北すべて（の場所がそもそも）仙人の住する場所（究極の場所）である。素足で（どれが本物の仙人か）見分けがつかないであろうが、むき出しのお腹が空っぽで（中に）何も入っていないので、粥や茶を飲むことさえも怖れてしまうものだ。

【喫茶を用いた説示】成忠という僧侶に与えた偈頌二首のうちの一首に、糊茶の記述がある。粥と同様に茶

を記す以上、茶は修行僧にとって特別なものでなく、清規にあるように日常生活で飲まれていたものである。日常生活で茶飯を喫しているからこそ、説得力を持つ言葉。

〔史料2―54〕『永平広録』卷十「偈頌」「十二時頌」（偈頌118）

### 食時辰

喫却僧堂吞仏殿、高心空腹愛雲霞。西天展鉢新羅湿、未討趙州飽飯茶。

〔訓〕食時辰

僧堂を喫却して仏殿を呑み、高心空腹にして雲霞を愛づ。西天に鉢を展ぶれば新羅湿い、未だ趙州を討ねざるに飯茶に飽く。

○掲載書籍：「道元①四・二九四」「道元②十三・五四〜五五」。○辰：辰の時。○喫却：のむ。くらう。却是動詞の後について意味を強める。○僧堂：禪門における修行道場。僧侶が坐禪・食事・睡眠する建物。雲堂とも。○仏殿：禪宗寺院で、伽藍の中心にあり、本尊を安置し礼拝する建物。○雲霞：雲と霞。○西天：中国からみて西方にある天竺国（インド）の意。○新羅：古代の朝鮮半島南東部にあった国「補1」。○趙州：南嶽下の趙州從諗（七七八〜八九七）のこと「補2」。

〔訳〕食時は辰の時

僧堂をくらしい仏殿をのみこみ、意気軒昂でも腹は空つぽだが雲や霞を愛でている。インドで応量器を展げれば「遠く離れた」新羅国が湿い、まだ趙州を尋ねていないのに、飯茶を十分に味わっている。

【茶を用いた説示】道元が十二時に頌を示した中の「食時辰」の中に、飯茶の記述が見られる。食事の後に

茶を飲むことに因んでいると思われる。

〔史料2—55〕『宝慶記』

不可喫久損山茶及風病藥（天台山有）。

〔訓〕久損山の茶及び風病の藥を喫す可からず（天台山に有り）。

○『宝慶記』は、道元が天童山景德禪寺の長翁如浄に入室した際の記録に基づく著述。道元の参問に対して、如浄が丁寧<sup>テイネイ</sup>に答えた問答の記録である。道元寂後にこれを見つけた弟子の懐契<sup>クヱツ</sup>が、その記録をまとめて『宝慶記』と題名を付けた。懐契が手写した『宝慶記』の原本が、愛知県全久院に伝わっている。○掲載書籍：〔道元①七・八〕〔道元②十六・一〇〕。

〔訳〕久損山の茶、ならびに風病の藥を服用してはならない（天台山にある）。

【中国における茶の事例】直接的な喫茶史料ではない。如浄が道元に、天台山にあるという「久損山の茶」を喫しないように述べている。

### 蘭溪道隆関係史料

〔史料3—1〕『蘭溪和尚語録』卷上「建長寺語録」（上堂53）

上堂。道在屎尿、道在瓦礫。眼見耳聞、撞牆磕壁。濶一丈、深三尺、尽大地人跳不出。山僧与諸人還跳得出麼。良久。下座、巡堂、喫茶。各各自宜著力。

【訓】上堂。「道は屎尿しにように在りあ、道は瓦礫かりやくに在り。眼に見、耳に聞き、牆しやうに撞あたり、壁かべに磕あたる。潤ひろきこと一丈、深いきこと三尺さんじやくなるも、尽大地じんたいちの人、跳とび出いださず。山僧しやんじゆんと諸人しよじんと、還はた跳ちやうとくしゆつ得とく出すや」と。良久りやうきゆうして、「下座あぎ、巡堂じゆんどうして、喫茶あつちやせよ。各みづか自よろら宜よろしく力を著つくべし」と。

○蘭溪道隆：臨濟宗大覚派祖の蘭溪道隆（一二二二—一二七八）のこと【補1】。○『蘭溪和尚語録』は、蘭溪道隆の常楽寺、建長寺、建仁寺住持時代の、宝治二年（一二四八）から弘長四年（一二六四）までの上堂説法や法語などを集めたもので、三巻で構成される。宋地で開版され、鎌倉後期に日本で宋版を模刻して再刊された。詳しくは、拙稿『蘭溪和尚語録』解題（思文閣出版、二〇一四年）参照。○掲載書籍：『蘭全一・二五b』。○屎尿：クソとシヨンベン。○瓦礫：かわらと小石。○撞牆磕壁：垣根に突き当たり、壁にぶち当たる【補2】。○尽大地：すべての大地。○下座巡堂喫茶：【補3】。○下座：僧堂の単を下りること。○巡堂：僧堂内を一巡すること。○著力：力を入れる。全力を尽くす。

【訳】上堂。「道は糞と小便にあり。道はがれきの中にあり。眼で見て、耳で聞き、垣根にぶつかり、壁に当たる。広さは一丈、深さは三尺だが、この世界の人々は誰も（ここから）飛び出せない。私と君たちは、飛び出せるだろうか」と。しばらくしてから、「座を下り、諸堂を廻り、茶をのみなさい。それぞれが、自分で努力することだ」と。

【清規における特為茶の一例】毎月の日や十五日に際して、住持が上堂説法後に「下座巡堂喫茶」と言うのと、修行僧たちが一斉に喫茶していたようである。蘭溪道隆の「下座巡堂喫茶」はこれに基づくものであり、すなわち鎌倉中期の建長寺で清規に基づいて喫茶が行なわれていた確実な史料となる。

〔史料3—2〕『蘭溪和尚語録』卷上「建長寺語録」(上堂104)

上堂。紅紅白白不相謾、無位真人赤肉团。諸人若向赤肉团上見得、且非無位真人。只今要見無位真人麼。擲下拄杖。下座、巡堂、喫茶。

上堂。「紅紅白白、相い謾ぜず。無位の真人、赤肉团。諸人、若し赤肉团上に向かつて見得せば、且つ無位の真人に非ず。只今、無位の真人を見んと要すや」と。主丈を擲下して、「下座、巡堂して、喫茶せよ」と。

○掲載書籍：「蘭全一・三五b・三六a」。○無位真人：いかなる枠にもはまらず、一切の枠を超えた自由人「補1」。  
○赤肉团：人間の体。生身の人間。○見得：見てとる。○擲下：投げ下ろす。投げ捨てる。○下座巡堂喫茶：「補2」。  
○下座：僧堂の単を下りること。○巡堂：僧堂内を一巡すること。○著力：力を入れる。

〔訳〕上堂。「赤は赤、白は白、欺くことはない。無位の真人は肉体だ。諸君がもし肉体上に〔無位の真人を〕見て取ったとしても、〔それは本物の〕無位の真人ではない。〔どうだ〕今、無位の真人を見たいと思うか」と。主杖を投げ下ろして、「座を下り、諸堂を廻り、茶をのみなさい」と。

【清規における特為茶の一例】〔史料3—1〕に同じ。

〔史料3—3〕『蘭溪和尚語録』卷上「建長寺語録」(上堂156)

上堂。魯祖見僧面壁、金剛杵打鉄山摧。趙州逢人請喫茶、八角磨盤空裏走。二大老氣呑乾坤、総被建長点検。休点検。只可聞名、不欲見面。

〔訓〕上堂。「魯祖、僧を見れば面壁す、金剛杵もて鉄山を打ちて摧く。趙州が人に逢わば喫茶を請う、八角の磨盤、空裏に走る。二大老、気は乾坤を呑むも、総て建長に点検せらる。点検することを休めよ。只だ

名を聞く可きも、面を見んと欲せざれ」と。

○掲載書籍：「蘭全一・四六b」。○魯祖見僧面壁：「魯祖面壁」の公案「補1」。○魯祖：馬祖下の魯祖宝雲（生没年不詳）のこと「補2」。○金剛杵打鉄山摧：金剛杵は金剛力士の武器。鉄山を打って真つ二つにする「補3」。○趙州逢人請喫茶：「趙州喫茶去」の公案「補4」。○趙州：南嶽下の趙州從諗（七七八〜八九七）のこと「補5」。○八角磨盤空裏走：八角磨盤空裏走。古代インドの神話に見える武器の一つで、八つの尖りをもつグラインダー（研磨盤）が空中を回転して、一切のものを破壊する「補6」。○乾坤：天と地。○点検：調べあげる。○只可聞名、不欲見面：「補7」。

【訳】上堂。「魯祖宝雲は修行僧がやってくるのを見たら面壁したが、「これは」金剛杵で鉄の山を打ち砕いたのだ。趙州從諗は人に会うと喫茶をすすめたが、「これは」八角の研磨盤が空中で旋回する（ようにものすごい）ことだ。二人の老僧は、気は天地をのみこんでしまうほど「の優れた禅僧」であるが、すべて私に点検されてしまった。「諸君らは」点検するのをやめなさい。名を聞くのは構わないが、面を見ようとするなよ」と。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。

【史料3—4】『蘭溪和尚語録』卷上「建長寺語録」（上堂17）

端午上堂。取得些子良薬、且非九転還丹。今朝信手拈来、善療諸人心病。慕拈拄杖、諸人心病作麼生医。卓拄杖。一服便安。下座、巡堂、喫茶。

【訓】端午上堂。「些子の良薬を取得するも、且つ九転の還丹に非ず。今朝、手に信じて拈じ来たり、善く

諸人の心病を療ず」と。慕に主丈を拈じて、「諸人の心病、作麼生か医せん」と。主丈を卓して、「一服にて便ち安んず。下座、巡堂して、喫茶せよ」と。

○掲載書籍：「蘭全一・五〇b」。○端午上堂：五月五日、端午の日に行なう上堂。○些子：すこしばかり。ちよつと。○良葉：よく効く葉。良劑。『説苑』に「良葉苦於口、利於病」とある。○九転還丹：道教で、長生不死の丹薬を九度練るのいう。九還丹、九転丹で仙薬。還丹は水銀を練つて仙丹（妙薬）にすること。○慕：まっこうから。たちまちに。○心病：心の病。心の中に妄見を生じて苦しむこと。○下座巡堂喫茶：「補一」。○下座：僧堂の単を下りること。○巡堂：僧堂内を一巡すること。

「訳」端午上堂。「少しばかりの良葉を収得したものの、九度ねられた真の仙薬ではなかった。（とはいえ、どんな効き目か）今朝、手当たり次第に（この仙薬を）つまんで、諸君の心の病を治してみよう」と。にわかには杖を取りあげて、「諸君の心の病、さあどうやって治そうか」と。杖を真つ直ぐに立てて、「一服ですぐに安らかになつたな。座を下り、諸堂を廻り、茶をのみなさい」と。

【清規における特為茶の一例】【端午の茶】「下座巡堂喫茶」については、「史料3—1」に同じ。ただし、端午上堂で行なわれていることは注目される。他の禅僧の記録から、中国・日本において、端午（五月五日）にも一斉に喫茶する習慣（菖蒲茶）があつたと考えられる。

「史料3—5」『蘭溪和尚語録』卷下「建長寺小参」（小参4）

結夏（中略）。

拳、趙州嘗問僧、曾到此問否。僧云曾到。州云、喫茶去。又問僧、曾到此問否。僧云、不曾到。州云、喫茶

去。師云、曾到不曾到、一例喫茶去。雖是尋常言語、就中毒藥醍醐。且甚麼処与趙州相見。聴取一頌。句下千鈞重、胸中万丈深。雖無上馬力、猶有殺人心。

〔訓〕結夏（中略）。

拏す、趙州嘗て僧に問う、「曾て此間に到るや」と。僧云く、「曾て到る」と。州云く、「喫茶去」と。又た僧に問う、「曾て此間に到るや」と。僧云く、「曾て到らず」と。州云く、「喫茶去」と。師云く、「曾て到ると曾て到らざると、一例に喫茶去と。是れ尋常の言語なりと雖も、就中、毒藥・醍醐あり。且く甚麼の処に趙州と相見せん。一頌を聴取せよ。句下千鈞重く、胸中万丈深し。馬に上るの力無しと雖も、猶を人を殺すの心有り」と。

○掲載書籍：「蘭全一・一一八a～b」。○趙州嘗問僧く州云喫茶去：「補1」。○趙州：南嶽下の趙州從諗（七七八～八九七）のこと「補2」。百二十歳の趙州にはすでに馬に騎る力はないが、修行僧の煩惱を打ち破る心がある。○喫茶去：茶を飲みに行け。茶を飲んでから出直して来い。○句下：ことば。○千鈞：非常に重いこと。○胸中：心の中。思い。○万丈：非常に深いこと。○一例：おしなべて。一様に。○就中：とりわけ。そのなかでも。○毒藥醍醐：人を殺す毒藥と、最上の味の醍醐。醍醐は精製された乳製品。○相見：お互いに相見見える。拝顔する。○聴取：しつかりと聞き取る。○句下千鈞重、胸中万丈深：趙州喫茶去のことはきわめて重みがあり、趙州の心の中は非常に広い。○雖無上馬力、猶有殺人心：「補3」。

〔訳〕結夏の小參（中略）。

〔公案を〕拏げ〔示し〕た、趙州從諗がかつてある僧に質問した、「ここに来たことがあるか」と。僧が言った、「来たことがあります」と。趙州が言った、「茶を飲んでから出直して来たまえ」と。また僧に尋ねた、「ここに来たことがあるか」と。僧が言った、「来たことはありません」と。趙州が言った、「茶を飲んでか

ら出直して来たまえ」と。

師(蘭溪)が言った、「かつて来たことがあるのもないのも、一樣に『喫茶去』と言った。これは普段の言葉ではあるけれど、その中に毒薬と醍醐がある。さあ、どこで趙州と相見するのか。ひとまず次の一頌を聞きなさい。言葉には千鈞の重さがあり、心中には万丈の深さがある。馬に上るほどの力はないけれど、人を殺すほどの心はもっている」と。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。

【史料3—6】「蘭溪道隆書状」

雲緘到来、兼以佳茗一大箱為賜。感無可言。非面莫謝候。當時之様、如夜暗中行、不知方所。未委善後之計。何如。紙上難書候。近聞、再主塩田、重興宝社。即十方衲子所望候也。毫楮不能尽申。伏祈永亮。

十二月初六日

〔蘭溪〕  
道隆

〔訓〕雲緘到来し、兼ねて佳茗一大箱を以て賜と為す。感言う可き無く、面するに非ずんば謝すること莫く候。當時の様、夜暗の中を行くが如く、方所を知らず。未だ善後の計を委かにせず。何如、紙上に書き難く候。近ごろ聞く、再び塩田を主り、重ねて宝社を興すと。即ち十方衲子の望む所に候なり。毫楮にて尽く申すこと能わず。伏して永亮なるを祈る。

十二月初六日

〔蘭溪〕  
道隆

○「蘭溪道隆書状」は、建長寺所蔵とされるもので、『信濃史料』五卷(信濃史料刊行会、一九五四年の元徳元年(二二二九)七月条や玉村竹二「信濃別所安楽寺開山樵谷惟僊伝についての新見解」(『史学論集』) 対外関係と政治文

化』（吉川弘文館、一九七四年）でも建長寺所蔵と明記している。ただし、現在、建長寺にはこの書状は見あたらない。『建長寺史』編年資料編第一巻（大本山建長寺、二〇〇三年）では某氏所蔵とあり詳しくは触れないため、現在の所蔵先が不明である。○雲緘：手紙の別称。○佳茗：上等な茶。○賜：恩恵。与えるもの。○方所：方向と場所。○善後：失敗の後始末をする。後日のための良い計画。○塩田：塩田と称する寺院。信州（長野県）塩田にある安樂寺の前身寺院か。○十方：あらゆる方面。すべての所。○衲子：衲衣（袈裟）を掛けた僧。禪僧。○毫楮：筆と紙。○永亮：永く賢明である。

「訳」お手紙が到着し、兼さねて上等な茶一大箱を贈り物として頂きました。「その」感激は「手紙の」言葉にては言うことはできませんし、直接お会いしたのでなければ「感謝の気持ちを示すこと」などできません。当時の「私の」有り様は、暗闇の中を行くようであり、「進むべき」方向が解っておりませんでした。まだ今後のための善い算段も具体的ではありませんでした。なんとも、手紙に書くことは難しいことです。近ごろ聞くところでは、再び塩田の住持となつて、寺院を興隆しているとのこと。まさしくすべての僧侶が望んでいることです。手紙では書き尽くすことはできません。どうか、いつまでも賢明であられることを祈っております。

【贈答品としての茶】塩田和尚から蘭溪道隆に対して「佳茗」が送られている。上等な茶は贈答品として使われていた。

「史料3―7」 「蘭溪道隆書状」 山梨県法蓋山東光寺所蔵

道隆、頓首再拜。

伏惟、興国法兄老禅師、踞座丈室、遠接四来、尊候日增多福。道隆、今夏内外蒙庇苟安。但造立之始、宏規未定。惟切向仰、不知高養何如。夏前、続々重荷、以佳茗為贖、兼勞問。甚深感、寸衷未易积也。大凡欲弘斯道、須是往日於唐徧參歸來者、捨公孰為主持耶。東西相向雖遠、而初無間隔之処。但各出隻手頽綱、不患不振耳。郷人千十郎之便、無可反書、聊通音問。今後華京井西州有何新聞、毋惜見示草。牽愧不謹、恰察不專。

六月初十日、建長住持比丘道隆頓首。

「訓」道隆、頓首し再拝す。

伏して惟みるに、興国法兄老禅師、丈室に踞座し、遠く四来を接す。尊候、日に多福を増さん。道隆、今夏内外に庇を蒙りて苟安す。但だ造立の始めなれば、宏規未だ定まらず。惟だ切に向仰するも、高養何如なるかを知らず。夏前、続々の重荷、佳茗を以て贖と為し、兼ねて勞問す。甚だ深く感じ、寸衷未だ積き易すからず。大凡、斯の道を弘めんと欲せば、須らく是れ往日唐に徧參して歸り來たる者なるべし。公を捨てて孰か主持と為らんや。東西相に向かうこと遠しと雖も、初めより間隔の処無し。但だ各おの隻手を頽綱に出だし、振わざるを患えざるのみ。郷人千十郎の便、反書して聊か音問を通ず可き無し。今後、華京井びに西州にて何らの新聞有らば、草を見示するを惜しむこと母かれ。愧を牽いて謹まず、恰察せよ、不專。

六月初十日、建長住持比丘道隆、頓首す。

○山梨県東光寺所藏「蘭溪道隆書状」は、東光寺に寺宝として伝えられてきたものであり、蘭溪道隆の墨蹟として、昭和四十八年に県指定文化財となっている。また、『続禅林墨蹟』一〇五（思文閣出版、一九六五年）にも同内容の書状「蘭溪道隆墨蹟」が、個人所藏として収録されている。ただし、両書状は内容は同じであるが、まったくの同一

の墨蹟ではない「補1」。○頓首：お礼の一種。頭を地面に打ち付ける敬礼。手紙の文頭や文末につけて敬意を表す。○再拜：より丁寧な敬意を表すため、二度おじきをする。手紙の末尾に記し、敬意を表すことば。○興国法兄老禪師：不詳「補2」。○丈室：禪宗寺院で住持の居室。○踞座：本来は膝を立てて坐ることだが、ここでは単に坐ること。住持していることを指す。○四来：方来。四方から集まってくる修行者。○尊候：書簡で相手の起居の状況を尋ねる挨拶の言葉。○苟安：一時の安樂を楽しむ。○宏規：立派な決まり「補3」。○向仰：仰ぎ向かう。○高養：「高」は尊敬を示す接頭語。「養」は保養・養生。○重荷：重い荷物。または、重い負担。重責。○佳茗：上等な茶。○贖：贈り物。○勞問：ねぎらい慰める。見舞いねぎらう。○寸衷：少しばかりの真心。少しばかりの誠意。○徧參：禪僧があまねく行脚して天下の知識に参学すること。○主持：主となつて維持すること。担当して事を行なうこと。寺院に限れば住持を指す。○頽綱：衰えた綱紀。また、規律や秩序がゆるんでいること。○郷人千十郎：不詳。道隆の手紙を興国法兄老禪師に届けた人。○反書：反論の言葉を述べること。ただし、ここでは返書・返信の意。○音問：たより。手紙。○華京：美しい都。○新聞：最近聞いたこと。新しい知識。○見示：あらわし示す。○怜察：哀れんでお察し下さい、程の意。○不専：不宣。手紙の末尾に添える言葉。書きたいことを十分に尽くしていない意。

〔訳〕道隆、頓首し再拜します。

謹んで思いますに、興国法兄老禪師は、興国寺の丈室に坐り、遠く四方から来た多くの修行僧を接化しておられ、きつと日に日に多福が増しておられることでしょう。道隆は、今年の夏は内外に庇護を受けてひとまず落ち着いております。ただ、まだ「建長寺の」造立は始めの段階であり、「禪宗の」立派な規則どおりにきちんとなつておりません。ただひたすら「法兄のことを」敬仰しておりますが、どのようにお過ごしのことか分かりません。夏前には、次々と重責が続きましたが、「法兄から」よい茶を贈り物として頂き、兼ねてお見舞い頂きました。深く感謝しておりますし、私の感謝の気持ちは、まだ簡単に無くなるものではありません。

ません。およそ「日本に」禅を弘めたいと思うなら、必ずまず入宋して「諸師を巡り」参学して帰って来た者でなければなりません。公あなたを置いて誰が事に当たれましょうか。私と法兄とは東西に別れ距離は遠いかも知れませんが、「心は」初めから離れておりません。それぞれが片方の手を衰えた綱紀(の中)に差し込んで、「結果として規矩が」振るわないことを思ったりはしないだけのことです。郷人千十郎の便に(「ついては」、返信して、とりあえず便りをする事ができません。今後、京や西国で何か新しい情報などが有りましたら、手紙をお示し頂くのを惜しむことが無いようにお願い申し上げます。恥を忍んで申し上げます。まず、お察しく下さい。不宣。

【贈答品としての茶】興国法兄から蘭溪道隆に対して、佳茗が送られており、その礼状となる。鎌倉中期において、高僧たちの間では贈答品として「佳茗」を送ることが行なわれていたことになろう。「史料3—8」とほぼ同文であるが、あるいは道隆が建長寺開創初期に茶を各地から集めており、その礼状と見ることもできよう。

「史料3—8」「蘭溪道隆書状写」(『異国日記』所収)

盛利今夏安衆多少。并有何事卒

示及

道隆 頓首再拜。揆序火雲……

伏惟

普門堂頭和尚大禪師

踞座丈室、遠接方來、

方一四

道体日増一福。道隆、今夏内外蒙

道体一尊候

庇荷安。但創立之初、規模未定。惟切

向仰、不知 高養何如。夏前統々重荷、以

佳茗為覓、兼以勞問、忽深感在。寸衷未易

釈也。大凡欲弘斯道、須是往日於唐土徧之

歸來者。捨 公孰為主持耶。東西相向雖遠、

而初無間隔之處。望各出隻手頽綱、不患

不振耳。郷人千十郎之便、無可反書、聊通音問。

今復華京井西州有何新聞、毋惜見示草。率

愧不謹、為伏乞 明察不專。

六月初十日 建長禪寺住持比丘道隆頓首

〔訓〕盛刹、今夏、衆を安ずること多少ぞ。並びに何事有りて卒かに示し及ぶや。

道隆、頓首し再拜し、揆序、火雲なり……

伏して惟みるに、普門堂頭和尚大禪師、丈室に踞座し、遠く方來を接す。道体、日に一福を増さん。道隆、

今夏、内外に庇を蒙むりて荷安す。但だ創立の初めなれば、規模未だ定まらず。惟だ切に向仰するも、高養

何如なるかを知らず。夏前、統々の重荷、佳茗を以て覓と為し、兼ねて勞問を以てす。忽ち深く感ずる在り。

寸衷未だ釈き易すからず。大凡、斯の道を弘めんと欲せば、須らく是れ、往日、唐土に於いて之を徧くして

帰り来たる者なるべし。公を捨てて孰か主持と為らんや。東西相い向かうこと遠しと雖も、初めより間隔の  
 処無し。望むらくは各おの隻手を頼綱に出だし、振わざるをうえざるのみ。郷人千十郎の便、反書して聊か  
 音問を通ず可き無し。今復た、華京井びに西州にて何らの新聞有らば、草を見示するを惜むこと母かれ。愧  
 を率べ謹まず、為に伏して明察を乞う。不専。

六月初十日、建長禅寺住持比丘道隆、頓首す。

○「蘭溪道隆書状写」は以心崇伝の『異国日記』巻下に収録されて、伝えられた蘭溪道隆の書状の写しである。以心  
 崇伝は大覚派（蘭溪道隆の法系）であつたため、いくつかの道隆の書簡を『異国日記』に記しており、その内の一点  
 に当たる。○掲載書籍：『異国日記―金地院崇伝外交文書集成影印本』、異国日記刊行会編、東京美術、一九八八年）。

○盛利：仏教寺院のこと。○頓首：お礼の一種。頭を地面に打ち付ける敬礼。手紙の文頭や文末につけて敬意を表す。

○再拝：より丁寧な敬意を表すため、二度おじきをする。手紙の末尾に記し、敬意を表すことば。○挨拶：挨拶は調べ  
 る、序は季節。「季節は」ほどの意味。○火雲：燃えたつような夏の雲。○普門堂頭和尚大禅師：臨済宗聖一派祖の  
 円爾（一一二〇～一一八〇）のこと「補一」。○普門：京都東山の東福寺に存した円爾の居所である普門寺のこと  
 「補二」。○丈室：禅宗寺院で住持の居室。○踞座：本来は膝を立てて坐ることだが、ここでは単に坐ること。住持し  
 ていることを指す。○方来：四来。四方から集まつてくる修行者。○道体：道を悟つた身体。○苟安：一時の安楽を  
 楽しむ。○規模：制度。模範。○向仰：仰ぎ向かう。○高養：「高」は尊敬を示す接頭語。「養」は保養・養生。○  
 重荷：重い荷物。または、重い負担。重責。○佳茗：上等な茶。○貺：贈り物。○劳問：ねぎらい慰める。見舞いね  
 ぎらう。○寸衷：少しばかりの真心。少しばかりの誠意。○主持：主となつて維持すること。担当して事を行なうこ  
 と。寺院に限れば住持を指す。○頼綱：衰えた綱紀。また、規律や秩序がゆるんでいること。○郷人千十郎：不詳。  
 道隆の手紙を普門堂頭和尚に届けた人。○反書：反論の言葉述べること。ただし、ここでは返書・返信の意。○音  
 問：たより。手紙。○華京：美しい都。○新聞：最近聞いたこと。新しい知識。○見示：あらわし示す。○明察：奥

底まで見抜く。○不専・不宣。手紙の末尾に添える言葉。書きたいことを十分に尽くしていない意。

「訳」貴寺では、今夏、どれほどの僧侶が安居しているでしょうか。また、何事が起こつてにわかには「手紙を」示してこられたのでしょうか。

道隆、頓首し再拜します。季節は、燃えたつような夏の雲の日です。

謹んで思いますに、普門堂頭和尚大禪師（円爾）は、普門寺の丈室にて坐り、遠く四方から来た多くの修行僧を接化しておられ、御身には日に日に多福が増しておられることでしょう。道隆は、今年の夏は内外に庇護を受けてひとまず落ち着いております。ただ、まだ「建長寺は」創立の最初の段階であり、制度がまだ定まっております。ただひたすら「法兄のことを」敬仰しておりますが、どのようにお過ごしのことか分かります。夏前には、次々と重責が続きましたが、「法兄から」よい茶を贈り物として頂き、兼ねてお見舞い頂きました。にわかには深く感じ入り、私の感謝の気持ちには、まだ簡単に無くなるものではありません。およそ「日本に」禅を弘めたいと思うなら、必ずまず入宋してあまねく「諸師を巡り」参学して帰つて来た者でなければなりません。公を置いて誰が事に当たれましょうか。私と法兄とは東西に別れ距離は遠いかもしませんが、「心は」初めから離れておりません。それぞれが片方の手を衰えた綱紀（の中）に差しだして「結果として規矩が」振るわないことを患つたりはしないだけのことです。郷人千十郎の便に「（ついては）」返信して、とりあえず便りをする事ができません。今また、京や西国で何か新しい情報などが有りましたら、お示し頂くのを惜しむことが無いようお願い申し上げます。恥を忍んで申し上げます。どうかお察しください。不宣。

【贈答品としての茶】円爾から蘭溪道隆に対して、佳茗が送られており、その礼状となる。鎌倉中期におい

て、高僧たちの間では贈答品として「佳茗」を送ることが行なわれていたことになろう。「史料3—7」とほぼ同文であり、あるいは道隆が建長寺開創初期に茶を各地から集めており、その礼状と見ることもできよう。本書状の位置付けは今後の課題としたい。

「史料3—9」蘭溪道隆『弁道清規』

弁道清規

大凡弁道、行住坐臥、著衣喫飯、屙屎放尿、折旋俯仰、造次顛沛、語默動靜之間、咸是靡非自家工夫用心処。念茲在茲、間不容髮。此是上根之行履也。中下之流不可、動是迷己顛倒、逐物奔馳。故印四次香、以為定準矣。寅起念偈、下牀洗面、著衣燒香、仏前禮拜。蓋為懺悔業障也。然後就被位、抖擻精神。曙色已分、展盞喫粥、粥罷喫茶、茶罷畢、就仏前、誦誦經咒。及辰已際、被位坐禪。日午而喫飯、飯畢喫茶也。或相對賓客、或洗濯衣裳、掃地普請、或把針補綴。然及晡時、而著衣坐禪。日入之後、施食誦誦經咒。至黃昏之時、仏前禮拜。禮拜了、如故坐禪。及亥之刻、軀身面外、誦誦經咒。或普門品、或八句陀羅尼、回向隨意。然後就寢、右脇而卧。凡一日一夜規式、大槩如是。此四次坐禪之際、勿隨人情而毀規矩。若又有不可回避事除之。如是參究、如是用心。則山林蓬蒿之下埋頭、紅塵紫陌之中混衆、善友知識之辺交肩、更甚差別。若又以順逆苦樂、是非憎愛、動靜毀譽、而動心生念、則千里万里、記取記取。

「訓」大凡弁道は、行住坐臥、著衣喫飯、屙屎放尿、折旋俯仰、造次顛沛、語默動靜の間、咸く是れ自家の工夫用心の処に非ざるは靡し。茲を念じて茲に在り、間に髪を容れず。此れは是れ上根の行履なり。中下の流は可ならず。動もすれば是れ己に迷いて顛倒し、物を逐うて奔馳す。故に四次の香を印して、以て定準と

為す。眞に起きて偈を念じ、牀を下りて面を洗い、衣を着て香を焼き、仏前にて礼拝す。蓋し業障を懺悔せんが為なり。然る後、被位に就いて、精神を抖擻す。曙色已に分かたば、盜を展じて粥を喫し、粥罷わりて茶を喫す。茶罷畢りて、仏前に就いて経咒を誦誦す。辰巳の際に及んで、被位にて坐禅す。日午にして飯を喫し、飯畢りて茶を喫す。或いは賓客に相対し、或いは衣裳を洗濯し、地を掃きて普請し、或いは針を把りて補綴す。然して晡時に及んで、衣を着て坐禅す。日入るの後、施食して経咒を誦誦す。黄昏の時に至りて、仏前にて礼拝す。礼拝了りて、故の如く坐禅す。亥の刻に及び、身を転じて外に向かい、経咒を誦誦す。或いは普門品、或いは八句陀羅尼、回向は随意なり。然る後、就寝し、右脇にして卧す。凡そ一日一夜の規式は、大槩是の如し。此の四次坐禅の際、人情に随いて規矩を毀ること勿かれ。若し又た、回避す可からざる事有らば、之を除く。是の如く参究し、是の如く用心せば、則ち山林蓬蒿の下にて頭を埋め、紅塵紫陌の中にて衆に混わり、善友知識の辺りにて肩を交うるも、更に甚の差別かあらん。若し又た順逆苦樂是非憎愛、動靜毀譽を以て、心を動かし念を生ずれば、則ち千里万里ならん。記取せよ記取せよ。

○『弁道清規』は、蘭溪道隆の著述として伝えられる清規であり、江戸時代の『延宝伝灯録』に収録されるほか、建仁寺両足院、駒澤大学図書館永久文庫に江戸時代の写本が所蔵されている「補1」。○行住坐臥：歩き、止まり、坐り、臥す。日常の立ち居振る舞いのこと。○著衣喫飯：衣を着てご飯を食べる。日常のありよう。○屙屎放尿：くそを垂れたり、小便をしたり。日常のありよう。○折旋俯仰：まがりめぐり、うつむきあおむくこと。日常の立ち居振るまい。○造次顛沛：せつぱつまり困窮する。○語黙動靜：話をしているときも、黙っているときも、どんなことをしているときでも、日常生活の一切をいう。○工夫用心：仏道修行・坐禅に専念し、心をはたらかせる。○念茲在茲：常にそのことを心に思うこと「補2」。○間不容髮：間、髪を容れず「補3」。○上根：氣根のすぐれた者。素質や能力がすぐれている者。○行履：禅僧の修行生活における起居動作。○迷已顛倒、逐物奔馳：迷己逐物。自己を見失

つて外物を追隨する「補4」。○四次：四次坐禅・四時坐禅。黄昏、後夜、早晨、晡時の四時の坐禅のこと「補5」。

○定準：一定の基準・規律。ただし、延宝伝灯録本と建仁寺兩足院本には「定集」とある。○寅：寅の刻。午前三時頃から午前五時頃。○業障：悪の行為によつて生じた障害。○懺悔：罪のゆるしを請うこと。○被位：僧堂において、雲水が坐禅し起臥する各自の定められたる場所。○抖擻精神：精神を奮い立たせる。発奮する。○展盞：展鉢孟。応量器を展げる。○経咒：經典や陀羅尼。○諷誦：經文を声を挙げて読む。○辰巳：辰の刻と己の刻。辰は午前七時頃から午前九時頃、己は午前九時頃から午前十一時頃。○日午：午の刻。午前十一時頃から午後一時頃。○賓客：大切な客人。○普請：あまねく請うて建設・修繕などをすること。総出で労役作務を行なうこと。○補襪：服の破れを縫いつくろう。○晡時：申の刻。午後三時頃から午後五時頃。○施食諷經：食に向かつて呪願することをいう。○黄昏：夕暮れ時。○亥：亥の刻。午後九時頃から午後十一時頃。○軀身向外：面壁坐禅からの軀身を指す「補6」。○普門品：『法華經』の第二十五品。略して觀音經、または普門品とも「補7」。○八句陀羅尼：『楞嚴咒』の最末尾の陀羅尼のこと「補8」。○回向：回向文の略。法会するとき、勤行の終わりに唱える願文。○随意：思うままに。自由に。○右脇：右脇を下にして寝ること。○規式：規則。禪林における清規。○人情：人の気持ち。○規矩：規則。禪林における清規。○參究：參禅して問題を究明すること。○用心：心を用いること。○山林蓬蒿：山林や草深い田舎。○埋頭：ひたすら。わきめもふらず。○紅塵紫陌：紅塵は世間塵俗の地、紫陌は京師の道路。世俗の地と京の路。○善友知識：善知識。善徳の智者。正法を説いて人を正しく導く師。○交肩：肩をくつつけ合う。密接なさま。○差別：区別すること。○順逆苦楽：正しかったり間違つたり、苦しんだり楽しんだり。○是非憎愛：ほめたりけなしたり、憎んだり愛したり。○動靜毀譽：動いたり静かだったり、そつたり賞賛したり。○動心：気持ちがちがゆれる。○千里万里：千里も万里も離れていること。隔たりの甚だしいこと。○記取：書きとること。記すこと。また、記憶すること。

〔訳〕そもそも、弁道とは、歩き止まり坐り横になるのも、衣を着て飯を喫するのも、大便を垂れ小便する

のも、まがりめぐり、うつむきあおむくのも、せっぱつまったり困窮したりするのも、話をしたり黙ったり動いたり静まるのも、このような日常生活の立ち居振るまいすべてにおいて、みな自らの工夫用心のところでないものはない。このことを常に心に念じて、微塵の隔たりもなく受け容れるのは上根の人の行ないである。しかし、中下根の者はそのようにはできない。やもすると、自らに迷つてあたふたし、物を追い求めて奔走してしまう。だからこそ、四次の香を焼いて、弁道の基準とする。寅（午前三時頃）に起きて偈を唱え、僧堂の単を下りて顔を洗い、衣を着て香を焼いて、仏前に礼拝する。これは業障を懺悔するためである。その後、被位（単）に就いて精神を奮い立たせ（て坐禅する）。ほのかに明るくなったら、応量器を展げて粥を食べ、粥を食べ終わったら茶を飲む。茶を飲み終わったら、仏前に行つて経咒を誦する。辰（午前七時頃）と巳（午前九時頃）の際に至つたなら、自分の単にて坐禅する。日午（午前十一時頃）になつたらご飯を食べ、ご飯を食べ終わつたら茶をのむ。あるいは賓客に相対し、あるいは衣裳を洗濯し、地面を掃いて普請し、或いは針を把つて繕いをする。そして晡時（午後二時頃）になつたら、衣を着て坐禅する。日が没したら、施食をして経咒を誦する。黄昏（五更では一更に当たる。夏午後七時頃、冬午後六時頃）になつたら、仏前にて礼拝する。礼拝し了わつたら、もとのように坐禅する。亥の刻（午後九時頃）になつたら、身を転じて外に向かい、経咒を誦する。「経咒は、」或いは普門品、或いは八句陀羅尼で、回向は自由でよい。その後、就寝して、右脇にして横になる。凡そ一日一夜の規式は、大体このようである。この四次坐禅の際には、人情に流されて規矩を毀つてはならない。例外として、回避できない事情があつた場合を除く。このように参究し、このように用心するならば、山林や草深い田舎でわきめもふらず修行しても、世俗の場所や京の〔にぎやかな〕路で多くの人に交わつて修行しても、善知識に囲まれてその中で皆と一緒に修行しても、

何の違いがあるうか。もし、正しいとか間違っているとか、苦しいとか楽しいとか、ほめたりけなしたり、憎んだり愛したり、動いたり静かだつたり、そしつたり賞賛したりして、心が動き雑念が生まれるならば、〔悟りから〕千里万里も隔たつている。このことを、よくよく心に留めて覚えておくように。

【日常修行における喫茶】蘭溪道隆『弁道清規』には、早朝の粥が終つた際と、日中の飯が終つた際の喫茶が規定されている。茶が建長寺の修行僧が毎日飲めるほど収穫されていたかは不明であるが、少なくとも規則としては定められていたのである。

### 月峰了然関係史料

〔史料4-1〕『月峰和尚語録』『極楽寺語録』（上堂54）

上堂。拳、瀉山在方丈内臥、見仰山入來。瀉乃軛面向裏臥。仰云、某甲是和尚弟子、不用形迹。瀉作起勢。仰使出。瀉召云、寂子。仰乃回来。瀉云、聽老僧說箇夢。仰低頭作聽勢。瀉云、与我原看。仰取一盆水一条手中來。瀉洗面了纔坐。香巖入來。瀉云、我適來与寂子作一上神通、不同小小。巖云、某甲在下面、了了得知。瀉云、子試道看。巖乃点一椀茶來。瀉嘆云、二子神通、過於鷲子。師云、山僧亦為諸人原夢、耳不往声處、色非到眼中、見聞如幻翳、寤寐一如同。

〔訓〕上堂。拳す、「瀉山 方丈の内に在りて臥し、仰山の入り來たるを見る。瀉乃ち面を軛じて裏に向かつて臥す。仰云く、「某甲は是れ和尚の弟子なれば、形迹を用いざれ」と。瀉起きる勢いを作す。仰便ち出づ。瀉召して云く、「寂子」と。仰乃ち回りに來たる。瀉云く、「老僧が箇の夢を説くを聴け」と。仰低頭して

聴く勢いを作す。瀉云く、『我が与に原ねて看よ』と。仰、一盆の水と二条の手中を取り來たる。瀉洗面し了りて纒かに坐す。香嚴入り來たる。瀉云く、『我適來、寂子と一上の神通を作す、小小に同じからず』と。嚴云く、『某甲、下面に在りて、了了として知るを得たり』と。瀉云く、『子、試みに道いて看よ』と。嚴乃ち一椀の茶を点じ來たる。瀉嘆じて云く、『二子の神通、鷺子に過ぎたり』と。師云く、『山僧亦た諸人の為に夢を原ぬるも、耳は声処に往かず、色は眼中に到るに非ず、見聞は幻翳の如し、寤寐一つに同じきが如し』と。

○月峰了然：臨濟宗大覺派の月峰了然（生没年不詳）のこと「補1」。○『月峰和尚語録』：月峰了然の語録であり、鎌倉時代で宋地で開版され、後の江戸時代に日本で再刊されている。国会図書館に、宝永七年（二七一〇）の刊本が、また中華人民共和国北京市の国家図書館に宋版が所蔵される。なお、翻刻したものに、佐藤秀孝『月峰和尚語録』の翻刻と訓読（『駒沢大学仏教学部研究紀要』六十九号、二〇一一年）があり、本論の引用は同論文による。○瀉山在方丈内く過於鷺子：「補2」。○瀉山：瀉仰宗祖の瀉山靈祐（七七1〜八五三）のこと「補3」。○方丈：禪宗寺院で住持の居室。○仰山：瀉仰宗祖の仰山慧寂（八〇七〜八八三）のこと「補4」。○形迹：世俗的な礼儀。○低頭：頭を低くたれること。○手中：手ぬぐい。○香嚴：瀉山下の香嚴智閑（？〜八九八）のこと「補5」。○適来：いましがた。○神通：神変不可思議な能力。○了了：物事が明らかさま。○鷺子：鷺鷺子。舍利弗のこと。釈迦十代弟子の一人。○耳不往声処、色非到眼中：『楞嚴經』卷三の「耳往声処」などを踏まえる「補6」。○見聞如幻翳：まぼろしとかげ。『首楞嚴經』卷六に見える語で『宛陵錄』などに引かれる「補7」。○寤寐：めざめることと寝ること。「訳」上堂。「公案を」挙げ（示し）た、「瀉山靈祐が、方丈の中で横になっていたら、仰山慧寂が入ってくるのが見えた。瀉山はすぐに顔を横にして裏側を向いてまた横になった。仰山が言った、『私は和尚の弟子ですから、礼儀は必要ありません』と。瀉山は、起き上がるようなそぶりを見せた。仰山はすぐに出て行っ

た。瀧山が呼んで言った、『慧寂』と。仰山はすぐに戻つて来た。瀧山が言った、『私が夢を話すのを聞きなさい』と。仰山は、頭を下げて聞くようなそぶりを見せた。瀧山が言った、『私のために〔何の夢か〕探り求めてみなさい』と。仰山は、一杯の桶の水と一枚の手ぬぐいを取つて来た。瀧山は、『桶の水と手ぬぐいで〕洗面しおわつて少しばかり坐禅していた。〔すると、〕香巖智閑が入つて来た。瀧山が言った、『私はいましたがた、慧寂さんと一つの神通をやつていた。つまらない神通ではないぞ』と。香巖が言った、『私は下面〔向こう側〕において、〔何の夢か〕ハッキリと分かっています』と。瀧山が言った、『君、試しに言ってみなさい』と。香巖はすぐに一碗の茶をいれてきた。瀧山は感嘆して言った、『二人〔仰山と香巖〕の神通は、舍利弗よりもすぐれている』と。師〔月峰了然〕が言った、『私も、また諸君らのために〔君たちの夢はどんな夢なのか〕探し求めたが、『楞嚴経〕にあるように、耳根も声境も色境も眼根も虚妄であり〕耳根が音声の処に行くわけでもないし、色境が眼根の中にやつて来るわけでもない。見たり聞いたりすることは幻や影のようなものであり、目覚めている時も寝ている時もまったく同じなのだ』と。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。

〔史料4—2〕『月峰和尚語録』『極楽寺語録』（上堂69）

上堂。不与方法為侶底、是什麼人。天不能覆、地不能載。見色色不能染、聞声声不能汗。只如不肯万法底、又是什麼人。昼見日、夜見星、逢茶喫茶、逢飯喫飯。雖然如是、更須転向那边始得。

〔訓〕上堂。「方法と侶ばんばう為ともたらざる底、是れなに什麼人ぞ。天も覆おおうこと能あたわず、地も載のすること能あたわず。色を見なるに色も染そむること能あたわず、声を聞くに声も汗けがすこと能あたわず。只だ方法に背そむかざる底ていの如ごときは、又た是れ什

麼人ぞ。昼に日を見、夜に星を見、茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す。然も是の如しと雖も、更に須らく那辺に転向して始めて得し」と。

○不与万法為侶底是什麼人：すべての事象と関わらない人。一切の存在と同じ次元にいない存在。龐居士の質問の語として知られる「補1」。○天不能覆、地不能載：天も覆い尽くすことができず、地も載せることができない。天地の外にある、如何なる範疇をも超えた独立自尊のありよう「補2」。○昼見日、夜見星：昼には日を見て、夜には星をみる。日常の行為「補3」。○逢茶喫茶、逢飯喫飯：遇茶喫茶、遇飯喫飯に同じ「補4」。○転向：途中でかえること。

「訳」上堂。「すべての事象と関わらない者は、いつたい誰だ。天でさえも覆うことができないし、地でさえも載せることができないし、色を見ても色は汚染することができないし、声を聞いても声は汚染することができない（者だ）。ところで万法に背かない者とは、またいつたい誰だ。昼には日を見、夜には星を見、茶にであえば茶を飲み、飯にであえば飯を食べる（者だ）。そうではあるが、さらに必ずあちら側（すべての事象と関わらない世界）に脱皮しなければならぬのだ」と。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。

「史料4—3」『月峰和尚語録』『極楽寺語録』（上堂79）

仏涅槃上堂。世尊言、此大涅槃、十方三世、一切諸仏、金剛宝蔵。且如何是從宝蔵流出底事。香煙一穗、清茶一甌。又言、若謂我滅度、非吾弟子、謂我不滅度、亦非吾弟子。非滅非不滅、葛藤猶未休。瞿曇尽力雖垂示、堪笑蚊虻上鉄牛。

「訓」仏涅槃の上堂。「世尊言く、『此の大涅槃は、十方三世、一切の諸仏の金剛宝蔵なり』と。且つ如何な

るか是れ宝蔵ほうぞうより流出りしゆつする底ていの事。香煙こうえん一穗いちほ、清茶せいさ一甌ひとかめ。又た言く、『若し我滅度われめつどすと謂いわば、吾が弟子に非ず。我滅度われめつどせずと謂いうも、亦た吾が弟子に非ず』と。滅めつに非ず不滅ふめつに非ず、葛藤かつとう猶なを未だ休きゆうせず。瞿曇くつどんは力を尽つくして垂示すいじすと雖いも、笑わらうに堪たえたり、蚊虻ぶんぼうの鉄牛てつぎゆうに上のぼることを」と。

○仏涅槃上堂：二月十五日、仏陀の入滅日（涅槃会）に行なう上堂。○世尊言、此大涅槃く金剛宝蔵：「補1」。○大涅槃：大般涅槃。釈尊の偉大な死をいう。○十方三世一切諸仏：いかなる時、いかなる所にも満ちている仏。○金剛宝蔵：金剛（ダイヤモンド）のように堅固な法蔵。法蔵は仏教をたとえている。○謂我滅度く亦非吾弟子：「補2」。○葛藤：心のまよい。○瞿曇：釈迦が出家する前の本姓。ゴータマ（梵：Gotama）のこと。○垂示：示衆。師が修行僧に対して説法すること。○蚊虻上鉄牛：蚊虻は、かとあぶ。蚊子上鉄牛に同じ「補3」。

「訳」仏涅槃の上堂。「釈尊が言った、『この大般涅槃は、十方三世一切諸仏の、金剛宝蔵である』と。さて、いったい金剛（ダイヤモンド）の宝蔵より出てくるようなものとはいったい何であろうか。〔ここに焼香の〕香の煙りが一すじ見え、清茶が一杯供えられているではないか。また〔釈尊が〕言った、『もし私が〔これから〕入滅すると言うなら、〔それは〕私の弟子ではない。私が〔これから〕入滅しないと信じてても、〔それも〕また私の弟子ではない』と。滅するわけでもなく滅しないわけでもない、〔釈尊は死に際になつても〕心のまよいがまだ収まっていらない。釈尊は力を尽くして垂示したけれども、お笑いぐさだ、蚊やあぶが鉄牛にとまっている〔ように、釈尊さえも歯が立たなかつた〕のだ」と。

【仏前への茶の供養】月峰了然が行なつた仏涅槃上堂で、焼香し、茶を供養していたことが確認される。茶は涅槃会にて供養されていた。

〔史料4—4〕『月峰和尚語録』『極楽寺語録』（頌古23）

趙州喫茶公案。

趙老喫茶滋味別、放過一著落二三。言盈天下不招咎、露柱灯籠幾対談。

〔訓〕趙州喫茶の公案。

趙老、茶を喫す滋味別なり、一著を放過せば二三に落つ。言は天下に盈つるも咎を招かず、露柱灯籠、幾ばくか対談せん。

○趙州喫茶公案：「補1」。○趙老：南嶽下の趙州從諗（七七八〇八九七）のこと「補2」。○放過一著：一手お負けしてやる、もう一手打ちなさい。○落在二三：「落二落三」。後手後手にまわる。○露柱灯籠：無情物のたとえ「補3」。○対談：二人以上が話をする。

〔訳〕趙州喫茶の公案。

趙州從諗の喫茶〔去の公案〕、「その」味わいは別格であり、一手おまけたら後手にまわつてしまふ。〔趙州從諗の「喫茶去」という〕言葉は天下に満ちているが災いを招かない、露柱・灯籠とは、どれほど対談していることか。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。

## 兀庵普寧関係史料

〔史料5—1〕『兀庵和尚語録』巻中「建長寺語録」

上堂。拳、智門和尚、僧問、蓮花未出水時如何。答云、蓮花。出水後如何。答云、荷葉。頌曰、出水未出水、心疑生暗鬼。鞏鼎造茶瓶、一隻三箇觜。

〔訓〕上堂。拳す、「智門和尚、僧問う、『蓮花未だ水を出ざる時、如何』と。答えて云く、『蓮花』と。水を出でて後、如何』と。答えて云く、『荷葉』と。頌に曰く、『水を出づるも未だ水を出でざるも、心に疑えば暗鬼を生ず。鞏鼎にて茶瓶を造る、一隻三箇の觜なり』と。

○兀庵普寧：臨済宗破庵派の兀庵普寧（一一九八～一二七六）のこと。〔補1〕。○『兀庵和尚語録』：兀庵普寧の語録であり、鎌倉後期に宋版の版式を模して日本で開版された。○掲載書籍：「続蔵一二三・一三三c」。○拳智門和尚く荷葉：〔補2〕。○智門和尚：宋代、雲門宗の智門光祚（生没年不詳）のこと〔補3〕。○荷葉：蓮の葉。○心疑生暗鬼：疑心暗鬼とも。疑いの心を持つと存在しないはずの鬼の姿まで見えるようになる。疑い出すとあらゆる信じられなくなり、不安を感じること。○鞏鼎造茶瓶、一隻三箇觜：「鞏鼎茶瓶、多口多觜」を踏まえる〔補4〕。

〔訳〕上堂。「公案を」挙げ〔示し〕た、「智門光祚に、ある僧が質問した、『蓮花がいまだに水の中にある時は、どうでしょうか』と。〔智門光祚は〕答えて言った、『蓮花だ』と。〔また質問した、〕『水の中から出できたなら、どうでしょうか』と。〔智門光祚が〕答えて言った、『蓮の葉だ』と。兀庵普寧が頌して言うには、『水の中から出てきたとき、水の中からできていないとき、疑いの心を持つと存在しない鬼のすがたまでみえる〔が、水の中や外にあらうと同じ蓮だ〕。鞏鼎で作られた茶瓶には、一つの茶瓶に〔無用な〕三箇の觜があつたと言う〔ように、まったく無駄なおしやべりだ〕」と。

【古則公案の提示】直接的な喫茶史料ではない。

## 円爾関係史料

〔史料6—1〕『聖一國師語録』『東福禪寺語録』

元旦上堂。禪非意想、立意乖宗。道絶功動、建功失旨。新年消息、不動纖塵。応節納祐、慶無不宣。若作仏法商量、喚鐘作甕。若作世諦流布、平地喫交。大衆還委悉麼。孟春猶寒、掃堂喫茶。

〔訓〕元旦の上堂。「禪は意想に非ず、意を立つれば宗に乖く。道は功動を絶す、功を建つれば旨を失す。新年の消息、纖塵を動ぜず。節に應じて祐を納れば、慶宜しからざる無し。若し仏法の商量を作さば、鐘を喚んで甕と作す。若し世諦の流布を作さば、平地に喫交す。大衆、還た委悉すや。孟春猶を寒し、堂に掃りて喫茶せよ」と。

○円爾：臨濟宗聖一派祖の円爾（二二〇二〜二二八〇）のこと「補1」。○『聖一國師語録』は、鎌倉中期の入宋僧で、東福寺開山の円爾の語録であり、虎関師鍊は、元徳三年（一三三一）の自序と、径山の無準師範、天童山の西巖了慧の書簡を付して刊行した。元和六年（二六二〇）に再刊、文政十二年（一八二九）に三刊された。○掲載書籍：「大正蔵八〇・一七c」。○意想：考え。○功動：功績。てがら。○消息：情況、実態。○纖塵：わずかなちり。○応節納祐：平地喫交：「補2」。○仏法商量：禪の教えを問答審議する。商量は、相談協議する。いろいろ考えて推し量ること。○喚鐘作甕：鐘のことを甕だという「補3」。○世諦：世俗的立場における真理。○流布：世の中に広くゆきわたる。○平地喫交：平地でけつつまづいてバツタリ倒れる。喫交はつまづき倒れる。○委悉：物事を事細かに詳しくすること。○孟春：春の初め。初春。

〔訳〕元旦の上堂。「禪は意想（考え）ではない、意（想）を立てれば宗に乖くことになる。（仏）道は功績とは無関係である、功（績）を建てれば（宗）旨を失することになる。新年の状況は、ほんの少しばかりも

変わらない。時節に応じて福を招き入れれば、目出度くて相応しくないものはない。もし「新年に合わせ」て、仏法についての思慮分別をするなら、鐘を喚んで龜とする（「よくな見当違いになつてしまふ」）。もし世諦（世俗的な立場における真理）を世の中に広めるなら、平地でけつまづいてバツタリ倒れてしまふ（「よくな失敗だ」）。諸君、「私の言つたことが」事細かに解つたか。初春でまだ寒いから、僧堂に帰つて茶を飲みなさい」と。

【清規における特為茶の一例】法堂での上堂説法後に、帰堂して喫茶することを促している。正月一日、法堂での上堂説法が終わつた後に、僧堂に帰つてから茶を飲んでいたか。この点、蘭溪道隆の語録の「下座巡堂喫茶」が参考になる「史料3—1」「史料3—2」「史料3—4」。

「史料6—2」「聖一国師語録」「東福禅寺語録」

上堂。挙、乾峰示衆云、挙一不得挙二、放過一著、落在第二。雲門出衆云、昨日有人従天台来、却往径山去。峰喚維那云、来日不得普請。拈云、乾峰無陰陽地、露箇消息。雲門袖裏藏金鎚、高持祖印。頭正尾正、始末相符。敢問大衆、有這般底麼。若無歸堂喫茶。

「訓」上堂。挙す、「乾峰、衆に示して云く、『一を挙し二を挙するを得ざれ、一著を放過せば、第二に落在す』と。雲門、衆を出でて云く、『昨日、人有りて天台従り来たり、却つて径山に往き去る』と。峰、維那を喚んで云く、『来日、普請を得ず』と。拈じて云く、『乾峰は陰陽無きの地に、箇の消息を露す。雲門は袖裏に金鎚を藏して、高く祖印を持つ。頭正尾正、始末相符合す。敢えて大衆に問う、這般底有りや。若し無くんば堂に帰りて喫茶せよ』と。

○掲載書籍：「大正蔵八〇・一九aとb」。○乾峰示衆云く不得普請：「補1」。○乾峰：曹洞宗の乾峰和尚（生没年不詳）のこと「補2」。○放過一著：一手お負けてやる、もう一手打ちなさい。○落在：く落ちる。く落ち着く。○雲門：雲門宗祖の雲門文偃（八六四く九四九）のこと「補3」。○天台：台州（浙江省）天台県の天台山のこと「補4」。○径山：杭州（浙江省）の径山興聖万寿寺のこと。五山第一位「補5」。○維那：禅宗寺院の僧堂などで修行僧を監督指導し、堂内の衆務を総覧する役。六知事の一つ。○来日：明日。○普請：あまねく請うて建設・修繕などをする事。総出で労役作務を行なうこと。○陰陽：中国古代の思想で、天地間にあり、互いに対立し依存し合いながら万物を形成している陰・陽二種の気。○消息：情況、実態。○袖裏藏金錠：袖裏金錠とも。力のすぐれた人が金錠を袖の中に隠し持っている「補6」。○祖印：祖師からの証明のしるし。○頭正尾正：はじめもよし、おわりもよし。○始末相符：最初から最後までびたりと符合する。

「訊」上堂。（公案を）挙げ（示し）た、「乾峰和尚が、修行僧に示して言った、『一を挙して、二を挙してはならない、一手を緩めるならば、後手（第二義）に落ちいってしまう』と。雲門文偃が進み出て言った、『昨日、天台山より来て、径山に行ってしまった人がいました』と。乾峰和尚は、維那を喚んで言った、『明日は、普請をするな』と」と。（円爾は）香をつまでんから言った、「乾峰は陰陽（ガ）が無い場所で、その（真理の）実態を露わにしている。雲門は袖の中に金錠を蔵しており、祖印（祖師からの証明のしるし）を高く掲げ持っている。（二人の対応は）はじめから終わりまで良いし、最初から最後までびたりと符合している。敢えて諸君に質問しよう、（諸君らに）このようやつはいるか。もし無いならば、僧堂に帰って茶を飲みなさい」と。

【清規における特為茶の一例】法堂での上堂説法後に、帰堂して喫茶することを促している。上堂説法の後に帰堂して喫茶することが説法に組み込まれている。「史料6-1」も参照。

補注

〔史料1-1〕

(1) 采西：臨済宗黄龍派の明庵采西（一一四一～一二二五）のこと。備中（岡山県）の賀陽氏。比叡山延暦寺で出家。天台宗にて顕密を極め、二度入宋する。二度目の在宋中に、黄龍派の虚庵懷敏の法を嗣ぐ。帰朝の後、博多聖福寺・鎌倉寿福寺・京都建仁寺の開山となり、天台・真言・禪を三宗兼学した形で禪を布教した。後に日本禅宗の初祖として尊崇される。また、奈良東大寺や京都白河法勝寺九重塔の再建に尽力したことも知られる。建仁寺にて建保三年（一二二五）七月五日に示寂。著書に『興禅護国論』三卷、『喫茶養生記』がある。

(2) 天台：台州（浙江省）天台県にある天台山のこと。山西の五臺山を臺山と称するのに対する。仙霞嶺山脈の東端に位置する。隋代に天台智顛（智者大師）がここに住し、修禅寺を開創してから、中国天台宗の根本道場として栄え、国清寺・万年寺・華頂寺など多数の寺院や天台石橋や智者塔院などの史蹟が存する。また、古来仙郷としての伝承があり、道士の修行道場としても知られる。『天台山方外志』三十卷、『天台勝蹟録』四卷がある。

(3) 石橋：天台山にある石橋のこと。天台山中の瀑布には、石橋が架かっており、この付近には五百羅漢が住すると伝えられている。平安時代には天台僧の最澄、円珍、成尋など、鎌倉時代には采西、俊苒、道元、寒巖義尹、山叟慧雲、無象静照など多くの僧侶が入宋してこの地を訪れている。

〔史料1-2〕

(1) 万年寺：天台山中の列秀峰下の平田にある禅寺。東晋の曇猷が庵を建てて居した地であり、唐の大和七年（八三三）に伽藍が建立された。会昌年間（八四一～八四六）に破仏に遭い廃されるも、大中六年（八五二）に再興し、鎮国平田寺と号する。禅寺開山は南嶽下の平田普岸とされる。後梁の龍徳年間（九二一～九二三）に福田寺と改める。北宋の建中靖国元年（一一〇二）に火災により焼失。崇寧三年（一一〇四）に重建され、天寧万年寺と号され、南宋の紹興九年（一一三九）に報恩広孝寺、さらに報恩光孝寺と改められる。万年寺と略称される。采西や道元らが訪れたことで知られる。

〔史料1—5〕

(1) 將軍家：鎌倉三代將軍、源実朝（一一九二～一二一九）のこと。源頼朝の次男であり、母は平政子。正二位右大臣にいたる。建保七年、鶴岡八幡宮で正月拝賀の際に公暁に殺害された。『新古今和歌集』などの勅撰集に九十三首入集するなど、歌人としても知られている。家集に『金槐和歌集』がある。

(2) 葉上僧正：明庵栄西のこと。既出〔史料1—1〕。

(3) 本寺：ここでは、亀谷山寿福寺のこと。神奈川県鎌倉市扇ヶ谷に存し、後に鎌倉五山の第三位となる。正治二年（一二〇〇）に、源頼朝の夫人北条政子の発願によって伽藍が建立され、栄西を開山とした。円爾・蘭溪道隆・心地覚心・大休正念などが歴任に名を連ねており、鎌倉における禅宗の展開に与えた影響は大きい。

(4) 所誉茶徳之書：『喫茶養生記』のこと。鎌倉初期の承元五年（一一二一）に栄西によって撰述された。陸羽の『茶経』をはじめ、中国文献を引用しながら、茶の葉としての効能を紹介した。日本における最初の茶書と云うことができるだろう。『吾妻鏡』建保二年二月四日条の記事によれば、「坐禅の余暇」に記しておいた「茶の徳を誉める所の書」を実朝に茶一盞とともに勧めたとあり、この書が『喫茶養生記』と考えられている。また、この記事からは少なくとも『吾妻鏡』においては、「坐禅」と喫茶が結びつけられて理解されていたと考えることができる。

〔史料2—1〕

(1) 道元：曹洞宗の道元（一二〇〇～一二五三）のこと。山城（京都）の源氏。比叡山の公円について得度受戒し、園城寺公胤、建仁寺栄西に歴参し、比叡山を下りて建仁寺明全に参ずる。貞応二年に入宋し、曹洞宗の天童如浄の法を嗣ぐ。帰朝後、宇治（京都）興聖寺、越前（福井県）吉峰寺、越前永平寺の開山となる。基本的には永平寺にあったが、宝治元年（一二四六）八月二日に檀越の波多野義重の請により永平寺をはなれて鎌倉に行化した。鎌倉では北条時頼をはじめ多くの人に法を説き、翌年三月十三日に永平寺に戻っている。語録として『永平広録』十巻が存し、『正法眼蔵』をはじめとした多くの著述が伝わる。

(2) 阿育王山：明州（浙江省）阿育王山広利寺のことで、五山の第五位。東晋の安帝義熙元年（四〇五）に塔・禅室を作り、劉宋元嘉十二年（四三五）に人曇摩蜜多が寺塔を建立して広利寺と名づけ、梁の普通三年（五二二）に武帝が修復して阿育王の号を与え、宋の太平興国三年（九七八）に勅にて仏舍利を迎えた。治平三年（一〇六六）に雲門宗の大覚懷璉（一〇一一〜一〇九三）が住持したことにより、禅寺として名を上げた。南宋代に大慧宗杲・拙庵徳光・無準師範・虚堂智愚などが住した。日本僧の栄西や道元もこの寺に参学している。『明州阿育王山志』十卷が存する。

〔史料2-7〕

(1) 澧州龍潭崇信師乃大悟：『景德伝灯録』卷十四の龍潭崇信章に「澧州龍潭崇信禅師、本渚宮元餅家子也。未詳姓氏。少而英異。初悟和尚為靈鑑潜請居天皇寺人莫之測。師家居于寺巷。常日以二十餅饋之。悟受之每食畢。常留一餅曰、吾患汝以蔭子孫。師一日自念曰、餅是我持去。何以返遺我耶、其别有旨乎。遂造而問焉。悟曰、是汝持来、復汝何咎。師聞之頗曉。因請出家。悟曰、汝昔崇福善、今信吾言、可名崇信。由是服勤左右。一日問曰、某自到来不蒙指示心要。悟曰、自汝到来吾未嘗不指汝心要。師曰、何処指示。悟曰、汝擎茶来吾為汝接。汝行食来吾為汝受。汝和南時吾便低首。何処不指指示心要。師低頭良久。悟曰、見則直下便見。擬思即差。師当下開解」（大正藏五一・三二三b）とある。

(2) 澧州龍潭崇信禅師：唐代、青原下の龍潭崇信（生没年不詳）のこと。荊州（湖北省）渚宮の人。天皇道悟（七四八〜八〇七）の法を嗣ぐ。澧州（湖南省）の龍潭で庵を結ぶ。門下に徳山宣鑑を出す。

(3) 天皇：石頭下の天皇道悟（七四八〜八〇七）のこと。婺州東陽（浙江省金華県）の張氏。径山法欽、馬祖道一らに参じ、石頭希遷の法を嗣ぐ。荊州（湖北省）東陽の柴紫、荊州城東の天皇寺に住する。法嗣に龍潭崇信がいる。

〔史料2-8〕

(1) 芙蓉山道楷禅師師掩耳而去：『聯灯会要』卷二十八の淨因道楷章に「師問投子、仏祖意句、如家常茶飯」

離<sub>レ</sub>此之余、還<sub>レ</sub>別有<sub>二</sub>為人言句<sub>一</sub>也無。子云、汝道、寰中天子勅、還<sub>レ</sub>飯<sub>二</sub>堯湯・堯舜<sub>一</sub>也無。師擬<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>口、子拈<sub>レ</sub>私子、驀口打云、你發意來時、早有<sub>二</sub>三十棒分<sub>一</sub>。師於<sub>レ</sub>此契悟、作<sub>レ</sub>礼便行。子云、且來闍梨。師竟<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>回首。子云、子到<sub>二</sub>不疑之地<sub>一</sub>耶。師掩<sub>レ</sub>耳而去〔統藏一三六・四五九a〕とあり、『聯灯会要』では淨因道楷の話として挙げられている。『嘉泰普灯録』卷三の芙蓉道楷章に「乃問、仏祖言句、如<sub>二</sub>家常茶飯<sub>一</sub>。離<sub>レ</sub>此之外、別有<sub>二</sub>為人言句<sub>一</sub>也無。曰、汝道、寰中天子勅、還<sub>レ</sub>飯<sub>二</sub>堯舜禹湯<sub>一</sub>也無。師欲<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>語。青以<sub>二</sub>私子<sub>一</sub>撼<sub>レ</sub>師口。曰、汝發意來、早有<sub>二</sub>三十棒<sub>一</sub>也。師即開悟。再拜便行。青曰、且來、闍梨。師不<sub>レ</sub>顧。青曰、汝到<sub>二</sub>不疑之地<sub>一</sub>耶。師以<sub>レ</sub>手掩<sub>レ</sub>耳」〔統藏一三七・四一a、b〕とある。

(2) 芙蓉山道楷禪師：曹洞宗の芙蓉道楷（一〇四三〜一一一八）のこと。沂州（山東省）費県の崔氏。舒州（安徽省）の投子義青の法を嗣ぐ。沂州仙洞山、西京（河南省）乾元招提、郢州（湖北省）大陽山、隨州（湖北省）大洪山崇寧保寿禪院、東京（河南省）十方淨因禪院、天寧寺を歴住した。法嗣に丹霞子淳を出した。『芙蓉楷禪師語要』一卷が存する。

(3) 投子山青禪師：曹洞宗の投子義青（一〇三三〜一〇八三）のこと。青州（山東省）の李氏。聖巖寺の浮山法遠に参じた。浮山法遠は臨済宗の人であったが、曹洞宗の大陽警玄の法も受け嗣いでおり、浮山法遠は既に示寂している大陽警玄に代わって、投子義青に曹洞宗の法脈を伝えた。舒州（安徽省）白雲山海会禪寺、投子山に住する。『舒州投子青和尚語録』二巻、『投子青和尚語要』一卷が存する。

〔史料2-9〕

(1) 趙州<sub>レ</sub>喫茶去…「趙州喫茶去」の公案。趙州從諗が人を接すること茶を飲むことを勧めた話頭。『古尊宿語録』卷十三の『趙州真際禪師語録』の「趙州真際禪師語録之余」には「師問<sub>二</sub>新到<sub>一</sub>、上座曾到<sub>二</sub>此間<sub>一</sub>否。云、不<sub>レ</sub>曾到。師云、喫茶去。又問<sub>二</sub>那一人<sub>一</sub>、曾到<sub>二</sub>此間<sub>一</sub>否。云、曾到。師云、喫茶去。院主問、和尚不<sub>レ</sub>曾到、教<sub>二</sub>伊喫茶去<sub>一</sub>、即且置。曾到、為<sub>二</sub>什麼<sub>一</sub>、教<sub>二</sub>伊喫茶去<sub>一</sub>。師云、院主。院主応諾。師云、喫茶去」〔統藏一一八・一六四d〕とあり、『碧巖録』卷二十二則「趙州凡見僧、便問<sub>二</sub>曾到<sub>一</sub>此間<sub>一</sub>麼。云、曾到、或云<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>曾到。州総云、喫

茶去。院主云、和尚尋常問僧曾到与不。曾到、総道喫茶去。意旨如何。州云、院主。主応諾。州云、喫茶去」  
 （大正蔵四八・六三 a）とある。

〔2〕趙州：南嶽下の趙州從諗（七七八〜八九七）のこと。全諱とも。曹州（山東省）の郝氏。馬祖下の南泉普願の法を嗣ぐ。趙州（河北省）観音院に住し、四十年間、口唇皮禪とも称される独自の禅風を宣揚する。唐の乾寧四年十一月二日に百二十歳で示寂したとされる。真際大師と諡する。『趙州真際禅師語録』三卷がある。

〔史料2-10〕

〔1〕襄州王敬初、這漢徹去也：『景德伝灯録』卷十一の襄州王敬初常侍、視事次、米和尚至。

王公乃拳筆。米曰、還判得虚空否。公擲筆入序、更不復出。米致疑。至明日、憑鼓山供養主人探其意。米亦随至、潜在屏蔽間、偵伺。供養主才坐、問云、昨日米和尚有「什麼言句、便不得見」。王公曰、師子蔽人、韓獹逐塊。米師竊聞此語、即省前謬。遽出朗笑曰、我会也我会也」（大正蔵五一・二八六 a）とある。

〔2〕王敬初：唐代、瀋山下の王敬初（生没年不詳）のこと。襄州の人。禅宗に帰依した人で、居士でありながら瀋山靈祐のもとで悟りを開く。常侍の職にあつたため、王常侍とも呼ばれた。

〔3〕米和尚：唐代、瀋山下の米胡（生没年不詳）のこと。瀋山靈祐の法を嗣ぐ。七人の師に参じたことから、米七師とも言われた。洞山良价や仰山慧寂にも参じていた。

〔4〕師子蔽人、韓獹逐塊：師子咬人、韓獹逐塊。人が土塊を投げつけると、獅子は人をめがけて襲い掛かるが、犬は土塊を追いかける。愚かな人が精神・意気を無用なことに費やすことをたとえる。『景德伝灯録』卷十一の襄州王敬初常侍章（大正蔵五一・二八六 a）による。

〔史料2-11〕

〔1〕長慶有時云、喫茶去：『景德伝灯録』卷十九の保福從展章に「長慶稜和尚、有時云、寧説阿羅漢有三毒、不説如来有二種語。不説道、如来無語、只是無二種語。師曰、作麼生是如来語。曰、聾人争得聞。師曰、情知、和尚向第二頭道。長慶却問、作麼生是如来語。師曰、喫茶去」（大正蔵五一・三五四 c）とある。

(2) 長慶：雪峰下の長慶慧稜（八五四～九三二）のこと。杭州（浙江省）塩官の孫氏。靈雲志勤、雪峰義存、玄沙師備に歴參し、雪峰義存の法を嗣ぐ。泉州（福建省）刺史の請により招慶院に住し、後に福州（福建省）の長慶院に住す。超覺禪師と諡する。

(3) 保福：雪峰下の保福從展（？～九二八）のこと。福州（福建省）の人。雪峰義存の法を嗣ぐ。漳州刺史の帰依により、保院の開山となる。十年間の住持を勤めたが、常に七百人の修行者があつたという。

〔史料2―12〕

(1) 四祖：四祖道信（五八〇～六五一）のこと。蕪州（湖北省）廣濟県の司馬氏。三祖僧璨の法を嗣ぐ。吉州（江西省）に住し、廬山大林寺に留まること十年、蕪州双峰山に三十余年住する。東山法門の初祖で、門下に五百人が集まつたという。大医禪師と諡する。

(2) 是何姓：『聯灯会要』卷二の四祖道信章に「一日、於蕪州黄梅县、逢一童子。骨相奇秀、異乎常童。師問之云、子何姓。云姓即有、不是常姓。師云、是何姓。云是仏性。師云、汝無姓耶。云姓空故。師默器之。即受出家落髮、俾令給侍」（統感一三六・二四a）とある。

〔史料2―13〕

(1) 黄檗在南泉茶堂、黄檗使休：『天聖広灯録』八の黄檗希運章に、「師、一日在茶堂内坐。南泉下来問、定慧等学、明見仏性、此理如何。師云、十二時中不依一倚一物。泉云、莫便是長老見处一麼。師云、不敢。泉云、漿水錢且置、草鞋錢教三什麼人選。師使休」（統感一三五・四五二a）とある。

(2) 黄檗：南嶽下の黄檗希運（生没年不詳）のこと。福州（福建省）閩県の人。福州黄檗山で出家し、後に百丈懐海の法を嗣ぐ。相国裴休に請われて洪州（江西省）に黄檗山を開いて開祖となる。臨済宗の祖である臨済義玄を打出した。『伝心法要』『宛陵録』が存する。

(3) 南泉：馬祖下の南泉普願（七四八～八三四）のこと。鄭州（河南省）新鄭の王氏。馬祖道一の法を嗣ぐ。池陽（安徽省）の南泉山に住する。自ら王老師と称し、趙州從諗や長沙景岑など多くの弟子を接化した。『南泉和尚語

録」が存する。

〔史料2—14〕

- (1) 趙州有僧問、有仏性也無……『趙州狗子話』「趙州無字」の公案。『趙州真際禪師語録』の示衆に「問、狗子還有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>也無。師云、無。学云、上至<sub>三</sub>諸仏<sub>二</sub>下至<sub>三</sub>螻子<sub>一</sub>、皆有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>、狗子為<sub>二</sub>什麼<sub>一</sub>無。師云、為<sub>レ</sub>伊有<sub>二</sub>業識性<sub>一</sub>在<sub>レ</sub>上」（統藏一一八・一五七c）とあり、『從容録』第十八則「趙州狗子」に「拳、僧問趙州、狗子還有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>也無。州云、有。僧云、既有、為<sub>二</sub>什麼<sub>一</sub>却撞<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>這箇皮袋<sub>一</sub>。州云、為<sub>二</sub>他知<sub>レ</sub>而故犯<sub>一</sub>。又有<sub>レ</sub>僧問、狗子還有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>也無。州曰、無。僧云、一切衆生皆有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>、狗子為<sub>二</sub>什麼<sub>一</sub>却無。州云、為<sub>レ</sub>伊有<sub>二</sub>業識<sub>一</sub>在<sub>レ</sub>上」（大正藏四八・二三八c）とある。

(2) 趙州：趙州從諗のこと。既出〔史料2—9〕。

〔史料2—15〕

- (1) 不悟：道元は不悟を大悟と同義の高い位置づけのものとして捉えている。七十五卷本『正法眼藏』卷十七「愆塵」に「大悟不悟、却迷失迷、被悟礙被迷礙、ともにこれ地にたふるもの、地によりておくる道理なり、これ天上天下の道得なり、西天東地の道得なり、古往今來の道得なり、古仏新仏の道得なり」とある。また、『正法眼藏』卷十「大悟」に「仏仏の大道、つたはれて綿密なり、祖祖の功業、あらはれて平展なり、このゆゑに大悟現成し、不悟至道し、省悟弄悟し、失悟放行す、これ仏祖家常なり」とあるのが参考になる。

- (2) 髻中宝珠：髻中明珠とも。『妙法蓮華経』「安樂行品」（大正藏九・三八c—三九a）に基づく故事成語。転輪聖王の髻の中に隠された宝珠のことで、手柄にしたがつてさまざまな褒美を与えていた王も、髻の中の明珠だけは容易に人に与えなかった。そして、最も功績のあつた兵にこれを授けたという。

〔史料2—16〕

(1) 芙蓉道楷：芙蓉道楷のこと。既出〔史料2—8〕。

(2) 唯将本院莊課、自去取用……『嘉泰普灯録』卷二十五の芙蓉道楷章に「唯将本院莊課一歲所得、均作三百六

十分、日取二分用之。更不随人添減。可<sub>レ</sub>以備飯則作<sub>レ</sub>飯、作<sub>レ</sub>飯不<sub>レ</sub>足則作<sub>レ</sub>粥、作<sub>レ</sub>粥不<sub>レ</sub>足則作<sub>中</sub>米湯<sub>上</sub>。新到相見、茶湯而已。更不煎点。唯置<sub>二</sub>茶堂<sub>一</sub>、自去取用<sub>レ</sub>（統藏一三七・一七三d）とある。

〔史料2—17〕

(1) 先師天童和尚：曹洞宗の長翁如浄（一六二〜一二二七）のこと。越州（浙江省）の人。雪竇山の石庵智鑑の法を嗣ぐ。建康府（江蘇省）清涼寺、台州（浙江省）瑞石寺、臨安府（浙江省）南山淨慈寺、明州（浙江省）瑞石寺を歴住したのち、浄慈寺に再住する。無際了派の遺書を受け、明州太白山天童山景德禪寺に勅住した。この間に日本僧の道元が入門し、その法を嗣いで帰国している。『如浄禪師語録』二卷、『如浄禪師統語録』一卷が存する。

(2) 天童：天童山景德禪寺のこと。明州（浙江省）鄞県の太白峰天童山景德禪寺のこと。中国五山第二位。西晋の永興元年（三〇四）に義興により開創され、唐の至徳二年（七五七）に伽藍を現在地に移した。南宋代には宏智正覚・虚庵懷徹・長翁如浄らが住し、日本からも栄西・道元が来山受法したほか、寒巖義尹や徹通義介も掛搭した。栄西は天童山の虚庵懷徹のもとで禅旨を究め、臨済宗黄龍派を伝えた。また、蘭溪道隆も日本に赴く直前には天童山に居住していた。明代の『天童山志』五卷、清代の『新纂天童山志』十卷などが存する。

〔史料2—18〕

(1) 若将耳聴・眼処聞声：『景德伝灯録』卷十五の洞山良价章に、「雲巖曰、我説法汝尚不<sub>レ</sub>聞、何況無情説法也。師乃述偈呈<sub>三</sub>雲巖<sub>一</sub>曰、也大奇、也大奇。無情解説不思議。若<sub>レ</sub>将<sub>レ</sub>耳聴<sub>レ</sub>声不<sub>レ</sub>現、眼処聞<sub>レ</sub>声方<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知。遂辞<sub>三</sub>雲巖<sub>一</sub>」（大正藏五一・三三二c）とあるのを踏まえている。

〔史料2—20〕

(1) 大滌禪師<sub>レ</sub>すくれたり：『景德伝灯録』卷九の滌山靈祐に「師、睡次仰山問訊。師使迴<sub>レ</sub>面向<sub>レ</sub>壁。仰山云、和尚何得如<sub>レ</sub>此。師起云、我適来得<sub>二</sub>一夢<sub>一</sub>。汝試為<sub>レ</sub>我原看。仰山取<sub>二</sub>一盆水<sub>一</sub>与<sub>レ</sub>師洗面。少頃、香巖亦来問訊。師云、我適来得<sub>二</sub>一夢<sub>一</sub>。寂子原了。汝更与<sub>レ</sub>我原看。香巖乃点<sub>二</sub>一椀茶<sub>一</sub>来。師云、二子見解過<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>鷲子<sub>一</sub>」（大正藏

五一・二六五c）とあるが、内容からは『聯灯会要』巻七の瀉山靈祐章に「師睡次、仰山来。師便面壁。仰云、某甲是和尚弟子、不用形跡。師作起勢。仰便出去。師召云、寂子。仰回首。師云、聽老僧說箇夢。仰作聽勢。師云、為我原看。仰取一盆水、并手中一朶。師洗面了、纔坐。香嚴進來。師云、我与寂子、適来作一上神通。不同小小。嚴云、某甲雖在下面、一一得知。師云、你試說看。嚴点一椀茶来。師嘆云、二子神通過於驚子・目連」（統藏二二六・二七二c）とあるほうが近い。『宗門統要集』四の瀉山靈祐章（『禅宗典籍叢刊』第一『宗門統要集』、臨川書店、一九九九年、八六頁）も参照。

(2) 大瀉：瀉仰宗祖の瀉山靈祐（七七一〜八五三）のこと。福州（福建省）長慶の趙氏。馬祖下の百丈懷海の法を嗣ぐ。潭州（湖南省）寧郷の大瀉山に住する。門下に仰山慧寂・香嚴智閑・靈雲志勳らがいる。『瀉山警策』が存し、明代に『潭州瀉山靈祐禪師語録』一卷が編纂された。

(3) 香嚴：瀉山下の香嚴智閑（？〜八九八）のこと。青州（山東省）の人。瀉山靈祐に久しく参じて悟りを得ず、鄧州（河南省）白崖山に入り、南陽慧忠の遺跡に止まる。一日、庭の掃除をし、小石が竹にぶつかる音を聞いて悟りを開き、瀉山靈祐の法を嗣ぐ。鄧州香嚴長寿寺に住し、大いに禅風を挙揚する。夔灯禅師と諡する。偈頌に巧みで、金沢文庫所蔵『香嚴頌』一卷が伝えられる。

(4) 寂子：瀉仰宗祖の仰山慧寂（八〇七〜八八三）のこと。韶州（広東省）懷化県の葉氏。南陽下の耽源応真に学び、百丈下の瀉山靈祐の法を嗣ぐ。郴州（湖南省）の王莽山、袁州（江西省）の仰山、新建（江西省）の石亭観音院、韶州の東平山正覚寺に住する。智通大師と諡される。

〔史料2-121〕

(1) 趙州從諗：趙州從諗のこと。既出〔史料2-19〕。

(2) 烟火徒勞、茶噉去又嘆：『古尊宿語録』卷十四「趙州真際禪師語録之余」の「十二時歌」に「食時辰。烟火徒勞望三四鄰、饅頭飽子前年別。今日思量空噉津、持念少、嗟歎頻。一百家中無善人、來者祇道覓茶喫、不得茶噉去又嘆」（統藏二一八・一六七a）とある。

〔史料2―26〕

(1) 擎茶来…『景德伝灯録』卷十四の龍潭崇信章に「一日問曰、某自到来、不蒙指示心要。悟曰、自汝到来、吾未嘗不指汝心要。師曰、何処指示。悟曰、汝擎茶来吾為汝接。汝行、食来吾為汝受。汝和南時吾便低首。何処不指示心要。」(大正蔵五一・三三三b)とある。

(2) 不動著境…鄧隱峰の行為。『聯灯会要』卷五の剛山隱峰章に「師到南泉。泉指浄瓶問師、浄瓶是境、瓶中有水。不我得動著境、与老僧将水来。師拈浄瓶、向南泉面前便瀉。泉休去」(続蔵一三六・二五八d)とある。

(3) 下面了知…瀉山靈祐の言葉。既出〔史料2―15〕。

〔史料2―27〕

(1) 大陽山楷和尚、以手掩耳而去…既出〔史料2―8〕。

(2) 投子…投子義青のこと。既出〔史料2―8〕。

〔史料2―28〕

(1) 趙州真際、喫茶去…「趙州喫茶去」の公案。既出〔史料2―9〕。

(2) 趙州真際大師…南嶽下の趙州從諗のこと。既出〔史料2―9〕。

(3) 誰在画楼沽酒处、相邀来喫趙州茶…『如浄和尚語録』卷上「台州瑞岩禪寺語録」に「上堂。斬鯨龍頭角、截虎豹爪牙。爛泥团受用不尽。踏著刺方見作家。其或未然。誰在画楼沽酒处、相邀来喫趙州茶」(大正蔵四十八・一二三b)とあり、卷下「小参」の天童山における小参においても「冬夜小参(中略)狼藉满地、笑殺傍觀。且道、如何收拾得。誰在画楼沽酒处、相邀来喫趙州茶」(大正蔵四八・一二九c)とある。

〔史料2―29〕

(1) 梵網經中に冬安居あれとも…『梵網經』に「若仏子、常心二時頭陀、冬夏坐禪、結夏安居」(大正蔵二四・一〇〇八a)とあるのを指すか。

(2) 清規云く不倉卒…『禅苑清規』卷二「結夏」に「行脚人、欲就<sub>レ</sub>処所結夏、須<sub>二</sub>於半日前掛搭<sub>一</sub>。所<sub>レ</sub>貴茶湯入事不<sub>レ</sub>至<sub>三</sub>倉卒<sub>二</sub>（統藏一一・四四四a）とある。

〔史料2—30〕

(1) 寮主…『禅苑清規』卷四「寮主寮首座」に「寮主依<sub>三</sub>入寮先後<sub>一</sub>輪請。或当<sub>二</sub>一月、或当<sub>二</sub>半月、或十日。各逐<sub>二</sub>所在<sub>一</sub>、主<sub>レ</sub>看<sub>二</sub>守衆僧衣鉢<sub>一</sub>。本寮什物動用、並具<sub>二</sub>文帳<sub>一</sub>、上下交割。掛搭新到茶湯特為、並新旧交代遞相煎点。装<sub>レ</sub>炉打<sub>レ</sub>炭添<sub>レ</sub>湯貯<sub>レ</sub>水。洒掃併淨、打疊抺拭。恭勤不<sub>レ</sub>倦、奉<sub>二</sub>事清衆<sub>一</sub>（統藏一一・四四〇a）とある。

〔史料2—31〕

(1) 勝式庫司く謹白…『禅苑清規』卷二「結夏」の割註に「勝云、庫司今晚就<sub>二</sub>雲堂<sub>一</sub>煎点。特為<sub>二</sub>首座・大衆<sub>一</sub>、聊表<sub>二</sub>結制之儀<sub>一</sub>。伏冀衆慈同垂<sub>二</sub>光降<sub>一</sub>。庫司比丘某等敬白」（統藏一一・四四四b）とある。

〔史料2—33〕

(1) 解夏、七月十三日く同垂光降…『禅苑清規』卷二「解夏」に「七月十四日晚、念誦・煎湯、來日陞堂・人事・巡察・煎点、並同<sub>二</sub>結夏之儀<sub>一</sub>。唯勝狀詞語不<sub>レ</sub>同而已。庫司湯勝（略云、聊表<sub>二</sub>解制之儀<sub>一</sub>）」（統藏一一・四四四c）とある。

〔史料2—34〕

(1) 知事・頭首く不在此限…『禅苑清規』卷二「解夏」に「知事頭首告云、衆中兄弟行脚、須候<sub>二</sub>茶湯罷<sub>一</sub>、方可<sub>二</sub>随意<sub>一</sub>（如有<sub>二</sub>緊急緣事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>在」（統藏一一・四四四d）とある。

〔史料2—35〕

(1) 忠国師驗大耳三藏他心通…『景德伝灯録』卷五に南陽慧忠章に「時、有<sub>二</sub>西天大耳三藏<sub>一</sub>、到<sub>レ</sub>京云、得<sub>二</sub>他心慧眼<sub>一</sub>、帝勅令<sub>下</sub>与<sub>二</sub>国師<sub>一</sub>試驗<sub>上</sub>。三藏才見。師便禮拜、立<sub>二</sub>于右辺<sub>一</sub>。師問曰、汝得<sub>二</sub>他心通<sub>一</sub>耶。对曰、不敢。師曰、汝道老僧即、今在<sub>二</sub>什麼處<sub>一</sub>。曰、和尚是一国<sub>一</sub>之師、何得<sub>下</sub>却去<sub>二</sub>西川<sub>一</sub>看<sub>中</sub>競渡<sub>上</sub>。師再問、汝道老僧即今、在<sub>二</sub>什麼處<sub>一</sub>。曰、和尚是一国<sub>一</sub>之師、何得<sub>下</sub>却在<sub>二</sub>天津橋上<sub>一</sub>看<sub>レ</sub>弄<sub>中</sub>蝴蝶<sub>上</sub>。師第三問語、亦同<sub>レ</sub>前。三藏良久、罔<sub>レ</sub>知去<sub>レ</sub>處。

師叱曰、遮野狐精、他心通在<sub>レ</sub>什麼処。三藏無<sub>レ</sub>対」(大正蔵五一・二四四a)とある。

- (2) 忠国師…六祖下の南陽慧忠(？七七五)のこと。越州(浙江省)諸暨の冉氏。六祖慧能の法を嗣ぐ。諸山歴遊し、五嶺・羅浮(広東省)・四明(浙江省)・天目(浙江省)を経て、南陽(河南省)の白崖山党子谷に入り、四十余年、山門を下らなかつたという。肅宗、代宗と二代の皇帝の参禅の師となり、唐の肅宗は京に迎え入れて千福寺西禅院に住させ、代宗は光宅寺に住させた。南陽の白崖山に住したことから、世に南陽の慧忠と言ひ、大証国師と諡する。

- (3) 仰山・玄沙・玄覺・趙州…慧忠が大耳三藏を験した故事に、仰山・玄沙・玄覺・趙州の四人が著語したこと。『景德伝灯録』巻五の南陽慧忠章には、「僧問、仰山曰、大耳三藏第三度為<sub>レ</sub>什麼不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>国師。仰山曰、前兩度是涉<sub>レ</sub>境心。後入<sub>レ</sub>自受用三昧。所以不<sub>レ</sub>見。又有<sub>レ</sub>僧拏<sub>レ</sub>前語問<sub>レ</sub>玄沙。玄沙曰、汝道前兩度還見麼。玄覺云、前兩度若<sub>レ</sub>見。後來為<sub>レ</sub>什麼不<sub>レ</sub>見。且道、利害在<sub>レ</sub>什麼処。僧問<sub>レ</sub>趙州。曰、大耳三藏第三度不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>国師。未審、国師在<sub>レ</sub>什麼処。趙州云、在<sub>レ</sub>三藏鼻孔上。僧問<sub>レ</sub>玄沙。既在<sub>レ</sub>鼻孔上、為<sub>レ</sub>什麼不<sub>レ</sub>見。玄沙云、只為<sub>レ</sub>太近<sub>レ</sub>」(大正蔵五一・二四四a)とある。

- (4) 仰山…仰山慧寂のこと。既出「史料2-120」。

- (5) 玄沙…雪峰下の玄沙師備(八三五〜九〇八)のこと。福州(福建省)閩県の謝氏。備頭陀・謝三郎と称される。福州芙蓉靈訓に参じて出家し、青原下の雪峰義存の法を嗣ぐ。福州侯官県の玄沙院や安国院に住する。宗一大師と諡する。『玄沙宗一禪師語録』三巻が存する。

- (6) 玄覺…六祖下の永嘉玄覺(六七五〜七二二)のこと。温州(浙江省)永嘉県の戴氏。天台止観の法門に精通していた。韶州(広東省)曹溪山の六祖慧能に参じ、わずかに問答商量するや印可を受け、その法を嗣ぐ。わずか一宿にして慧能の下を去つたことから、「一宿覺」と称される。温州永嘉に帰つて松臺山浄光寺などで大いに化を振つた。真覚大師といい、無相大師と諡する。著述に『禪宗永嘉集』や『証道歌』が存する。

- (7) 趙州…趙州從諗のこと。既出「史料2-19」。

(8) 五位尊宿：趙州、玄沙、仰山、海会端、雪竇重頤の五人の尊宿。「忠国師驗大耳三藏他心通」に對し、四人の僧侶が著語を加えた記録と、五人の僧侶が著語を加えた記録の二つがある。四人のものは『景德伝灯録』により、五人のものは『宗門灯要集』三による。

(9) 壺水点茶：既出「史料2-20」。

〔史料2-36〕

(1) 閉炉上堂：『禅苑清規』卷四「聖僧侍者炉頭直堂」には「十月一開炉。二月一閉炉」（続藏一一・四四九d）とあり、中国では二月一日に行なわれていたが、『瑩山清規』には「三月一日、称閉炉節。僧堂及諸寮閉炉。大衆出仕脱頭帽、露叉手」（大正藏八二・四三八b）とあり、日本では三月一日に行なわれていた記録も残る。

(2) 興聖：宇治興聖寺のこと。道元が京都深草（現在の京都市伏見区深草）に開いた寺院。僧堂を中心とした中国式の修行生活が行なわれた。数代で廃絶してしまうが、江戸時代に永井尚政が曹洞宗の万安英種を招いて宇治（現在の京都府宇治市）に再建した。

〔史料2-38〕

(1) 夾山因僧問、漁父棲巢：『宏智禪師広録』卷二「泗州普照覚和尚頌古」に「拳、僧問、夾山、撥塵見、仏時如何。山云、直須揮劍。若不揮劍、漁父棲巢。後僧拳問、石霜、撥塵見、仏時如何。霜云、渠無国土、何処逢渠。僧回拳、似夾山。山上堂云、門庭施設、不如老僧。入理深談、猶較石霜百步。頌曰、弘牛劍氣洗兵威。定乱掃功更是誰。一旦氛埃清四海、垂衣皇化自無為」（大正藏四八・二四c）とある。

(2) 夾山：青原下の夾山善会（八〇五〜八八二）のこと。漢広（河南省）峴亭の廖氏。幼少にて潭州（湖南省）龍牙山に出家し、道吾円智の勧めにより、華亭江で船頭になっていた葉山下の船子徳誠に參じて法を嗣ぐ。澧州（湖南省）夾山に居して禅風を振るつた。碧巖は夾山に存する一峰。

(3) 劍若不揮、漁父棲巢：「漁父」は漁師。漁業に従事する人。『従容録』第六十八則「夾山揮劍」の本則に「山云、直須揮劍。若不揮劍、漁父棲巢」（大正藏四八・二六九c）とある。

(4) 不勞懸石鏡、天曉自鷄鳴：『投子青禪師語錄』卷上「投子山勝因禪院語錄」に「次日謝專使上堂云、若論

此事、豈在繁論。雖官不容鍼、私通車馬、便有分疎分。所以、道靈山座自恥何多。少室虛淹是誰之過。蓋為栽梧待鳳種、竹引風。若無無祖承襲、依旧青山帶翠。諸仁者、且道、承襲箇甚麼。良久云、不勞懸石鏡、天曉自雞啼」(統藏一二四・二二七c)とある。

(5) 喫飯喫茶、出入同門：少し形は違うが、『法演禪師語錄』卷上「次住海會語錄」の「遇飯即飯、遇茶即茶。同門出入、宿世冤家」(大正藏四七・六五五c)が参考となろう。

〔史料2―39〕

(1) 森羅万象總在這一椀茶裏：『景德伝灯録』卷二十の嵇山章禪師章に「曾在投子作柴頭。投子喫茶次謂師曰、森羅万象、總在遮一椀茶裏。師便覆却茶云、森羅万象、在什麼處。投子曰、可惜一椀茶」(大正藏五一・三六三b)とある。

(2) 健即坐禪困即眠：『聯灯會要』卷七の瀉山靈祐章に「師問仰山、近日宗門令嗣作麼生。云、大有人疑著。師云、寂子又作麼生。云、某甲只管困來合眼、倦即坐禪。所以未嘗說著」(統藏一三六・二七二a)とあるが、『五灯会元』卷九の瀉山靈祐章には「師方丈內坐次、仰山入來。師曰、寂子。近日宗門令嗣作麼生。仰曰、大有人疑著此事。師曰、寂子作麼生。仰曰、慧寂祇管困來合眼、健即坐禪。所以未嘗說著在」(統藏一三・八・一五九d)とある。

(3) 大道通長安：『古尊宿語録』卷十四「趙州真際禪師語録之余」に「上堂云、纔有是非、紛然失心。還有答話分也無。有僧出撫侍者一下云、何不祇對和尚。師便歸方丈。後侍者請益、適來僧是會不會。師云、坐底、見立底、立底、見坐底。問、如何是道。師云、牆外底。云、不問者箇。師云、問什麼道。云、大道。師云、大道通長安」(統藏一一八・三三二b)とある。

〔史料2―40〕

(1) 諸法因緣生、是法說因緣、是法緣及尽：『大智度論』に「爾時、阿說示比丘、說此偈言、諸法因緣生、是

法説「因縁」是法因縁尽、大師如「是説」（大正蔵二五・一三六c）とあるが、ここでは阿濕示の言葉になっている。『止観輔行伝弘決』六に「頌韓曰、諸法從縁生、是法説「因縁」、是法縁及尽、我師如「是説」（大正蔵四六・三三四c）とあり、ここでは釈尊の言葉となっている。

(2) 毘盧：毘盧遮那仏のこと。毘盧遮那とはサンスクリット語のヴァイローチャナ（梵：Vairocana）の音訳。略して盧遮那仏、遮那仏とも表される。遍一切処・光明遍照・大日遍照と訳される。

(3) 洞山：曹洞宗祖の洞山良价（八〇七〜八六九）のこと。越州（浙江省）の愈氏。南泉普願や瀉山靈祐に歴参し、曹原下の雲巖曇晟（七八二〜八四二）の法を嗣ぐ。筠州（江西省）洞山広福寺（普利院）に住する。法嗣に雲居道膺・曹山本寂らがいる。

〔史料2—41〕

(1) 趙州茶：「趙州喫茶去」の公案。既出「史料2—9」。

(2) 和修伝著仏袈裟：商那和修が生まれながら布をまとっていたとされる話。『景德伝灯録』卷一の商那和修章に「第三祖商那和修者（正宗記云、梵語商諸迦、此云自然服。以三生時身「自有」衣也。洪覺範志林云、謂僧伽梨衣与「雲巖」同也。而伝灯曰自然服）」（大正蔵五一・二〇六c）とある。

〔史料2—42〕

(1) 世尊、因五通仙人問く五通六通那「一通」：『聯灯会要』卷一の釈迦牟尼仏章に「世尊因五通仙人問云、世尊有「六通」、我有「五通」。如何是那「一通」。世尊召云、五通仙人。通応諾。世尊云、那「一通」、汝問「我」（続蔵一三六・二二一b）とある。

(2) 瀉水点茶：瀉山靈祐が昼寝の夢を当てよと命じたとき、仰山慧寂は盥をいに水を盛って呈し、香巖智閑は茶を入れて献じた故事。既出「史料2—35」。

(3) 乞兒打破飯碗：『如浄和尚語録』卷下の「明州天童景德寺語」に「上堂。世尊道、一人発「真帰」源、十方虚空悉皆消殞。師拈云、既是世尊所説。未「免」尽作「奇特商量」。天童則不「然」。一人発「真帰」源、乞兒打「打破飯

碗<sup>二</sup>（大正藏四八・一二八b）とある。

〔史料2—43〕

(1) 世尊在靈山上<sup>レ</sup>附厲摩訶迦葉<sup>レ</sup>：『天聖広灯録』卷二の摩訶迦葉章に「如来在<sup>二</sup>靈山<sup>一</sup>說法。諸天獻<sup>レ</sup>華。世尊持<sup>レ</sup>華示<sup>レ</sup>衆。迦葉微笑。世尊告<sup>レ</sup>衆曰、吾有<sup>二</sup>正法眼藏、涅槃妙心<sup>一</sup>、付<sup>二</sup>囑摩訶迦葉<sup>一</sup>。流<sup>二</sup>布將來<sup>一</sup>、勿<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>斷絶<sup>一</sup>。仍<sup>二</sup>以<sup>二</sup>金縷僧伽梨衣<sup>一</sup>付<sup>二</sup>迦葉<sup>一</sup>」（統藏一三五・三〇六c）とある。

(2) 摩訶迦葉<sup>レ</sup>：禪宗西天付法第一祖。仏十大弟子の一人、頭陀第一の摩訶迦葉（梵：Mahā-kāśyapa）のこと。大迦葉・飯老尊者とも。摩揭陀国のバラモンの出身で、若くして出家し、釈尊の出世を知って仏教に帰依した。釈尊が亡くなった後、第一結集を行なったことで名高い。禪宗の伝承では、釈尊が靈鷲山で說法している際に花を拈じたところ、摩訶迦葉ひとりとその意味を悟り、破顔微笑し、釈尊と黙通証契したので、釈尊は迦葉に正法眼藏涅槃妙心を付囑し、迦葉は西天第一祖になつたとされる。この釈尊との因縁を拈華微笑・破顔微笑などという。後には阿難に付法し、西天第二祖となした。

〔史料2—44〕

(1) 葉山問高沙弥<sup>レ</sup>只是不肯承当<sup>レ</sup>：『景德伝灯録』卷十四の高沙弥章に「葉云、汝從<sup>二</sup>看經<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>、請益得<sup>レ</sup>。師曰、不<sup>レ</sup>從<sup>二</sup>看經<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>、亦不<sup>レ</sup>從<sup>二</sup>請益<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>。山云、大有<sup>レ</sup>人不<sup>二</sup>看經<sup>一</sup>不<sup>二</sup>請益<sup>一</sup>。為<sup>二</sup>什麼<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>得。師曰、不<sup>レ</sup>道<sup>二</sup>他無<sup>一</sup>、只是他不<sup>レ</sup>肯<sup>二</sup>承当<sup>一</sup>」（大正藏五一・三二五c）とある。

(2) 葉山<sup>レ</sup>：青原下の葉山惟儼（七四五〜八二八）のこと。絳州（山西省新絳県）の韓氏。石頭希遷の法を嗣ぐ。澧州（湖南省）葉山（芍葉山）に住す。弘道大師と諡する。弟子に雲巖曇晟や道悟円智を出し、雲巖曇晟の系統から洞山良价へと続き曹洞宗の系譜が生まれることとなった。

(3) 高沙弥<sup>レ</sup>：唐代、青原下の高沙弥（生没年不詳）のこと。細かい行実是不明であるが、葉山惟儼の弟子で、のちに葉山を辞して草庵に住み、往来の人々を接化したという。

(4) 趙州<sup>レ</sup>：趙州從諗のこと。既出「史料2—9」。

(5) 趙州茶…「趙州喫茶去」の公案。既出「史料2—9」。

〔史料2—45〕

(1) 百丈、因僧問、非異大小乘…『景德伝灯録』卷六の百丈懐海に、「或曰、瑜伽論、瓔珞經。是大乘戒律。胡不依隨」哉。師曰、吾所宗非局大小乘。非異大小乘」（大正藏五一・二五一a）とある。

(2) 百丈…馬祖下の百丈懐海（七二〇・七四九〜八一四）のこと。福州（福建省）長樂県の王氏。馬祖道一の法を嗣ぐ。洪州（江西省）奉新県の百丈山（大雄峰）に住して禅風を鼓吹する。後世に『百丈清規』を制定したと伝えられ、門下に瀉山靈祐、黄檗希運らがいる。大智禅師と諡する。

(3) 先陀婆…梵語 saṃdhava の音写。南本『涅槃經』卷九「菩薩品」に見える、如来の密語についての有名な比喻。聞く者が聞けば真意を理解する。一語に塩・器・水・鳥の産地であったことから、一つの言葉をもつ語。もとは「信度産の」という意味の言葉であり、この地が塩・器・水・鳥の産地であったことから、一つの言葉で四つの意味をもっていた。ある国の臣下で伶俐の者が、王が「先陀婆」と言った際に必ず王の求めに応ずるものを呈したという。

〔史料2—46〕

(1) 煎点趙州茶…「趙州喫茶去」の公案。既出「史料2—9」。

(2) 三斤麻…「洞山麻三斤」の公案。麻三斤は、布一着分が作れる麻糸。麻製の袈裟一着分の重さ。『無門関』第二十則「洞山三斤」に雲門宗の洞山守初（九一〇〜九九〇）の問答として「洞山和尚、因僧問、如何是仏。山云、麻三斤」（大正藏四八・二九五b）とある。『古尊宿語録』卷三十八の『襄州洞山第二代初禅師語録』の上堂に「問、如何是仏。師云、麻三斤」（統藏一一八・三三三c）とあるのが初出である。詳しくは、入矢義高「麻三斤」（『禅学研究』六十二号、一九八三年）を参照。

(3) 打牛・打車…「南嶽磨瓢話」に基づく。『景德伝灯録』卷五の南嶽懐讓章に「開元中、有沙門道一（即馬祖大師也）。住伝法院、常日坐禅。師知是法器。往問曰、大德坐禅因什麼。一曰、因作仏。師乃取一搏、於彼庵前石上磨。一曰、師作什麼。師曰、磨作鏡。一曰、磨博豈得成鏡耶。坐禅豈得成仏耶。一曰、

如何即是。師曰、如<sub>二</sub>人駕<sub>レ</sub>車不<sub>レ</sub>行。打<sub>レ</sub>車即是、打<sub>レ</sub>牛即是。一無<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>」（大正藏五一・二四〇c）とある。

〔史料2—47〕

(1) 先師天童<sub>ノ</sub>莫得<sub>レ</sub>當面諱却<sub>ノ</sub>…典拠未詳。『如淨禪師語錄』にも、如淨への入室門法の記録である『宝慶記』にもみられない。

(2) 先師天童<sub>ノ</sub>長翁如淨のこと。既出「史料2—17」。

(3) 天童<sub>ノ</sub>天童山景德禪寺のこと。既出「史料2—17」。

(4) 磨瓢・打車<sub>ノ</sub>…「南嶽磨瓢」の公案に基づく。既出「史料2—46」。

(5) 趙州茶<sub>ノ</sub>…「趙州喫茶去」の公案。既出「史料2—9」。

〔史料2—48〕

(1) 眉毛蹉過<sub>ノ</sub>…『古林和尚語錄』卷三「重拈雪竇拏古一百則」に「眉毛未<sub>二</sub>曾眨上<sub>一</sub>、早是蹉過。若更眨<sub>二</sub>上眉毛<sub>一</sub>、蹉過不<sub>レ</sub>少也」（統藏一二三・二二一b）とあるのが参考になる。

〔史料2—49〕

(1) 蘿蔔頭禪<sub>ノ</sub>…だいこん禪。安易に印可を与える希薄な禪。『古尊宿語錄』卷十三「趙州真際禪師語錄」巻上に「問、承聞、和尚親見<sub>二</sub>南泉<sub>一</sub>。是否。師云、鎮州出<sub>二</sub>大蘿蔔頭<sub>一</sub>」（統藏一八・一五四c）とある。

(2) 琉璃瓶子禪<sub>ノ</sub>…ガラス瓶の禪。誰かに触られたらすぐに粉々になってしまう。『圓悟仏果禪師語錄』卷十三「虎丘山語録」の「普説」に「先師常云、莫<sub>レ</sub>学<sub>二</sub>琉璃瓶子禪<sub>一</sub>、輕輕被<sub>二</sub>人触著<sub>一</sub>便<sub>レ</sub>百雜碎」（大正藏四七・七七五b）とある。

(3) 如来禪<sub>ノ</sub>…如来の根本精神を伝える禪。如来清淨禪の略で、最上乘禪とも呼称される。『楞伽經』に愚夫所行禪・觀察義禪・攀縁如禪・如来禪の四種禪で最高として提示されるのを最古とする。神会や宗密は、達磨門下が伝えたのは如来禪としたが、馬祖道一門下の隆盛の中で、祖師禪が提示された。

(4) 眼裏無筋一世貧<sub>ノ</sub>…眼筋は眞実を見きわめる眼力のこと。眼裏有筋で眼光鋭く気力気概のあること。対して眼裏

無筋は無気力の意。ものの本質を見抜く力がなく、一生涯むだに送る。『古尊宿語録』卷七の『汝州南院禅師語要』に「問、久在貧中、如何得<sub>レ</sub>濟。師云、滿<sub>二</sub>掬摩尼<sub>一</sub>親自捧。学云、教<sub>二</sub>人眼瞎<sub>一</sub>。師云、眼裏無<sub>レ</sub>筋一世貧」  
 （統藏一一八・一一九a）とある。

(5) 祖師禪：祖師から祖師に以心伝心して伝えられた禅。如来禅と対に用いられる。經典にもとづいて実践する如来禅に対し、釈尊から摩訶迦葉に以心伝心して伝えられ、達摩によつて中国に伝えられた禅のうち、六祖慧能を祖とする南宗の行ずる禅を祖師禅と称するようになった。以後、祖師禅は如来禅の上に位置付けられた。

(6) 但見日頭東畔上。誰能更喫趙州茶：『黃龍慧南禅師語録』「偈頌」「三関師自頌」に「生縁有<sub>レ</sub>語人皆識、水母何曾離得<sub>レ</sub>鰕。但見<sub>二</sub>日頭東畔上<sub>一</sub>、誰能更喫<sub>二</sub>趙州茶<sub>一</sub>」（大正藏四七・六三九b）とある。

(7) 趙州茶：「趙州喫茶去」の公案。既出「史料2-9」。

〔史料2-50〕

(1) 龍潭禪師く潭乃大悟：既出「史料2-7」。

(2) 龍潭禪師：龍潭崇信のこと。既出「史料2-7」。

(3) 天皇和尚：天皇道悟のこと。既出「史料2-7」。

(4) 千年八百田将主：『景德伝燈録』卷十一の韶州靈樹如敏禅師章に「問、如何是和尚家風。師云、千年田八百主。僧云、如何是千年田八百主。師云、郎当屋舍没<sub>二</sub>人修<sub>一</sub>」（大正藏五一・二八六b）とあるのを踏まえる。田地の持ち主が次々に変わること。「田将主」は「田荘主」の意か。

〔史料2-51〕

(1) 芙蓉楷和尚く以手掩耳：既出「史料2-8」。

(2) 芙蓉楷和尚：芙蓉道楷のこと。既出「史料2-8」。

(3) 投子：投子義青のこと。既出「史料2-8」。

〔史料2-52〕

(1) 長慶有時云く喫茶去：既出「史料2—11」。

(2) 長慶：長慶慧稜のこと。既出「史料2—11」。

(3) 保福：保福從展のこと。既出「史料2—11」。

〔史料2—54〕

(1) 新羅：古代の朝鮮半島南東部にあつた国。四世紀中頃に朝鮮半島南東部の辰韓諸国を斯盧しよろが統一して建国した。六世紀以降、伽椰諸国を滅ぼし、また唐と結んで百濟・高句麗を征服し、六六八年に朝鮮半島を統一した。唐制にならない中央集権的な政治体系を敷いた。九三五年に高麗の太祖王建に滅ぼされた。

(2) 趙州：趙州從諗のこと。既出「史料2—9」。

〔史料3—1〕

(1) 蘭溪道隆：臨濟宗大覚派祖の蘭溪道隆（一二二三—一二七八）のこと。西蜀涪州（重慶市涪陵区）の冉氏。無準師範・癡絶道冲・北磻居簡に歴参し、臨濟宗松源派の無明慧性の法を嗣ぐ。天童山景德禪寺に滞在中、日本僧から日本で禅が弘まっていないことを聞き、寛元四年（一二四六）に自らの意志で弟子数人と共に来朝。博多の円覚寺、京都の泉涌寺来迎院、鎌倉の寿福寺に寓居し、北条時頼によつて大船（神奈川県）常楽寺の住持として迎えられ、建長元年（一二四九）に鎌倉の建長寺の開山となる。その後、京都の建仁寺、松島の瑞巖寺、鎌倉の寿福寺に住し、示寂するまでの三十三年間、日本において禅を弘めた。示寂後に大覚禪師と諡されるが、これは日本最初の禪師号である。『蘭溪和尚語録』二巻が存する。

(2) 撞牆磕壁：『碧巖録』第二十則「龍牙西来意」の垂示に「堆山積嶽、撞牆磕壁、佇思停機、一場苦屈。或有箇漢出来掀翻大海、踢倒須弥、喝散白雲、打破虚空、直下向一機一境、坐断天下人舌頭、無爾近傍处。且道、従上来、是什麼人曾恁麼。試拈看」（大正蔵四八・一六〇a）とある。

(3) 下座巡堂喫茶：『入衆須知』「朔望巡堂」に「朔望上堂。就座云、下座巡堂喫茶。首座領衆、依巡堂一匝、至三元位立。住持入堂、焼香掃位。知事作一班、面聖僧問訊。住持巡堂一匝。若暫到、先随衆、後同

侍者、在「帳後」立。知事巡將出堂、却隨後出。侍者帰「堂」。平常焼香喫茶畢、收「盞」、鳴「退堂鐘」三下。如不「巡堂」、即粥罷、就「座喫茶」。其三人巡堂、見「前不「再録」」（「統藏」一一・四七七a）とある。「勅修百丈清規」に「且望巡堂茶。住持上堂說法竟、白云下座巡堂喫茶。大衆至「僧堂前」依「念誦」立。次第巡入「堂内」とある。『大鑑清規』（大正蔵八一・六二二c）に「四節僧堂茶礼」（中略）則初一日上堂罷、巡堂喫茶。住持巡堂還礼。下八、三人問訊之礼。此日繼罷、僧堂無「就」座茶。上八、念誦有「巡堂」。則十五日同前。若上下二八念誦無「巡堂」。則初一十五、粥了就「座茶」。侍者礼如「常」とある。

〔史料3—2〕

(1) 無位真人：無位真人はいかなる枠にもはまらず、一切の枠を超えた自由人。『臨濟録』に「上堂云、赤肉团上有「一」無位真人。常従「汝等諸人面門」出入。未「証」抛「者看看。時有」僧出問、如何是無位真人。師下「禪床」一把住云、道道。其僧擬議。師托開云、無位真人是什麼乾屎橛。便帰「方丈」（大正蔵四七・四九六c）とある。また、「真人」は「莊子」「大宗師」に見られる言葉で、道家では道の体得者として用いられる。

(2) 下座巡堂喫茶：既出「史料3—1」。

〔史料3—3〕

(1) 魯祖見僧面壁：「魯祖面壁」の公案。馬祖下の魯祖宝雲が自らの面壁坐禅の姿によつて学人接化を果したとする公案。『景德伝灯録』巻七の魯祖宝雲章に「師尋常見「僧来」便面壁。南泉問云、我尋常向「僧道、向」仏未「出世」時上会取。尚不「得」一箇半箇。他怎麼地驢年去」（大正蔵五一・二八〇a、b）とある。

(2) 魯祖：馬祖下の魯祖宝雲（生没年不詳）のこと。馬祖道一の法を嗣ぐ。池州（安徽省）魯祖山に住す。「魯祖面壁」の公案で知られるが、詳しい行実は解っていない。

(3) 金剛杵打鉄山摧：金剛杵は金剛神の武器。金剛杵で堅固な鉄山を打つて真つ二つにする。『嘉泰普灯録』巻三の潭州道吾真章に「問、如何是真如体。曰、夜叉屈「膝眼睛黒」。云、如何是真如用。曰、金剛杵打「鉄山」摧」（統藏一三七・三六d）とある。

(4) 趙州逢人請喫茶：「趙州喫茶去」の公案。既出「史料2―9」。

(5) 趙州：趙州從諗のこと。既出「史料2―9」。

(6) 八角磨盤空裏走：すさまじい破壊力のたとえ。八角磨盤は、古代インドの神話に見える武器の一つ。八つの角をもつ武器が空中を回転して一切のものを破壊する。『円悟仏果禪師語録』卷十八の「頌古上」に「拳、僧問：投子、一大藏教還有奇特事也無。子云、演出一大藏。頓漸偏円、權実空有、釘嘴鉄舌、河目海口。一道清虚亘古今、八角磨盤空裏走」（大正藏四七・八〇〇b）とある。

(7) 只可聞名、不欲見面：ただ名を聞くだけでよい、顔を見ようとは思わない。『景德伝灯録』卷十四の薬山惟儼章に、朗州刺史の李翱が「見、面不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>名」と述べたのに対し、薬山惟儼が「何得<sub>レ</sub>貴<sub>レ</sub>耳<sub>レ</sub>賤<sub>レ</sub>目」（大正藏五一・三一二b）と答えた問答にちなむ。

〔史料3―4〕

(1) 下座巡堂喫茶：既出「史料3―1」。

〔史料3―5〕

(1) 趙州嘗問僧、州云喫茶去：「趙州喫茶去」の公案。既出「史料2―9」。

(2) 趙州：趙州從諗のこと。既出「史料2―9」。

(3) 雖無上馬力、猶有殺人心：気はあつても実力が伴わないたとえ。『物初和尚語録』「慶元府阿育王山広利禪寺語録」に「上堂。拳、僧問：趙州、二龍争<sub>レ</sub>珠、誰是得者。州云、老僧只管看。師云、者僧発<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>問、大似<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>致仕宰相面前、說<sub>レ</sub>少年登科事<sub>レ</sub>一般。只如<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>老僧只管看、又作麼生。雖<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>馬力、猶有<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>人心」（続藏一二一・九三a）とある。

〔史料3―7〕

(1) 山梨県東光寺所藏「蘭溪道隆書状」：山梨県東光寺所藏「蘭溪道隆書状」（東光寺本）のものと、『続禪林墨蹟』一〇五（思文閣出版、一九六五年）（禪林墨蹟本）に個人所藏として収録される「蘭溪道隆書状」を比較し

たところ、書かれている内容はまったくの同一であったが、末尾の「六月初十日建長住持比丘道隆頓首」の部分で、東光寺本は一行で書かれているのに対し、禅林墨蹟本は「六月初十日」で改行されて「建長住持比丘道隆頓首」の一段が記されている。したがって、東光寺本と禅林墨蹟本は同一のものではない。なお、山梨県東光寺所蔵「蘭溪道隆書状」の写真閲覧に際しては、山梨県の法蓋山東光寺様と山梨県教育委員会の野代恵子様にご助力を賜った。

(2) 興国法兄老禅師：不詳。興国寺とあるため、かつては心地覚心宛の書状と考えられていたが、覚心開山の西方寺が、興国寺と呼称されるようになるのは、蘭溪道隆の示寂後であるため当てはまらない。現在のところ宛先は不明であり、ほぼ同内容である「史料3-8」の円爾宛「蘭溪道隆書状写」（『異国日記』所収）との関係も明確ではない。あるいは道隆が建長寺開創初期に茶を各地から集めており、その礼状と見ることもできよう。「史料3-8」が江戸期の書写であるため確定はできないが、内容がほぼ同じで、差し出された日時が一致するのは、同日に書かれた礼状であるがゆえと理解するのが自然ではないか。

(3) 宏規：立派な決まり。『一山国師語録』卷上「太守請、慶讚地藏宝殿、供養五部大乘経」に「眷茲名刹、雄冠東州。始自最明寺創基、大覚師開法。竺嶺真風再振、少林五葉重榮。曩因劫焼之余、未復宏規之旧」（大正蔵八〇・三二六b）とある。また、『五燈全書』卷六十七の嘉興府古南牧雲通門禅師章に「九旬安衆、先聖宏規」（統蔵一四一・二〇六d）とあるのが参考になる。

〔史料3-8〕

(1) 普門堂頭和尚大禅師：臨济宗聖一派祖の円爾（一二〇二〜一二八〇）のこと。駿河（静岡県）の人。五歳で久能山に入り、天台教学を学ぶが、のちに上野（群馬県）長楽寺の栄朝に師事する。嘉禎元年（一二三五）に入宋して各地を歴参したのち、無準師範の法を嗣ぐ。仁治二年（一二四一）に帰朝し、建長七年（一二五五）に東福寺の開山となる。応長元年（一三三一）、花園天皇より聖一国師と諡される。

(2) 普門：京都市東山の東福寺に存した円爾の居所である普門寺のこと。京都市東山の東福寺は嘉禎二年（一二三三

六)に九条道家(一一九三〜一二五二)の発願によって建立されはじめたが、巨大な伽藍の建立には時間がかかった。そのため、寛元四年(一二四六)に普門院(普門寺)を建立して、円爾を住ませた。東福寺が完成するのが建長七年(一二五五)になるので、それまでの期間は円爾は普門寺を中心として活動していた。後には十刹の一つとなるが、現在は廃寺となり、名称のみが東福寺常楽庵に残っている。

〔史料3-9〕

(1) 蘭溪道隆『弁道清規』：本論掲載の蘭溪道隆『弁道清規』は、『延宝伝灯録』所収のものを底本に翻刻している。書誌情報や対校について、詳しくは拙稿『蘭溪道隆『弁道清規』について』(『印度学仏教学研究』第五十九号巻一、一四一〜一四五頁、二〇一〇年)、『建仁寺両足院所蔵『大覚禅師弁道清規』について』(『印度学仏教学研究』第六十三号巻一、二二九〜三四頁、二〇一四年)を参照。なお『延宝伝灯録』所収のうち、「定集」については、意味内容から永久文庫所蔵本に基づき「定準」としている。

(2) 念茲在茲：常に心に思うこと。このことをいつも心にかけて忘れない。『書経』(『尚書』とも)「大禹謨」に禹のことばとして「帝念哉。念茲在茲、積茲在茲、名言茲在茲、允出茲在茲、惟帝念功」とある。大禹謨は中国の伝説上の聖王で、夏王朝の始祖。夏禹・大禹とも称される。

(3) 間不容髮：間髪を容れず。髪の毛一本も入れるすきまのないこと。微塵のへだたりもないこと。『文選』「枚乗」「上書諫吳王」に「其出不<sub>レ</sub>出、間不<sub>レ</sub>容<sub>レ</sub>髮」とある。

(4) 迷已顛倒、逐物奔馳：迷已逐物。『首楞嚴經』巻二に「一切衆生、從<sub>二</sub>無始<sub>一</sub>來、迷<sub>レ</sub>已為<sub>レ</sub>物、失<sub>レ</sub>於本心、為<sub>二</sub>物所<sub>レ</sub>転<sub>一</sub>」(大正蔵一九・九四五c)による。雪峰下の鏡清道愆(八六八〜九三七)の間答として、『景德伝灯録』巻十八の龍冊道愆(鏡清)章に「師問<sub>レ</sub>僧、門外什麼声。曰、雨滴声。師曰、衆生顛倒、迷<sub>レ</sub>已逐<sub>レ</sub>物」(大正蔵五一・三四九c)とあり、『碧巖録』巻四十六則「鏡清雨滴声」には「拳、鏡清問<sub>レ</sub>僧、門外是什麼声。僧云、雨滴声。息清云、衆生顛倒、迷<sub>レ</sub>已逐<sub>レ</sub>物。僧云、和尚作麼生。人清云、泊不<sub>レ</sub>迷<sub>レ</sub>已、意旨如何。清云、出身猶可<sub>レ</sub>易。脱体道<sub>レ</sub>應難」(大正蔵四八・一八二b)とある。

- (5) 四次：四次坐禅・四時坐禅。黄昏、後夜、早晨、晡時の四時の坐禅のこと。北宋の『禅苑清規』には四時の規程はないが、栄西の『興禅護国論』や道元の『弁道法』にはそれを示しているから、南宋の禅林で行なわれたものであろう。ただし、時代によって四時の坐禅の時刻には変遷がある。拙稿「鎌倉期の禅宗の坐禅について」（『古代中世日本の内なる「禅」』、『アジア遊学』一四二号、勉誠出版、二〇一一年、六二―七三頁）を参照。
- (6) 転身向外：面壁坐禅からの転身を指す。鎌倉時代は曹洞宗、臨済宗を問わず四時坐禅の際には面壁坐禅をしていた。そして、江戸時代に隠元隆琦などが来朝し、明末の禅宗が導入された際、面壁しない坐禅が導入されて、以後、それが臨済宗などでも受容された。詳しくは、拙稿「鎌倉期の禅林における面壁坐禅」（『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』十二、二〇一一年、二二九―二三四頁）、「江戸期の禅林における面壁坐禅」（『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』十四、二〇一三年、二四九―二五四頁）を参照されたい。
- (7) 普門品：『法華経』の第二十五品。略して観音経、または普門品とも。観世音菩薩が三十三身を現じあまねく説法し、衆生を濟度する妙用を宣説したものの。古くから法華経から別行して誦誦され、長行と散文からなり、偈頌だけでも単独に用いられる。アジアの広い地域にみられる観音信仰は、おそらくこの経の伝播にはぐくまれたものである。禅宗でも日用經典の一つとして重視されている。
- (8) 八句陀羅尼：『楞嚴咒』の最末尾の陀羅尼のこと。「唵」以下の八句で、八句陀羅尼という。日本の禅林で八句陀羅尼を唱える事例として、鎌倉期には蘭溪道隆の『弁道清規』、心地覚心の「誓度院條々規式」の「三時勤行事」（『鎌倉遺文』第二十三卷「一七八六七」）が確認される。また、永祿八年（一五六五）頃に撰述された『諸回向清規』巻四「諸葬礼法式之部」（大正蔵八一・六六四c）に、中陰の間の勤行として、後夜坐禅（五更）の後と、黄昏坐禅（初更）の前に「八句陀羅尼」の誦誦が規定される。他に、『小叢林略清規』巻上「日分清規」第二（大正蔵八一・六九三b）、毎日の晩課で「八句陀羅尼」を誦誦していることが確認される。

〔史料4―1〕

(1) 月峰了然：臨済宗大覚派の月峰了然（生没年不詳）のこと。京兆（京都府）の人で、もと大学博士。蘭溪道隆

の法を嗣ぐ。鎌倉極楽寺（後の淨妙寺）の開山となる。七十一歳で示寂。『月峰和尚語録』一卷が存する。

(2) 瀧山在方丈内、過於鷺子：既出「史料2—20」。

(3) 瀧山：瀧山靈祐のこと。既出「史料2—20」。

(4) 仰山：仰山慧寂のこと。既出「史料2—20」。

(5) 香巖：香巖智閑のこと。既出「史料2—20」。

(6) 耳不往声处、色非到眼中：『首楞嚴經』卷三に「阿難汝更聽、此祇陀園中、食辦擊鼓、衆集撞鐘、鐘鼓音声、前後相統。於意云何、此等為是。声来耳边、耳往声处」(大正藏一九・一一五c)とある。

(7) 見聞如幻翳：『首楞嚴經』卷六に「六根成解脱、見聞如幻翳」(大正藏一九・一三一a)とあり、『宛陵錄』にも「問、聖人無心即是仏。凡夫無心、莫沈空寂否。師云、法無凡聖亦無沈寂。法本不有、莫作無見。法本不無、莫作有見。有之与無、無是情見、猶如幻翳。所以云、見聞如幻翳、知覺乃衆生」(大正藏四八・三八四b)とある。

〔史料4—2〕

(1) 不与方法為侶底是什麼人：龐居士が馬祖道一に参じた際の問答。『景德伝灯録』卷八の龐居士章に「後之西江西参問馬祖云、不与方法為侶者、是什麼人。祖云、待汝一口吸尽西江水、即向汝道。居士言下頓領玄要」(大正藏五一・二六三b)とある。

(2) 天不能蓋、地不能載：天でも覆うことができず、地にも載せることができない。天地を超えたありよう。『碧巖録』第七則「法眼答慧超」の垂示に「垂示云、声前一句、千聖不伝。未曾親覲、如隔大千。設使向声前辨得、截断天下人舌頭、亦未是性慍漢。所以道、天不能蓋、地不能載。虚空不能容、日月不能照。無仏処独称尊、始較些子」(大正藏四八・二四七a)とある。

(3) 昼見日、夜見星：『景德伝灯録』卷の長沙景岑章に、「上堂(中略)又云、成仏成祖出不得。六道輪迴出不得。僧云、未審出箇什麼不得。師云、昼見日、夜見星」(大正藏五一・二七四a)とある。

- (4) 逢茶喫茶、逢飯喫飯：遇茶喫茶、遇飯喫飯に同じ。『碧巖録』第九則「趙州東西南北」の本則評唱に「但只遇<sub>レ</sub>茶喫<sub>レ</sub>茶、遇<sub>レ</sub>飯喫<sub>レ</sub>飯、此は大妄語。謂<sub>レ</sub>之未<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>、未<sub>レ</sub>証<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>証」（大正蔵四八・一四九b）とあり、『碧巖録』第八十則「趙州孩子六識」の本則評唱に「但隨<sub>レ</sub>時自在。遇<sub>レ</sub>茶喫<sub>レ</sub>茶、遇<sub>レ</sub>飯喫<sub>レ</sub>飯。這箇向上事、著<sub>レ</sub>箇定字<sub>レ</sub>也不<sub>レ</sub>得。著<sub>レ</sub>箇不定字<sub>レ</sub>也不<sub>レ</sub>得」とある。

〔史料4―3〕

- (1) 世尊言、此大涅槃、金剛宝藏：『大般涅槃經遺教品第一』に「爾時、仏告<sub>二</sub>阿難普及大衆、吾滅度後汝等四衆、當<sub>二</sub>勤護<sub>一</sub>持我大涅槃。我於<sub>二</sub>無量<sub>一</sub>万億阿僧祇劫、修<sub>レ</sub>此、難<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>大涅槃法<sub>一</sub>。今已顯說。汝等當知<sub>二</sub>此大涅槃<sub>一</sub>乃是十方三世一切諸仏金剛宝藏」（大正蔵十二・九〇〇c）とある。

- (2) 謂我滅度、亦非吾弟子：『聯灯会要』卷一の釈迦牟尼仏章には「世尊、一日、於<sub>二</sub>涅槃会上<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>手摩胸、告<sub>二</sub>大衆<sub>一</sub>云、汝等善觀<sub>二</sub>吾紫摩金色之身<sub>一</sub>、瞻仰取足、勿<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>後悔<sub>一</sub>。若謂<sub>二</sub>吾滅度<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>吾弟子<sub>一</sub>。若謂<sub>二</sub>吾不<sub>レ</sub>滅度<sub>一</sub>、亦非<sub>二</sub>吾弟子<sub>一</sub>。時百万億衆、悉皆悟道」（統蔵一三六・二二二b）とある。

- (3) 蚊虻上鉄牛：蚊虻は、かとおぶ。蚊子上鉄牛に同じ。蚊が鉄牛を刺そうとしてもくちばしが入れようもない。とりつくしまのない頑丈さの形容。『景德伝灯録』卷九の瀉山靈祐章に「雲巖却問<sub>レ</sub>師、百丈大人相如何。師云、巍巍堂堂、焯焯煌煌。声前非<sub>レ</sub>声、色後非<sub>レ</sub>色。蚊子上<sub>二</sub>鉄牛<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>汝下嘴処<sub>一</sub>」（大正蔵五一・二二六b）とある。

〔史料4―4〕

- (1) 趙州喫茶公案：「趙州喫茶去」の公案。既出「史料2―9」。

- (2) 趙老：趙州從諗のこと。既出「史料2―9」。

- (3) 露柱灯籠：無情物のたとえ。『碧巖録』第十五則「雲門倒<sub>レ</sub>説」の本則評唱に「設使一時無<sub>レ</sub>言無<sub>レ</sub>句、露柱灯籠何曾有<sub>二</sub>言句<sub>一</sub>」（大正蔵四八・一五五b）とある。

〔史料5―1〕

- (1) 兀庵普寧：臨濟宗破庵派の兀庵普寧（一一九八―一二七六）のこと。西蜀（四川省）の人。無準師範の法を嗣

ぐ。景定元年（文応元年、一二六〇）に來朝し、博多聖福寺、京都東福寺を經由して鎌倉建長寺に入る。弘長二年（一二六二）に蘭溪道隆が京都建仁寺に移ると、建長寺の第二世となった。道隆の後を受けて北条時頼を接化し、弘長二年に普寧は時頼に印可した。時頼が遷化すると、文永二年（一二六五）に帰国した。婺州（浙江省）の雲黄山宝林寺（双林寺）や、温州（浙江省）の江山龍翔寺に住する。至元十三年十一月二十四日に示寂。宗覺禪師と諡する。『兀庵和尚語録』三卷が存する。

(2) 智門和尚く荷葉：『碧巖録』第二十一則「智門蓮花荷葉」に「拳、僧問「智門、蓮花未レ出水時、如何。智門云、蓮花。僧云、出水後如何。門云、荷葉」（大正藏四八・一六一c）とある。

(3) 智門和尚：宋代、雲門宗の智門光祚（生没年不詳）のこと。浙（浙江省）の人。香林院澄遠の法を嗣ぐ。随州（湖北省）智門寺に住し、雪竇重顕をはじめ三十余人を育成した。『古尊宿語録』卷三十九『智門祚禪師語録』一卷が存する。

(4) 鞏県造茶瓶、一隻三箇嘴：「鞏県茶瓶、多口多嘴」とも。無駄なおしゃべり。無用な多口。鞏県は河南省宋陽県の西、洛水の東岸で、伝によれば、ここから産する茶瓶は口が多いとされる。

〔史料6—1〕

(1) 円爾：円爾のこと。既出「史料3—8」。

(2) 応節納祐く平地喫交：『大慧普覚禪師語録』卷一「徑山能院禪院語録」に「歳旦上堂。拈拄杖空中、作書」字勢云、正朝把筆万事皆吉。応レ時納レ祐、慶無レ不レ宜。若作二世諦流布、平地喫交一。更在二弘法商量、眉鬚墮落一。卓二拄杖一下座（大正藏四七・八一四a）とある上堂に基づく。

(3) 喚鐘作甕：鐘のことを甕だと早合点すること。襄州洞山第二代初禪師語録』には「問、法不二孤起、仗レ境界生。向上一路、請師便道。師云、聽レ事不レ真、喚レ鐘作レ甕」（統藏一一八・三二四c）とあり、『無門関』第七則「趙州洗鉢」に「趙州因僧問、某甲乍入二叢林、乞師指示。州云、喫レ粥了也未。僧云、喫レ粥了也。州云、洗二鉢盂一去。其僧有レ省。無門曰、趙州開口見胆、露レ出心肝。者僧聽レ事不レ真、喚レ鐘作レ甕」（大正藏四八

・二九三c（二九四a）とある。

〔史料6―2〕

- (1) 乾峰示衆云く不得普請：『雲門匡真禪師広録』卷三「遊方遺録」に「乾峰示衆云、拳<sub>レ</sub>一不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>拳<sub>レ</sub>二、放<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>一著<sub>レ</sub>落<sub>レ</sub>二在第二。師出<sub>レ</sub>衆云、昨日有<sub>レ</sub>人從<sub>レ</sub>天台<sub>レ</sub>来。却往<sub>レ</sub>径山<sub>レ</sub>去。峰云、典座来日不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>普請<sub>レ</sub>」（大正蔵四七・五七四c）とある。
- (2) 乾峰：唐末、曹洞宗の乾峰和尚（生没年不詳）のこと。洞山良价の法を嗣ぐ。越州（浙江省）に住した。詳しい行実是不明。
- (3) 雲門：雲門宗祖の雲門文偃（八六四〜九九九）のこと。嘉興（浙江省）の張氏。南嶽下の睦州道蹤に謁し、三度門を閉じられ足を挫いて大悟した。その後、青原下の雪峰義存の法を嗣ぐ。韶州（広東省）の雲門山光泰禪院を建立して開山となり、常時千人の修行者が雲集していたという。雲門宗の開祖として知られる。『雲門匡真禪師広録』三卷が存する。
- (4) 天台：台州（浙江省）天台県の天台山のこと。既出「史料1―1」。
- (5) 径山：杭州（浙江省）余杭県の径山興聖万寿寺のこと。五山の第一位。天目山の東北の峰にあり、径<sub>み</sub>が天目山に通づることから径山と名付けられた。唐の天宝年間（七四二〜七五六）に国一禪師法欽が庵を結び、代宗の命で大暦四年（七六九）に伽藍が建立された。南宋代に大慧宗杲（二〇八九〜一二六三）・無準師範（一一一七〜一二四九）・虚堂智愚（一二八五〜一二六九）などが住した。また、日本僧の道元や円爾もこの寺に参学している。元末に兵火によって焼け、洪武年間（一三六八〜一三九八）に重建されている。『径山志』十四巻が存する。
- (6) 袖裏藏金鍬：袖裏金鍬とも。力のすぐれた人が金鍬を袖の中に隠し持っている。『圓悟仏果禪師語録』卷一「上堂」に「上堂云、大人具<sub>レ</sub>大見<sub>レ</sub>、大智得<sub>レ</sub>大用<sub>レ</sub>。胸中懷<sub>レ</sub>六合<sub>レ</sub>、袖裏掛<sub>レ</sub>金鍬<sub>レ</sub>」（大正蔵四七・七一七b）とある。



## 上村観光来簡集『交遊帖』解題と翻刻

堀川貴司

ここに紹介するのは、稿者架蔵の書簡集で、すべて上村観光宛てのもの全二〇通が卷子本一軸に仕立てられていた。緑色卍繫地に牡丹を摺り出した蠟染の表紙（二二・〇×二七・九釐）、紫檀の軸頭、桐の共箱の蓋表に打付墨書で「交遊帖」と記されている筆跡は観光自筆と思われ、「交遊」という命名から見ても、観光自身によつてこの形にまとめられたものであろう。

差出人は、順に近重真澄、松本文三郎、荻野仲三郎、林泰輔、瀧精一、（不明）、鳥居素川、結城素明、藤井乙男、和田万吉、幸田成友、辻善之助、黒板勝美、島文次郎という、大正期の仏教学・美術史学・漢文学・国文学・国史学等々を代表する学者たちである。

近重・松本・荻野・藤井・辻・黒板らは観光が主筆を務めた月刊雑誌『禅宗』にしばしば寄稿している。書簡の内容は多く観光に禅宗史上の不明点につき教示を仰いだり、京都の禅寺への紹介を頼んだり、といったもので、学者たちにとつて寺院資料へのアクセスの仲介役を観光が果たしていたことがわかる。観光もそのようなつながりを持つことで、『禅宗』への寄稿者を増やしていったのであろう。

彼が京都禅宗界と東西アカデミズムを結ぶキーパーソンになっていたことは、『禅宗』一八卷二号（一九〇号、明治四四年一月）の「忘機日乗」、同二号（一九二号、同二月）の「壺中日乗」という病間日録にも活写

されている。四三年一二月一〇日から翌年一月一日までのもので、その間の来訪者は、学問関係者に限つても富岡謙蔵、新村出、吉沢義則、小川琢治、湯浅半月、藤井乙男、島文次郎、桑名鉄城、大江文城、佐賀東周、内田銀蔵ら、来簡では古城貞吉、境野黄洋、藤井乙男、近重真澄、和田万吉、出簡では辻善之助、黒板勝美、森大狂などの名前が見える。

和田や幸田は、古くからの愛書家仲間である。徳富蘇峰記念館所蔵の蘇峰宛上村觀光書簡は、多く觀光が入手したり仲介を頼まれた古典籍を蘇峰に取り次ぐような内容であるが、某年五月一日付（明治末あるいは大正前半か）の葉書は、湯浅半月（蘇峰の姉が半月の兄に嫁いでいる）が記したもののらしく、「五山文学の上村と一酌を催して大兄を懐想致候」との文面と、「桃華生」（富岡謙蔵）、「出子」（和田万吉）、「閑堂」（觀光）の署名が並ぶ。半月はわざわざ「註 桃華君は御存じの富岡氏、出字君は和田図書館長、閑堂君は五山文学の著者」（読点を補った）と記しているが、蘇峰には言わずもがなであつたろう。幸田については書簡7を参照されたい。

以下、各書簡冒頭に差出人の略伝と内容に関する略注を掲げた上で翻刻する。文字は通行字体に直し、句読点を補っている。誤字脱字、ミセケチ等は適宜注記した。

#### 1 近重真澄（「大正九年」九月二三日付 一八・一×一二〇・〇糶、素紙三枚継墨書

一八七〇〜一九四一。号、物安（庵）。化学者、京都帝国大学教授。禅・茶道・漢詩にも詳しく、その方面の著作もある。文中の詩は『禅宗』二七卷一一号（三〇八号、大正九年一月）の文苑欄に「閑堂道人新

「居偶成」の題で載る。ただし「芝」を「斐」に、「尽未伝句」を「語皆仙趣」に、「幽谷白雲」を「的是寒山」に作る。おそらく「斐」は誤植、他の二箇所は本人かまたは觀光による推敲で、文面にある「大正の寒山子」を活かしたものであろう。翻刻では読み下しを補った。「涙痕録」は、觀光が母の逝去について記した和文で、『禪宗』二七卷九号（三〇六号、大正九年九月）所載。短歌が一〇首含まれ、そのなかに「きのうけう執るものうし筆つかをつきせぬなみたいかてはらはむ」とある。

肅啓 秋涼適意、高堂愈御清祥奉恐賀候。先日は御近辺迄罷出候序ニ、御邪魔申候て、尚ほ何処へか御案内申上けんと存候処、却而清羞を供せられ、芳情鳴謝之至ニ存候。後に心付き候得共、御外出之御予定あらせられ、時間の御都合を妨害いたし候事と恐縮仕候事ニ御さ候。御新宅誠に結構、一詩相試候まゝ奉呈、叱教を乞候。

訪閑堂道人於其新居偶成

纒叩柴門習氣除（纒かに柴門を叩けば 習氣 除かる）

紫芝香草感如々（紫芝 香草 感 如々たり）

壁間題尽未伝句（壁間 題し尽くす 未伝の句）

幽谷白雲仙子居（幽谷 白雲 仙子の居）

政

大正の寒山子と見立たる積ニ御さ候。

涙痕録、不覚落涙御事候。貴兄の多能なる、和哥<sup>哥</sup>まで勘能<sup>能</sup>とは驚嘆仕候。固より印刷之誤植とは存候得とも、

今日はけふに、けうにあらす。一寸申上候。

右先日の御礼をかね、諸用とりませ寸椿如此ニ御さ候。尚小生土日月之三日の夜分は大抵在宿、且つ閑暇を得られ候。御来光奉待候。早々不乙

真澄拝 九月廿三日

閑堂先生侍史

返々、御令政様へもよろしく御致声是祈候。以上

## 2 近重真澄 某年八月五日付 一八・〇×九八・八糶、素紙二枚継墨書

文中「悪智悪覚」(悪知悪覚)は、身につけてしまった悪い智恵。『無門関』冒頭に見える。「俠骨論」は近重著『物庵禅話』(文泉堂、一九二二)の第五章が「俠骨論」と題されているので、それを指すとすると、本書簡はそれ以前の成立か。

拝啓 御約束のもの、大ニ延引、昨夜半ニ漸ク脱稿、被持上候。御落手、御出版と否トハ貴意ニ任せ候。実際物ニなり居らず。将又別冊ハ、頃者英国なる未知の友より贈与せられ、一読致候処、高等数学ニ基く智恵の弊害を列挙し、吾人者コンモン、センス以上の小智ニ迷さるゝことなかれと論居候。宗乗の上より見れば、更ニ一步を進めて、ソノコンモンセンスも亦た打破、一生を要すへきものなれとも、ソコ迄ハ外人ニは六ヶ敷事ナラン。Fake Education ハ、訳して悪智悪覚論とすへく、一訳の価値可有と存し、俠骨論の代ニ著手致しかケ候得とも、病余慵懶の情ニ不堪、相ヤメ候。貴覽ニ入候間、御試ミナサレ候テハ如何也。右ハ当月

中位ハ御借し申上候テモよろしく御坐候。先ハ不取敢右当用のミ如此御さ候。再拝

八月五日 物庵生

上村先生足下

### 3 松本文三郎

某年一月二日付 一八・〇×四六・七糶、素紙二枚継墨書

一八六九〜一九四四。仏教・美術学者。インド仏教およびインド美術が専門。京都帝国大学教授、東方文化研究所長などを歴任。文中「波雪村」は、室町後期の画家雪村周継のことで、蕨のような波頭の書き方を創始したことからそう呼ばれる。

拜啓 昨日は御出先之所を御邪魔致奉多謝候。扱甚々唐突之義に候得共、其節拜見仕候波雪村のメクリ一葉、何とかして御割愛御譲被下間敷哉。此段懇願之至ニ不堪候。勿論急ぐ必要無御坐候間、貴兄媛々御賞翫之後にても宜敷候。右御願まで。頓首

十一月十二日 松本文三郎

上村観光様

### 4 荻野仲三郎

大正八年一〇月二三日付 一八・五×七八・五糶、素紙二枚継墨書

一八七〇〜一九四七。歴史学者。日本史が専門で、古美術保存事業にも関わる。東京女子高等師範教授・陽明文庫主管を務める。文中『本朝高僧伝』は卍元師蛮編、宝永四年（二七〇七）刊の僧侶伝記集成。編

者は臨済宗僧であるが、対象は各派に及ぶ。南化玄興（妙心寺住持、一五三九〜一六〇四）および愚堂東寔（妙心寺住持、一五七七〜一六六一）の伝はともに巻四四に収められ、文面どおりの国師号が贈られたことが末尾にそれぞれ記されている。

拜啓 時下秋冷之節、弥御安祥奉賀候。当夏郡山之一夜已来音問を欠き、疎情に候が、御近況如何に候哉、奉伺候。何時ぞや御伺申上候国師号一件にて、南化・愚堂に国師号宣下なき由承り候処、本朝高僧伝には南化に定慧円明国師、愚堂に大円宝鑑国師之勅諡有之候由記載有之候。小生之何ひ違かとも存候へ共、再応御意見伺度候。折返し御高見御漏願上候。敬具

大正八年十月十三日 荻野仲三郎

上村老兄侍史

### 5 林泰輔 某年九月二日付 一七・二×七三・一糶、素紙二枚継墨書

一八五四〜一九二二。歴史学者。東京高等師範学校教授。朝鮮史および中国古代史が専門、甲骨文字や『論語』および孔子の研究で知られる。旧蔵書は筑波大学林文庫に収め、原稿類の一部が慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に寄託されている。文中「木製活版本論語抄」とは、現在筑波大学附属図書館蔵の『論語抄』二〇巻（巻一九・二〇欠、ロ六六〇―二）のことであろう。「芳郷」は芳郷光隣。東福寺の僧。同書に論語についての彼の講説が引用されていること、「外記常忠云」という文言も見えることは、阿部隆一「室町以前邦人撰述論語語孟子注釈書（上）」（『斯道文庫論集』二、一九六三・三）にも指摘がある。同論文では

同書を、清原家において禅僧の説を取り入れて室町末・近世初に成立したものと推測する。

拜啓 未得拜芝候得共、愈御多祥之段、敬賀此事ニ御座候。陳ハ、甚突然之儀ニ候へ共、兼々尊台にハ、五山文学等に就てハ精細なる御研究被遊候由、承り及候ニ付、御多忙中誠ニ恐縮ニ御坐候へ共、左之件御示教を仰き度、御願申上候。

別紙之文ハ、木製活版本論語抄ニ有之候ものなるか、文中西京東洛ト有之候ハ、京の西、京の東と申事ニ候哉。或ハ僧侶の間ナドにて南都北嶺ナド申様に、其派を分ち候事も有之候ものなるか。又芳郷と申僧ハ、東福寺第二百世ニ、芳郷名光隣、天文五年滅、と申者と、鎌倉円覚寺第四百十一世に、芳郷諱妙統、文明七年寂、と申者と有之候由ニ候か、何れの方と見るか適當なるへきか。万里ハ漆桶万里なるへくと存候へ共、翰林学士大外記と申ハ、清原業忠（常忠）なりや否や。翰林学士と申事、聊不審の廉も有之、誠ニ決定致し兼候ニ付、もし御高教を辱うし、渙然氷積することを得は、大幸不過之候。先ハ右御願上如斯御座候。敬具

九月二日

林泰輔

上村観光様

尚右論語抄ハ、出版年月及著者之名ハ無之候が、製本活字等より見れば、寛永以前之ものと被察候。而して著者ハたぶん清原家にて、足利時代のものなるべくと存候。

6 瀧精一〔大正七年〕六月二十九日付 一七・五×九七・二糶、素紙ニ枚継墨書

一八七三〜一九四五。美術史学者。東京帝国大学教授。専門は日本美術史。美術研究雑誌『国華』の編集

に長く携わる。文中「玉稿」とは、観光の「青萍博士の三教思想研究を読む」であろう（青萍は末松謙澄の号）。上中下の三回に分け、『国華』三三八・三四〇・三四一（大正七年七月・九月・一〇月）に、『禅宗』二五巻八・一〇・一一号（二八一・二八三・二八四、大正七年八月・一〇月・十一月）に掲載されている。

尊翰拝誦仕候。先頃より御出京相俟、例之御旅宿へも問合せなど致居候も、御出無之、如何と存居候。折柄之御書面二候玉稿ハ目下校正中ニ有之候。印刷之上ハ如貴命早速ゲラ一通御送可申上候。然るニ国華ハ大抵廿日後之発行を例とする様之次第に有之候に付、禅宗の方へは八月より御載録之御都合に御願申上度希望之至ニ御坐候。尚小生ハ多分両三日中ニ京阪へ出張可仕ニ付、此度は是非拝顔を得度存申候。右御返事旁々匆々如此候。頓首

六月二十九日 精一

上村老台坐下

7 幸田成友（大正一二年）一〇月一三日付 一九・〇×（五二・五五二・九）糰 八〇〇字詰原稿用紙（二

〇字詰四〇行、「日比谷用紙」とある）二枚、ペン書

一八七三〜一九五四。歴史学者。慶應義塾大学教授・東京商科大学教授。日本経済史・日欧交渉史を専門とし、蔵書家としても知られ、両大学に「幸田文庫」がある。露伴は兄。妹の延・（安藤）幸は共に音楽家。成友は、明治三四年大坂市史編纂主任となり、四二年まで勤務、その後京都帝国大学講師を一年務め、四三年に慶應義塾大学教員となった。この間、訪書のため休日は京都・奈良に出かけ、京都では富岡謙蔵

（鉄斎の子）と知り合い、その紹介で上村観光とも知遇を得、三人でよく酒を飲んだという（幸田成友著作集七所収「富岡家三代」）。震災時は、慶應義塾大学教員および東京商科大学予科教授兼同大学助教。今宮新「恩師幸田先生の思い出」（著作集別巻附録の月報8所収）には、赤坂丹後町（現在の赤坂四丁目の一部）に居住、一三年に荻窪（第一巻附録月報5所収、柿原謙一「幸田成友先生御夫妻と一学生」に上荻窪一ノ三とある）へ転居したとある。文中「田中萃一郎」（二八七三〜一九二三・八・一三）は東洋史学者、慶應義塾大学教員。蔵書は田中文庫として慶應義塾図書館にある。また「村口、浅倉、横尾、いそべや」は村口書房（神田今川小路）、浅倉屋（浅草）、横尾文行堂（上野広小路）、磯部屋（麹町）という、神保町・本郷の二大古書街以外にある有力古書店を挙げたもの。「小川町」は神保町のことであろう。「鹿田君」は大阪を代表する古書店鹿田松雲堂の主人三代鹿田静七。

拝啓 御見舞二預り難有存候。實際今度の地震及び火事には驚かさされ申候。○地震の際は小生丁度小川町を電車二乗じ通行致居りし際にて、その節はさして恐怖も感ぜざりしが、小川町より一直線二電車道路を我家に立帰り、その後は殆ど何日二何をせしやを忘れ候位、夢中に十日余を暮し候。幸に小生及び家族一同無事、当時次女は学校へまゐり居り、妻は姉方へまゐり居り、小兒一人宅二居り候始末、能く無事に往来へ出でしものと存候。小生の親戚、横浜・平塚・小田原等劇震地に居りしも、幸二一同生命二別条なし、但し家ハ崩潰したるあり。又妻の方の親戚も無事、たゞし焼出されあり崩潰あり。拙宅去月二日より一昨日まで多き時八十一人、少き時も七人の罹災者寐とまり致居り（妻の親戚）、トテモ机に向つてゆるく、勉強など出来ず、寢道具・衣服・食器等眼前に横り、掃除も出来ず、塵埃と怒声・罵声・泣声（近処二沢山あり）の中に暮し

候。昨日より坐敷を掃除いたし、ホット一息つき候。○小生宅は元來借家なれば、雨が降らうが風が吹うが一向かまハねど、雨もりには閉口、タラヒ・バケツ其他あらひざらひの容器を坐敷中にとり散かし、首をスボメてゐる処など、滑稽とやいはん、悲酸とやいはん。況や電灯（「氣」ミセケチ）なく水道なき震災後の数日間ハ、淋しい感致候。○人間は非常ニ野蠻になり、喧嘩をするか、哀憐を請ふか、盜賊をするか、甚だ極端に陥り候。市街の復興もさる事ながら、人心の復興も一大事と存候。誰も高唱する人がないので、驚いてゐる位です。○小生ハ被害極めて少き方なり。併し商科大学が焼け、その構内の研究室も焼けたので、同所に置いた蔵書六段の大本箱につめたものハ、全部烏有に歸し候。これにはさしあたり閉口、それに自分の蔵本の外、慶大・商大より借入れし本も若干焼失、同大学の納屋に入置きしもの（雜誌及び和書）は助かりしが、取出の際地上に落ちしか焼けしが一部分損失、而して納屋ハ無事ニ残り候。ソロヒしものが半端ツブになりしには当惑、これも大本箱一杯有之候。死んだ子の年を数へると同じく、愚痴の話ながら、焼けたものがおしく、たま〜あの本を出さう（「読まう」ミセケチ）、此の本を出さうと、我家を捜すと（「読まうとすると」ミセケチ）、ホイアレも焼いた、之も焼いたといふ事にて口惜しく相成候。尤も小生が焼いたのハ主として洋書及び活版書（全蔵書の1/5位の冊数にして）ミセケチ）にて和書ハ少々也。まだ家ニハ相応ニあり。されど、此の位愚痴なれば、蔵書全部なくした人ハ嘸かしと同情に不堪候。○帝大図書館の丸焼も、史料編纂の残りしも、不思議といふべく、今度の火災は普通の火事と違ひ、石造も煉瓦も鉄筋コンクリートも安全といはれず、風の方向も滅茶〜にかはり、小生ハ一日・二日の両日は姉の宅（麴町・紀尾井町）と自分の宅との間をウロ〜致し、四日・六日・八日と三四日て親戚まいを致候。○六日向島の兄を訪はんとて両国を渡り、被服廠の傍を通り、惨憺たる光景を目撃いたし候。吾妻橋・厩橋落ちし為に、斯様な大迂回を致せしなり。

浅草の観音が残つて居るが不思議なり。○こんな事書けばいくらもあれど、もうやめます。地震騒ぎさへなけれバ、先月十日前後、授業始まる前、一寸御地に行く筈なりしも、一切水泡に帰したり。地震後あまり東京の殺風景なるを厭ひ、西遊せんとせしが、ソレにては余りノンキらししと妻共よりいはれ、又途中の混雑話をきゝて、恐をなし、遂に中止せり。焼失の為商大は十一月一杯休みなれど、慶応ハ焼けざりし為授業本（先「ミセケチ」）週より開始、商大へハ復興事業手伝として又夜警監督として、教師一同日を定めて呼出され、町内の夜警にも呼出され候。読書も殆と出来ず、友人慶大教授田中萃一郎氏死去のため八月の暑中（「ハ滅茶」ミセケチ）、箱根より帰り其の儘箱根に行かざりし、箱根の義弟宅は新築中（殆と成就）の三階ツブレ、召仕に男女四人の死者を出し候。慶大の学生と共に、本日にて二回、田中氏の遺書整理に著手候。これが本月にありて本を見た位なり。東京の本屋ハ（村口、浅倉、横尾、いそべや其他）殆と全焼、明治出版の活版本が大層高くなつた（小川町の本屋も全部焼失したので焼失本の再蒐集を鹿田君へ注文した処、馬鹿高なつ腕なたとの返事あり）といふことです。

十月十三日

幸田成友

上村閑堂様

奥様に宜敷、御令弟の方も御無事と存じますが、いかゞ。○在京都諸兄へも全然御無沙汰、自然御出会も有之候ハ、宜敷く。

8 近重真澄（大正二四年）五月二八日付 一九・四×五九・八糶、素紙一枚墨書

文中「誠拙」は誠拙周樗（二七四五〜一八二〇）、臨濟宗僧侶。円覚寺・相国寺で活躍、書画に巧みで、詩

文および和歌の集を残す。福山老叟（今井福山）「誠拙禪師忘路集提唱」が『禪宗』二九卷四号（三一五、大正一一年四月）から三二卷三号（三五九、大正一四年三月）まで断続的に三〇回連載された。

拜啓 新緑適意の節、雅台益御清祥奉賀候。然れは禪宗誠拙詩解満了大慶ニ存候。乃ち装釘せんと欲し、取調候処、大正十二年九月分ト存候講義第十五回、紛失致居り残念ニ有之、若し補ふことを得れば好都合と存之、御本御無心申上候。乍御面倒、御残部有無御調下され間敷哉。右御依頼まで。草々

五月十八日 物安

閑堂先生侍史

**9 不明** 某年某月某日 一七・二×四六・七糶、綠色纖維漉込料紙二枚継墨書

署名が難読。内容からすると東京在住の学者であろう。

拜啓 鉄齋居士揮毫ニ就ては信ニ御高配相蒙、多謝仕候。渴望を医し候。御礼乍ニ東京名物少許進呈仕度、小包便ニ托し申候。御笑納下され候ハゞ幸甚。 ■ ■

上村老台侍史

**10 鳥居素川** 某年二月二〇日付 一八・一×五七・三糶、素紙二枚継墨書

一八六七〜一九二八。言論家。名、赫雄。熊本出身、大阪朝日新聞社主筆。大正七年米騒動の記事で筆禍

事件（白虹事件）が起き退社。文中「听叔顕暲」（中暲ともいう）は一五八〇〜一六五八、相国寺の僧。公家の日野輝資の子で、鹿苑院塔主として『鹿苑日録』の筆者の一人でもある。「五山文学」は『五山詩僧伝』（明治四五年刊）か。末尾に別号等の一覧あり。「雪溪」は雪溪集立（？〜一六三九）か。啓書記（賢江祥啓）は室町中期〜後期の画僧であり、時代が合わない。

拝啓 未得拝眉候へとも、夙に御高名拝承仕居候。偕突然之御尋ねに候へとも、

楽窩子。幻松。听叔顕暲

といふ禅僧は何書にて其伝記を調べ候へば宜しく候や。貴著五山文学末尾の索引の部にては唯以上の外分り不申候。伝記も欠如仕候間、甚た御手数に候へとも、御教示被下度、小生右楽窩子より雪溪禅師への書翰を所持し居、雪溪禅師は啓書記と存候也。拝具

十二月二十日 鳥居赫雄

上村賢台

11 鳥居素川 某年二月二十六日付 一八・〇×二八・一糶、素紙一枚墨書

書簡10の翌年に記されたものであろう。

尊書辱く拝見いたし候。御多用中御取調被下、難有々々。物ハ楽窩子より雪溪禅師への漢文書簡にて、文も書も逸品にて、楽窩子を知りたく御尋ね申上候也。右御礼迄。拝具

二月廿六日 鳥居

上村賢台

**12 結城素明** 某年九月一〇日付 一五・四×二二・〇糎、東京三越製一〇行青罽線便箋墨書

一八七五〜一九五七。日本画家。本名、貞松。東京美術学校助教（二九〇五〜一三三）および教授（二九一三〜四四）。文中「山田師」は大徳寺真珠庵住職の南山宗寿か。「皆々」というのは、東京美術学校の学生か。彼らを引率して京都・奈良の文化財見学の旅行をしていたものであろう。

残暑長く難凌事ニ御座候。過日は高野山上にて久々にて拝光、失礼申上候。下山後、新和歌の浦を経て京都へ参り、直ちに真珠庵を御尋ね仕候。山田師自身、大徳寺を初め塔頭の各寺院をご案内被下、残る方なく見物仕候。洵ニ御紹介被下候御蔭にて皆々喜居り候。御礼状後れ誠ニ申訳無之候。今秋ハ正倉院へ参り度、其節ハ御尋ね候者、拝光万謝申度候。敬具

九月十日 結城素明

上村観光様

**13 藤井乙男** 某年一二月七日付 一八・七×一二・五糎、鈴蘭（？）色刷下絵二行薄緑色罽線便箋ペン書

一八六八〜一九四五。文学者。号、紫影。専門は近世日本文学、俳諧研究の先駆者で、大学時代子規と知り合い、実作もよくした。京都帝国大学教授。文中「伊地知版」は文明一三年（二四九〇）薩摩において、

桂庵玄樹と伊地知重貞（島津家家臣）によつて刊行された『大学章句』のこと。日本における初めての新注（朱熹による注釈）の出版として知られる。

其後ハ誠に申訳なき御無沙汰、是非一度御伺可仕と存じながら、煙草をやめてから何だか他所へ行くが手持無沙汰のやうにて、いづ方へも失敬のみ致居候処、却而御尋に預り、御珍菓御恵投、偏に感佩の至に御座候。九州にてハ何か珍品御入手にもや。例の伊地知（「地」ミセケチ）版にても御発見無之かりしや。いづれ其中拝趨可仕、不取敢御礼まで。草々頓首

十二月七日 乙男

閑堂老兄侍史

#### 14 和田万吉 某年六月二四日付 一七・六×七七・七糎、素紙二枚継墨書

一八六五〜一九三四。図書館学者。東京帝国大学国文学科を出て同図書館に勤務のかたわら、国文学・書誌学を研究、明治三〇年（一八九七）館長（後に教授）。日本初の図書館学の講座を担当する。大正一二年（一九二三）、関東大震災による焼失の責任を取つて翌年辞任、法政・東洋大学などで教える。文中「雀林玉露」は南宋・羅大経著の随筆『鶴林玉露』。詩文に関する逸話が多く、中世五山でもよく読まれた。古活字版は一八卷六冊、『東京帝国大学附属図書館和漢書書名目録 増加第二』（一九一〇）に載るが震災で焼失。なお成算堂文庫にも所蔵あり。「成算堂叢書」は大正二年（一九一三）から一一年まで刊行された所蔵稀観本の複製。蘇峰・観光・森大狂らが解説を執筆。本書簡は刊行開始から間もない頃のものが。

貴論ノ如ク椽天甚陰鬱御同困御坐候処、執事益御清祥ノ段、欣賀ノ至拜上候。借来示之古本中、古活字版『雀林玉露』ハ弊蔵ニ完本有之候ガ、餘ノ四部五冊御譲受ヲ得ラレ候ハ、難有可存候。御序ノ折御送本相待候。次ニ徳富蘓峯君ノ成篁堂叢書ノ儀、弊館ニ寄贈ヲ得度切望仕候ガ、自然御都合ヲ以同君ニ御依頼被下間敷ヤ、直接当方ヨリ申出候モ如何ニ存候マ、右様相願候。只今迄該叢書ハ一冊モ入手不致候。拜答ヲ兼御頼迄。草々拜具

六月念四 和田

上郵賢台侍曹

**15 和田万吉**〔大正二二年〕一〇月一六日付 一八・九×九一・〇糶、素紙一枚継墨書

書簡7に同じく、関東大震災の惨状を報告した内容である。文中「石割火焚」は八大地獄の第三・衆合地獄を石割地獄、第六・焦熱地獄を火焚地獄ともいうもの。「弊屋付近無事」とあるように、和田自身の蔵書は無事で、戦時中東京都に買い上げられ疎開、現在も都立中央図書館特別買上文庫の一部として現存する。震災前の東京帝国大学附属図書館蔵書のうち、五山文学関係では東福寺の塔頭善慧軒（現在は善慧院善慧院）にいた彭叔守仙の旧蔵書がまとまって入っていたが、一点を残して焼失した。

拝復 益御清安奉賀候。借今回ノ凶変ニ付、懇到ナル御慰問ヲ蒙リ、御芳志深ク感荷致候。真ニ古今ニ絶セラル天災ニ而、一時ハ不安、奈何ニ成行クヤラント被思、石割火焚（煩）ミセケチノ大地獄ニ墮シタル感有之候。幸ニ弊屋附近無事ニ御座候ヒシガ、三十余年間監護セシ東大書城、忽焉烏有ニ帰シ、悔恨無限、今ニ

茫乎トシテ不知所為候。是迄貴兄ノ御厚意ニヨリ蒐集致来候佳書珍籍モ、一紙ヲ不遺亡失、誠ニ向顔モ出来ザル様ノ始末、不可抗ノ場合ト云ナガラ申訳无之トモ存候。震後建物大虧隙ヲ生ジ候為、火焰ノ廻リ早く、瞬時ニシテ不可救事ニ相成、僅ニ一万冊弱ヲ搬出シ得タル耳。実ニ御話ニモナラヌ次第、御憐察可被下候。本日館ノ残骸ヲ工兵隊ノ手ニテ爆破、無情ヲ感ジテ涙モ出ザル程ニ候。全市荒涼凄惨、トテモ難悉筆紙、委シクハ新聞ニテ御承知ト存候。近日御出京ノ趣、定而喫驚可被為遊ト察入候。御見舞拜謝迄取急申上候。拝具

十月十六日 和田万吉

上村仁兄梧右

**16 幸田成友** 某年二月八日付 一八・五×一一五・三糶、素紙二枚継墨書

震災後の消息を伝える。文中「義弟」は妹幸の夫安藤勝一郎か。「狩野博士」は狩野直喜（一八六八〜一九四七）。京都帝国大学教授。「池辺氏」は池辺三山（一八六四〜一九二二、朝日新聞社主筆）か。狩野とは同じ熊本県出身。「富岡邸」は富岡鉄斎（一九三七〜一九二四）も長子謙蔵（一八七三〜一九一八）も没後であろう。

「村口」は書簡7にも見える村口書房。

拝啓 御無音仕候。目下の御様子いかゞ。僕春来俗事のみにて（亡母の法事、義弟の洋行、姪の転地療養その他）少しも本屋まはりをせず、得る所なくて費す所のみ多し。何か面白き話も無之や。君の助手をしてゐた久家と申す慶應卒業生も病歿の由聞及べり。まさか、ウソニはあらざるべく、一時ハ金松の世話で洋行す

るなどいふ風聞もありし男、アタラ才子を玉なしニシて仕舞ひけり。南無阿弥陀。狩野博士の夫人（池辺氏妹）も流感で逝去之由、狩野君自身の御病氣ハいかゞ。去年富岡邸へまゐりし時、やよひさん、二月頃結婚との話をきゝしが、愈々日取もきまり候ハ、心ばかりの祝物贈り度、様子御内報頼入り候。東京てバ、村口が三階造を新築する勢也。大兄の御新築いかゞ御すゝみ候哉。僕ハ只今居る家の後の極めて光線のワルキ家をかり、漸く慶應の荷物を引とり候。夜分ハソコへ閉籠りて読書いたし候。寒いので少々風邪引となり申候。富岡令嬢の事、何卒御知らせ頼入り候。乍末奥様に宜敷く。僕の長女も本春ハ学校を出る事にて、親父大分責任を感じ来り候。先ハ御無沙汰御詫旁々雑事のみ。頓首

二月八日雪降る日 幸田生

上村閑堂様

17 幸田成友 某年五月一八日付 一七・五×六二・一糶、素紙二枚継墨書

文中「姉」は延（のぶ、一八七〇〜一九四六）。東京音楽学校教授として活躍。大正八年辞職、審声会を作り後進を指導。

拜啓 先日入洛之節は大御馳走ニ与り満悦仕候。廿五日正午過無事帰京ノ処、小子留守中、姉流行感冒ニかゝり、帰京当日より熱度昂進、肺炎ニ変じ、死地ニ入るもの二回、現在は病勢の減退と共に二身体非常ニ衰弱、然しコレデ食慾さへつけバ大丈夫との事。殆ど毎夜姉方ニ宿直し、右の有様にて帰京後御礼も不申上、甚だ失礼仕候。御宥恕所祈二候。榮あれば苦ありと申せ、コレハ又余リヒドキ変化にて、少々頭脳もボンヤ

りいたし申候。ドウカ恢復するやうにと祈念致居候。先ハ近況御報まで。五月十八日

五ノ十八 幸田生拝具

上村閑堂様

18 辻善之助 某年七月一〇日付 一八・九×八〇・五糶、素紙二枚継墨書

一八七七〜一九五五。歴史学者。日本仏教史・文化史分野で活躍。東京帝国大学教授、史料編纂掛事務主任（後の史料編纂所長）を務める。文中「慶仏」は鎌倉時代の仏師快慶のこと。薩摩川内市に快慶入定の石室が、南さつま市（坊津）の広泉寺には伝快慶作阿弥陀如来がある。「小島師」は小島文鼎。相国寺長得院任職で、禅宗史研究者。『禅宗』にもたびたび寄稿している。「桃隠」は桃源瑞仙の誤り。「史記抄」「百衲襖」は桃源の抄物。「翠竹真如集」は建仁寺の僧天隱龍沢（一四二三〜一五〇〇）の語録。史料編纂所（「史局」）には観光所蔵本を大正一〇年一〇月に謄写した本あり。したがって本書簡はそれ以後のものである。

七日の御書拝見致候。薩摩慶仏の件について小島師へ御照会被下、御手数数の段深謝の至ニ存候。全師指示に従ひ、薩摩の方へ依頼試みるべく候。全師へ宜く御伝声願上候。雑誌二冊難有存候。次に桃隠事蹟の出所御教示難有存候。早速史記抄・百衲襖等見可申候。次に翠竹真如集は仰の通、既に史局に写済ニ相成居候。灯台下暗の譬、汗顔の至ニ候。実は図書目録を見候処無之候為め、全く無きものと思ひ目録編成後、新追加の分を見ざりし過に候。御手数数相かけ奉謝候。先ハ右御礼のみ。早々

七月十日

辻善之助

閑堂老兄座下

**19 黒板勝美** 某年一月一日付 一九・七×九二・〇糶、素紙三枚継墨書

一八七四〜一九四六。歴史学者。専門は日本史全般にわたり、また古文書学を開拓、名古屋真福寺など寺院資料調査およびその保護にも努めた。東京帝国大学教授、史料編纂官。文中「キサ、ギ」は植物の名。キササゲとも言い、その実を利尿薬として用いる。「辻氏」は辻善之助であろう。

肅啓 一昨夜ハ態々御来訪、却つて恐縮之至候。然ハ御病状如何ニ候や。一日も早く御診察を受けられ、御快復之程奉祈候。又腎臓病ニハ、烏丸二条角和葉屋特売のキサ、ギ、特効候由、辻氏の如き常用者の証言する所ニ有之、煎薬として至急御試ミありてハ如何。尤もそれにて多少快く候とも、医師ニハ御かゝりある様勧め申上候。唯今ハ稀珍の書御惠贈被下奉謝候。先ハ御礼旁御見舞候。恐々謹言

十一月十日 帰東ニあたりて 勝美

上村老兄梧右

**20 島文次郎**〔大正八年〕二月三日付 一七・九×八一・一糶、素紙二枚継墨書

一八七一〜一九四五。号、華水。文学者。専門は英文学。伝記は廣庭基介「島文次郎京都帝国大学附属図書館初代館長年譜について」(『花園大学文学部研究紀要』三二、二〇〇〇・三)に詳しい。それによると、佐

賀藩家老諫早氏に仕えた学者野口松陽の次子として生まれ（長兄は野口寧齋）、志士島惟精（維新後は元老院議員）の養子となり、帝国大学文科大学および大学院を出て京都帝国大学附属図書館初代館長、同文科大學助教、第三高等学校教授等を歴任。大正八年三月から九年一二月まで欧米留学。本書簡はその直前のもの。文中「佐々木」は京都の古書店佐々木竹苞樓、「吉沢君」は国文学者吉沢義則。「桃華」は富岡謙蔵、大正七年一二月二三日没。

寸簡呈上。寒威凜烈、折角之雪景色モ賞美の勇モ不出、御憫笑被下度候。然ハ 大兄ニハ益御康壯、大賈之至御座候。扱今回ハ遂ニ辞退ヲ不得、出廬東征致候ニ就てハ、告別方高屋御過訪可仕候処、何カニ取紛れ延引致居候。実ハ彼地学者達へ説明旁贈物とし而我古文書類少々持参致度存候が、固より何種ニテモ不苦、年代さへ古ければ宜しく候が、御所蔵中御不用ノ分御割愛願上度、なるべく（正式ノもの宜しけれど）仮名文書ニテモ可ナリ。花押其他一枚ニテ具備せるもの宜しくと存候。総額ニテ参拾円だけ、枚数ハなるべく多き方宜しく存候。写経ハ定めし高価なるべく、佐々木ニ多分有之候由、吉沢君ノ談話に候が、拙モ話にハなるまじくと相諦申候。要スルニ多忙ノ際他之方法無之候まゝ、御任侠ニ訴へ候次第、御一臂ノ勞を惜まさらん事願上候。桃華モ登仙シテ正ニ五十日ナラントス。大兄不相変悠然トシテ酒盃ニ親まれ居候や。余りに御疎遠打過候まゝ、前記御依頼を兼ねて御起居御尋申上度、勿々頓首。

二月三日 華水生

閑堂先生凡右



執筆者一覧（五十音順）

竹下 ルツジエリ・アンナ 京都外国語大学准教授

館 隆 志 花園大学国際禅学研究所客員研究員

堀川 貴 司 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授

林 観 潮 厦門大学副教授

花園大学国際禅学研究所論叢 第十二号

二〇一七年三月三十一日発行

編集兼  
発行者

花園大学国際禅学研究所

〒〒162-8601 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八十一

花園大学内

電話 〇七五―八二三―〇五八五

FAX 〇七五―八一―九六六四

印刷 河北印刷株式会社

# 日本の禅宗における女性観

## —白隠禅師の場合— (3)

竹下 ルッジェリ・アンナ

### はじめに

本論では「日本の禅宗における女性観—白隠禅師の場合— (1)」(『論叢』第九号) 及び「日本の禅宗における女性観—白隠禅師の場合— (2)」(『論叢』第十号) の続きである。前論では白隠慧鶴禅師(1685-1768)の女性観について考察しながら、仏教と禅宗における女性観の背景および禅師の女性弟子の代表であるお察(1)、そして恵昌尼(2)について調べた。今回は、政女および大橋女(出家後に慧林尼)に関わる情報を集め本論を作成した。

前回と同様に、白隠禅師の作品を分析したうえで、このテーマについてすでに論じた論文を参考にした。特にこのテーマを扱った学者は、芳澤勝弘氏と故町田瑞峰氏、常盤義信氏の三名である<sup>(1)</sup>。彼らの論文は白隠禅師の女性弟子たちに関する情報、そして白隠の言葉を理解することにあたって非常に参考になった。

本論は新しく発見された資料を紹介することを目的としておらず、白隠禅師の女性弟子の生涯を通して、白隠自身の女性観を明らかにすることを目指している。従って、以前に書いた論文と同様に、白隠禅師の弟子を紹介してから、禅師の思想・教えについて考察した。

### 白隠禅師の女性弟子についての記録とその資料

白隠禅師の女性弟子については、主に白隠の大高弟東嶺円慈(1721-1792)が著した『白隠和尚年譜<sup>(2)</sup>』(正式名は『龍澤開祖神機独妙禅師年譜』、

1820) および白隠下四世の妙喜宗續 (1774-1848) による『荊棘叢談<sup>(3)</sup>』(1842) に記録されている。後者には白隠門下の尼僧と大姉を合わせて五人の女性が登場する。彼女らは、お察 (阿察婆)、そして原駅の婆、恵昌尼、政女と茶店婆の五人である。『年譜』では、さらに大橋女 (後に慧林尼) について書かれているが、原駅の婆と茶店婆の話は記されていない。『年譜』が口伝されたことは考えられないことから、この二人の消息が晩年のお察と紛淆していると思われる。相国寺の荻野獨園による『近世禪林僧宝伝<sup>(4)</sup>』(明治23年、1890) には、『荊棘叢談』の孫引きのように見えるので、女性五人伝のみ記載され、大橋女について何も書かれていない<sup>(5)</sup>。また森大狂居士が著した『近世禪林言行録<sup>(6)</sup>』(明治35年、1902) にも同様である<sup>(7)</sup>が、同じ森大狂著の『近古禪林叢談<sup>(8)</sup>』(大正8年、1919) には、前記の五人女性<sup>(9)</sup>と共に『年譜』に紹介された大橋女<sup>(10)</sup>の話も見られる。そして、小畠文鼎による『続禪林僧宝伝<sup>(11)</sup>』(昭和13年、1938) に上記の女性弟子が載せられていない。

## 政 女

白隠禪師の女性弟子の中には、杉山政女がいた。政女は比奈村 (現在静岡県富士市比奈町) の人であった。夫の死の後に、一人の子供と暮らしながら、修行を始めた。白隠禪師の『年譜』では1730年、つまり禪師の46歳 (満年齢45) の箇所に来歴されている。

比奈村の杉山氏の寡婦政女は、解脱の勧めによって、実に熱心に参禅していた。時には数日のあいだ身心を忘れるほどであった。その子供は毎日、手習いに行っていたが、子供の食事を用意することさえ忘れるので、隣人が可哀想に思っ、政女に代わって食事を与えるのだった。ある日、子供が家に帰って来た。政女は我が子であることも分からずに、「おまえはどこの子じゃ」と。子供が、「この家の子だ。おっ母、何でこんなことを言うんだ」と言うと、政女はウンウンと言って、また三昧に入ってしまう。こんな状態で数日、ついに省発すると

ころがあった。そこで白隠老師に謁して見解を呈した。白隠がいくつかの機縁をもって点検すると、一つも疑滞するところがなかった<sup>(12)</sup>。

政女は「解脱の勧め」（「脱公點發<sup>(13)</sup>」）によって修行に取り組んでいたということであるが、解脱とは無量寺の超宗解脱首座（生没年未詳）のことである。独園元利の弟子に当たり、1715年（正徳5）示寂後に清見寺陽春主諾の元に至り、この年に白隠禪師に入門した僧侶である<sup>(14)</sup>。参禪に励んで政女は、身心を忘れるほどの公案三昧に入り、大疑を起こした。自分のことだけではなく、子供のことさえ忘れるほどの状態であった。社会的な面においては倫理的な問題が生じかねない行動であるが、禪の修行の立場から考えると、このような身心の状態がなければ、公案を透過することができないのである。

白隠禪師も時折引用する曹洞宗の道元禪師の有名な言葉を引例すると、「仏道をならふというふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり<sup>(15)</sup>。」という心境は政女にも当てはまると思われる。白隠自身は上記の道元禪師の言葉を他の作品にも引用し、例えば『於仁安佐美』巻の下では、「道元禪師が『自己を運んで万法を修証するを迷いとす。万法すすみて自己を修証するは悟りなり』と言ひ『身心脱落、脱落身心』と言われたのも、この三昧のことを言ったものである<sup>(16)</sup>」と述べる。白隠による「此ノ三昧<sup>(17)</sup>」とは「宝鏡三昧」のことであり、「四智」に導く本来の公案の工夫に関する説明の一部である。本論の最後にこの内容について考察した。

政女の体験に基づくもう一つの側面があると思われる。禪に限らず、宗教の世界に入門することであり、安永祖堂老師に次のように説明される。

そもそも宗教にかかわるといことは、とりもなおさず人間世界を超える大きな力にからめとられることに等しい。宗教に生き、宗教に死のうと誓いを立てる者は、肉親との恩愛も自己にたいする愛着も断つ

覚悟を迫られる<sup>(18)</sup>。

その後、安永氏は「ルカの福音書」を引用する。

だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉、妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない。

(「ルカによる福音書」十四-二十六<sup>(19)</sup>)

政女は大姉として禪修行を歩んだが、上記のような心境をもったと推測でき、白隠禅師の下で修行の深いところまで至っていたのである。

また『年譜』で、政女の修行に関わるエピソードが語られている。引用すると、次のようである。

ある日、金剛寺の雲山和尚が松蔭寺に来ており、白隠の後ろに寝転んでいた。そこへ政女がやって来て入室を乞うた。雲山がどこかへ行こうとすると、白隠が「かまわん」と言うので、雲山はそのまま平然と寝転んでいた。政女が入って来た。白隠が拶して言う、「夢中の西來の意、作麼生」。政女が見解を呈する。白隠はそこで休した。政女は辞して出て行った。これを見ていた雲山は驚いて起き上がり、「あの女は何のものだ」と。白隠がこれこれしかじかと告げると、雲山は嗟嘆して言った、「あれほど作略が純真で、風も漏らさぬような者は初めて見た」と<sup>(20)</sup>。

この出来事から、興味深い白隠禅師の参禅の様子が伺える。白隠の部屋に横になっていた雲山和尚は、雲山祖泰(1685-1747)のことである。駿州の人で、古月禅材(1667-1751)に参じ、後に永明寺鉄船玄迪の後を継いで金剛寺三世住職となった。白隠禅師と同年であって、幼年時代から親しかったが、62歳(満年齢61歳)の時に示寂した<sup>(21)</sup>。白隠は雲山の頂相に着賛し、その内容は次のようである。

### 仏日雲山和尚

古風な道風、清らかな気宇。

かつて九州の古月和尚に参じて得語したが、

駿河に戻って来て、わが白隠下に参じ、その余蘊を尽くし、向上の玄関を透った。

それ以来、諸方の枯木禅を批判し、

時には、天性の絵筆の才を生かして、近隣の和尚方の頂相を描いたりもした。

私とは幼なじみ、四十年にわたる心交。別れに臨んで、涙があふれてとまらぬ。

その弟子たちが、頂相に賛することを求めて来た。

徳倉普光寺の国禅法均和尚が定中に入って描かれた頂相である。

これに私白隠が睡裏の狂言のごとき言葉を書きつける。

賛を書き終えぬうちに、うとうと居眠り、

夢で雲山和尚と相對して、互いになっこりと笑った。

覚めてみれば、老涙、衣袖に満つ、時に七月二十二日正午<sup>(22)</sup>。

この白隠の頂相の賛から道友の雲山との絆が伺え、白隠の部屋で寝転んでも不思議ではないであろう。その時に入って来た政女が自分の公案の理解を点検するために、『お婆々どの粉引き歌』にも述べられている<sup>(23)</sup>「夢中の西来の意、作麼生」という拶処を与えられ、その答えは驚くほどのものであった。

政女は、白隠禅師に会うために、原の松蔭寺と比奈村の何十キロもの距離を歩き、参禅を求めていたと考えられる。参禅が終わってから、また比奈村に戻り、自宅などで坐禅三昧に入り、公案を拈提し、また参禅のために松蔭寺に行っていたのであろう。残念ながら白隠禅師と政女との出会いについては『年譜』の記録から推測するしかない。禅師が『兎専使稿』で説明する「ただ大勇猛心をもった真の修行者だけが、難透の公案に取り組み、一切の旧見を棄て大疑団を起こして、単々に参究し、そして蛇が竹筒に入ったようになることができよう<sup>(24)</sup>」という根性が政女にあったであ

ろうと思われる。

実は政女についての話は、『年譜』の外に『荊棘叢談』にもあるが、『年譜』の孫引きと見られる。しかし、『年譜』と『荊棘叢談』に注目すべきだと思われる一つの相違点がある。政女に対する雲山の感嘆を表す表現は、『年譜』には「あれほど作略が純真で、風も漏らさぬような者は初めて見た」（「我未見如彼作略純真而不通風者」）であるが、『荊棘叢談』には「女性とはいえ、まことに雲水のはたらきがある」（「彼雖婦女実有衲子作略」）になっている<sup>(25)</sup>。女性である筆者から見れば、この点においては『年譜』と『荊棘叢談』の女性観の違いが感じられ、『荊棘叢談』には当時の女性に対する見方が入っており、『年譜』には白隠とその高弟子である東嶺に、読み取れる修行に対する男女区別のない女性観が見られる。『年譜』と『荊棘叢談』のこのような女性観の違いはお察の伝記にも感じられる<sup>(26)</sup>。

後の禅籍では、上記の政女に対する雲山和尚のコメントは『荊棘叢談』のバージョンになっていて、残念ながら『年譜』の言葉は見られなくなった。

### 大橋女（後に慧林尼）

大橋女（年没年不詳）の本名は「律」で、後に浪人になる江戸の旗本の娘であった。晩年に尼僧になり、白隠禅師に参じた。彼女の来歴は『年譜』に書かれているが、前述したように『荊棘叢談』に記されていない。

大橋女は白隠禅師の時代に有名な人であった。禅師の『年譜』によると、白隠は67歳（満年齢66歳、1751）の時に大橋女に出会った。この出来事に関しては、次のように書かれている。「帰路、平安城に過ぎる。世継氏に館す。池大雅、来たり参ず。及び大橋女を度す<sup>(27)</sup>。」前の年の冬に、白隠禅師は『虚堂録』を講じるために播州明石の竜谷寺におり、そして年明けて備前岡山と井山に行った。その年の四月に、竜谷寺の虚堂録会の際に参じて来た京の豪商の世継政幸とともに京都に戻り、世継の自邸に泊まった。京都に滞在中の際に、上記したように禅師は大橋女にも会った。白隠は京都滞在中、妙心寺の養源院で『碧巖録』を講じたが、おそらく大橋女はこの

法座と他の行事にも参加したのであろう<sup>(28)</sup>。

加藤正俊氏と芳澤勝弘氏が説明するように、一般的に知られている白隠禅師の『年譜』以外に、別に『勅謚神機独妙禅師白隠老和尚年譜』という写本が存在する(京都、法輪寺蔵)<sup>(29)</sup>。この写本は東嶺によって書かれたものであり、その弟子の大観文珠(1766-1842)によって編集された。これは学者たちに『草稿』と呼ばれ、『年譜』より史料として豊かであると思われる。その違いは大橋女の説明にも見られる。もっとも目立つのは名前の違いである。『年譜』では大橋女と記されているが、『草稿』では高橋女になっている。この相違はなぜ生じたか不明であるが、大橋が正しいと思われる<sup>(30)</sup>。

大橋女はどういう人物であったのか。『年譜』と『草稿』の内容を合わせた芳澤氏の現代語訳を見てみよう。

大橋女はもとは江戸に住まいする旗本某甲の娘だった。父は千石余を食んでいたが、何らかの事情あって浪々の身となり、京都にやって来た。収入がないものだから、娘は弟とともに乞食までして家計を助けたが、それでも衣食ともに足らぬ赤貧のありさま。娘は一家を救うため、自分を遊女屋に身売りするよう父母に申し出たが、父母は、わが子を売って生きるなど畜生の業、と許すはずもない。娘はさらに、「これというのも方便、もしお許しにならなければ、一家ともに死ぬだけです。方便は真智には及びませんが、死の難を免れることは道にかなうのですから、これも真智ではありませんか」と説得するので、父母も泣く泣くこれに同意し、遊廓に送ったのである。

女は、もとより教養があり、書も和歌もよくしたので、やがて島原の名妓大橋となった。しかし折りに触れて思うはわが身の上。もとはといえば侍の家に生まれ、深窓に養われ、女中にかしずかれる身であったのに、今はかかるうき川竹の身、何と情けないことか、と。やがてこの煩悶が積もり重なって病となり、医者も手をこまねくほどになった<sup>(31)</sup>。

ここまでの『年譜』および『草稿』の説明から、大橋女はどういう人だったのか明らかになった。望んでもいない生き方を仕方なく歩み、深い実存的な悩みによって心身の病に落ちることに至った。しかし、禪の世界でよく見られるパターンであるが、病に導いたこのような深い悩みと苦しみがあったからこそ彼女が次の次元に入境することができたと見えよう。その後、ある時、名前の不明な貴客が大橋女の悩みと苦しみに気づき、彼女にその病悩から脱け出す方法を教えたという。客は次のように述べた。

「そなたが、我が身と思っておるものは、すべて見聞覚知の四つに他ならない。けれども、この四つのを司る主人というものがあるのだ。これから先、行住坐臥、見るもの何ものぞ、聴くもの何ものぞと、切々に返観して怠らないならば、いずれ本具の仏性が忽然として現前するであろう。そういう境地になれば、苦界を脱することができる」と(32)。

その後、大橋女は教えられたように毎日工夫し、ある時に大事な体験をしたという。『年譜』によると、次のようである。

[...] 延享のころ（一七四四～四七）のある日、狂雷が京の都を襲い、二十八ヶ所に落雷した。大橋は生まれつき雷が嫌いだったので、蚊帳に入り布団をかぶって、左右を小婢従女に護らせて避難していたが、ハタと思うところあって、起き上がると端然と静坐した。やがて狂雷がにわかに庭に落ちた。たちまち大橋は仰顔気絶した。しばらくして蘇ったのだが、何と、見聞するところ、以前とはまったく異なるのである。この不思議な体験を、どなたか明師にお話しして、自分が味わった境地が何なのか証明してもらおうと思っていたが、廊暮らしの身ゆえ、それもかなわず過ぎていた<sup>(33)</sup>。

以上の記述を読むと、大橋女は白隠禅師による「大死」または「大死一番」を体験したと思われるが、遊郭で暮らしていたため、その体験を解明

してもらふことや認めてもらうことができなかった。

これについては、また『草稿』と『年譜』に違いが見られる。『草稿』では大橋女の体験は次のように述べられている。

頻りに震るい地に落つるもの一声、二三間を阻つ。高橋、地に絶す。  
暫くあつて帰覚す。悟、前見に異れり。是より耳根円通を修す<sup>(34)</sup>。

大橋女はまだ遊郭にいたころ、そしてまだ師に導かれていない時にも関わらず、「悟」の体験をしたということである。つまり、『草稿』の著者である東嶺と当然のことながら彼の師匠である白隠禅師は女郎の過去がある女性を受け入れ、まだどの師匠も出会っていないうちに体験した悟りを認めたのである。女性に対して儒教的な「三従」および仏教的な思想である「五障」が一般的であったその時代を考えれば、注目すべきところだと思われる。

白隠禅師が大橋に出会ったとき彼女はすでに遊女をやめていた。『年譜』では次のように述べ続けられている。

そのうちに、ある人に身請けされ、その妻となったが、やがてその夫も歿した。その後、栗原一素居士という者に再嫁した。栗原は大橋に誘われて、いつも白隠禅師に参じたという。大橋は、後に一素居士に乞うて尼となり、慧林と名のつたが、居士に先だつて死んだ。一素居士は白隠禅師の弟子である東嶺に焼香を頼んだ。東嶺が一素居士の家に行ったところ、位牌の代わりに、ただ観音像の軸が掛かっているだけである。東嶺が「位牌はどうしました」と尋ねると、居士は「普門品には応に婦女身得度者、即現婦女身而為説法とあるが、慧林尼こそは観音の応現だ。だから観音像を掛けてあるのだ、何もおかしなことではない」と答えた。東嶺もこれを聞いて黙って香を拈じた<sup>(35)</sup>。

一素居士は鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』(406)の「観世音菩薩普門品第二十五」を引用していた。一般的に「観音経」と呼ばれ、『法華経』の中

では最も新しい部分に当たっている<sup>(36)</sup>。一般民衆における観音信仰の根幹である。この品の内容であるが、無尽意菩薩は仏に向かって、観世音菩薩が何の因縁によって、観世音と名づけるのか。また、観世音菩薩は、どのようにしてこの娑婆世界を巡り、どのようにして人々に教えを示すのかという問いに対し仏は答えの一部として、「長者・家長（居士）・長官・官吏（宰官）・婆羅門の妻の姿によりて救われるべき者には、直ちに妻の姿を現わして一向に法を説き示す<sup>(37)</sup>。」一素居士にとってはまさしくその通りと信じ、出家後に慧林尼になった大橋女のことをそのような菩薩に例えた。『年譜』にあるこのような説明を読むことによって、大橋女後に慧林尼に対する白隠禅師と東嶺禅師の尊敬が読み取れる。さらに、『年譜』に一人に対してこのように詳細な説明は珍しいことから、上記の印象は強まるのである。

『年譜』と『草稿』の違いとしては、大橋女の二代目の夫である栗原一素居士の名前にも見られる。『草稿』で一相になっているようである<sup>(38)</sup>。『年譜』で書かれているように東嶺は大橋女の夫に、彼女のために焼香を頼まれたにもかかわらず、その名を間違って記した。理由は不明である。

大橋女は遊女になる前の武家の娘としての教養も関係するが、和歌と書画に優れていた。しばしば、日本美術の本に引用され、日本近世絵画史の専門家であるパトリシア・フィスター氏の『世の女性画家たち—美術とジェンダー』で大橋作の『梅図』が載せられている。個人蔵の紙本墨画（93×28.3cm）で、次のような歌が添えられている。

梅のはな  
たか袖ふれし  
にほひぞと  
春やむかしの  
月にとはばや<sup>(39)</sup>

絵には、梅の花が咲いている幹から左上方に向かって伸びる細い枝が描かれている。さらに、紙の右下に描かれている幹と伸びる枝の間の少し上

に薄い墨で掠れかけた筆で描かれた満月も表れる。この画を分析したところでフィスター氏は、狩野派の影響が見られると言う。さらに、「彼女は狩野派の無名のもとで学んだのではなかろうか<sup>(40)</sup>」とフィスター氏は推測する。

大橋女は伴蒿蹊（1733-1806）の『近世畸人伝』（1790）にも記述されている<sup>(41)</sup>。『近世畸人伝』とは江戸時代の多彩な人物百余人の伝記を集めた五巻の伝記集。さらに、『続近世畸人伝』があり、これも五巻で人物百余人の伝記を集めているが、三熊思孝編のものである。収載人物は、文学者、学者、詩人だけではなく武士、商人、職人、農民、僧侶という幅広く社会の階層の人たちが取り上げられ、婢女と遊女まで載せられている。大橋女と共に同じ時期に白隠禅師に参じた池大雅の伝記も記されている<sup>(42)</sup>。『近世畸人伝』の最後の伝記は、白隠禅師の『夜船閑話』（1757）に現れる白幽子のものである。ここでは白隠禅師の名前が記されており、『夜船閑話』の話がまとめられていると見られる<sup>(43)</sup>。

大橋女の『近世畸人伝』による伝記においては、次のように述べられている。

都島原の遊女大橋、実の名は律、もと彼所に大橋といへる名妓あり。うたよみ手書ぬるが、その手ことによければ、大橋やうといひていまに伝はるよし。此妓もその名を嗣るとなん。よろづみやびを好めり。さばかりの女なれば、中々につひのよるべもなかりけらし、尼にならんとおもへるを、老たる母のためいかにとためらふほどに、栗原一素といへるは、世のすねものにて独あるを、よき戯がたきなるべしと人あはせけり。[...] かたみに才をたゝかはしけるが、後に夫婦つれて有馬の湯に浴し、妻はそこにて髪をおろしたり。さて禅にも参じて、白隠和尚京師逗留の日はつねにまうでしに、折々冷泉寂靜入道殿に出あひまらせしかば、和尚、此尼はもと島原の名妓なり、と語られしほどに、入道殿、さらばむかしのなげぶしといへるものを覚えたらん<sup>(44)</sup>。

この伝記で注目すべき点は『年譜』に記されてなかった「老たる母」がいたことと冷泉家の下で歌を勉強していたということである。大橋女の歌は他に残っていると思われるが、これに関しては、町田氏は次のように述べた。

静岡の故秋山寛治氏より、大橋女の歌集が禅文化研究所資料室に所蔵されていると仄聞したので、借覧を申しこんだが、ないとのことである。恐らくはどこかに在ることと思うが、知聞する読者があつたらご教示を仰ぎたい<sup>(45)</sup>。

残念なことであるが、未だにこれについて新たな情報がない。

また芳澤氏は加藤正俊氏が架蔵した大橋女の書蹟を見たという。歌は次のようなものである。

はとのつえといふ事を 句のかしらのつぎの字にを  
きて 松年久といふ事をよみて奉る 恵琳  
とはに懸けて ちとせかそふる この宿の  
まつのさかへの すえそ久しき<sup>(46)</sup>

慧林の名前に関しては、漢字が通仮字によって、混用されてきた。ちなみに、町田氏の論文では、「恵林尼」が使われた<sup>(47)</sup>。また、加藤氏の『白隠和尚年譜』の注にも「恵林尼」となっている<sup>(48)</sup>。

最後に、白隠禅師の和歌集である『藻塩集』を見ると、慧林に関わる歌がある。

慧林いかにや歌よみかけたりけむ岩つゝじの返して  
予がかごにあつらへおこしければ  
春に逢ふ うき世の花と みやま木と  
いざさしよりてあだくらべせん  
岩つゝじ 慧林

人しらぬ みやまのおくの 岩つゝじ  
あだにやさきて あだに散らむ(49)

この歌はいつ作られたか不明であるが、『藻塩集』は宝暦9年(1759)に上梓されたということは序から明らかになっている<sup>(50)</sup>。つまり、白隠禪師が京都で慧林尼に会った8年後のことである。この歌は、慧林尼俗名大橋のための歌かどうかよく分からない<sup>(51)</sup>。

大橋女についてはまだまだ分からないことが多くあるのではないかと思われる。

大橋女の人生をもう一度考えてみると、彼女は武家の娘として生まれて育てられ、高いレベルの教養を受けたにも関わらず、父親が浪人になったせいで京都に移り住み、家族を餓死から救うために京都の遊郭である島原に売られる。家族に対する深い愛情によって生まれた選択であったが、彼女は自己犠牲となるのである。身体は死から免れたが、心は自分の自己認識および元の芸術的な才能と実際の生き方の大きなギャップによって破壊されつつあった。ここで無常を感じ、生きることに対する希望と意欲がなくなったに違いない。何もできなく縛られているような心の状態から工夫方法を教えられ、この工夫に対する大信心と実践によってある日常的な出来事である落雷で自己の死とその蘇生に至った。禅的に言い換えれば、「大死一番」を体験した。しかし、白隠禪師によれば、この境地で止まってはいけない。修行を続ける必要があり、これは「悟後の修行」という。

大橋女は最初の体験にとどまらず、二度の結婚の後に出家し、慧林になり、修行を続けたのである。そして、人生の最後の時期に白隠禪師に出会って、師に参じてから、『年譜』の説明によれば一年余りで逝去した<sup>(52)</sup>。確かに禪師に出会ってから、接したであろう時期は短いのであるが、なぜこのような禪者が『荊棘叢談』や『近世禅林僧宝伝』、『近世禅林言行録』に記されてないのか疑問に思われる。

## 老若男女を超えた白隠禅師の修行方法

政女と大橋女の伝記から読み取れた、「大疑団」と「大死一番」は白隠禅師による修行過程の重要な点である。禅宗では「大疑」や「疑団」とも呼ばれ、人生そのものに対する大きな疑問の固まりであり、「疑うそのものに成り切って徹底的に疑いを尋究する<sup>(53)</sup>」や「悟境に入る直前の疑いの状態<sup>(54)</sup>」ということである。本来の真剣に修行する姿を示している。直接白隠禅師の説明を引用すると、次のようになる。

どうしたら、その大疑の喜びを味わうことができる。大疑の下に大悟有り、と申しますように、大疑団をおこすことです。今、この文を読んでいる、その主体は何か。日常生活においても、笑ったり悲しんだり、外界の事象にそれぞれ応じて働いていくもの、それはいったい何のものか。これは心か、性か。そのものは青黄赤白の色があるものか。内にあるのか外にあるのか、それとも中間にあるのか、と。その根源を、何としても一回、はっきりと見届けずんば措くまじと、一日中、絶え間なく励み進むならば、いつしか、あれこれ妄想し思う心もなくなり、一切の疑団もなくなり、一念も生ぜず、男もなければ女でもない、賢くもなければ、愚かでもない、生もなければ死でもない、心はひたすらカラリとして、昼夜の分かちもなく、心も身体もともに消え失せたような、そういう心境を、幾度も味わうことができるでしょう<sup>(55)</sup>。

そのような真剣な修行における心境に入ると、疑団そのものもなくなり、「男にあらざ女にあらざ、賢にあらざ愚にあらざ、生ある事を見ず、死ある事を見ず<sup>(56)</sup>」、すなわち不平等差別も不差別平等も、心も身体も消えるのである。

その次に、上記の大橋女が体験した「大死一番」とは、「肉体的な死ではなくあらゆるものを捨てきった境地で初めて得られることを言い表したもの<sup>(57)</sup>」というのである。前述したように、「大死」とも呼ばれる。

これについて白隠禅師は『於仁安佐美』巻の下で次のように述べる。

つらつら思うに、参玄の上士は大死一番して、命根を截断するところを経験せねばならぬ。「懸崖に手を撒して、絶後に再び蘇える」というところである<sup>(58)</sup>。

政女と大橋女が体験しているこのような大疑団と大死一番は、白隠禅師の説明では公案の修行に関連しており、その工夫から離すことができない。さらに、この体験に止まらないことが大事であるということを白隠は強調する。『於仁安佐美』巻の下での説明がこのように続く。

このような境地に至ろうとするならば、一気に進んで決して退かないことが肝心要である。往々に、公案に参究じて自己の一大事を究明して、実参の功夫を積み、日常の行ないの中でひそかに仏法の行持を勤めることによって道力が充ちいて来れば、万里も続く幾重にもうち重なった氷の中にいるようで、身心も公案もすっかりなくなり、底のない黒暗坑に墜つたようになることがある。多くの者はたちまち恐怖の心を生じて一步も進むことができず、頭をかきむしって懊悩することであろう<sup>(59)</sup>。

それでもまだ工夫を進まなければならない。

しかし、そこに留まってしまうならば、いつまでたっても大歡喜を得ることはできない。そこは、百尺の竿の先に達した者が、そこから更に一步を踏み出すことによって、十方世界がそのまま我が身の現われであるという境涯になる直前の一瞬の境地なのである。そこに留まっていたはならない<sup>(60)</sup>。

大疑団および大死一番の次に白隠禅師は大歡喜について述べている。白隠は、公案の正念工夫や見性、大悟、さらに悟後の修行など、どの作品に

においても強調し、それらに基づく精神的な過程について説いている。この過程は、大疑と大死、大歓喜の「奥義体験」と定義付けている体験も含んでいるとする。白隠は、こうした体験を非常なる精神の緊張状態までもつていく、公案の絶え間ない工夫における、個人の内的経験の行程として記述している。このような精神の状態を大疑と定義しているのである。習慣的に思い込んでいる事象を疑いに疑い抜き、その限界点まで疑い抜くことが大疑である。そして、この「疑団」とも呼ぶ状態を打破し、心の真理をつかむことは、公案の見解を見つけることと一致するのである。

なぜならば、公案こそが、最初の大疑を生み、最後には大疑を打破するための必要な中心課題なのである。大疑の後に大死があり、大死の後に大歓喜があるといわれる。この三つを白隠禅師は、見性と大悟の教義の支柱として構築した。白隠によれば、見性の体験をするためにも、最初の段階である大疑は絶対に必要である。白隠の功績は、その弟子達に大疑を抱かせることに成功したからである。さらには、見性の深さはそれに先立つ大疑の深さと同等である。白隠にとって公案というものは、知識として学ばれるものではなくて、それによって全身的な疑団を打発し、見性を得る方便なのである。公案は、徹底して疑われなければならない。疑団には、意識的な分別を容れる余地があってはならない。疑団とは、全体的な疑いの塊の意である。それを起こしやすい公案は、最初は「趙州無字」であることを強調していたが、60歳代の半ばになると自分自身が創作した「隻手音声」の公案が最もふさわしいと述べた。白隠の弟子宛ての手紙である多くの作品には、このような修行方法とその必要性を説明し続けるのである。しかし、まだまだここで満足してはいけない。留まる境界ではないという。

公案の修行が進めば進むほど、仏陀の境地を体験し、自分自身は仏陀そのものになるという。白隠禅師の教えの方針と完全性を表す文書は次のようなものであると思われる。これは、特別な人間のための修行方法ではなく、白隠自身の言葉を利用すれば、「僧俗男女ニ限らず、老幼尊鄙に依らず<sup>(61)</sup>」すなわちすべての人間のための修行方法である。

老衲は、三四十年前は、新到が来れば、まず「趙州無字」の公案を

与えていたのだが、どうも、「無字」では効果が少ないように思い、このごろでは「隻手音声」の公案を課している。

隻手の音を聞きとどけたかどうか点検するには、いくつかの雑則がある。[…] これらのすべてが、掌上を見るごとくはつきりしたときに、初めて、大円鏡智を得たことを認める。しかるのちに今度は、一切の音声を止めさせる。鳥獸、笛の声、鐘鼓の響きを止めよ、と。あるいは、「沖ゆく帆かけ舟を止めて見よ」とこれらのすべてが透過したときに、宝鏡三昧に入ることができる。これを諸法実相の觀ともいう。つまり、洞山五位の偏正三昧に同じである。見る我もなければ、見られる物もない、差別即平等、平等即差別であり、(臨済のいう)「途中に在って家舎を離れず、家舎を離れて途中に在らず」というところである。この境地に至るならば、平等性智を得たことになる。

しかし、この平等というところに安住するならば、狐や狸が巢穴に閉じこもって睡るようなことになってしまう。[…] それから、正受老人がされたように、いくつかの古則公案を出す。[…] これらを一々透過して初めて、妙觀察智を得ることができるのである。

(これで終わりではない) さらに精神を激発して、(あらゆる法門、仏教ばかりでなく広く外典までも学び) 広く法財を集め、(これをわがものとして) 法を説いてゆかねばならない。大法施を行ずることによって、あまねくいっさいの衆生を利益し救済し、「上求菩提、下化衆生」を実践してゆくのだ。まことに貴ぶべきは、この「上求菩提、下化衆生」である。これを未来永劫にわたって倦まずたゆまず実践してゆく。この大いなるはたらきは、応ぜざることなく、到らざるところがない。この大いなるはたらきをするものを成所作智というのである。喜ばしいではないか、かくして四智(大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智)がそなわったのである。そして、この四智が円明になれば、ついに常樂我淨の四徳が具足するのである。それを大乘円頓の菩薩行という。それがまた愚堂国師の家風である<sup>(62)</sup>。

『宝鑑貽照』による長い引用であるが、これは白隠禅師の根本的な教え

だと思われる。それだけではなく、白隠自身は自分の家風のやり方だという。さらに、上記の『於仁安佐美』巻の下の説明はほぼ同じ内容である。他の作品にもしばしば表れる。

白隠禅師による修行方法は、大悟の根本である大疑団、大死一番、大歎疑の体験を得るには「趙州無字」や「隻手音声」が必要であるが、そこで終わることなく、多くの古則公案と拶処を透過することによって、修行が深まり、最終的に『坐禅和讃』で言われている四智の円明まで至るべきである。

女性の問題に関わる平等と差別の相互関係を理解するには、四智と洞山五位の理解は欠かせないところである。筆者はすでにこの二つのテーマと白隠の関わりということについて論文を書いた<sup>(63)</sup>ので、ここでは省略するが、改めて四智と五位の同等に注目したい。

白隠禅師の女性観について常盤氏は、白隠自身の『無門関』第四一則である「女子出定」の理解が大事と述べる<sup>(64)</sup>。今回これについて論じるための余裕がないので、常盤氏の論文を参考にして頂きたい。しかし、この公案は女性観および差別と平等との関連について重要だと思われる。

山田無文老師は、この「女子出定」について『無門関』の提唱には、上記の引用の内容である四智のことを述べる。白隠の説明をより理解するには、役に立つと思われるので、引用する。

坐禅和讃に、「四智円明の月さえん」とあるが、仏の智慧には四つの面があると言うのである。第一が大円鏡智、大きな円い鏡のような智慧である。これが根本智である。鏡の中には、なんにもないから、富士山も入れれば、太平洋も入る。太陽も月も何千万の星も入る。何もかも入る。なぜ入るかと言えば、無だからである。われわれの心も鏡のごとく無だから、全宇宙がすべて入る。これを大円鏡智と名づける。

その鏡のような清浄無垢な心の前には、すべてが平等である。鏡の前には、富士山が大きくもなければ、石ころが小さくもない。金持ちも貧乏人も、大臣も乞食も、鏡の前には同じく現象にすぎない。すべて平等である。このすべてを平等に見ていく智慧を、平等性智と言う。

すべてを平等に受けいられるけれども、映る姿はそれぞれ、山は山、川は川、男は男、女は女で、決して混同されることはない。はつきり違わなくてはならん。このはつきり判断を下す智慧を妙観察智と言う。妙に観察する智慧である。しかも、眼はものを見、耳は声を聞き、鼻は匂いを嗅ぎ、舌はものを味わい、身体はものに触れて初めて差別の判断が下されるので、その五感のはたらきを成所作智と名づける。所作を成す智慧である。

この四つの智慧が、人間には誰にも本来そなわっておる。悟りを開けば、この四つの智慧が円明に自由にはたらくことになる<sup>(65)</sup>。

白隠禅師の女性弟子のように当時の禅の道を歩んでいた女性たちの気持ちを表すことができるものとして、最後に、同じ時代に生きていた女性禅者であった飯塚染子（1667-1705）の『無門関』第四一則の解釈に書かれた和歌を引用したい。

そのかみの契りし儘を標にて法の道芝踏みも迷はず

昔、お釈迦様は、人生に苦悩する衆生を救おうと、お誓いになった。

かく言うわたくしも、その昔、禅の道によって救われたいと願った。

その時の誓いと決意は、お釈迦様とわたくしとの「默契」のようなものである。

だから、女性である自分は悟り得ないなどと一切迷うことなく、この禅の道をひたすら歩き続けよう。

わたくしは女性であると同時に、「人間」でもあるのだから<sup>(66)</sup>。

## 最後に

本論では政女と大橋女という白隠禅師の女性弟子について調べた。以前に述べたお察と恵昌尼と共に四人にのぼる。しかし、白隠禅師の『年譜』

に記されていない他の女性弟子が存在していたと思われるので、白隠禅師の女性弟子について今後も研究を続ける予定である。

## 注

- (1) 特に次の論文が参考になった。町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息」、『禅文化』第103号、1982年、77-89頁；町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、『禅文化』第105号、1982年、127-141頁；常盤義伸「白隠と女性」、『日本仏教学会年報』第56号、1990、153-166頁；常盤義伸「禅の女性観」、『仏教』第15号、1991、219-226頁；芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（五）—お多福美人のこと—」、『禅文化』第167号、1998年冬、132-139頁；芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（六）—遊女大橋こと慧林尼—」、『禅文化』第168号、1998年春、132-141頁。筆者は常盤義信氏から上記の自分の論文を送って頂いたこと、芳澤勝弘氏に多くのアドバイスとヒントを頂いたことに感謝を申し上げる。それに加えて、白隠の生涯に関わる情報を得るには、白隠伝の代表研究者である陸川堆雲氏の『白隠和尚詳伝』および秋山寛治氏の『沙門白隠』も欠かせない参考書であった。陸川堆雲『考証白隠和尚詳伝』山喜房仏書林、1963年。秋山寛治『沙門白隠』、秋山愛子、1983年。
- (2) 『白隠和尚全集』第一巻、龍吟社、1967年（初版発行1934年）、1-78頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、思文閣出版、1985年。芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、禅文化研究所、2016年。
- (3) 『白隠和尚全集』第一巻、105-148頁。能仁晃道編『白隠門下逸話選—荊棘叢談全訳注』、禅文化、2000年。
- (4) 荻野獨園『近世禅林僧寶傳』上・中・下巻、貝葉書院、1889年。能仁晃道訓注『訓読・近世禅林僧宝伝』全二巻、禅文化研究所、2002年。
- (5) 能仁晃道訓注『訓読・近世禅林僧宝伝』上巻、223-226頁。
- (6) 森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、金港堂書、1902年。森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、日本図書センター、1977年。
- (7) 森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、197頁、208-213頁。
- (8) 森大狂『近古禅林叢談』、藏経書院、1919年。森大狂『近古禅林叢談』、禅文化研究所、1986年。
- (9) 同上、350-356頁。
- (10) 同上、352-354頁。

- (11) 小島文鼎『続禅林僧宝伝』八冊、貝葉書院、1938年。その内容は『訓読・近世禅林僧宝伝』にも含まれている。
- (12) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、178-179頁。原文は次の通りである。「比奈邑杉山氏寡婦名政。依脱公點發。參禪尤切。至忘身心。有兒日往。順朱墳墨。午時遺炊爨。兒還無飯。鄰人愍食之。一日兒還。政問曰。子。誰家兒。兒曰。阿娘何言乎。政肯諾復入三昧。如是數日而有省。便謁師呈所見。師以數段機縁詰之。一無凝滯。」『白隠和尚全集』第一卷、46-47頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (13) 原文である。『白隠和尚全集』第一卷、46頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (14) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、166-167頁。
- (15) 『道元禅師全集』第一卷、春秋社、1991年、3頁。
- (16) 芳澤勝弘訳注『白隠禅師法語全集』第二冊、禅文化研究所、1999年、97頁。原文は次の通りである。「永平開祖ノ、自己ヲ運ンデ、萬法ヲ證スルハ迷イナリ、萬法來シテ自己ヲ證スルハ悟リナリ、身心脱落、々々身心、ト説カレタルモ、此ノ三昧ノ大略ヲ云ヘリ。」同上、301-302頁。時折、白隠による道元禅師の引用として、他には『於仁安佐美』巻の上を挙げられる。「道元禅師は『行持有らん一日は貴ぶべきの一日なり、行持なからん百年は恨むべきの百年なり』と言われたが、行持とは何か。それは上求菩提、下化衆生の方に他ならないのです。」同上、44頁。原文は、202頁。内容から判断すると、白隠は道元の教えを尊敬し、さらに深く理解していたということが分かる。
- (17) 同上、302頁。
- (18) 安永祖堂『笑う禅僧一「公案」と悟り一』、講談社、2010年、96頁。
- (19) 同上。また、『聖書』、日本聖書協会、2000年、137頁、を参照。
- (20) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、179頁。原文は次の通りである。「一日。雲山在師後偃臥。政來乞入室。山將避。師曰。母起。山臥自若。政人來。師拶曰。夢中西來意作麼生。政呈所見。師便休。政辭去。山問曰。適來是誰誰。師以實告。山嘆曰。我未見如彼作略純眞而不通風者。」『白隠和尚全集』第一卷、47頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (21) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、164頁。
- (22) 芳澤勝弘訳注『荊叢毒蕊』坤、禅文化研究所、2015年、277-278頁。原文は次の通りである。「佛日雲山和尚 道標高古、氣宇清閑。西航海撞著 古月黒光、擊碎佛心印。東還家透脱玄沙道底、拗折法窟牙。從是惱害諸

- 方枯木裏禪徒、或時描貌近鄰曲景上諸老、心交四十歳、別涙千萬行。其徒一兩肩、來請題畫像。眞是普光堂頭定中遊戲、贊印沙羅樹下睡裏狂言。贊語未成先春睡、夢中相對笑顏親。覺來老淚滿衣袖、七月廿二當午時。」同上、276頁。また、『白隠和尚全集』第二卷、245頁。
- (23) 芳澤勝弘訳注『白隠禪師法語全集』第十三冊、35頁。『白隠和尚全集』第六卷、236頁。
- (24) 芳澤勝弘訳注『白隠禪師法語全集』第十二冊、230頁。原文は次の通りである。「特（獨）り大勇猛の上土有て、一則難透の狼毒語を執て舊見を放下し、大疑團を起して、單々に參究して生蛇竹筒に入るか如くし。」同上、303頁。また、『白隠和尚全集』第六卷、146頁。
- (25) 能仁晃道編『白隠門下逸話選一荊棘叢談全訳注』、107頁。原文は同左、260頁。『近世禪林僧宝伝』のような後の書物には、『荊棘叢談』の伝記がほぼそのまま載せられているので、最後の文書は『荊棘叢談』の文章と同じである。能仁晃道訳注『訓読・近世禪林僧宝伝』上巻、224頁。森大狂（慶造）『近世禪林言行録』、213頁。森大狂『近古禪林叢談』、354頁。
- (26) これについて、竹下 ルッジェリ・アンナ「日本の禪宗における女性観—白隠禪師の場合—（1）」、『花園大学国際禅学研究所論叢』第九号、2014年3月、56頁。
- (27) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、330頁。原文は次の通りである。「歸路過平安城館世繼氏。池大雅來參。及度大橋女。』『白隠和尚全集』第一卷、60頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。
- (28) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、330-331頁。
- (29) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、3-4頁。芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、xix 頁。
- (30) 芳澤勝弘「白隠禪師假名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、134頁。芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、331頁。
- (31) 『年譜』に関する原文は次の通りである。「本貫者江府公臣。某甲女。而食千石餘。父因事爲浪士。與其小弟俱寄食每家。終婁且貧。女教父母曰。贖我娼家。得時相遇。父母曰。估子自活。是畜生業也。設死不爲。女曰。是方便也。君如不爲。應當入死地。雖方便不及眞智。去難入道。亦非眞智耶。父母同之。遂送倡家。善書好和歌。待遇惟勤矣。女嘗思惟。我舊生官。養帷帳之内。使令婢子。而今墮這隊。是什麼狀。日往月來。思念漸積而感沈痾。醫亦至拱手。』『白隠和尚全集』第一卷、60-61頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。

- (32) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、332-333頁。『年譜』に関する原文は次の通りである。「汝一身除見聞覺知。別無作底者。四者有主。汝行住坐臥。見者何物。聽者何物。切切返觀不怠則。本具佛性。忽然現前。到這箇田地。是便解脫苦界要徑也。』『白隠和尚全集』第一卷、61頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。
- (33) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、333頁。『年譜』に関する原文は次の通りである。「女謹稟命。單單潛修。延享間。狂雷震洛地。一日隕二十八所。女素忌雷。垂帳被衾。令小婢從女護左右。忽猛省堅坐。雷聲遽震。撲然墮庭中。大橋仰顛絕氣息。少焉蘇。見聞幾乎異平常。雖欲得師證。欲染境中未由也耳。』『白隠和尚全集』第一卷、61頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。
- (34) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、610頁。
- (35) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、331-333頁。
- (36) 観音経事典編纂委員会編『観音経読み解き事典』、柏書房、2000年、252頁。
- (37) 金森天章訓読『法華経』、東方出版、1985年、424頁。原文は、『大正新脩大藏経』巻9、大正新脩大藏経刊行会、昭和48年、57頁b。
- (38) 芳澤勝弘「白隠禪師仮名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、134頁。また、芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、610頁。
- (39) パトリシア・フィスター『世の女性画家たち—美術とジェンダー』、思文閣出版、1994年、130頁。
- (40) 同上。
- (41) 伴蒿蹊『近世畸人伝』、岩波書店、2015年（第18刷発行）、73-75頁。
- (42) 同上、157-162頁。
- (43) 同上、238-242頁。
- (44) 同上、73-75頁。
- (45) 町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、127頁。
- (46) 芳澤勝弘「白隠禪師仮名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、139頁。解説については、同上、139-140頁。また、芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、336-337頁、を参照。
- (47) 町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、130-131頁。
- (48) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、237頁。
- (49) 『白隠禪師法語全集』第十三冊、333-334頁。『白隠和尚全集』第六巻、

- 340頁。
- (50) 『白隠禅師法語全集』第十三冊、319-320頁。『白隠和尚全集』第六巻、333-334頁。
- (51) これについて、芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、140-141頁を参照。
- (52) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、336頁。
- (53) 『禅学大辞典』、大修館書店、789-b頁。
- (54) 同上。
- (55) 『白隠禅師法語全集』第十二冊、5頁。原文は次の通りである。「蓋し彼の因地下の歡喜は如何して得べきぞとならば、大疑の下に大悟ありと申して、唯今、此文を披賢し、或は笑ひ或は談論し、萬縁に應じて、夫れへに働きもて行く底、是れ何物ぞ、是れ心なりや、是性なりや、青黄赤白なりや、内外中間に在りやと、是非々々一回分明に見届けずば置くまじきぞと、十二時辰三 [の] 四威儀、たけく精彩をつけ、間もなく勵み進み侍らば、いつしか妄想思量の堺を打越へ、前後際斷（底）の工夫現前して、男にあらず女にあらず、賢にあらず愚にあらず、生ある事を見ず、死ある事を見ず、唯一向、（心上）、空洞々地虚潤々地にして、晝夜の分ちを見ず、心身ともに消へ失する心地は幾たびも有之事に候。」同上、36-37頁。『白隠和尚全集』第五巻、320-321頁。
- (56) 原文である。『白隠禅師法語全集』第十二冊、36頁。
- (57) 『禅学大辞典』、大修館書店、795-b頁。
- (58) 『白隠禅師法語全集』第二冊、87頁。原文は次の通りである。「熟へ顧フニ、參玄ノ上士ハ大死一番、命根斷底ノ時節ヲウルヲ以テ貴シトス。是レヲ天涯ニ手ヲ撒シテ、絶後ニ再ビ蘇ヘル底ノ時節ト云フ。」同上、284頁。
- (59) 同上、88頁。原文は次の通りである。「此ノ寶處ニ到ラント欲セバ、一氣ニ進ンデ退カザルヲ至要トス。往々ニ話頭ヲ參究シ、自己ヲ究明して、寶參功積モリ、潛行カラ充ツル則ンバ、萬里ノ層水裏ニ在ルガ如ク、身心モ話頭モ、一時ニ打失シテ、無底ノ黑暗坑に墮イルガ如クナル時、多クハ乍チ恐怖ノ心ヲ生ジテ、一步モ正ニ進ム事得ズ、頭ヲ搔イテ懊惱ス。」同上、284-285頁。
- (60) 同上。原文は次の通りである。「若シ果シテ然ラバ、縦イ無量劫數ヲ歴ルトモ、歡喜ノ眉ヲ開ク事能ワジ。殊ニ知らズ、是レハ斯レ百尺ノ竿頭ニ一步ヲ進メテ、十方刹土ニ全身ヲ現ズル底ノ刹那ナル事ヲ。」同上、285頁。

- (61) 同上、288頁。
- (62) 芳澤勝弘訳注『荊叢毒蕊』坤、1143-1145頁。原文は次の通りである。  
「山野三四十年前。勸人參趙州無字。中謂無字出人難。參到死不得力多。近勸令聞隻手聲。到聞隻手有穿鑿。[…]如上如見掌上時。始許得大圓鏡光。而教一切音聲止。鳥獸簫笛鐘鼓響。或令遠浦歸帆止。如上逐一透過後。却入彼寶鏡三昧。或名諸法實相觀。同五位偏正三昧。全無能見無所見。今時那邊總一般。途中家舍無隔礙。此觀若人得成就。即是平等性智人。若住著平等寶處。恰似狐狸睡舊窠。[…]自是疑數段因緣。如最初正受授與。[…]從頭一一透過後。始許得妙觀察智。於此轉激發精神。廣聚法財行法施。普利濟多少羣生。修上求下化正因。可貴彼上求下化。涉塵點劫不倦怠。大機圓應妙無方。名之爲成所作智。歡喜四智漸具足。須期四智圓明時。終是得四德具足。此是圓頓菩薩行。又是國師舊家風。」  
同上、1141-1142頁。または、『白隱和尚全集』第一卷、261-262頁。
- (63) 竹下 ルッジェリ・アンナ「白隱の唯識観—『四智辨』を通して—」、『花園大学国際禅学研究所論叢』第二号、2007年、151-179頁。アンナ・ルッジェリ「白隱禅師における洞上五位の一考察」、『花園大学禅学研究』第79号、2000年、199-221頁。アンナ・ルッジェリ「白隱と現代の公案の問題—『十牛図』および『洞山五位』を通して—」、大阪府立大学大学院『人間文化学研究集録』第10号、2000年、59-69頁。
- (64) 常盤義伸「白隱と女性」、157-158頁。常盤義伸「禅の女性観」、224-225頁。
- (65) 山田無文『無文全集』第五卷、禅文化研究所、平成16年、677頁。
- (66) 島内景二『心訳「鳥の空音」—元禄の女性思想家、飯塚染子、禅に挑む』、笠間書院、2013年、248-249頁。

